**殺人兵器が愛を知る方法**

たてごと♪ （白木 康寛）

# **おことわり**

　この物語はノンフィクションです。

　登場する人物名、団体名、建物等はプライバシーの保護のため実際のものとは異なりますので、あらかじめご了承下さい。

# **※とある走り書き**

　愛。

　とは、何だろう。

　私にはわからないけれど、どうやら素敵なもののようだ。

　それを手に入れた時の、人の喜びよう。

　それを失った時の、人の悲しみよう。

　きっと、何よりの宝に違いない。

　それが私に手に入れられないのは何故だろう。

　やはり私は……。

# **《１》ネクロマンサーと呼ばれた少女**

　松平瑞穂。

　高校に入学して初めて見掛けた時から、何となく気になってはいた。

　顔はとにかく愛らしく。体躯も小柄で愛らしく。烏羽色の髪は腰まで届くきれいなストレート。気質はとにかく活発はつらつ。そしてどうやら家はいいとこらしい、それでいて誰にでも分け隔て無く優しい。

　これだけ条件が揃えば否応も無い。登校初日から彼女は、男女を問わずクラスを問わず、学年すら問わず人気を博した。

　そんな彼女とはクラス分けで一緒になれたから、一度はラッキーと思いはした。が、特に話し掛ける機会や勇気があるわけでもない。別にラッキーでもなかったと思い直した。

　しかし、入学翌日の事。彼女は不意に、僕のほうをじっと見詰めてきたのである。何の山も谷も無い、非常に無味乾燥な中学時代を過ごした僕にとって、その視線は強烈だった。

　とは言っても別に、僕の顔に見とれたわけではなかったらしい。僕の肩へついと手を伸ばすと、彼女はこう言った。

「糸くず、付いてたから取ってあげたよ？」

「……あ、え、あ」

　女子に話し掛けられた経験のほとんど無い僕だ。返答にまごついていると、彼女は他の女子に話し掛けられ、僕の事を忘れたかのように応じ始めた。

　僕も内向的ではあっても、高校男児である。彼女へ惹かれるには、それで充分だった。

　まあそれは、日が経つにつれて恋心へと変化していくわけだが。

　何しろ眩しく、そして誰にでも分け隔て無く接する彼女の事だ。引っ掛かった男子はごく多数、ついでに女子もちらほらと居たようだ。

　入学から二週間ほど経った、ある日。

　最初の犠牲者になったのは、僕と同じ中学から上がってきていた、知った顔だった。彼はずっとサッカーをやっていて体は逞しく、風采も栄えて、それなりに女子からの人気を獲得していた。

　そんな彼が男子仲間に、松平瑞穂へ告白すると宣言してみせたのだ。格好のいい彼なら、もしかしたらその告白は成功するかも知れない。そう考えると、どうにもやる瀬ない気分になった。

　しかし、その翌日。彼は、授業も部活も精彩を欠いていた。もうこれは、結果など彼の口から聞かなくてもおおよそ想像が付く。それを見た後は、口にしては慰めの言葉もあろうが、内心にしては快哉を叫んだものだ。

　そんな彼を皮切りに、それは見ていて面白いくらい次々と、男子どもは犠牲者へと成り果てた。

　いくつかの時期に至ってはほぼ連日。いくつかの日に至っては複数人。松平瑞穂は、体育館裏や屋上などへ呼び出されては、しかしその都度相手を、ばっさばっさと斬り捨てるように振りまくったのである。

　やがて、その死屍累々は恐ろしくも、五十を数えるほどになる。そうなれば、もしや彼女は男に興味が無いのでは。そんな噂が漂い始めたりした。それに乗じて告白を決行し、そして無惨な姿へと変わり果てた女子の数すら片手では数えられない。

　異常事態。

　こんな言葉が、これほど似付かわしい話も無いだろう。

　しかしいくら可愛いと言っても、である。一人の少女へ、何十人もの男女が、恋慕し押し掛けるような事があるものか？　そんな疑問を持つ人も居るかも知れないが、そのような人物は確かに存在する。何故と問われても説明できないが、はっきり言える事は一つ。

　見ればわかる。

　というより、同じくらい可愛いと思える女の子なら、他のクラスにあと二人くらい居る。上級生を含めれば、もっと居る。その中で松平瑞穂だけは何というか、際立って光を発しているのだ。それはもう見ればわかる、ではない。見なければわからない、というわけだ。

　ときに、振られて気力の抜けた犠牲者を死霊、つまりゾンビに見立て、それを立て続けに量産する彼女を死霊使い、すなわちネクロマンサーと呼ぼう、などと言い出した奴が居た。

　即刻、袋叩きにされた。そこへ松平瑞穂が仲裁に入り、馬鹿だねえと言いながら介抱したものだから、別途そいつは彼女の居ない機会に改めて袋叩きにされる事になった。

　まあつまり、松平瑞穂は決して嫌な人間ではない。彼女の人気はあくまで高いままだったのだ。

　ちなみに袋叩きとは、大勢で取り囲んだのち、空気で膨らませたポリ袋で以って、バカスカ叩く事である。それはまこと恐ろしき悪魔の所業であるから、僕は参加していない。

　っつーか、いい音するんですけどアレ。本気で魔的なモノを感じますよ。

　しかし振ったのなら、松平瑞穂は相手へ何らかの理由を言い渡したはずである。ところが、振られた相手がそれを口にする事は無かった。彼女には既に特定の人が居る、という話は聞かない。他の理由にも到達できない。彼女の友人らも何やら訊き出しづらい空気、云うなれば聖域のようなものが感じられるらしく、尋ねた人は居なかったようだ。

　うーん、何なんだろうね？

　そう思いつつも既に、僕の中の恋心は揺るがないものとなっており。

　……別に振られてもいい。

　……とにかく気持ちだけでも伝えたい。

　そんな事を考えた。

　ただもちろん、僕もまだまだ青いわけで。

　……もしかして。

　……ゆくりなく。

　……あわよくば。

　そんな、夢物語を思い浮かべないでもなかった。

　七月最初の月曜日。とにかく僕は、呼び出しの手紙を出してみた。

　オーソドックスに、彼女の下駄箱へ投函。たったそれだけの事に、あんなに喉がカラカラ渇き、あんなに足裏がソワソワ浮つき、あんな死にそうなほど鼓動がドクドク早まるものとは思わなかった。

　それはもちろん誰にも見付からないように、早朝に登校しては慎重にやったつもりだ。だがしかし、部活の朝練に出ていた誰かが見咎めたようだ。

　朝のホームルーム前には既に何やら騒がしくなっており、昼休みに僕はクラスの男子から包囲される事になる。

「おい宮前。お前もか」

「ゾンビにされるのがわかっててやるとはなあ。勇気あるなお前」

「まあ馬鹿だけどな」

「ああ馬鹿だ馬鹿」

「うむ。馬鹿である」

　うっさいなあ。

　まあ言われ放題なのだが、しかし間違ってもいないので、反論の余地は無い。僕は黙って、持参の弁当をつつき続ける。

「そういえば宮前って、独り暮らしだろ？　お前、弁当自分で作ってんの？」

「悪いかよ」

「悪いな。毒見無しで食うのは」

「あ」

　そいつは僕の許可も無く、ウィンナソーセージをつまんでいった。

「うーむ。可も無し、不可も無し、かな」

「ウィンナの味に可とか不可とか無いって。勝手に取るなよ」

　僕は食べるのを一旦やめると弁当箱に蓋をして、続いてつまもうとする他の魔の手を遮った。

「何だよおい。俺のシウマイを寄越せ」

「お前らのじゃないって。散った散った」

「ケチ」

「ああケチだケチ」

「うむ。ケチである」

　未練はあるようだが、今は昼休みだ。彼らも食事を摂らなければならない。しぶしぶ散って行くのを待つと、僕は弁当を使うのを再開した。

　それでもまあ、うち一人よりは去り際にて、こんな事を言われたりする。

「ってかさ。お前の昼メシなんてノーチェックだったぜ。何で混じってこねーのお前？」

「いや、まあ……何となく、だけど」

「気が乗らねーだけならいーけどよ、ハブらせるような真似あんますんなよ？　つもりもねーのに悪モンになんの、御免だぜ？」

　そう。どうしようも無い馬鹿ばっかりではあるが、ここには悪者なんか一人も居ないのだ。ニュースなんかで陰惨な学校現場がたびたび報じらるのが正直信じられないくらいの勢いではあるが。

　まあ結局のところ、僕があまり人に対して積極的になれない所に問題があったのだ。それで好きな子へ告白というのも、ちゃんちゃらおかしい感が無いでもない。

　ただ、言い訳をするなら……それで、充分だったのだ。みんなが楽しくやっている。それを見ているだけで僕も、何となく楽しかった。

　まあ、平和なんだと思う。のどかと云ってもいい。いい事だ。

　だから僕はあえて、こう返してやる。

「でも僕って別に……ぼっちじゃないよね？」

「……ふうん？」

　もちろん言われたほうは呆れ顔で去っていくわけだが、僕の気持ちは伝わっているに違いない。きっとそのはずだ。

　しかし、繰り返しになるが馬鹿ばっかりであり、つまり野次馬根性は相当にしっかりと座っているものである。だからみんな、放課後にはどうなるのかと生温かく見守っていた。

　けれどもそれを尻目に、僕は普通に下校する。別に呼び出しの手紙を出したからって、その約束が当日である必要は無いわけだ。

　ただ……その日にちの指定は多少、いやかなり、独りで突っ走りすぎたかと思う部分がある。もしかしたら、彼女は来てくれないかも知れない。

　それは……土曜日。

　七夕だ。

　場所は教室。土曜日とはいっても部活動のために校門は開放されているから、校内へ入る事に問題は無い。その教室という場所に特段の意味も無いのだけれど、それはただ別の場所を指定して、デートでもするつもりなのかと勘繰られたりするのが嫌だっただけだ。

　そういえばその前日とかで、特に学校として七夕の行事は催されなかった。祭り好きの生徒たちはぶーぶー文句を垂れていたが、要するに高校とは勉学の場。そういう姿勢なのだろう。まあ義務教育ではないのだし、だからあまり強く羽目を外させろと言えたものでもないのだが、しかし勉学……。

　あああああ期末テスト、もうすぐだよ……。こんなんやってる場合かな？

　いや、でも。

　……七夕という日でなければ、いけないし。

　そして当日。目が覚めてから、大きな失敗に気が付いた。

　手紙に、時間の指定をするのをすっかり忘れていたのだ。

　うわー、間抜けすぎる。訂正入れようにも、彼女の番号もアドレスも知らないし……どうしよう？

　いや、迷う余地は無い。時間の指定が抜けた以上、いつ来てしまうかわからないのだから、早目に行って待っている必要がある。もちろん、午前か午後かもわからないのだから、昼をまたぐかも知れない。

　僕は慌てて弁当の準備に取り掛かった。自炊はこのアパートへ入室してからだが、それでも数ヵ月も経つとこなれてきた。それに冷凍食品は電子レンジで調理できるし、三十分もせず弁当箱は食べ物で埋まった。

　急ぎ出立する。

　アパートから学校までは徒歩。一般には電車通学が普通だが、僕の場合はもともと独り暮らしを希望していて、早いうちから部屋探しをしていたせいもあって、かなり都合のいい物件を確保できた。

　もっともその動機は……不純である。男子諸君には説明の必要は無いだろうし、女子諸君には説明したくない。まあ、そういう理由だ。何しろ姉二匹、妹一匹と、女だらけだった。お察しください状態というやつである。

　もちろん親には、早く一人前になりたいという建前で説得してあった。ただ、その親からの仕送りはギリギリで、既に万年貧乏へと陥っている。夏休みに入ったら、バイトでも始めようか。そんな事を検討中だ。

　学校へ着く。

　時刻は八時半。校庭では各運動部が駆けずり回っているはずの頃合だったが、僕は今日、傘を差して来た。当然、屋外の部活動は中止だろう。

　まあ七夕は、滅多に晴れない。梅雨が残るからだ。

　梅雨なのに何で天の川？　そう疑問を感じる人は少なくないだろうし、僕もそうだ。　ちょっと他にわけもあって、それは気になったので、ちらっと調べてみた事がある。それによるとどうやら、七夕とは旧暦の七月七日、要するに現在の新暦における八月周辺の行事だったらしい。八月なら晴れ空真っ盛りだから、天の川も見たい放題というわけだ。ただ、それならどうして新暦へ移行した時に七夕もずらさなかったのか。その点はわからなかった。数字の問題だろうか。

　引き戸をガラリと開けて教室へ入れば、もちろん誰も居ない。好き勝手もできるだろうけれど、他人の席に座るのは割と気分の落ち着かないものだ。そうして自分の席に収まれば……。

　さて。長丁場になるだろうし、時間を潰すための用意はしてきた。場所も場所だ、試験に備えて復習を始める事にする。鞄から、教科書とノートを取り出した。

　……。

　……。

　そう意気込んで、とりあえず昼までは粘ってみたものの。

　授業を聞いていれば、何となくわかった気分にはなる。しかしそれは、すぐに復習をしなければ、ほとんどと言っていいほど身に付かないものだ。ノートを見返しても、どんな授業を受けていたのかさっぱり思い出せない。

　うーん、まずいぞ。全然復習にならん。中間テストの結果もかなりヤバかったし……僕、落ちこぼれるかな？

　うーん、もぐもぐ。

　空になった弁当箱を鞄に仕舞うと、それでも忍耐の切れてしまった僕は、勉強道具とは違う物を取り出した。こういうのがイカン、というのはわかっているのだが……。

　僕は、ライトノベルにハマっている。小遣いにできる資金は限られているので、高校に上がってからは特定の文庫の物しか買っていないが。中でもとある架空世界で、不思議な力によって駆動する機械を乗りこなし、自由に空を飛び回ったりするあのシリーズ。うむ。

　今日持ってきているのはその続刊だが、主人公カップルの漫才めいた会話。息もつかせない展開。胸躍るバトル。そして何より、舞台設定がよい。それなりに制限もあるし障害もあるが、それでも気儘に空を飛ぶ事ができる。とか、何てファンタスティックな設定なんだろう。そんな事ができたとしたら、それはどれだけ素晴らしい事か。

　そう。ライトノベルなどといったフィクションに触れていると、しばしば思う事がある。多分、誰しも思う事だろう。

　自分が……そのような物語の世界に居た、としたら。

　そう想いを馳せるだけでも、もう無性にわくわくとしてくる。ご飯三杯というやつだ。

　それにしても……。

　この主人公の少女のように、可愛らしい子が傍に現れたらなあ。この子はちょっと、あまのじゃくで我が儘だけど。根は真っ直ぐだし。いいよなあ。

　って、そうだった。僕はこれから、松平瑞穂に会うのだった。来てくれるのかどうなのかも、よくわからないけれども……。まあ、来てくれても、多分。

　……はあ。

　ため息しか出ない。

　ライトノベルの主人公のように特別な能力があるわけではなく、それどころか一般的な能力にも劣り。それほど正義感が強いわけでもなく、それほど誠実なわけでもなく。逆に人を酔わせるほどの悪というわけでもなく、財があるわけでもなく。

　自分で振り返っても、どこにも魅力が見出せない。そんな僕の前に、仮にそのような少女が現れたとして、果たして自分へなびいてくれたりするだろうか。まさか無条件に慕ってくれるとか、無いよなあ？　現実的に。

　……はあ。

　ため息しか出ない。

「ため息ついてると、幸せ逃げちゃうよ？」

「……うわあ！」

「うわあ、ってまた凄い個性的な叫び声だね？」

「……松平、さん」

　後ろに立っていた松平瑞穂は、普通に制服姿で、ニコニコ笑顔だ。

「面白すぎるよ？　呼び出しに時間の指定が無いし、来てみればため息つきながらエロ本読んでるし」

「えええエロ本？」

「それ。違うの？」

　彼女が指差した文庫本のページには、挿絵が描かれている。

　……少女の裸体の。

「う、うおおおおおおおおお？」

　何コレ！　何コレ！　裏切られた！　騙された！　信じてたのに！

「ち、違うよ！　エロじゃない！　こ、これは……ちょっとした入浴シーンで」

「そういうのエロって云うと思う」

　うわあああん！　松平瑞穂にエロ認定された！

　作者を責めればいいの？　絵師を責めればいいの？　それとも編集の陰謀？

「宮前くん大人しいから全然わからなかったけど、ムッツリスケベ？　意外ー」

　うわあああん！　松平瑞穂にムッツリ認定された！

　誰かこの出版社、滅ぼしてくれないかなあ。

　松平瑞穂は、僕の前の席に腰掛けた。ええと、近い……。

「さてと、お待たせしました。本日のご用向きは？」

　この流れに、この距離で、それを訊いてきますか……。もう、告白どころじゃないですよ。

「いや……あの……」

「言いにくい事？　今日はちょっと時間あるから、待ちますよ？」

「その……言いにくい、っていうか……言えない、っていうか……」

「土曜にガッコー呼び出して、やっぱ言えない？　本当に面白すぎるよ？」

　疑わしそうなまなざしで言う松平瑞穂。それはそうだ。

「……ごめ」

「あ、ううん。ごめんね？　いじめすぎたかな」

「……え」

「用件は、大体わかるよ？　宮前くんで……七十七人目、だから。……何かちょうど、日付とぴったんこだよね？」

　あー……数えてらっしゃいましたか、それ。

「それで……その。だから、大体わかるかなあ、とか……その、私がこれから言う事」

「あ……うん」

　そうだよね……。そうなんだよね。

　わかってた。わかってた、けど……。

「私もね。中学の時、凄い好きな人が出来て、それで告白して。でも断られちゃって。だから凄い、気持ち、わかるんだ。だから凄い、言うの……つらいんだけど……」

「松平さんが、振られた事とか、あるの？」

「あるよ？　えへへ」

「信じられないよ」

「そうかな？」

　照れ隠しだろうか、頭をカリカリ掻く彼女は、やっぱり可愛らしくて。

　こんなに可愛い子であれば、隣に誰かが居るのが自然な気がする。やっぱり尋ねてみないわけにはいかない。

「えっと、松平さん？　その、ちょっと知りたい事があって……」

「５７の４９の６３、ですぜ？　旦那」

　おっと。結構ノリがいいなあ……っつーか、細くない？

「いや、スリーサイズじゃなくて……いや、それも嬉しいけど」

「じゃあ、なあに？」

「振られた松平さんが、振る側に回った理由」

「……」

　あ。黙ってしまった。訊いてはいけなかったのだろうか？

「ごめん……嫌ならいいよ」

「うーん。実はかなり言いにくいんだけど……知りたいよね？」

「いや、だから、嫌なら……」

「ううん。断ったほとんどの人に言った事だから」

「そうなの？　みんな全然、口割らないけど」

「丁重に秘密厳守をお願いしてます。宮前くんも、よろしくね？」

「あ、うん」

　それは……余程の事なのだろうか？

「じゃあ言います。実は、私はですね……」

「……」

「魔法少女なのです！」

　……はい？

「夜な夜なうごめく邪悪な存在を、ミラクルパワーで成敗しているのです！　でも、その力は恋をすると消えちゃうので、私はどなたともお付き合いできないのです！　ごめんなさい！」

　松平瑞穂は、頭を下げた。

　ええと。

「……本当に？」

「信じる？　突飛な話だけど」

「まあ、突飛は突飛だけど……まあ」

「本当の本当に、信じてくれる？」

「いや、松平さんがそう言うなら、そうなんだろうなあ、って……夢みたいだけど」

「うん……そうだね。そんな、夢のある話だったら、いいのにね……」

　そこで……彼女の顔は、曇ってしまった。そして僕に、背を向ける。

　……松平さん？

「魔法少女とか、もちろん嘘だよ？　本当は、もっと汚い、夢の無い話」

「……」

「私……私。あのね、私。実は、本当は……」

「あ……やっぱ、言いにくいなら」

「……ここの校長の、アイジンしてるんですわ」

　え。

「アイジン、って……あの、愛人？」

「愛人に種類があるのかどうなのか知らないけど、多分その愛人」

「……それも、嘘、なんだよね？」

「ごめんね？　これは本当に、本当。それもね？　お金とか貰ってるし、エッチな事もしてるし。もうね、ドロドロの不倫だよ？」

　にわかに信じがたい事を言い放ちつつ、再びこちらを向いた松平瑞穂は、はにかみ笑いを見せた。その笑顔は……最高に可愛かった。

「幻滅、したかな？」

「え、あ、いや……」

「幻滅したでしょ。イケナイ事してるもんねえ……ううん、私が悪いように思われるとか、そういうのはどうでもいいんだ。でも校長に傷が付くのは絶対、ダメだから。絶対、内緒だよ？」

　これは……頷くしか、無いだろ？

「……うん」

「ありがと。ごめんね？　本当はお詫びに、キスの一つもあげたい所なんだけど……ごめんね？　私、校長に、心底ぞっこんみたいで。無理。ごめんね？」

「……そういうの、いいから」

「ごめんね？　ごめんなさい」

　ここまで言われて、それでもやっぱりと迫る事ができる人は居ないだろう。

　しかし……。

　松平瑞穂が平凡だったら。または、相手が平凡だったら。それならあるいは、普通に失恋できたかも知れない。むしろ涙を呑みながら、応援する事すらできたかも知れない。

　しかし、そうするには両者あまりに特別すぎて。そして、それでいて松平瑞穂は依然、天使のままで。

　……これは、無い。こんなの、無い。

　無いよ。

「こりゃあ……ゾンビが量産されるわけだ」

「ネクロマンサーだよね、私」

　しばらく二人に、救いの無い笑みが続いた。

　ふと、尋ねる。

「……でも、それなら」

「何でしょか？」

「あんまり愛想とか、撒かないほうがいいんじゃないかな？　少なくともこうやって、いちいち告白に付き合ったりする事は無いと思う。余計なお世話かもだけど……いちいち面倒なんじゃ？」

「うーん。でも私、ええとその、我が儘だから。みんなから嫌われたくもないんですわ」

「そっか。我が儘ならしょうがない」

「あはは」

　そう笑った彼女は、微笑みを保ちつつ笑みを引っ込めるという、するに易しく形容するに難しい仕草をする。

　まあ要するに、話題を少し変える前振りであるわけだが。

「えっと。私のほうからも、訊いていいかな？　ちょっと引っ掛かったんだけど……」

「え？」

「みんな大体、口頭で直接告ってくるか、手紙くれるにしてもその中で告るとか、その日の放課後に呼び出しとか。大体そういうんだったわけですよ。でも宮前くんだけ、かなり先の日を指定してたから。学校がお休みの日っていうのも初めてだし……何でかな、って」

　……ああ。振られた今となっては、それ訊かれても何も意味、無いのだけれども……。まあ、言うだけ言いますか。

「今日は何の日？」

「え。……七夕だよね？」

「まだあるでしょ？」

「……土曜日？」

「もっと他にもあるよね？　すんごい重要なやつ」

　ちょっとだけ、彼女はフリーズした。

「……それで、今日だったの？」

「うん。誕生日、おめでとう。……あ、あああああ。ケーキとか、ちょっと無いんだけど……」

　いまさらながら気付いたが、何の手土産も持参していなかった。これはかなりの失点である、はず……だが、彼女のほうはそれどころではなかったらしい。

「びっくりだ！　昨日誰にも言われなかったし、今日だって誰からもメール一つ無いのに」

　……うん。そんな事だと、思ってたんだよ。

「やっぱさ。松平さんって、みんなに囲まれてるようで、友達居るのかな、って思った」

「……」

「実際、近寄りやすい雰囲気はあっても、踏み込みづらい雰囲気もあって……多分、みんな誕生日とか、調べようともしなかったんじゃないかな？　踏み込みすぎて嫌われたくないからかも知れないけど、ちょっと寂しい思いとか……してないかと思った」

「……ありがとう。ありがとう……」

　松平瑞穂は嬉しいような悲しいような微妙な表情を見せた。そして、こう付け加えたりする。

「……ごめんね？」

　意味がわからない。

「そこで何で、謝罪？」

「えっと、あのね？　もし校長との関係が無かったら、私……今ので落ちてたよ？」

　……おい。

　ちょっとタンマ。何すかそれ？

「……そういう事、言うかな？　生殺しだよ」

「あ……そっか。ごめんね？　でも……宮前くんの言う通りなのかも、って。私には本当の友達は居ないのかも、って。そんな事指摘されちゃって、それでああ確かにって思っちゃって。そんなんでその人から告白なんてされてたら……落ちちゃったりしないかな？」

「そんな……もんかな？」

　感謝と恋愛感情。連動したりするものなのだろうか。

　そう思ったが、違う話だった。

「……聖域」

「え」

「みんなが私に、そんな壁を感じてるっていうのは、わかってた。それが何て言われてるかも、知ってた。私のほうじゃあ、そんな壁作ってるつもりなんか、これっぽっちも無いんだけども……」

「そう、なんだ……」

「いやあしかし、流石に昨日今日は、ちょっとヘコみました。うん、本当ならやっぱり、コロっといっちゃうと思うよ？」

「……」

　ちょっと深刻だな、これ。ここまで彼女がまいっているとは思わなかった。

「……家族は？　祝ってくれないの？」

「あ、いや、それはもちろん。ただ……うちの親、ずっともう仕事でゴタゴタしててね。夜には何かしてくれると思うよ？」

「そっか……あ。えっとじゃあ、校長と……とか？」

「いやあ、それも……立場とか、いろいろあるし。なかなか気軽に、逢えなくてね？」

「……何だよ、それ。恋人でしょ？　寂しくないの？」

「……」

　その沈黙はもはや、肯定、という意味でしかないだろう。ちょっと、どころではない。これはかなり、深刻だ。何とかならないだろうか、何とかできないだろうか。

　……僕がそれに、成り代われないだろうか。

　そう思わないでも、なかったのだが。

「……。でも、やっぱり私は……落ちてあげるわけには、いかなくて。本当に、ごめんなさい」

　先手を打たれてしまった。

　……。

　そっか……そんな状態で。そんなに、寂しいのに。

　つまり彼女は、それでも。そこまでも。

　そういう事か。

　……。

　じゃあやっぱり、ダメなんだ……。

　……。

　うーん、うまくいかないなあ……。

「あー……えっと、まあ……それは言っても、ええと。しょうがないから」

「うん……」

　申し訳無さそうな表情を見せる、松平瑞穂。

　その申し訳無さの度合いを強めると、彼女は再び口を開いた。

「……あの、宮前くん？」

「何？」

「こんな事言うの、また生殺しで、凄い迷惑かも知れないけど……お願いがあるんだ」

「うーん。それ、今度は僕のほうが、松平さんが何を言うのか大体想像付くなあ」

「あー。そっか」

　お友達に、なってください。だよね？

「えっと、それ……言っていいかな？」

「どうぞ」

「お友達に、なってください」

　うん。想像通り。

　しかし……これは。

「やっぱり、迷惑？」

　本当なら。彼女を大事にしたいなら。一も二も無く頷くべきなんだろうけど。

　……。

　意気地無しでごめんなさい。やっぱりこれは、ちょっと。

「正直、微妙。僕も松平さんに……心底ぞっこんだから」

　まあそれも理解できるのか、彼女の表情は複雑難解なものへと変化した。

「私も……宮前くんと同じ立場だったら、やっぱり微妙って返すかな？」

「どうかなあ？　松平さん、優しいから」

「宮前くんほどじゃあないと思うよ？」

「そう思う？　じゃあええと……例えば今日、何回謝った？」

「えっと……宮前くんよりはちょっぴり、たくさん？」

「ちょっぴりかどうかは知らないけど、やっぱりその分、優しいって事だと思う」

「そう、かな？」

　彼女は首を傾げ。

　そんな仕草はやっぱり可愛らしく。

　……うん。こんな所だろう。

　まあ彼女と、いつまでもしゃべっていたい気分ではある。だけど、そのためのネタが豊富にあるわけでもない。かといって、付き合っているわけではないのだから、黙ってお見合いというのも彼女に悪いだろう。そろそろ切り上げるべきだ。

　……僕はもう、振られしまったのだから。

　でも何か悔しいので、どかーんと一発だけやっておこうね。

「えーと、保留」

「……え？」

「友達になる話。今の僕には縦にも横にも、首は振れないから」

「あ、うん……ごめんね？　じゃあ、そういう事で」

「ただ……生殺しにしてくれた仕返しにね。ちょっと嫌な情報を教えてあげようかと思う」

「えー。何すかセンパイ」

　やっぱりノリいいのかな？

「いや。先輩でも後輩でもないんだ」

「まあ、同級生だけども」

「いや。そういう意味でもないんだ」

「え？」

「今日は何の日？」

「え？　えー……七夕で、土曜日で。それから私の、誕生日？」

「他にもあるんだけど、わかる？」

「え。えええええ。さらに？」

　しばらく考え込む松平瑞穂。うーんうーんと唸りながら、こめかみに両の人差し指を突く仕草が可愛い。

　まあ多分わかるだろうはずも無く、案の定彼女は白旗を揚げた。

「……ギブアップ。教えてください」

「十六年前の今日、僕は生まれてね。お蔭で織彦とかいう、わけのわからない名前を付けられたりしてる」

　再び彼女は、フリーズした。

「……はい？」

「はい」

「はい？」

「はい」

「はいいいいいいいいいいいい？　今日なの？　マジっすか！」

　よし、セット完了。

　じゃ、一丁やりますか。せえの。

「七月七日に、七月七日生まれの女の子が、七月七日生まれの男の子に告白されました。それは高校に入って七十七人目の相手でしたとさ。……えっと、女の子ってこういうの、弱いんだよね？」

「ぎゃー！　わー！　わー！」

　うむ、なかなか華々しい大玉だ。たまや、かぎや。

「そういう事で、僕帰ります。今日はどうもでした」

「ちょっと待って！　宮前くん！　それ無いよ！　いくら何でも！」

「また来週」

「うわあああん！」

　それはちょっと、してやったり感があって、僕は大変な充足感を得た。

　そんな満足感は当然ながら、帰り道の途中で跡形も無く消え失せる。確かに花火とは、そういうものではあるものの。

　まともに女子と会話をした事も無い僕が、びっくりするくらい饒舌になっていた。それはとても、楽しい事だった。それはとても楽しい事だっただけに、それはとても……。

　とても。

　……。

　混濁した頭の中には、どういう道順を辿ったかすらの記憶も無い。まあ多分、いつも通りの道を通ったのだろうけれども。

　そしてアパートの部屋の前に着いた時、アホな事に気が付いた。

　ずぶ濡れ。

　僕、傘持ってるのに。何で、差してないかな？

　あれだろうか。漫画やドラマでは、よくある。何かショッキングな事があったりすると、登場人物はしばしば雨に打たれるものなのだ。これはまあ義務と云うかお約束と云うか、様式美的な所があって、悲愴感を増すための通過儀礼でもある。

　だがしかし、実際やってみるとこれは……。

　物語の中に入り込んで、悲劇の主人公を演じたりしてみようかとか、僕は考えたりしたのだろうか。そうして、どこかの優しい誰かがふと現れて手を差し伸べてくれたり、そこから新しい友情や恋が始まってみたり……。

　実際には、何も起こらない。雨の土曜日に、人など通るはずもない。

　そして、何にもならない。悲愴感を増すも何も、その前から気分はどん底だし、だから制服が吸った雨水と、濡れた事による不快感の他に、得られたものなど無い。

　……。

　アホらしい。アホだ。

　時刻は午後三時。特におやつの時間と洒落込む気力も無く、部屋に入ると濡れた制服を脱ぎ捨てる。夏服のワイシャツはもちろん、ポリエステルをふんだんに含むスラックスも、洗濯機で洗える事は知っていた。ドラムの中へ放り込む。下着もだ。そうして丸裸になると、タオルを手に取っては髪と体を拭き上げ、それも洗濯機へ放り込んだ。

　それが済めば、今は初夏だ。シャワーなど浴びずに布団へ直行する。もちろんベッドなどという豪華な物は無い。七畳半という微妙な広さの部屋の中に、せんべい一枚。

　……。

　ガックリ来る事くらいは、覚悟の上だった。

　でもさあ、あれ。思いっ切り僕に、好意あるでしょ？

　その上で、無理だと。

　そう完璧に、振られてしまった。

　これは……どう、ガックリ来ればいいのだろうか？

　あの分では、校長を諦めたり、または二股掛けたりして、僕と付き合ってくれる可能性は、まず無いわけで。しかしその一方で、友達としての関係を求めてきているわけで。

　本当に、生殺しではないか。

　……いや。云ってしまえば彼女の態度とは、私は苦しいので支えてください、ただしあなたの願いは聞き届けないけれど。つまり要するに、こういう事だ。そんなつもりじゃないのも悪気があるわけじゃないのも明らかではあるが、しかし結局はそういう事だ。

　酷すぎないか？　松平瑞穂。

　僕は、そんな彼女を……しかし絶対に、嫌いにはなれない。そんなわけが、無い。

　ならば、友達として？　いや、それは無理だ。僕は平静では居られないだろうし、向こうもおそらくそれが重荷になるだろう。そんな関係など、うまく続けていけるはずが無いだろうし……。

　そういえば、誕生日おめでとう。言われなかったな。まあ僕が、言う隙を与えなかったのかも知れないけれど。

　……。

　涙は、出ない。

　本当に悲しい時、人は涙を流せないものだ。そう云うが、僕は今、自分が悲しいのかどうなのかすら、判断が付けられなかった。

　無為に、時間が過ぎる。二階建ての二階部屋には、当然ながらすぐ上に屋根がある。

　それを打っているであろう雨の音は、次第に強さを増してきていた。

　……。

　ケータイに、メールの着信。確認するのには非常に多大なる気力が必要だったが、もし何らかの重要な連絡でもあったらまずい。魂を削ってどうにかケータイまでたどり着き、操作すると、僕はそれを放り投げた。

『ハッピーバースデー！　お祝いにヌード写真をプレゼントだ！　待ち受けにしろ！』

　添付の写真はどう見ても、幼児用遊戯人形の服を剥いだものだった。

　それは上の姉からのメールで、昔から割とお茶目をしでかす人ではあったが、その本文にはこう続いていたように思う。

『Ｐ．Ｓ．夏休み戻るよな？』

　どうかなあ……。夏休みまでに僕は、脳停止とかしたりせずに居られるか？

　僕は、死にたい、かも知れないよ……。

　松平さん……。

　重い、ただただ重い気分を、屋根からの轟音が覆い包んだ。

# **《２》ＭＫ．２と呼ばれた少女**

　七夕の夜。

　酷い土砂降りの夜ではある。夏だからと油断していた僕が発熱を感じ。慌てて感冒薬を口にして。ようやっと寝巻きを着て。再び布団を丸かぶりし。しかしそんな状態でなお感じ取る事ができたのだから、それなりの降りっ振りだったのだと思う。

　彼女が僕の部屋を訪れたのは、そんな夜だった。

　いやもちろん、その時点ではまだそれが女性である事もわからなかったわけだが、とにかくその何某はまず、部屋のドアをノックした。

　……コンコン。コンコン。

　ありがちだが、擬音としてはそんな感じだ。まあ、その騒がしい夜の事であったわけで、だから最初は気付かなかった。呼び鈴を鳴らしてくれれば、一発でわかったのだが。

　ただし。

　……コンコン。コンコン。

　いくら何でもそれが十分も続けば、流石に気付かざるを得ない。しかし、それでも僕は布団から出る気力が起きず、無視を決め込んだ。ところが。

　……コンコン。コンコン。

　それはさらに十分以上続いたのである。しつこい。仕方無く、僕は応答する事にした。

　……コンコン。コンコン。

　あーもう、わかったってば出るってば。

「はーい」

　そう声で合図すると、僕は布団から脱出した。

　ふと暗がりの中で、時計をどうにか確認すれば、時刻は既に夜中の一時を過ぎている。

　何だよこんな時間に。

　そう思いながらドアの覗き窓から外を見ると、それは暗くて誰だかよくわからない。ただ、髪が長いように見えるから、女性なのだろう。

　髪の長い女性として知り合いにあるのは、とりあえず……松平瑞穂？　いや、それは無いだろう。多分こちらの住所も知らないはず……と。

　そういえば結局、番号もアドレスも交換していなかった事を思い出す。それは……まあ、そのほうがいいだろう。そうなってしまったら、彼女から連絡が貰えても貰えなくても、悶々もだえる事になってしまうに違いない。

　しかし、ならば……外に居るのは、誰だ？

「どちら様、ですか？」

「怪しい者ではありません、とは言えませんが」

　……怪しくないって言えよ。開けられねーじゃねえか。

　まあ、声と言葉遣いからして、松平瑞穂でない事ははっきりとした。加えてその人物が、少女か、それに近い年齢の女性であろう事も推測できる。その彼女は、なかなか押しが強かった。

「こんな時間に申し訳無いですが、何も訊かずに中へ入れてください」

「いやいや。無理でしょそれは」

「そこを何とか」

「じゃあ、どこの誰だか教えてください」

「ですから、何も訊かずにと」

「だから。それは無理だって」

「そこを何とか」

　何のコントっすか？

　しかしこの人物のセリフ、字にして読めばごく普通の丁寧語であろうが、声にして聞けばどこか慇懃無礼の印象を受けさせられる。ただ、本人にはそのつもりが無いらしい事も窺えるので、慇懃無礼ずばりだとは言い切る事ができない。

　なかなか微妙で独特なしゃべりかたをするその人物、次のセリフにはいきなり劇物を仕込んできたりした。

「ごめんなさい。入れてもらえないならこのドア……壊す事になってしまうんですが」

　何ですとー。

「やめてください、管理人さんに怒られます。修理代も払えません」

「では、お願いします。入れてください」

「ケーサツ、呼んでいいですか？」

「その場合は、駆けつけられる前にドアを壊す事になります」

　あうう、何じゃこりゃ。

　この人物がドアを壊せるのかどうなのかは、もちろん知らない。だけともし本当に壊せるのだとすると、実行に移されたりしたら後の祭りすぎる。

　しかし、こんな時間に不審人物を無抵抗で部屋へ招き入れなきゃいけないとか、どう考えてもおかしいだろう。

　んー、んー……ああもう。

　それでもやっぱり結局は、開けるより他に方法が見付からない。仕方無かろう。それに、自ら怪しいと名乗るような人物だし、かえって悪者ではない気もする。

　とにかく、部屋の電気を点ける。チェーンを外す。錠を上げる。ドアを開ける。

　そこに居た人物は。

「……」

　え。

　そのロングヘアは金色で。

　その大きな目の中の瞳は青くて。

　その顔は僕と同じくらいの歳頃で。それは多分、少しだけ？　いや、もうちょっと？　いや、かなり？　いや、とんでもなく？　松平瑞穂よりも整っていて。言葉じゃうまく説明できないけれど、何というかこれは……。

　文句無しの美少女さんですよ？

　えーと、ガイジン？　あーいやでも、日本語しゃべってたしなあ。

　革製？　黒くて丈夫そうな、しかしよくわからないデザインの、手足むき出しでちょっぴりエッチい感じのする服を着てて。

　その服が抱え包んでいるムネは、どう少なく見積もっても控え目ではなくて。

　その右足の太ももにはホルダーのような物が巻き付いていて。それには何やら、無骨なサバイバルナイフのような物が収まっていて。

　履いているのはやっぱり黒いけど、普通のスニーカー？

　そんな感じの人物が、全身ずぶ濡れで立っていたですよ。

　わけがわからないよ。

「親方。空からじゃないけど女の子が」

「入っていいですか？」

「あ、えっと……うん」

　スルーされちゃった。親方ェ……。

「失礼します」

　少女はそう断って中へ入り、ドアを閉めると、しかし玄関でフリーズしてしまう。

「ん？」

「濡らしてしまいます」

「あ、そっか」

　慌ててバスタオルを取ってくると、少女に渡した。彼女は受け取り、その場でもそもそと体の水分を拭き取り始める。

　僕はその間、何もする事が無くて突っ立っていた。その時、これといってフラつきは感じられなかった。だから熱は、治まってくれたのかも知れないし、あるいは気のせいだったのかも知れない。

「ええと。着替え……女の子の服とか無いけど、何か貸そうか？」

「いいえ、多分すぐに済みますので。そうすれば、また濡れる事になりますから」

「え。って、あー……傘貸してあげたいけど、一本しか無いや……」

「いえ、それも。実は、済んだ後では傘がおそらく邪魔になるような用件なんです。だから私は今、濡れています。合羽をかぶるという手段が無くもないですが、それは別の理由があって避けています」

「そうなの？　よくわからんけど……じゃあ、何か飲み物は？　雨に打たれたならとりあえず……ホットミルクとか」

「それは……いただきます」

「了解、上がって。思いっ切り散らかってるけど」

「そうですね」

　おおおい。そこ、同意する所かな？

　靴と靴下を脱いでもらい、部屋の中央にある小さな一人用のコタツ台の所に落ち着いてもらい。

　冷蔵庫から牛乳を取り出しては鍋にあけ、それを火に掛けたところで、少女が口を開く。

「空から降ってくるには、屋根が邪魔です。それが無ければ、隣のマンションから飛び降りてくる事ができましたが」

　あー。スルーしたんじゃなかったのね、しかも生真面目に受けたのね。

「うーんそれ、もし屋根が無くても、危ないからやめてね？」

「そんな事はありません、大丈夫です。ご要望でしたら何とかします」

「えー？　いやいや」

　おもろい女の子なのかな？　とか思ったら、彼女はこんな言葉を継いだ。

「……なるべく、あなたの希望に沿うようにしたいので」

　んー。どういう事？

　これはまさか、僕の言う事を全部聞き届けて、ついでにエッチい事もいろいろして、その後コワーイお兄さんがやって来るアレ、とは違わんかな？　いやいや、僕は貧乏なんだから、ゆすっても何も出ないよ？

　まあ、そんなこんなで牛乳は温まり。

　その半分はマグカップに、もう半分は茶碗に注ぐ。

　カップ二つ無いからな。貧乏万歳。

　それらを台へ運ぶと、マグカップのほうを彼女に勧めた。

「どうぞ」

「いただきます」

　ず。

　ず。

　ホットミルク、温まりますなあ。

「美味しいです」

「そっか、よかった。……ええと。とりあえず君は、どこの誰なの？」

「ごめんなさい。教えられません」

　ハッキリしている子は、好きです。

　でも今、この回答は困りますが。

「こちらも訊きます。あなたは宮前織彦。男性。十六歳。間違いありませんか？」

「うん。僕に、何か？」

「はい。実は、本当に申し訳無いんですが……」

「何か面倒事？」

「面倒という事は、ないとは思います。あなたはただ、じっとして居てくれればいいんですが……まあ、そうしているのが難しくは、あるかも知れません」

「はあ。何するの？」

「ごめんなさい。私は、あなたを殺しに来ました」

　ず。

　ず。

　ホットミルク、美味しいですなあ。

「ええと。今、ちょっと聴き慣れない言葉、言わなかった？」

「はい。あなたの生活環境を考えれば、おそらくそれで間違い無いと思います」

「ええと。殺す、とか？」

「はい。ごめんなさい」

「ええと。ちょっとよくわからない」

「本当にごめんなさい。実は私も、あなたを殺す理由を知らないんです。ただ、命令には従わないといけませんし……」

「めーれい？」

「はい。あなたの希望に沿いたいと言ったのはつまり、そのせめてものお詫びというわけです」

「そうだったんだ。でもその、命令って誰の？」

「ごめんなさい。教えられません」

「うーん。よく謝る子、他にも知ってるよ？　っつーか、その子に告白して、振られたんだけどさ。今日……あ、もう昨日か」

「……告白、ですか」

「うん。君も誰かに、告白した事、ある？」

「いいえ。告白とか、そういう事。私には……まったくわかりません」

「え。わからない、って……女の子なのに珍しいね？　潔癖症、とか？」

「いいえ、そういう事ではありません。私は、殺人兵器として作られました。そのせいか、そのために必要の無いものは、私には具わっていないようなんです」

　ず。

　ず。

　ホットミルク、いいですなあ。

「……兵器？　作られた？」

「私は、人に普通あるはずの感情などを、持ち合わせていないんです。しかし私は、愛情。恋情。特にそういったものについて強く興味があるんです。だから、それが何なのか知ろうとしてきたんですが、でも結局はわからずじまいに終わっているんです。とても残念に思います」

「んー。本当にわからない？」

「はい」

「そっか。でも、そんなにいいものでもないよ？　振られると、めっちゃ苦しいし」

「そうなんですか？」

「うん。……あ、でも悪いものでも、ないかな？　人を好きになると、凄く元気になれる。わくわくもするし、それなりに楽しい事でも、あるかな」

「そうですか。やっぱり私は、それを知りたいです」

「うーん、でも……こういうのって教えられるものじゃなくて、自然に感じるものだし」

「説明は難しい、ですか？」

「そうだね。熱さ、冷たさ、痛さ。そういうのが言葉で教えられないのと同じだと思う」

「そうですか」

　ず。

　ず。

　ホットミルク、無くなってしまいました。

「ごめんなさい。私はそろそろ、命令を実行に移します」

「そう」

　少女は立ち上がる。

　脚に装着してあったナイフを引き抜く。

　こちらへ向かって構える。

　……。

　えーと、あれ？　これは……。

「あの」

「はい？」

「ひょっとして、それで僕を刺そうとしてる？」

「殺しに来た、と言いました」

　……え。

　え。

　あ。

「のああああああああああああああああああああ！」

　おかしな事に、さっきまで僕はやたら落ち着いていた。平和ボケというやつだが、そこは彼女も不審に思ったらしい。まあ、だからといってこれは、彼女が言うセリフでもなくて……。

「どうしましたか？」

　いやいや、こっちが訊きたいよ！　っつーか訊くよ！

「な、な、何で！　何でそんな！」

「理由は私も知らない、と言いました」

「ちょっと待って！　勘弁してよ！」

「ごめんなさい、と言いました」

「のおお！　ごめんで済んだらケーサツ要らない！」

「でも私は、あなたを殺さなければ」

「何故ー！」

「理由は私も知らない、と言いました」

「堂々めぐり！」

　話にならないし！

　これ、ヤバイ？　相当、ヤバイ？

　どうにかしないと僕、死ぬ？　殺される？

　いやいや、確かに死にたいとか、思ったよ？　考えたよ？　でもそれは、失恋した時とかに付き物の、いわゆる言葉の綾ってやつでしょ？

　殺人兵器？　だっけ？　何でそんなのが僕の所に来るの？　一応、ゼンリョーな一般市民のつもりですよ？

　どうしてこうなった！

「世の中には、その理由も知らずに死んでいく人もいます。例えば、交通事故。例えば、通り魔。例えば、安楽死。珍しい事ではありません」

「いやいやいやいやいやいや！　事故はともかく後の二つは違うでしょ！　珍しいよ！」

「私が手に掛けた人数も少なくありません。私は、その人たちの事をみんな覚えています。もちろん、あなたの事も忘れません。それはきっと、あなたが生きたという証くらいにはなるでしょうから、だから……ごめんなさい」

「ぎゃー！　わー！　わー！」

　本当に飛び掛ってきた！　何とかよけるうううううう！

　……。

　あれ？　えーと。

　とっさの事で、自分の体がどう動いたかもよくわからないのだけれども、しかし。

　……これは？

　彼女の頭が、金色の髪の毛が、すぐ目の前にあって。

　彼女の体が、こちらに少しのし掛かってきてて。

　脇腹辺りに、少し妙な感触があって。

　ええとこれは、温かい？

　いや、熱い？

　いや違う、これは……。

「……痛……？」

「ごめんなさい。あなたの動きを読み違えて、急所を大幅に外してしまいました」

　そんな言葉が、聞こえたような気がする。

「本当にごめんなさい。せめて苦しまないように一撃で、と私は……こんなはずでは」

　……。

「だああああああああああああああああああああああっ！」

　どん！

　僕は無我夢中で、彼女を突き飛ばした。虚を突かれた彼女は、どたり倒れ。距離は開き。そして僕は、自分の状態を確認する事ができる。

　左脇腹が、赤い。熱い。痛い。

　刺された。刺されてる……。

　……。

　殺されるよ！

「うわああああ！　あああああああああ！」

　僕はとにかく、手で物を探っては、彼女へ向かって投げつけた。

　脱ぎ捨てたシャツ。通学バッグ。転がっていたシャープペン。放り投げたままだったケータイ。マグカップ。茶碗。コタツ台。散乱していた参考書。お気に入りのライトノベル。台所に備えてあった缶詰。食器。鍋。包丁。

　……あー。刃物はちょっとアレだった、かな？

　いいや、そんな事に構ってはいられない。僕は投げられる物を探り続けた。

　冷凍庫の中の冷凍食品。氷。アイス。冷蔵庫の野菜。作り置きの料理。調味料。とっておきのワイン。鶏卵。牛乳パック。

　……あー。卵と牛乳は、刃物とは別の意味でちょっとアレだった、かな？

　まあいろいろ投げたものだから、少女のほうはもう滅茶苦茶になっていて、様子がよく覗えなくなっていた。

　ただ、動きも見られない。

　今だ、逃げよう……。

　しかし出口は、玄関ドアしか無く。それには少女の居る辺りの脇を、すり抜けなければならず。

　……いいや迷っている暇は無い！　一心不乱に玄関ドアを目指す！

　狭い部屋だからそれはすぐにたどり着く！　ドアを開ける！

　ガチッ！

　……。

　うんー？

　これは……チェーン、ですねえ。さっき閉めてくれたんですか？　金髪少女たん。それはどうも、わざわざご丁寧に……って違う違う違う違う違う！

「ああああああああ！　あああああああああああーあああああー！」

　慌ててチェーンを外そうとするが、人間、慌てるとかなり何もできなくなる。僕は、ドアを一旦閉めなければチェーンは外せない事を、すっかり失念してしまっていた。

「わあああああ、開けええ！　開けえええええええ！」

　ガチャンガチャンガチャン！

　もう何が何だかわからなくなって、ドアを激しく揺さぶる。もちろん派手な音が立つだけで、期待した効果は得られない。そんな無意味な行動を、どれくらい続けただろうか。それはまるでわからないが、混乱した思考の片隅でふと、訝しく思う。

　かなり時間は経ったはずだ。なのに……危機が、さっきまであった危機が、なかなか襲い掛かってこない。

　……。

　彼女、どうなった？

　そんな事が気になった。

　もちろん、誰がどう考えたって、そんな事を気にしている場合ではない。何しろ、自分の命を狙ってきた相手である。しかし、それでも。

　……。

　彼女、どうなった？

　そんな事が気になった。

　少女の居るほうを、振り返る。いろいろな物で山になっていて、少女の姿は目視できない。そして、やはり動きは無かった。何かが、当たりどころ悪い箇所に、当たった？　もしそうなら申し訳無くもラッキーではあるが、油断はしないほうがいい。

　恐る恐る、僕はその山になった品々をどけていった。

　まあ当然ながら、その行為こそが油断丸出しである。そんなものには構わずに、ドアを開けて逃げ出して、誰かに助けを求めるのが正解。平常時なら誰もが当たり前に出せるはずのこの解答へ、その時の僕はまったくたどり着く事ができなかった。

　一番大きな物は、コタツ台。それをどけると、少女の姿を目にする事はできる。

　ただ……。

　その姿は、おかしい。何が異質か？

　足が見える。それは正常。

　腕も見える。それも正常。

　体。ちゃんと服着てる。大人しいとはとても云えない、胸のふくらみも確認できる。

　顔。何となく薄ら目を開いてこちらを見てるけど、ちゃんと美少女してる。

　ええと、では？

　……ギュッ。

　それに気付く前に、僕は両手両足を拘束されていた。

　何に？

　腕は、動いていない。

　足で拘束できるのかどうかはよくわからないけれど、それも動いていない。

　じゃあ……ムネか？　ムネなのか？

　ムネで拘束するとは器用な真似を、というアホな考えをどうにか抑えてよく観察すれば、僕の手足を拘束する金色の糸状のそれは、彼女の頭から伸びていた。

　……髪ですか！

　ちょっとちょっと！

　そういうのはフィクションの中だけにしといてください本当に！

　髪って筋肉とか入ってないでしょ！

　何で動くの！

　っつーか長さも変わってるでしょ！

　こんなの絶対おかしいよ！

　しかし現実として僕は拘束されていて、もがいても打ち解く事はできない。それでもひたすら暴れてみたが、結局どうにもできず、やがて疲れて休止してしまう。

　そんな僕へ、彼女は死刑宣告をした。

「これで、結果は固定されました。あなたは私に、殺されます」

「う……」

　殺、される……。

　髪で僕を拘束する、謎としか云いようの無いその少女は、ところがこんな事を言い出した。

「ただ、あなたとは会話が弾みます。だから私は、やはり名残惜しい。そんな風に思います。なのでもう少し、お話をしませんか？」

「……え？」

　あの程度の軽いおしゃべりを弾むと表現するとは、どういう事なんだろうか。一体どんな感覚をしているのかよくわからないものの、溺れている僕にとっては一応の藁だ。これを掴まない手は無い。

「死ぬのが先延ばしになるなら……いいけど」

「どうして逃げなかったんですか、とは訊きません。すぐに追い付きますから」

「……はあ」

「でも、それでも逃げていれば、多少はあなたの有利に働いたかも知れません。……やっぱり訊きたいですが、訊かないと言ってしまったので別の質問に変えます。どうして私を、掘り起こしましたか？」

「だ……大丈夫かな、って思って……」

「馬鹿、なんですね。……いいえ、お人よしと訂正します」

「……それはどうも」

　ええと僕は今、褒められたん？　けなされたん？

　うーん、両方か。だよね。

　もともと成績よくないほうだけど、こんなところでまで馬鹿扱いって……。はあ。

「もう一つ、訊きます。おそらくあなたは今、常識外の光景を体験しているはずです。どうして驚かないんですか？」

「いや……それはすんごく……驚いているつもりなんだけれども……」

「そうなんですか？」

「いやいや、そりゃそうでしょ。っつーか、これは……この髪は、どういう仕組み？」

「それは、私には説明されていないので答えかねるんですが……とにかく、私の意志で動かす事ができます」

　彼女は少し、拘束には用いていない頭頂あたりの髪の毛を、ちょこりちょこりと動かしてみせる。現実味がまったく感じられない点を無視すればその様子はちょっと、ファニーと云えた。

　っつーか今のすんごく、動くアホ毛っぽかったよ？

「便利、だね？」

「そうでもありません。さっきまでの私はヒューマンモード、つまり人として行動する状態でした。そこから今のトランスフォームモード、自由に変形できる状態へ移るために、かなりの時間が必要です。その時間まるまる、相手に猶予を与えてしまう事になります」

「でも……追い付くんでしょ？」

「それはあなたのような、逃げる事しかできない相手の場合の話です。もっと好戦的な相手だった場合、私は応戦できずに危機的状態に陥ります。現に私は今、あなたからいろいろと物を投げつけられても抵抗もできずに、ただまともに身に受けるしかありませんでした」

「あ、そっか。……でもじゃあ、ずっと……えーと、トランス？　モードで居れば？」

「エネルギーは有限です。トランスフォームモードで居るには大量のエネルギーを消費しますから、持続しません。普段はどうしても、ヒューマンモードで居る必要があります」

「はあ。万能ではないんだ？」

「技術革新に幻想を抱いたり目が眩んだりした人たちは、しばしば高機能を万能と勘違いします。でも、万能なものはこの世に一つもありませんし、だから作り出すのも不可能です」

　……何か妙に、深い事言うなあ。

「ところで作るっていえば、作られたとか言ってたよね？」

「はい」

「それって要するに……君は、人間じゃ、ないの？」

「殺人兵器、と言いました」

「そっか。人間じゃないなら髪が動いてもしょうがない」

「……」

　一瞬、黙られてしまった。ええと、ダメだった？

「それで納得してしまうんですか？　私自身、納得のいかない点が多いんですが……」

「いや、だって難しい事わからないし。その、エネルギーってやっぱ、ガソリンとか？」

「そういうのは、ちょっと。基本的にエネルギー源は、人の食べる物です。もちろん食べられる物かどうかを判別する必要がありますから、私が具える感覚には味覚もあります」

「そっか。じゃあ、少しは楽しみとかあるんだ？」

「はい。ホットミルク、ごちそうさまでした。久々で、とても美味しかったです。ただ私は……空虚、というものをとても強く感じているんです」

「……くうきょ？」

　殺す、とは別の意味で、日常ではあまり聴き慣れない単語だ。

「他に表現のしようが無いので私が勝手にそう呼んでいるだけですが、何かで埋まっていなければいけないと感じる箇所に、何も無い。常に、満たされない。渇望にさいなまれる。そんな感覚です。これを抱え続ける事は、私には非常につらい事なんです」

「そうなんだ……。どうせ作るなら、つらさとか感じないように作ればいいのに」

「まったく同感です。痛みなどは身体の異常を察知するものですから無ければ困りますが、こんなものまで感じていなければいけない理由は皆目見当が付きません」

　いちいち説明的なセリフを出してくるよね、何か。クセなのかな？

「そして残念ながら、その空虚は食べ物では、満たせないようなんです。物質的には食べ物で補えているはずですし、だから精神的なものだと思うんですが……」

「精神……兵器に、そんなのあるの？」

「わかりません。ただ、私の思考回路は少なくとも、一般に普及しているノイマン型コンピュータでない事は間違いありません。例えばＰＣやスマートフォンが自律的に、愛を知りたいとか名残惜しいとか言い出しますか？」

「そんな事言い出したら、窓から投げ捨てるけど」

「それは勿体無いので、初期化で勘弁してあげてください。……といいますか、ゴミにするにしてもそれでは不法投棄です。そういう事は、してはいけません」

「……え……あー、いやその……それは、えっと……ごめん」

　ええと……何か今、叱られましたけど？　殺人兵器に。不法行為を。

　これはちょっと、どうやっても申し訳無さ感より、キツネにつままれた感のほうが強いんだけれども。いや……むしろ、キツネに包まれた？

　よくわからない。どこへ持っていけばいいの？ この気持ち。

「それはそれとして、ただ……私ははっきり、コンピュータは自分とは異質なものなんだと感じます」

「そうなんだ」

「これはつまり、私には直感のようなものが具わっているという事ですから、それもコンピュータではない事の証左と云えるはずです。私が愛を知りたいと強く思うのも、それが私の感じる空虚を埋めてくれるという、直感らしきものによるんです」

「そっか、うーん。じゃあ、何なんだろうね？」

「わかりません。私が何であるのかも、そもそも兵器にどうしてこんな思考の揺らぎを許しているのかも」

「あー。フィクションで、機械とかに感情持たせると、大体ロクな事になってないよね」

「そのフィクションではよく、性能向上に伴って人工知能が自律行動し、自我や感情が生まれる。そのような設定のものが散見されますが、しかし少なくともそれがノイマン型コンピュータである限りは構造上、そんな事は絶対にあり得ないと言い切れます」

　……話の流れとはいえ、なかなか悲しい事を断言してくれた。

「夢が無いなあ。フィクションなんだから」

「そうかも知れませんが、私の存在はフィクションではありません」

「それはそうだけれども……」

「そもそも人間とまったく同じ思考回路を作り出せるという事は、人間の頭脳そのものを作り出す事ができてしまうという事なんですよ？　頭脳で思考する人間が人間の頭脳を考えるというのは、その設計図自身を表す設計図を作成するようなものですし、そしてそんな事は絶対に不可能ですから、人間の頭脳を作るのは極めて困難な事だと私は思います」

　……すいません。あんま理解できないです。

「えーと、あー……そんなもん、なの？」

「はい。付け加えるなら実は、未だ人工知能とはどういうものであるかという定義がまったくできていなくて、何が実現できればそもそも知能と云えるのかという哲学の段階なんです。定義が無いんですから当然、今出回っている人工知能と呼ばれるものはみんな人工知能ではない何か別のものですし、その大抵は成長しているように見えるよう仕組まれただけの、ただのおもちゃなんです。まあそれは、実現可能性とは別の話ですが、いずれにせよ私に、そんなものが搭載されているとは考えにくいんです。それを以って、私の思考回路はコンピュータではない。そう言ってしまう事ができます」

　……すいません。馬鹿ですいません。

　しかし何か、ずいぶん語るなあ。

「うーん。よくわからないけど何か、いろいろ難しいんだ？」

「そうですね。さらに言えば私は私が……機械ですら、ないと考えています。皮膚を切られれば人とおそらく同様の痛みを感じますし、血も流しますから……このように」

「……え」

　彼女が髪の毛を操って示した先。それは左足の脛の横で……。

「あ……うああああああ！」

　包丁が、突き刺さっていた。どう見ても血液にしか見えないものが、少しずつ滴り落ちている。

「ご、ごめん、なさい……」

「いいんです。私は、こうされても文句の言えない事を、あなたにしましたから。お腹は痛みますか？」

「あ……いや、普通に痛いです……」

「ごめんなさい」

「謝られても……」

「それでも……ごめんなさい」

　少し目線を落とし、少しうつむき。そんな仕草を、少女はした。

「君は……変な、殺人兵器だね？」

「そうですね。私はこれから、あなたを殺すのに」

「……それは言わないでちょーだい……」

「ごめんなさい……。私に涙があればきっと、今流すんでしょうね……」

　そんな事を言う少女の表情は……そういえば、部屋のドアを開けて初めて相対した時から、ずっと無表情のままだ。

　どうなのだろうか？　喜怒哀楽の無い世界。

　まったく想像にも付かないが、自分の考える通りの感情を表現できないって、それって凄くつらい事なんじゃないのか？　これは僕が、普通の人間だから、そう感じるだけなのだろうか。

　……いや。少し、理解できるかも知れない。

　僕も松平瑞穂に、振られた。それはとても、残念な事のはずだ。しかし、それが悲しいかどうかも、わからず。涙すら、出ず。その事について僕は今、どう感じているか。

　……ああ。そうか。これが、彼女の云うところの空虚、というものだろうか。確かにぽっかりと、心のどこかに隙間が出来たような感がある。

　それによる、云いようの無い虚脱感。

　それによる、云いようの無い無力感。

　それによる、云いようの無い厭世感。

　僕は今それを、しかし松平瑞穂に振られた事だけにしか感じていない。だけどもしこんなものを、たくさんの対象に対して、普遍的に抱え込まなければいけないとしたら。抱え続けなければいけないとしたら。

　……。

　ふと気付く。彼女の口調から受ける、慇懃無礼のような印象。

　違った。言葉に感情が乗っていないんだ。奇妙な違和感を覚えるのは、おそらくそのせいだ。そうでなければ、この子の言葉はきっと、もっと……。

　……。

　何だか、凄く悲しくなってきた。

　可哀相。そう思った。

「……どうして」

「え？」

「涙を流したいのは私なのに、どうしてあなたが涙を流すんですか？」

「……あ」

　あー。これはちょっと、格好悪いかな？　泣いちゃってるわ、僕。

　っつーか。何で僕は今、泣いているんだろうね？　好きな子に振られても、そうはならなかったのに。

「私が怖いからですか？　それとも、死への恐怖からですか？」

「……どっちでも、ないと、思うよ？」

「それでは？」

「そうだね……えーと。悔しい、からかな？」

「私から逃れられないからですか？　それとも、ここで死ぬ事に無念があるからですか？」

「違うよ。僕は、君を助けてあげたいのに、何もできないから……謝るのは、僕のほうだよ。ごめん……」

「……何が」

「え……？」

「私を助ける、というのもよくわかりません。しかしまず……あなたの命をおびやかす私を、あなたが助ける事について、何があなたにとってのメリットになるんですか？」

「……あー、来たよ、その質問……」

「はい？」

「それはね、よくあちこちで議論になって、それでも結局はっきりした答えが出ないで終わっちゃう議題なんだ」

「そうなんですか？」

「うん。例えば、人の財産を奪ってはギャンブルでジャブジャブ使い込んじゃう人が、病気の人に匿名で治療費を寄付するとか。人を容赦無く殺してまわる殺人鬼が、捨てられた赤ん坊を守るのに命を掛けちゃうとか」

「そういう話も、時々聞きますが……確かに私には、行動原理が理解できません。あなたには、その理由がわかるんですか？」

「そうじゃないんだ。理由なんか無いんだよ」

「理由が……無い、ですか？」

「そう。自己満足、って理由が出てくる事もあるけど、普段そうしたくてしてるのと全然逆の事やってるんだし、結局それが何で自己満足に繋がるのかまでは説明が届かない」

「それでは確かに、そうですね」

「だからもう、そういうもんなんだ、って思うしか無いんだよ、多分。リンゴが地面に向かって落ちるのとおんなじに」

「そういうもの、ですか」

「うーん……まあ、偉そうな事言ったけど、僕にはよーわからんです、はい」

　っつーか、モノのホン（ライトノベル）の受け売りでした、すいません。

「……例えば」

「え……？」

「例えば……私がその殺人鬼のように、あなたを助命したら……そういうもの、という事で済むものなんでしょうか？」

「それは……君に命令してる人に訊いてよ。まあ、僕としては是非、そういうものって事で済まして欲しいけど……あ、そういえば」

「……何ですか？」

「名前、やっぱり教えてくれない？　君って呼ぶのも何だかアレだし……」

「名前……ごめんなさい。私は、名乗る事ができません」

「えっと……やっぱ、どうしても秘密なの？」

「いえ。これは絶対に秘密というわけではないんですが、私には……名前が、無いんです」

　え、マジか。

「えっと……通称みたいなのも、無いの？」

「それは、ありますが」

「教えてみてよ」

「マークⅡ」

　……ごっつすぎます……無機質すぎます……。

「私は、初代の改良版のようです。だから、マークⅡ。ちなみに初代は推測するにおそらく、私が作られるまで本当に名無しだったんではないかと」

「何か……嫌だな、それ」

「どうしてですか？」

「……道具みたいで」

「事実、私は道具として使われています」

「僕が君の主人だったら、そんな扱いしないのに」

「……道具として作られたものを道具として使う事に、特に疑問をはさむ余地は……」

「だって君……道具には、見えないよ？」

「！　……」

　んー？　あれー？

　動揺したよね？　今。

　これ。もしかして、説得で何とかなる感じ？　さっきも助命だ何だ言ってたし。

　……うん。感情とかいろいろ無いとは言ってるけど、完全に何から何まで無いわけではないんだろうと思う。多分。だったら……どうにか、説得できるはずだけれども。

　しかし僕が、ではどうやって攻めたらいいのかな？　と言葉を探していると、少女は不意に言葉を発した。

「……ごめんなさい。時間切れです」

「時間、切れ？」

「正確には、エネルギー切れです。もうすぐあなたに対する拘束は、解けてしまいます。その前に私はあなたを、殺さなくてはいけません」

　……うわーん。

「その命令、どーしても聞かなくちゃダメなの？」

「はい」

「聞かないと、どうなるの？」

「おそらく私は閉じ込められて、エネルギーの補給を断たれます」

　……ん？

「それだけ？」

「それだけですが、それが私にはおそらく、永劫の苦しみになるんです」

「どういう事？」

「私はマスターの作品ですから、命令に背いても破棄はしてくれないでしょう。でも補給を断つだけなら、いつでも再始動できる状態で動けないようにする事ができます」

「それって……眠るって事なんじゃないの？　それなら別に、大した事無いんじゃないかと……」

　そんな理由で殺されるのはちょっと御免こうむりたいのだけれど、少女は予想外の説明を付け加えた。

「いいえ、眠りません。意識は続きます。止まっている間でも、ずっと」

「……え」

「それがどういう事なのか、私は体験した事はありませんが、想像はできます。そして、どんな理由でかは知りませんが……初代が今、実際にその状態にあります」

「……」

「あなたには、本当に申し訳無いと思います。今だってあなたは、私とたくさんお話をしてくれました。そんな相手の命など奪ったりなんかしたくはありませんが……でも私は、そんな風になるのはもっと嫌なんです」

　それは……それは確かに、ちょっと嫌だ。同じ立場なら僕も、誰かを殺してしまうかも知れない。

　けれどこのままじゃ、僕のほうが本当に殺されてしまうし。何か、何か言わないと。

　ええと……ええと。

「ごめんなさい……我が儘、ですよね？」

　あ。この線。

「そっか。我が儘ならしょうがない」

「……はい？」

「でもそれなら、僕も我が儘言う。君、可愛いから」

「可愛い……ですか？　私が……」

「うん。それはもう、とびきり」

「そうなんですか？」

　自覚、無いのか……。

「嘘言ってどうするよ。だから、君が泣いたり笑ったりしてるとこ、見てみたいんだ」

「……私に、それはできません」

「それは本当に？　できないって教わってるだけとか、思い込んでるだけとか」

「……」

「だからさ。僕も死にたくないし。チャンスくれないかな？」

「チャンス……」

「まあ、僕なんかに何ができるかは知らないよ？　何もできないかも知れない。でも、君に、何かをあげられるかも知れない」

「何か……」

「とりあえず、僕の命を保留する事。あと、君のご主人様がちょっかいを出してきたら、追い返す事。それを約束してくれたら僕も君に、最大限の努力をするって約束する」

「最大限の、努力……」

「うん。どう？」

「……」

　どうだろうか。悪い提案ではないはずだ。もう後は殺されるというだけなら、言って可能性がある事は何でも言ってみるべきだ。そして言ってみたから、後は反応を待つしか無いわけだけれども……。

　これは正直……すり減る。今、まともそうな事言ったから、もしかしたら平気の平左のように思われているかも知れないが、その実……。

　どうしてこんな事になったのか、まったく以ってわからない。わからないし、だからもう思考など働かないし、もういっぱいいっぱいだし、僕はこの災難がただ過ぎていくのをただ待つより無いし。

　ひたすら、助けて欲しいと願うばかりだった。

　会話が途切れて沈黙は訪れたが、静寂までもが訪れたわけではなく、屋根を打つ雨の音は相当に強いものへと変化していた。その雨声に包まれる中、本当に長かったのか短かったのか僕にはよくわからないものの、体感的にはかなり長い時間の経過を感じ、その分僕の魂は削り取られていき。

　その果てに……。

　彼女の髪の毛は、動き……。

　落ちていたナイフの柄を、巻き取り……。

　もたげた。

「決めました。というより、最初から決まっています。……私は、命令を果たします」

　その鋭利な刃は次の瞬間、僕の喉元に迫る。

「あ……」

　短い、悲鳴なのか何なのかわからない声が、僕の口から漏れた。

　本当に……殺される。

　無駄とわかっていても、暴れて振りほどこうと思った。しかし体は、動かない。これは……これが、蛇ににらまれた蛙、という事なのだろうか。つまり、僕は……怖いのか。

　いや、まあ、そうなんだろう。この状況。あり得ない。

　自分で言うのも何だが、平凡な男子高校生である。平凡な一般市民である。今まで普通の、平凡だが安寧な生活を送っていた。遠く離れた土地では殺し殺されるなど当たり前な場所もあろうが、少なくともここでは無縁のはずだった。

　今、目の前に突き付けられたそれは、多分僕の命をあっさり奪うだろう。

　僕は、ここで、死ぬ。だとしたら、僕の今までの人生とは、何だったのか？

　生まれるのにも死ぬのにも理由は要らない、どう生きるかが問題だ。そういう言がある。しかし、だとしたら僕は、どう生きたか。

　何もしていない。

　何となく生まれ。何となく保育園に預けられ。何となく小学校で過ごし。中学校ではテストに多少苦労したけれど、それ以外は割といい加減に過ごし。

　その結果、僕は何もしていない。強いて言えば、つい今日……いや昨日の昼間、初恋の相手に告白してみるという一大イベントを敢行した。その結果は、どうしようも無いものではあったが……。その相手の顔が、思い浮かんだりした。

　さよならすら言えずに、僕は終わるのか。

「……」

　再び、長く感じる沈黙が訪れた。

　それは本当に長かったが、よく考えれば当初彼女が言っていた、せめて苦しまずという言葉に反している。けれどそれも、仕方の無い事なのだろう。彼女はいろいろ、迷っていた。今も、尋常ではないほどの葛藤があるに違い無い。

　もっとも、それをやられるこちらとしては当然たまったものではなく、恐怖を味わうために焦らされているのと何も変わらない。

　今か……今か。

　早く……早く。

　まるで、逆にとっとと自殺したい人間のような思考すら、芽生え始め。

　そんな風に憔悴させられてきたあたりで……不意に、僕の体は床に倒れ込んだのだった。

　そして、暗転。

　ああそうか、これで……終わり。終わってしまうか。

　なるほど何も、面白くない人生だった。後悔先に立たずって云うけれど、そのまんまだな。

　さよなら人生……。

　……。

　って、うーん？

　それでこの意識は、いつ消えて無くなるのだろうか？　それとも僕は、幽霊とかになって漂い続けるのだろうか？　もしくは、ここは天国か地獄で、既に死後の世界に身を置いているのだろうか？

　もちろん死んだ経験なんか無いからその辺はよくわからないが、まあとりあえず目を開けてみようか。

　……元、居た部屋だ。

　という事は、ここは天国でも地獄でもない？　ならば僕は、幽霊に？

　体を確認しようと、起き上がってみる。その時、脇腹に痛みが走った。見てみれば、着ている寝巻きは血を吸ったままだ。

　んん？　幽霊ってこういうもの？　最期に受けた怪我とか痛みとか、引きずったりするのだろうか。とすれば、僕の死因は喉への一撃のはずだけれども……そこからの痛みは、無い。手で触って確認するも、特に異状は認められない。

　ちなみにベタな確認ではあるが……足は、ある。

　どういう事ですか？　先生。

　ふと見やると、例の金髪少女が壁にもたれて座り込んでいる。金髪といえばその髪の毛は、ごく普通の長さでごく普通に頭から垂れ下がっている。動いたりもしていなければ、僕を拘束していたりもせず、ましてやナイフを操ってなんかすらいなかった。

　まさか、夢か幻でも見ていたとか、そんなオチだったりするのだろうか。いやしかし、それではこの腹の傷が説明できない。もう、どこにもかしこにも、理解できるものが見当たらなかった。

「……ええと……僕は……」

「死んだと思いましたか？」

「……え？」

「私はただ、拘束を解いただけです。それだけで倒れ込んでしまうほど、あなたに思い詰めさせてしまった事は謝ります。ごめんなさい」

「あ、そうなの？」

「つまりあなたはまだ、生きています」

　なあんだ。

「だから私は、命令を果たします」

　ぎゃー。

「ただし命令に、期日の指定はありませんでした」

　ええ……つまり？

「あなたは私に、最大限の努力をすると言いました。それを条件に、命令の遂行をしばらく見合わせようと思います」

「……ええと……あー……」

　要するに、僕……助かりました？

　状況をきちんと認識する事ができる前に、その安堵をきちんと噛み締める事ができる前に、しかしその少女は矢継ぎ早にセリフを継いだ。

「それで早速、お願いがあります」

「え……何？」

「卵と、牛乳は、ちょっと。身をきれいにしたいんですが」

　……おおう。

　確かに彼女は酷い有り様に……っつーか、何かエロいです。頭から卵の白身が垂れたりしてて、そういうプレイとかした後のような感が。

　っつーかコレ、僕がやったのかよ変態かよ。

　……ごめんなさいわたしです、わたしが悪うございました……。

　って、そんな脳内一人ノリ突っ込みをやってる場合じゃなかった。

「あー、じゃあ、シャワー使ってよ」

「それをあなたにお願いします。私はしばらく、身動きできません」

「……え？」

　これは、トイレ行きたいけど行けないから代わりに行ってとか、そういう話？　いやいや、それ意味無いし。えー？

　そう首を傾げていると、彼女はひどく親切丁寧な解説をした。

「説明しないとわかりませんか？　私は今、エネルギー切れのために体を動かす事ができないので、あなたが私の服を脱がせて、あなたが私の体をシャワーで洗ってください。私はあなたに、そういうお願いをしています」

　……。

　何ですとおおお！

「いっ、いいいいいい、いや！　それ無理だから！」

「何か問題ありますか？」

「問題しか無いよ！」

「どんな問題が？」

「男が女の子の服とか脱がしたらまずいでしょうが！」

「それは公衆の面前だったり、相手に了解を得ていなかったりする場合でしょう。今はこれといって、まずくはないかと」

「了解しないで簡単に！　っつーかそれとも、体がちゃんと作られてないから見られても問題無いとか、もしかしてそういうオチなの？」

「いえ、そういう事は無いはずですが」

「違うのかよ！　じゃあダメだよ！」

「どうしてですか？　そのほうが、あなたも嬉しいのではないですか？」

「そんなんじゃ嬉しいどころじゃないってば！　っつーか恥ずかしいでしょ！」

「私は、特に」

「僕が恥ずかしいの！」

「そうですか。それでも私は、あなたにお願いするしかありません。このままでは、傷に影響します。まあそのついでですが、包丁も抜いて欲しいと思います」

「……あ」

　そうだった。彼女の足には未だ、包丁が刺さったままであって……。

「いや……でも。それなら包丁ら辺だけ、という事で……」

「つまり私が回復するまで、汚れたままで居ろという事ですか？　それは、ちょっと」

「……それは、そうだけとさ」

「でしたら、お願いします。最大限の努力を、という約束でしょう？」

「そうは、言ったけれども……動けない女の子を脱がすって、変態さんじゃないか」

「私のほうが、そうしてくださいとお願いしています。何なら、私のほうが変態だったという事にしてください」

「いや、無理でしょ？　絶対変態なんかじゃないでしょ？」

「そもそも変質的行為を変態と称するのは言葉としてどうかとは思いますが、事実私は、自分の服を脱がせる事をあなたへ要求しています。一般的な意味合いとして、立派な変態だとは思いませんか？」

「……」

　何か、絶体絶命じゃないですか？　どーすんのコレ？

　いやいや、まずいって。

　男子の夢みたいな状況ではあるけれども、しかしその状況がいざ突然、訪れるとなってしまうと……。

　しかし少女は、僕のそんな逡巡もお構い無しに、さらに念を押してきて。

「こんなにお願いしても、ダメですか？」

「……」

　そんな事を言う彼女の顔は、最高に可愛らしく。

　そして彼女が言う事は、否定の余地が無く。

「……わっかり、ました……」

「ありがとうございます」

　礼とか言われましたけど、何か……大事なものを捨ててしまった気がするよ？

「ではとりあえず、先にあなたの傷を手当てしてください」

「……あー」

　あんまり衝撃的な事を次々と言われたもんで、すっかり忘れてましたわ。まったく痛まないって事は無いけれど、それでも全然気にならなくなるもんですな。はっはっはっ。

　笑い事じゃないけれども。

「でも、こんな怪我……絆創膏じゃダメだろうし、手当ての仕方とかわからんのだけれども……救急車、呼んじゃダメ？」

「その場合は私も搬送されてしまいますが、それはとても困ります。申し訳無いですが」

「やっぱりそうですか……」

「そんな風に身を起こしていられるなら、深い傷ではないはずです。私の手応え的にもおそらく、皮膚を少し深めにえぐっただけでしょう。何か、食品用ラップはありますか？」

「え。それは、あるけど」

「まずシャワーで、傷をよく洗ってください。その時ずいぶん痛むはずですから、舌を噛まないように歯をしっかり食いしばってください。一分ほど洗い流したら水分を拭き取って、ラップで三重くらいにきつく巻いてください。手当てはそれで、問題無いはずです」

「なるほど」

　シャワー。

「……脱がなきゃ、まずいよね？」

「むしろ、そうしなければ難しいと思いますが」

　この狭い部屋に、脱衣所などという豪華なスペースも無く。

「脱ぐのも、まずいんだけれども……」

「どうしてですか？」

「いや……君の見ている前じゃ……」

「なるほど、恥ずかしいという事ですか。でも、恥ずかしがっている場合ではありません」

「あう……」

　仕方無く、寝巻きを取り払ってみる。しかし、美少女の目の前でストリップ、とか……あーあー、腰引けてる腰引けてる。

　それでもとりあえず、どうにかこうにかブリーフ一枚になったのだが……少女は、容赦無かった。

「最後まで脱がないんですか？　邪魔になりますよ？」

　うむ。段々、恨めしくなってきた。

　いっそ顔の真ん前で脱いで、見せつけてやろうか？

　……いや、僕の心が死ぬから無理だけど……。

「中で脱ぎますわ」

「そうですか」

　僕はシャワールームに入り、ドアを閉める。浴槽は無く、半畳よりは少しだけ広いスペースのそこで完全に裸になると、外から声が掛かった。

「お湯よりも水のほうがいいですよ。温まると、出血が激しくなります」

　何となくお湯を出す所でした、はい。

　水色のマークが付いた栓をひねり、夏だから一応三十秒くらい流し捨てた。そうしてとりあえず傷のまわりの血を洗ってみるが、固まってはいないから難無く流れていく。すぐにきれいになってしまった。

　さて……痛いよね？　当然。まず、一瞬だけ当ててみようか。歯を食いしばって……。

「ぎあああああああああ！」

　痛い！　痛いよコレ！　一分とか無理！　でも……やらなあかんのよな？

「っっっっっっっ！」

　痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！

「ぐううううっ！　のおおおおおっ！　がああああああっ！」

　痛いだけじゃなくて、意思に反して漏れる声が悪役の断末魔みたいな感じ！　フィクションとかでは怪我だの傷だの普通にあるけど、みんなこんなに痛い思いをしてるって事なんか？

「っっっ！　っっっ！」

　一分経ちましたか？　まだですか？

　もういいよね！　大丈夫だよね！

　水を当てるのを、やめる。

「っはあ……はあ……はあっ……」

　傷はまあ多分、きれいになっているように思う。血は……ほぼ止まっているのかな？　少なくともあまり、にじみはしない。彼女の言う通り重傷でもなかった、という事か。

　備え付けのタオルを水でよくすすぎ、栓をひねってシャワーを止めるとタオルを絞った。そしてそれを使い、体の水分を拭き取っていく。最後に、傷口に慎重にタオルを当てる。

「ふう……」

　こんなもんかな。

　棚に置いておいたブリーフを身に着けると、ドアを開けてシャワールームを出た。そんな僕を、さっきと変わらず壁にもたれたままの少女が迎える。

「よく辛抱しました。では、ラップを巻いてください」

「あ……うん。でも、このままで？　消毒とかしなくていいのかな」

「それは絶対にいけません。消毒は雑菌を殺しますが、それ以上に体の細胞を壊してしまって、回復力を著しく損ないます。傷が汚染されているなら話は別ですが、あなたは動物に噛まれたりしたわけではないので、きれいに洗った後ではデメリットしか無いんです」

「そうなんだ？」

　台所に立ち、食品用ラップを取り出すと、お腹の周りにぐるぐる巻いてみた。

「こんなもんで？」

「いいと思います。何かテープがあれば、端を固定してください」

「あー……無いや」

「そうですか、それならいいです。今後一日三回、水で洗ってはラップを巻き直してください。それで傷は治ります。徐々にふやけて見た目は悪くなっていきますが、そのほうがかえってきれいに塞がるんです」

「なるほど、そっか。手当てって意外と、シンプルなんだね」

「傷の手当ての鉄則は、乾かさない事と清潔を保つ事で、それ以上の事は基本的にしないほうがいいんです。動物なんかが傷を舐めるという行為をよくしていますが、これは不潔なようでいて実はかなり効果的なんですよ？　唾液にはむしろ、殺菌の効果がありますし」

「ふーん、勉強になるなあ」

「ただ実際の所、口の中にある程度の雑菌が生息しているのも確かですから、傷の洗浄には水道水以上のものは今の所ありません。……では次は、私をお願いします」

「……」

　うーん、取って付けたように言われたけれど、脱がせって事だよね……。

　気が進まないけどしかし、やるって言っちゃったしなあ。

「先に、ここで私を脱がせてください。シャワールームには、そのためのスペースが無いようです」

　あうう。

「二言が、ありますか？」

　……ええい、ままよ。

　と、ありがちな定型句を頭に浮かべつつ、彼女のその服に手を掛けた。よくわからないデザインの服だが、ボタンが付いている。それを外していけば、脱がす事はできるだろう。

　緊張と興奮に震える手を、どうにか抑えつつ。

　目に付くボタンを、外し終え。

　前開きになっているそれを、恐る恐るめくってみると。

　……その下からは、次のボタンが現れた。

「ずいぶん……厳重な服だね？」

「はい。戦闘服ですから」

「はあ」

　どうしようも無いので、新たに現れたボタンも外していく。

「暑く、ないの？」

「命のやり取りをします。構っていられません」

「それなら逆に、何で手足むき出しなの？」

「場合によっては手足を変形させます。その時に邪魔になります」

「はあ。……あ。あーそっか、なるほど」

「何がなるほど、ですか？」

「最初に言ってた、合羽がダメっていうのは、そういう事だったんだ？」

「はい。ちなみに、傘が邪魔というのは……」

「あーそれは、もしかしていわゆる……死体の始末、ってやつ？」

「そうですね、大体そんなようなものです。若干違いますが、する事に違いはありません」

「……うーん……」

　東京湾の底まで運ぶつもりだったとか、そういう話だよねコレ……。何か、マルボーの世界に入り込んでしまったような感じがしないでもない。っつーか、もし殺されていたら本当にそうなっていたんだろうし、考えてみるとぞっとする。ちょっと冗談にはできそうにない。いや危なかった、いまさらながら。

　そんな事を思いつつも、服のボタンを外し終えたので、再びゆっくりとめくってみる。

「……え」

「何か？」

「あの……下着、とかは？」

「見ての通り、着けていませんが」

　えーと。

　えーと。

「うわああああああああああああああ！」

　ム……ムネ！　見えてる見えてる見えてる！　っつーか下も見えてる！

「私の体はどこか、変ですか？」

「へ、変じゃない！　変じゃないから、だから……」

「また、恥ずかしいんですか。でも申し訳無いですが、覚悟は決めてください。こうなるとわかっていて脱がせたのではないんですか？」

「……ごめん。覚悟してたつもりなんだけど、いきなり出てきたから……」

「そうですか。でもまだ、きちんと脱げていません。最後までお願いします」

「うん……」

　目の毒。そんな言葉がある。ラッキースケベというものを獲得した人間による、ノロケのような言葉だと考えていたが、この言葉の意味をまざまざと思い知らされた。これは確かに……毒だ。しかも今、その毒を開封したのは自分の手、ときている。

　どうしよう。どうしよう。

「それにしても、妙ですね」

「え……何が？」

「あなたくらいの男子は性欲が非常に強いはずですから、相手の許可があれば喜んで裸にすると思ったんですが」

「性欲強いのは否定しないけど……普通は相当、抵抗あると思う……」

「矛盾しますね」

「そういうもんです……」

「なるほど、そういうもの、ですか。ところで私はその、性欲についての倫理というものに疑念を……いえ。ごめんなさい、あなたの作業を中断させてしまいました。続けてください」

「あー……うん」

　えっと……今、何を言いかけたのかな？

　それはそれとして完全に脱がせるのは、これといって難しい話ではなかった。壁にもたれた彼女の体を起こし、服から彼女の腕を引き抜くだけだ。もし彼女がぱんてーと呼ばれるモノを穿いていたら、それを脱がすのは至難の業だったに違い無い。

　しかし、脱がせる折りにちらちらと、どうしても僕の手は彼女の肌に触れてしまい。それは何と言うか、なめらかで、やわらかで。あー。

　っつーか。彼女はこれできれいさっぱり、生まれたままの姿になってしまったわけで。それも、男子高校生の一人部屋の中で。どうするんだよこの状態？

「では、私をシャワールームへ運んでください。私はそれほど重くないはずですが、あなたは負傷していますから、持ち上げるのはやめたほうがいいでしょう」

「あー……えっと、じゃあ？」

「私の両脇に、後ろからあなたの腕を通して、引きずってください。それが一番楽だと思います」

「あー……なるほど」

「それからあなたも、それは脱いでください」

「あー……え。えええええ」

「あのシャワールームでは私を洗う時に、濡らさないようにするのは不可能です」

「……今、脱ぐのも、不可能です……」

「どうしてですか？」

　いや、だって……だって。

「……僕が、健康だから、かな……？」

「よくわかりません。きちんと説明してください」

「ああもう！　濡れてもいいなら穿いてていいでしょ！」

「それはそうですが、しかし気になります。理由を教えてください」

　理由。僕は君に欲情したので、その状態のアレを見られるのがとっても恥ずかしいのです。言えないでしょ？　コレ。

　それとも……おっきしてるもん、とか言ったら通じるんかな？　いやいや。そんな期待など、とてもできそうに無い。

「不可能デス」

「そうですか、わかりました。ではとりあえず、私を運んでください」

「ハイ」

　先に散らかっている物をどけて道を作り、後ろへ回って羽交い絞めをするような感じで彼女を抱えた。僕の顔に彼女の頭部が最接近する。ドキドキだがしかし、彼女からは……牛乳の匂いが強烈にした。うわーごめんなさい！

　方向転換して、ずりずり引きずってみるが……この部屋は畳敷きである。狭い部屋だし、別に大した距離でもないのだけれど、何しろ女の子だ。気になってしまう。

「ええと……お尻、痛くない？」

「大丈夫です。あなたの負担になりますから、私を浮かせようとしないでください」

「あ……うん」

　それでもシャワールームへの段差だけは持ち上げるしか無かったわけだが、どうにか運び込む事はできた。彼女を、壁にもたれ掛けさせる。もう、何から何まで見えまくりなのだが、背中を向けさせるのも洗うには不都合だし……いろいろ諦めざるを得ない。

「先に、全身を洗い流してください。その後、包丁を抜いてもらいます」

「……うん。ええと、どこから？」

「順当に、上から下へお願いします」

「じゃあ頭からね。ええと、冷たいけど」

「大丈夫です」

　水栓を開けてはシャワーを左手に持ち、右手で彼女の髪の毛をすすいでいく。その長い髪の毛は、水に濡れるとかなり扱いにくい代物へと変化した。

「あ、シャンプーは？」

「そうですね、牛乳をかぶりましたから。お願いします」

　一旦シャワーを止め、シャンプーのポンプを操作して洗料を手で受けると、彼女の頭に塗りつけた。そのまま泡立てる。

　そういえば昔はよく、妹の頭とか洗わせられたな。短髪だったからこんなに苦労はしなかったけれど、それにしても妹と一緒に風呂に入るってエロゲーやエロ漫画あたりでありがちなイベントよなあ。まあ当時にそんな概念とかまったく無かったわけだけれども、今の妹の性格とか考えるとむしろ何も無くてよかった、とは思う。

　あ、いや。今の状況のほうがよっぽどエロイベントだけどさ……。

　適当な所でまたシャワーを開栓し、髪の泡を洗い流す。

「あ、ごめん。リンスとかコンディショナーとか無いんだけど」

「贅沢は言いません」

　ホントすいませんねえ、貧乏で。

　とか考えつつ髪の毛をすすぎ終えると……僕は立て続けに、貧乏を呪う羽目になった。

「無い無い尽くしでごめん。体洗うのスポンジとか無いから、タオルでいい？」

「タオル、ですか」

「まずい？」

「手で、お願いします」

　……。

　これはひょっとして、いじめですか？

「ごめん。それ、果てしなく拷問」

「どうしてですか？」

「うーん……あのね。男にとって……っつーか少なくとも僕にとって、女の子って神聖な存在で。畏れ多いんだよ」

「そうですか。でも私は、タオルはダメです。手で洗ってもらうしか無いんですが」

「おねがいですわかってください」

「……わかりました。それではシャワーで、よく洗い流してください」

「了解。でも、そんなにタオル、ダメなの？」

「はい。理由はわかりませんが、私の肌はタオルでこすると、とても荒れます。それから、さっきはあなたを驚かせてしまいましたが、下着も長時間着けているとダメなんです」

「はあ。何か、大変だね」

　シャワーの水を彼女の体に、存分に掛けてやる。

　肩。背中。腕。胸。お腹。脚……。

　うん、きれいなんだよ。ホントきれい。その整った形状をした、つややかな肢体の上を、水が伝って流れ落ちていくさまは。画家がこぞって裸体画を描きたがる心理がありありと読み切れてしまうくらい、きれいなんだけれども……。

　やっぱダメだわ。ダメでしょ？

　そんな事を考えながらも結構長い時間掛けていたから、もう充分だろうと思った頃。

「股間も、きちんとお願いします」

　……。

　いや確かに、意図的に避けてたけどさ……。

「だから、その……畏れ多いって」

「神聖と思うならなおの事、汚れたままにしないでください」

　あー……しぶしぶ、ですよ？

　やむを得ず、ですよ？

　進んでやるわけじゃない、ですよ？

　とりあえず心の中でそう言い訳して、流水を彼女の股間に当てた。

　……。

　凄く変な気分になってきた。

　一体……何をやってるの？　僕……。

　どうもこれはエロとかインモラルとか、そういう感じじゃない別の何か。どう表現したらいいのかわからないけれども。

　魔？　修羅？　煩悩？　業？

　うむ、わからん。っつーか、煩悩は菩薩に同じとかいう言葉があるらしいけど、それはもっとわからん。

　いや……それよりもコレ、もし手で洗うの了承してたら、触る事になってたよね？

　……あー……。

　そろそろもう、精神が保たなくなってきた。

「ええと……何とも、ない？」

「何がですか？」

「い、いや何でも……えっと、もう……いいかな？」

「そうですね。では、包丁の刺さっている所も充分洗い流してください」

「平気？」

「そうしてもらわないと、後で困ります」

　彼女の左の脛に、シャワーを当てる。流れていく水に、血はそれほど混じらない。

「痛くない？　大丈夫？」

「まだ包丁が栓をしている状態ですから、それほどというわけでもありませんが……痛いには痛いです。でも、続けてください」

　刺さってるもんな……。間違っても浅くはない。小振りの包丁ではあるが、それなりに深く刺さらなければその自重で抜け落ちるはずである。

　僕が、やったんだよな、これ……。その様子はどうにも、痛々しくて。申し訳無くて、どうしようも無くて。

「そろそろいいでしょう」

「あ、うん」

　水を止めた。きれいになった傷口からはしかし、少しずつではあるものの血がにじむのは止まらない。

「それではこれから、包丁を抜いてもらいます。段取りを説明するので聞いてください」

「う、うん」

「先に、タオルをよく洗って、絞っておいてください」

「あ、じゃ、今洗おうか」

「そうですね。やりながら聞いてください」

　また水を出し、じゃぶじゃぶ洗う。

「利き手は、右ですね？」

「うん」

「ではまず、左手で私の足首をしっかり掴んで、動かないように固定してください。そして右手で包丁をしっかり持って、躊躇わずに一気に引き抜いてください」

「うん」

「その時、大量に出血します。それから私も、痛みに耐えかねて何やら叫ぶかも知れません。それらをやり過ごすための心の準備は、念入りにお願いします」

「う、うん……あ。あーそれ、縛ってから抜くのじゃ、ダメなの？」

「いえ、今はいけません。それは最終手段です」

「最終、手段？」

「そうです。縛るべきなのは既に出血していて、それが命にかかわるほど大量だった時。あとは、これから手足の切断をするという場合のように、大量出血する事があらかじめわかり切っている時だけです」

「それは、どうして？」

「何故と言って、縛るというのは非常に危険な行為なんですよ？　血流が止まる事によって神経が壊死したり、緊縛によるダメージでその部位の組織が傷付いたりする、というような問題を実に簡単に引き起こせてしまうんです」

「あー、そうなんだ……」

「はい、ですから基本は直接圧迫です。包丁を抜いたら間髪入れずに、タオルで傷口を圧迫してください。潰れてしまいそうなくらいの強い力でお願いします。落ち着くのに、十五分から一時間くらい掛かります」

「うん」

「私がＯＫを出したらタオルを取り去って、シャワーで血を洗い流してください。そしてタオルで水分を拭き取って、すぐにラップできつく巻いてください。それで終わりです。できますか？」

　足首を固定。包丁を引き抜き、すぐにタオルで圧迫。しばらく待って水で洗ってから、拭いて、ラップで巻く。

「何とか、やってみる」

「実はこのために、私はわざとエネルギー切れになって身動きを取れないようにしたんです。私が痛みで暴れる事は無いので、そこは安心してください」

「そ、そうなんだ」

「タオルは、もういいでしょう。絞ってください」

「あ、うん」

　水を止め、タオルをギチギチ絞る。

「では、私はいつでも構いません。あなたの用意ができ次第、始めてください」

「……うん」

　ゆっくりと、手を伸ばし。

　左足首を、掴み。

　包丁の柄を、手にとって。

「……はあ……はあ……はあ……」

　ドクン。ドクン。ドクン。

　動悸は、激しく。

　息は、荒く。

「大丈夫ですか？」

「ごめん、緊張して……もう少し、待って……」

「はい」

　ドクン。ドクン。ドクン。

　……深呼吸、して。

「いきます」

「どうぞ」

　右手を、勢いよく、引く。……途端。

「んぁあああああう……っく……！」

　痛烈な悲鳴が聴こえる。

　赤黒いものが大量に流れ出す。

「あ……」

　それだけで僕は……もう何も考えられなくなってしまった。

　赤。赤。赤。

　こんな……こんな！

「あ……あ……」

　赤。赤。赤。

　こんなの、ダメだ。こんなの……。

「圧迫！」

　張った声が掛かる。

「……え」

「早く！　急いで！」

「あ……う、うん！」

　それで何とか判断力を取り戻した僕は、視界の中からどうにかタオルを検出すると、それを掴んで彼女の左足の脛に当てた。強く押し付ける。

　シャワールームの床はちょっと、スプラッタな感じになってしまった。

「上出来です」

「いやあの、そんな……ごめん」

「いいえ。あなたは私の要求通りの目標を、きちんと達成しました。上出来ですよ」

　うーん。

　取り乱したし、どうも素直に受け取れないものがあるけどなあ……。

「それよりあなたには、慣れない事をさせてしまいました。ごめんなさい。それから、ありがとうございます」

「あ……いや、僕のせいだし……」

「そもそもは、私のせいです。幸い、動脈にも達していなかったようですし、気に病まないでください」

「ええと、うん……」

　少女は相変わらずの口調で、言葉を続ける。

「それよりこれから、しばらく落ち着くまで、待ちです。その間、力を抜かないように気を付けてください」

「うん。……ええと、痛かった？」

「はい。どれくらいだったかは、想像しない事をお勧めしますが……」

　彼女は一瞬考えてから、次の言葉を継いだ。

「そうですね。待ちの間少し、お話をしましょう」

「話？」

「はい。例えば、人はどこを傷付けられると一番痛いか、知っていますか？」

「え？　えーと……やっぱりお腹？　男ならあとは、金的とか……」

「いいえ。急所に対する損傷というのは甚大な痛覚を発生させますが、痛覚が強ければその分痛いという事にはなりません。強すぎると脳が処理できずに無視したり、朦朧とさせられる事によって麻痺したり、精神を保護するために気絶したり、またはショック死したりして、実際には感じ取る事が難しいんです」

「そっか……えっと、じゃあ？」

「一番痛いのはそれほど強い痛覚が発生しない部位という事になりますが、それは膝なんです」

「え。膝？　ホントに？」

「はい。あなたの言う通り腹部もそれなりに痛みますが、こちらは苦しさや熱さ、あるいは重さといった別の感覚に変換される事が多いのに対して、膝ではほぼ、そうはなりません。例えば銃で撃たれたりすると、激烈に痛いのに無視も麻痺も気絶もさせてくれなければ、殺してもくれないという本物の生殺し状態になりますから、そんな状況に見舞われたとしたら気を付けてください」

「うわあ……想像したくないや。あ、でも女の人が赤ちゃん産む時も、結構痛いって聞かない？」

「陣痛については、あまりに個人差がありすぎます。人によっては初産でも痛みを、耐えられる耐えられないではなく、そもそも感じないという例すら、少なくありません。一番痛いものと云うには、かなり無理があるんです」

「そういうもんなんだ？」

「はい。それに、出産とは健康な状態で起こる生理現象ですから負傷とは違うんですが、実は病気まで含めればもっと痛いのは別にあって、人にとって一番痛いのは心筋梗塞と尿路結石、そして群発頭痛の三つだと云います。これらの痛みは、銃弾とは比べ物にならないほど半端なものではないそうです」

「え……そんなに痛いの？　銃弾よりもなの？」

「そのようです。特に、群発頭痛は自殺頭痛という別称があって、本当に自殺してしまうほど酷いとの事です。ただ、その群発頭痛は原因不明ですが、他の二つは不摂生のせいです。それは歳を重ねるほど是正が難しいので、今から注意していたほうがいいですよ？」

「……はあ」

　何か結構、興味深い話では、ある。っつーか、銃で撃ち抜かれるより痛い病気なんてあるのか……確かにそれは、気を付けたい。

　けれど、今はとりあえず気になるキーワードが出てきたので、尋ねてみる。

「歳っていえば……君は、いくつなの？」

「そこはちょっと、どう言ったらいいのかわかりません。私が目覚めたのは六年前の事なんですが」

「じゃあ、そのまま六歳？」

「あるいは、そういう事になるかも知れません」

「あはは……ちょっと、大きすぎる六歳児だね？」

「そうですね。ただ、私が目覚めた時にこの体は、人間にして十歳程度だったんです」

「あ、なるほど。なら……十六歳？　少なくとも体は、僕と同じくらいなんだね」

「おそらく」

　それは奇遇……って、ん？

　あれ？　待てよ？

「昔十歳くらいだったって事は……成長、するんだ？」

「そのようです。ちなみに成長といえば、私には月の障りもあります」

「え？」

「月経です。四年ほど前に初潮を経験しました。兵器なのにおかしいと思いませんか？」

「それって……え？」

　月経って要するに、女の子のデリケートなアレの事なんだよね？　それってつまり、赤ちゃんを作るための準備であって……。

「つまり……どういう事？」

「……私の体は、人体を流用したものなのではないか。私は、そのように疑っています」

　人体、流用……。

「改造……人間？」

「確証はありません。そもそもそんな事が可能なのかどうかもわかりませんし、それでは説明の付かない点も多々あります。その筆頭があなたも疑問を持った、動く髪の毛です。なぜ動くのか、動かす事ができるのか。それすらさっぱりわかりませんが……」

「うーん、僕にはもっとわからないけれども……。戦争時代に実は改造人間が作られていた、って話は聞いた事はあるけど、でもあれは……」

「はい。有能な人物同士を掛け合わせて子どもを作るという事を繰り返したり、薬物や過剰な栄養素を与えてコントロールしたりして、通常よりは高い能力を発揮する肉体を作り出す、というだけのものに過ぎませんでした」

「だよね……」

「でもそう考えれば、腑に落ちる点も多いんです。私の体は人造物にしては出来すぎているように感じますし、そもそも単に殺人を行うためだけなら人の形にする理由も、思考能力を持たせる理由も無いんです。例えば、一撃のもとに相手の息の根を止められるものさえ作ってしまえば、人の姿を見せて油断を誘うような必要性もありませんよね？」

「それはまあ、そうだね」

「あるいは諜報活動が主な目的で、その過程で殺人も必要、というような事であればまだ理解もできるんですが、私が今までされてきた命令には殺人行為のたぐいしかありません」

「うーん……」

「だから……もしかすれば私の思考回路は、人間の脳髄が元になっている可能性が高いんです」

「あ……！　そっか、そうだよね」

「なのに私には、人に具わっているはずのいくつかのものが、欠落しています。その最たるものが、愛。恋。そんな感じのものです。人間の脳髄が思考回路なら、わからないはずが無い。そう思って、今まで探してきました。でも、結局……見付けられませんでした」

「……」

「これから、見付かると思いますか？　私は、それが見付かるという希望を、持ってもいいですか？」

「……」

「それとも、やっぱり私はただの兵器で、そういったものは持ち得ないものなんでしょうか。でも、だとしたら今、私がこうして感じている空虚は、何なんでしょうか？　どうやって満たせばいいんでしょうか？」

「……」

「私は……どうすれば、いいんでしょうか……？」

「……」

　あまりに、疑問符だらけだった。それは、彼女の思い悩みが強固なものである事を如実に物語っている。

　だから、こんな事しか言えない自分が、僕は悔しかった。

「ごめん。僕は神様でも、君を作った人でもないから、何もわからないよ」

「そう……ですよね」

「でも、はっきり言える事はあるよ。探すのを諦めたら、何も見付からない」

「……はい」

「ちょっと残酷な言葉かも知れないけれども……」

「いいえ。では、その手伝いをしてくれますか？」

「うん。それはまあ、最大限の努力って約束があるし」

「なら、この後なんですが」

「うん」

「とりあえず、私とセックスしてください」

　……。

「はいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい？」

「タオル、ちゃんと押さえていてください」

「あ……ごめん」

「私は、性交渉は未経験です。もしかしたらその行為で、何かが芽生えるかも知れません」

「いや、でも……」

「それに私には、月の障りがあります。もし私にも子どもを授かる事ができたとしたら、それも何かが芽生えるきっかけになるかも知れません」

「あの……僕は、今すぐ子持ちになるのはちょっと……」

「その場合は、迷惑が掛からないように配慮します」

「いや……迷惑とか何とか、そういう……」

「お願いできませんか？　……今まで、居なかったんです」

「……え」

「私の相手は、常に強敵でした。一つ気を抜けば、こちらがやられる。そんな相手です。とても、愛を語るような余地なんかありませんでした。そして、命令が下っている時以外に、私の自由行動はありませんでした。私には、人と会話する機会がほとんど無かった。こんな話ができたのは、あなたが初めてなんです」

「……」

　それは……確かに寂しいかも知れないし、でもだからって……。

「そういえば、そこにまた一つ疑問があります。私の相手は強敵ばかり。つまり、あなたが私の標的になるのは不自然なんです。どうしてでしょうか？　それともあなたは何か、特別な能力を隠していますか？」

「……いや別に、目からビーム出たりはしないけど……」

「そうですよね。私もあなたを把握するために、しばらくあなたを監視していましたが、そんな素振りは見られませんでした」

「え……か、監視？」

「はい。あなたが常人である事を知ったので、それを確認するために。その結果、見れば見るほどあなたが本当にただの常人だとわかって、疑問は強まるばかりで……結局、一ヶ月ほど躊躇い続けてしまう事になりました」

「いや、あの、ずっと……見てたの？」

「常時ではありませんが、要所は押さえたつもりです」

　……恥ずかしい。っつーか、プライバシー返して。

「例えば……何が見えたのかな？」

「驚くほど、特筆すべき点がありませんでした」

「そ、そう」

　そういう結論なら、まあ……見られてないのと一緒、なのかな？　じゃあ、いいか……。

「強いて言うならとても……とても、たくさん。精液を無駄遣いしている事でしょうか」

　……。

「何を見たああああああああああああああああああ！」

　何から何まで全部見られてたですかー！

　わたし泣いていいですかー！

「タオル、ちゃんと押さえていてください」

「あ……あああ。ごめん」

「だからあなたは切実に、耐え難いまでに性欲を持て余しているんだと思いました。なのに、私に対していろいろと遠慮をするのは、どうにも理解できません」

「……放っといてよ……」

「その性欲を、私のために使ってくれませんか？」

　……はあ。もう。

　ダメだこの子、早く何とかしないと……。

「えっと。あのね」

「はい？」

「確かに人にエッチな事をさせちゃうのは、性欲だよ。でも、男と女の関係とか、好きとか嫌いとか、そういうのは、それだけじゃないんだよ」

「それは？」

「人によって変わるよ。ただ、単純じゃない。そういう複雑なものが、性欲を呑み込んじゃう事なんて普通にあるんだよ」

「なら、あなたが私を向いてくれるには、何が必要ですか？」

「そんな事が丸わかりになるなら……片想いも失恋も無くなるよ」

「そうですか。……そうかも知れません」

　わかって、くれた、か……。

　と思ったのは早計だったらしい。彼女は言葉を続けた。

「でもそれは……説得力、ありませんよ？」

「え？」

「あなたはずっと……私の服を脱がしたあたりから。準備完了しています。違いますか？　それは、他の何かが性欲を呑み込んでいる状態と云えるんですか？」

　ぬああああ、きっちりチェックされてたのね……。何かもう、何かもうね……。

　うわーん。

「いや……これはその……いや、だから……だから、性欲だけじゃエッチは」

「気持ちも重要。そういう事ですか？」

「わかってるじゃんか。少なくとも……とりあえず、って感じでする事じゃあ、ないよ」

「それなら私は、一定期間あなたを見続けていました。その上で、私はあなたがいいと思いました。あなたでなくては嫌だと思いました。それではダメですか？」

「……」

「あなたは、私が相手では、嫌ですか？　……答えてください」

　そう言って見詰めてくる彼女の顔は、相も変わらず無表情。でも、今の言葉に、嘘は無いと思う。だから、ちゃんと言わなきゃ。

「ええと、あのね……」

「はい？」

「僕は……好きな子が居てね。まあ振られたのは、さっき言った通りなんだけれども」

「何の話ですか？」

「それでもその子を、好きなままなんだ。だから、こんな状態じゃ、君の事、ちゃんと愛てあげられない。だから、ダメなんだよ」

「……なるほど。そうですか。あなたの言いたい事は、あなたの気持ちは、わかりました」

　今度こそわかってくれた、か……。

　と思ったのも早計だったらしい。彼女は言葉を続ける。

「でもそれは……私の質問に対する答えにはなっていません。私は、していいかどうかではなくて、したいかどうかを訊いているんです。結局、私が相手では嫌なんですか？　そうではないんですか？」

「容赦無いなあ……正直嫌では、ないよ？　むしろ、進んでお願いしたいくらい」

「なら」

「それができないのは、今言った通りだから」

「曲げて、お願いします」

「いや……だからさ……」

「最大限の努力をする。その約束は、嘘なんですか？」

「それは……嘘にするつもりは無いけれども……それとこれとは」

「気持ちは、変えられないかも知れません。でも、変わったという事にする。その程度なら、努力で対応できませんか？」

「……そうかも知れないけれど……」

　これ、どうやって説得したらいい？　かなりお手上げだよ？

「君は、さ。どうしても今すぐ、したいの？」

「お願いします」

　即答……。

　いや、軽々しく言い寄ってきてるだけなら、いくらでも突っぱねられるだろうし。あるいは深く考えずに、つまみ食いしてしまってもいい気がしないでもないけれど。この子は間違いなく真剣に言ってきてるよね……。

　うーん……。

「いやいやいや。僕も今はそんな気、起こらないし。でも君、可愛いし。そのうち君に、気持ちが向くかも知れないよ？　それまで、待てない？」

「可能なら、早いほうがいいです。お願いできませんか？」

「いやいやいや。だからさ……」

　そういった問答の後。彼女が発した言葉は、地味ではあるが、抵抗し難い。そんな感じの殺し文句だった。

「例えば先に私とセックスしたら、後になってあなたの気持ちが私へ向くのが早まったりしませんか？」

「……」

　それはある。女の子の場合はわからないけど男なら絶対ある。否定できない。

　Ｇの後にはＨがあり、Ｈの後にはＩがある。そんなジョークかジョークとして成立する所以だ。

　もちろんエッチ目的だけの子だったら、性欲がはければ飽きて飽きられる可能性があるけれど、この子に限ってそれは無い。

「どうですか？」

「うーん……まあ、そういう事もあるかも知れないけれども……」

「では、お願いします。是非」

「……」

　断る言葉が見付からない。見付からないのだが……ふと思う。

　それはつまり、断らなきゃいけない理由が、無いからなのではないだろうか？

　だとしたら、あるいは……頷いてしまっても？

「……いいの？　それで」

「私のほうがお願いしているんです」

「……」

「お願いします」

「……」

「私を、助けると思って。あなたはさっき、そうしたいと言いました」

「……」

「お願いします。どうか」

「……」

　も、限界。

　兵器だか何だか、知らないけれど。

　それでもこんなに可愛い子に、ここまで迫られたら。

　断れなくても、罪じゃないよね？

　操を立てなきゃいけない相手が、居るわけでもないし。

「うん……じゃあ」

「ありがとうございます」

　うーん……何か、いたす事になっちゃいました……。

　これでいいんだろうか。頭の中で、天使が悪魔に屈服する光景が展開された。

　ちょっと、のぼせてきていて。こないだ松平瑞穂へラブレター出した時なんかとは比べ物にならないくらい、喉は灼熱のようにやけていて。多分もう、顔なんて誤魔化せないほど赤くなっているだろうけど、どうにか誤魔化そうと質問をひねり出してみる。

「……え、えーと。あとどれくらい、こうしていればいいのかな？」

「もう少し、待ちですね」

「そっか。じゃあ他に、何か話す事は……」

「私のほうには差し当たり……そうですね、さっき言いかけた事がありました」

「え。何だっけ？」

「あなたの性欲は強いはず。そう指摘した時の流れで、私はそれに関する倫理というものに強い疑念を抱いている、と言いました。その話です」

「あ、それか……えっと、どういう話？」

　そう何の気無しに促した話の内容は、なかなかとんでもないものだった。

「その、性欲のピークがちょうど今のあなたくらい。女性についても、多くの年代の男性が押しなべて、あなたと同年代くらいの女性の肉体を最も好ましく感じるという話です。それも個々の嗜好を抜きにして、実際に性交に及べばそのように感じるとか」

「え、そういうもんなの？」

「きちんと調査をしたようですよ？　そしてそれは、つまり男性も女性もその時期に、子を為すべきだと本能が教えているという事です。それを裏付けるように、実際にも女性の出産適齢期は十代後半、遅くとも二十代前半なんです」

「え、えええええ……それは早すぎる気も、するけれど……そう、なんだ？」

「はい。法律でも、女性であれば十六歳から結婚できる事になっています。ですから世に云う、ロリコンは正義という言葉は、実は非常に正当性のある主張なんですよ？」

「す、凄い事言うね……。でもああいうのって、どう見ても赤ちゃん産めないような小さい女の子とか、対象になってない？」

「それは、ロリータコンプレックスというもの対する誤解によるものです。これが実は、結構入り組んだ誤解なんですが……」

「誤解？」

「もともとこれは、語源となった小説において少女ロリータ本人が抱えていたとされるコンプレックス、つまり少女が同年代ではなく年上の男性を志向する、いわゆるオジサン趣味の事を指すものなんです」

「……そうだったの？」

「はい。やがては転じて、年上志向の若い少女に愛されたいとする男性を指して云われるようになったんですが、それでもつまりは好かれたい、愛情を向けられたいという事であって、一方的に好きだとか性交に及びたいとか、そういう話ではないんです」

「へええ……何かまるで違うね？　今思われてるのと」

「そして、性的嗜好について云った場合はロリータシンドロームという別の言葉で云うんですが、その場合でも対象はあくまで妊娠能力のある少女に限定されます。そうではない幼女を対象としたものは、ペドフィリアという精神疾患による性愛異常で、ロリータシンドロームとは別物なんです」

「そうなんだ……まあ、そうだよね」

「他にもチャイルドマレスターと云って、支配欲や探求欲とか、ストレスやトラウマなど、そういった性欲ではないものを動機として、嗜好対象ではないはずの幼女に関係を求めてしまう人間も居ます。それはちょうど、窃盗行為が好きなわけでも必要があるわけでもないのに、ついつい万引きをしてしまう心理と同じようなものでしょう」

「あー。何かそれ、わかる気がするかも？」

「さらには、暴力を好んで振るうわけでもない人がバイオレンスフィクションを好んだりするのと同じように、単に架空の題材として興味があるだけで本来の性的嗜好とは云えないものもあります。他にも、幼い性に美的価値を見出すというアートの分野であって、性愛とはそもそも無関係なものすらあります」

「確かにこう並べられると、みんなそれぞれ違うね……」

「はい。ところが、そういったものが一緒くたに混同されてしまっているんです。それが今云われているところの、ロリコンというものなんです」

「……ロリコンって、そんな複雑な事になってたんだ……」

「そんな事態になってしまったのは、みんなが言葉というものを大切にしてこなかったからですよ？　言葉はそれ自体が意味を持っているだけではなくて、つまりある特定の概念を表現したものなんです」

「……概念、っていう言葉って、よく聞くけどあんまり意味がわかんなくて」

「そうですね、難しい言葉かも知れません。云うなれば、同類の対象を指すもの、とでも云いましょうか。例えばロリータシンドロームとペドフィリアは同類とは云えませんが、それをそのまま別々の概念、と丸呑みすればいいと思います」

「そっか」

「そしてロリータコンプレックス、チャイルドマレスターなど、言葉の数だけ個別の概念が存在するんですから、その区別をきちんとしなければ混沌に至るのは当然ですし、だから通じればいいというものではありません。ロリコンの女性版、というだけの浅はかな意味合いで作られたショタコンという言葉など、もはや愚の骨頂です」

「それはまた……全国のオネーサンたちを、敵に回しちゃいそうな主張だね……」

「反論があるなら、私も訊きたいです。ではショタコンとはどういう概念ですか、と」

「……よ、容赦無いねホント……」

「事実、私はショタコンという言葉が何なのか、説明できないんです。本気で教えて欲しいと思う部分すらありますが、あなたにはそれができますか？」

「いや……僕も実はあんまり、はっきりとは……」

「そうですよね。ちなみにもっと複雑な事を言いますが、実はロリータコンプレックスもロリータシンドロームも、ペドフィリアやチャイルドマレスターも、ついでに単なる題材の趣味やアート観までがすべて、同一人物に混在できてしまうものなんです。そこが、混同に拍車を掛けてしまっている所はあります」

「うええええ……もう何が何だか」

「しかし、ロリータコンプレックスを抱えてはいてもペドフィリアではない、というような人たちにとってはその混同は、迷惑どころか災難でしかありませんし、もっと云うなら理不尽な迫害でしかないんです。まあ、私もロリータコンプレックスについて詳しいわけではありませんし、そろそろ話を元に戻しますが……」

「……こんな詳しい話、聞いた事無いってばさ」

「そうですか。ともあれ、性欲は性交を促すものですが、性交の目的はもちろん出産にあります。その出産とは、常に何らかのリスクが付きまとう仕業ですが、両親が若いほうが元気な子どもが誕生して、母体も無事な可能性が高いのはわかり切っています。そしてそれは、誰もが当たり前に期待する事だと思いませんか？」

「あー、まあ、そうだよね」

「しかし、現実にはそれが当たり前に叶うわけではなくて、まさかここまでという言葉が漏れてしまうくらい酷い不平等が存在するんです。そしてその成功率は、齢を指折るごとに低下してしまいます」

「うーん、そうなんだ」

「なのであれば、いわゆる高校生という人たちに未成年というだけの理由で、性交を禁じたり、出産を許さなかったりする。さらにはそれをした人たちを、非難したりする。そういう事はまったく不合理で、矛盾があって、筋が通らない話です。むしろ、推奨されるべきだと思いませんか？」

「……そ、それはなかなか過激な……。でも、結婚前に子どもとか出来ちゃったら、問題じゃあ？」

「いいえ。結婚していない状態で、子どもが出来ると社会的に困難があるのなら、結婚も許せばいいんです。それに未成年が、子どもを育てるのに経済面や教育面で問題があるのなら、援助を行えばいいんです。第一、成年カップルであっても援助を受けている、という実例がそこかしこにたくさんあるんですから、未成年の婚姻、性交、出産が禁じられなければいけない理由はどこにもありません」

「うーん……言ってる事は、わかるけど。それはなかなか、通用しないんじゃないの？」

「通用するしないではなく、おかしいという話です。成年未成年の定義すら怪しい所で、本当はもっと早くに成熟しているはずのものが、教育体制や社会制度の不備によってしわ寄せを受けているだけではないのかと、私は思います。そもそも、人の成長の度合いなどそれぞれ違うものなのに、年齢で一律に線引きできるはずがありません」

「まあその辺の基準は、よくわからんね？」

「とにかくそういった、明確な根拠に欠ける禁則を産んでいるのが倫理というものなんです。性交とは汚らわしいものであるというのが根拠だという主張がありますが、それは単なるレッテル貼りです。欲に負けるのが汚らわしいからレッテルではないという主張もありますが、それは汚らわしい存在になりたくないという欲に負けているという事です」

「うーん、それはまあ、要するにそういう事だよね……確かに」

「第一、欲というものは通常、そうするべきだからこそ発生するんですから、欲には正直であるべきですし、汚わしくなどまったくありません。逆に、欲に勝つというほうが生物として余程不自然な事なんですから、それを清いとする考え方は異常そのものと云えますし、その根底にある魂胆を穿てばむしろ、そちらのほうが汚らわしいと云えるでしょう」

「筋は通ってるけど……。でも、それだとみんな、好き勝手し放題なんじゃあ？」

「それで本当に困る事が起きるなら、倫理というものが形成される前に社会も文明も崩壊しているはずですが、現実にはそうはなっていません。それは、欲を最優先させればどんな事になるか、ほとんどの生き物はそれを本能的に知っているからです。本能も生き伸びるためにあるものなんですから、その本能をも信用せずに筋の通らないルールでがんじがらめにするというのも、また異常な事です」

「なかなか、ザックリいくね？　根本的な所まで」

「そうでしょうか。私は、至って当然の考え方と思いますが……」

「いやだって普通、自分の事を異常だなんて思えないでしょ？」

「それは、非常にまずい事なんですよ？　一つ認識に誤りがあれば、その次の認識も必ず誤りますから」

「そっか……」

「ところで異常といえば、その欲というものの扱いもまた、おかしいんです。欲というものは、欲求と欲望の二つに大別されるんですが……」

「えっと。それは、どう違うの？　おんなじようなもの、って感じがするけれども」

「欲求の代表は食欲や性欲、欲望の代表は金銭欲や名声欲になりますが、簡単に云えば必要とする事と、期待する事の違いです。宣伝文句によくある、お求めくださいという言葉をお望みくださいという言葉に替えれば、およそ違いは把握できると思います」

「あー、そういう事か。それはわかりやすいね」

「もう少し説明を加えれば、欲求はさっきから私が云うところの欲に相当して、生きるために必要なものです。それゆえに本人の望む望まないにかかわらず発生してしまう、云わば仕方の無いものです。一方で欲望は、単にいい思いをしたいというだけのもので、本人が望んで発生させるものです。直接の害があるわけではありませんが、生存するという事においてそれほど重要なわけでもありません。その点で、明確に違います」

「うん」

「ですから本来であれば、ルールによって規制されるべきは欲望のほうであって、欲求は満たされなければいけないはずですよね？　にもかかわらず一般には、欲求を露わにする人が非難されて、欲望を露わにする人がそしりを受ける事は稀なんです。例えば、足りているはずなのに食べ物を欲しがる人と、足りているはずなのにお金を欲しがる人。天秤に掛けると、不思議な傾き方をしますよね？」

「あ。それは確かに……何でだろうね？」

「はい。逆ではないのかと思いますが、それどころかこの二つはしばしば混同された上で、動物は欲に支配されるが、人間はそうではない。そんな事が云われます」

「あー。よく云うね、それ。キザすぎる、っつーかイヤミすぎる」

「その通りです。これを発言しようという動機は、自分は動物とは違う特別な存在だという事にしたいとか、あるいは至言をしていい格好を見せたいとかいうものであって、それはつまるところ欲ですから、ちょっと何を言っているのかわかりません」

「そう整理されちゃうと、完全に意味不明だね」

「結局、禁欲したいと思う事すら欲なんですから、欲から完全に解放されるのは不可能。そういう事です」

「でも実際、ストイックってカッコいいイメージあるけど……」

「いえ、それは意味が違う言葉です。ストイックというのは自らをコントロールするという事で、そう振る舞うというのは欲を諦めるという事ではなく、別の目的のためにそれを保留するという事なんです」

「保留っても、結局は諦めるんでしょ？」

「動機が違うんです。例えば暑さを感じる時、禁欲の人の場合は理由も無くエアコンを使わずにただ我慢しますが、ストイックな人の場合は省エネや経済的な節約などを考えてエアコンの使用を保留する。結果、禁欲の場合は酷い暑さでもそのまま使わずに熱中症などにおちいりますが、保留の場合はそれを取り止めて健康を保つ事ができます」

「あー。なるほどね」

「それができるのは有能の証ですから、憧れるという事ですよ。それに比べて、禁欲をするというのは一方的な受け身で、何もしないという事です。つまり禁欲とは、単なる不能の証でしか無いんです」

「うーん、そういうもんなのか……」

「つまり欲についての最大の異常とは、欲を制御したいという欲を欲として認めていない所で、そこにいろいろとトラブルの種が潜んでいるんです。そしてその代表として、禁欲を善しとする考えかたは大体が宗教によって発生するものなんですが、宗教というものは倫理というものをはるかに超える害悪だと私は思います。ただそれは別の話になるので、神も仏も実在しない。そのひと言で終わりにしておきます」

「……アグレッシブですなあ……」

「宗教を押し付けるほうがアグレッシブですよ。ところで出産の話に戻しますが、若い人とは逆に高齢出産においては、障碍児が生まれてしまったり、母体が死亡してしまう例が多く発生します。障碍が親子へ生涯にわたって苦難を与え続けるのはもちろん、実の母が居ない事も不幸の種です」

「あー。そういうのはちょっと、可哀相だよね？」

「まだあります。仮に母子共に健康であったとしても、その親子には大変な年齢差が生じますから、それが子どもの精神的負担になるとか、いじめを受ける原因になるとか、そういった悪い結果にしか繋がらないんです。あるいは自立する前に親が他界したり、介護が必要になったりして、困窮してしまう例もたくさんあります」

「あー。無事に生まれても、問題はあるんだ？」

「それこそ問題しかありません。それはその親が……それも、精神がより成熟しているはずの高年者が、ですよ？　子どもや周囲に対する配慮をまったくせずに、自己満足のみによって出産した結果なんです。こんなものは、はっきり言って迷惑千万です」

「確かにちょっと、大人げ無いね？　いい大人が……」

「そうなんです。間違ってもやろうすべきではない事のはずなんですが、そういう問題に歯止めを掛けるためにあるはずの倫理というものが、これを禁止するどころか逆に応援へ回っています。状況的には、子どもには苦難を強いておいて、大人だけが好き勝手するというものです。私には、その正当性がまったく理解できません」

「あー……なるほど。それは僕にもわからないよ……」

「結局、倫理とはそういういい加減なものなんです。以上が私の疑念ですが、ただ補足します。倫理学という分野の哲学があって、つまり倫理とは何かという事を追究する学問なんですが、そちらの内容については非常に立派なものだと私は思います。そしてだからこそ、学という字を取り去っただけでこの体たらくに至るのは意味不明ですし、理が皆無なのに理という字だけ残っているのはもはや滑稽です」

「はあ……なるほど……」

　うーん。ごめんね、ずっと適当に相槌打ってたけどあんまり理解が追い付いてないよ。まあせっかくだし、後で反芻してみるけど、でも……哲学なんて単語が出てきてる時点でちょっとくじけるよね……。

　ただ、それはそれとして、これだけは突っ込みたい。ちょっと尋常じゃないでしょ。

「いや、えっと……君は本当に、兵器？　何かいろいろ、語りすぎない？」

「どうでしょうか。確かに私も、疑問を感じる事はありますが、それでも私は殺人活動を続けてきました。だから私はやっぱり、そうなんだと思います。とにかく、そういうわけですから私もあなたも、子を為すとすれば今。そう思いますよ？」

「いや、えっと……それは……何というか……」

　こんな話をしている今、相手は全裸、自分も半裸。それも、狭いシャワールームでの事。形がよく挑戦的なムネはさっきからずっとどアップだし、脚も閉じていないから秘められているべき部分も明らかになってしまっている。それはあまりにも直截的で、どうしようも無く扇情的で。

　僕はこれから、この子と……。

　うー。

　むー。

　あー。

「あああああああああああああああああああー！」

　頭がフットーしそうだよおっっ！

「タオル、ちゃんと押さえていてください」

「あ……えっと、ごめん」

「どうかしましたか？」

「あの、その、いや」

「大丈夫ですか？」

「えーと、あー、ほらあれだ……そうそう、名前！」

「名前？」

「そ、そう。そうそう。僕は君を、マークⅡだなんて呼びたくないし。何か考えようよ」

「そうですか。でも私は……そういう事を考えるのは、ちょっと」

「でも、何か、思い付かない？」

「そうですね……では、ミズホというのは？」

　ぶっ！

「な、な、何でそれ！」

「タオル、ちゃんと押さえていてください」

「あ、ご、ごめん」

「あなたの想い人でしょう。愛情が深まりませんか？」

「いやいやいやいやいや！　まずいし！　っつーか、何で松平さんの事知ってるの？」

「それは、監視していましたから。何がまずいんですか？」

「問題だらけだけどまず、それだと君が、松平さんの代用品になっちゃうでしょ？　それじゃあまるで……ダッチワイフだよ」

「なるほど。確かにダッチワイフ扱いは、ちょっと。でもそれ以外は、私には……」

「じゃあ僕が考えるよ……」

　どうしようか。

　この子は金髪碧眼。だから、日本名は似合わない。ならば、英名。

　この子はマークⅡ。それなら、２にちなんでみようか。トゥ。トゥワイス。セカンド。デュオ。ダーブル。バイナリィ。

　……うーん、しっくりくるものが無いなあ。

　この子は殺人兵器……いや。この線は変なのしか出てこなさそうだからやめとこう。

　この子は雨の夜にやって来た。レイニィ。ナイティ。

　悪くないけどしっくりもこない。

　この子は七夕の夜に……。七夕って、英語で何て言うのかな？

　あ、これいいかも？

「思い付いたけど、ちょっと保留にしようか」

「何を思い付きましたか？」

「うん。七夕の英訳にしようと思うんだけど、それが何て言うのかわからない」

「七夕はタナバタです」

「……あー。ボツ」

　いいと思ったんだけどな。

　ええと他には……。じゃあ、織姫。って、あれはヴェガだよなあ。ヴェガって言ったら、某格闘ゲームの総帥が出てきてしまいます（筋肉隆々：男）。

　七月。ジュライ。違う。

　他に、七月にちなんだもの、と……。ああ。

「七月の、誕生石とか知ってる？」

「ルビィ」

　この子は赤くない。

「うーん、違うなあ」

「それなら、誕生日石というのもありますよ？」

「そんなのあるの？」

「はい。閏日を含めて、三百六十六の宝石が決められています」

「それは凄い。じゃあ七月七日とか、わかる？」

「スターローズクォーツ」

「それは、どんなやつ？」

「六条星の紋が浮かぶ、バラ色の水晶です」

「それも何か違う……じゃ、誕生花とかわかる？」

「七月七日ならスイレンです。ただ、誕生花はいろいろ云われていて正確な所がよくわからないんですが、他にアベリアやクチナシなんかがあります」

「よく、そんなにいろいろ覚えてるね？」

「一度覚えれば忘れませんよ」

「……」

　どっかのドラマで聞いたようなセリフだけど、実際言われると呆れてしまうなあ。

「えっと……コンピュータじゃないなら、一括インプットとか、そういうのじゃないんだよね？　いちいち全部調べたの？」

「……ありがとうございます」

　ええと、んん？　今、礼とか言われたのは何故なのだろうか。

「あなたは比較的、物事をきちんと見る事ができる人なんですね」

「いや……どういう事なのか全然わからないんだけれども……」

「人は非現実的な事態に遭遇すれば、非現実的な対応を取ってしまうものなんです。実は私は、作られたなら何でもありだろう。そんな言葉があなたの口から出てきてしまう事を、さっきからずっと恐れていたんですよ？　私にはいろいろ感情が具わっていないとは言いましたが、不安は理解できるんです」

「……あー。そういう事……」

　つまり彼女が言いたいのは。作られたなら何でもあり、という考えは現実的ではないが、普通の人ならそれを言ってしまうだろう、と。なのに僕がそれを言わなかったから驚いた、と。そういう事なんだろうが……。

「ごめん、僕の場合は、そんなんじゃないから……」

　自慢じゃないけどモノのホンです、ハイ。

「謙遜とはまた、奥ゆかしいですね」

「いや、本当に違くて……ちょっと似たような話を、読んだ事があって。免疫って云うのかな？　そういうの。それだけだから……」

「それは違いますよ？」

「……え？」

「それが受け売りでも、聞きかじりだったとしてもです。たった今こうして実践できたのなら、それは間違い無くあなたのものになっているはずです。そうではないですか？」

「……」

　そう、なのかな。

「過信はいけない事ですが、過小評価はそのはるか上を行くレベルでいけない事なんです。それは、自分が何かをやり遂げたという事実から、目をそらすという事なんですよ？　成果が確認できなければ、そこに成長はありません。もっと自信を持ってください」

「うーん……でもそうすると、図に乗っちゃいそうで……」

「その時はその時です。それで失敗したなら、そこからまた学べばいいだけの話です」

「……そっか……」

　何か、ここまで理路整然と誉められたのは初めてな気がする。

「ところで、あなたの言う通り私には、データを機械的に入力する端子のたぐいはありません。それでもインターネットというものがありますし、知識を得るのには苦労しませんよ。ただ……私が扱う事を許された端末には恐ろしく厳重で厳格な年齢フィルタリングが施されていたので、性の戯れに関してだけはとんと疎いんです」

「はあ……」

　殺人兵器に対して年齢制限、というあたりもよくわからないのだけれども……。

　必要な情報が得られないせいで暴走する、という事もままあるのだろうか。そんな感想が出てきたりした。

　って、そういえば今まで何の話を……あ。

　名前だった、名前名前。

「ええと、ちなみにスイレンを英語で言うと？」

「ウォーターリリィ」

　お。おお。

　来た、やっと来た。しっくりくるのが来た。

「それだ。リリィっていう名前はどうかな？　何か少し、聴いたような感はあるけど」

「リリィ単体だと、スイレンではなくユリになってしまいます」

　がびーん。英語強敵、恐るべし。

「おわー、ダメか……」

　と、しかしそれならどうしようかと僕が再び迷い始める前に、彼女は付け足した。

「でもそういえば、日別ではなく月別としての、七月の誕生花がちょうど、ユリですね」

　何と。

「決まった。君はリリィ。ＯＫ？」

「リリィ……」

「うん。どう？」

　彼女はちょっと考え込むと、こう述べた。

「わかりません」

「……え」

　お気に召さなかった？

「でも、悪くはないと思います」

　あ、そういうオチだったか。

「何だよかった、ダメなのかと思った」

「命名、ありがとうございます。でも……七月七日に、何かこだわりが？」

「そこはまあ、何となく。日付は変わってるけど、七夕の夜だしね」

「そうですか」

　っつーか、ユリなんてありふれた単語だから、聴いた感もあったわけなんだろうけど。

　うん。

　そんな事は関係無い。

　僕が選んで、付けた。

　それを受け取って、もらえた。

　うん。

「……そろそろ、タオルを取ってみてください」

「あ、うん」

　思えば結構、長くしゃべった気がする。

　ゆっくり、タオルをどけてみた。あれだけ激しく血が流れたのが嘘であるかのように、傷口は穏やかだ。出血が止まっているかどうかは血だらけで確認できないが、少なくとも溢れてはこない。

「いいようですね。洗ってください」

「しみないかな？」

「大いに痛むと思いますが、仕方ありません。それよりついでです、血だらけですから先に、私とあなたの体を流してください」

「了解」

　何となく、慣れてきた感じ。シャワーを開栓すると、手際よくそれぞれの血を洗い流していく。それが済むと、彼女の傷口に取り掛かる前に、尋ねた。

「ええと、掛けるよ？」

「はい」

　傷に流水を当て、手でやわやわとこすった。

「っ……」

「あ、痛い？　大丈夫？」

「痛いですが、大丈夫です」

　何か凄く無意味な問答をしているような気がしないでもないけど、しかし。我慢強いんだなあ、よっぽど。僕が、あれだけ痛かったのに。僕があれだけ、うめき声を上げたのに。

　まあ、やはり血は固まっていないから、それほど労せずに傷はきれいになる。出血もほとんど収まっているようだ。

「これでいいでしょう。シャワーを止める前に壁の血を落として、それからタオルをもう一度洗ってください」

　あ、壁か。そこまで気が回らなかった。

「ずいぶん的確に指示するね？」

「そうですか？　特段の意識はありませんが、そうだとすればそれは……慣れでしょうか」

　うーむ。あまりこういうのは、慣れたくない。

　まあ、壁の血を洗い流すのも、やはりそれほど苦労しなかった。タオルを洗い、水を止め、絞る。

「んー。ええと君は、タオルで拭いたりしても大丈夫なんだろうか」

「ダメなので、ぬぐわずに軽く叩くようにしてください」

「あ、なるほど」

「その前に、先にあなたの体を拭いてください。私の出血はまだ完全に止まっていませんから、私が先だとタオルが汚れます」

「あ、なるほど」

「あと、それはやっぱり、脱いだほうがいいですよ？　きちんと拭けません」

「あ、なるほど」

　……。

「いや、あの……これは……」

「これから私と、するんでしょう？　セックス。誰も咎めません、大丈夫です」

「……でも」

「それよりも早く拭いて、早くラップを巻いてください」

　……ああ、もう。どうにでも。

　と、破れかぶれでブリーフを脱ぎ捨てたが、彼女は目撃しても特に何も言わなかった。

　しかし……若い男女が、お互い全裸で、狭いシャワールームに……ああああああああああああああああ……。

　とにかく僕の体をわしわし拭き。とにかく彼女の体をぽんぽん叩き。素早く。素早く。

「完了！」

「ラップを」

「ハイ」

　一旦シャワールームを出て、台所のラップを手にすると、取って返す。

「きつく、三重でお願いします」

　ぐるぐるぐる。

「こんなもんで？」

「はい。後は……はい。お願いします」

　……布団まで、という事だ。

「また、引きずっても？」

「平気です」

「えっと、じゃあ」

　先に道を作り、再び彼女を羽交い絞め。

　きちんと、牛乳の匂いは取れていた。ただ……よく話に聞くような、いわゆる女の子の匂いというようなものも感じられなかった。まあ、丸洗いしたばかりなわけだから仕方無いんだろうけれども……。はっきり言って、シャンプーの匂いしかしない。何となく残念では、あった。

　いや別に、シャンプーの匂いが悪いというわけでもないんだけれど、これといって男好きする匂いでもないよね？　よく、女性向けの商品には男性が好む香りを付けてあるとか云うけれど、正直はなはだ、疑問。まあ、僕が買ってるのは女性向けも男性向けも無い激安シャンプーだから関係無いんだけど、単なる洗脳じゃなかろうか？

　頭を洗うだけに。

　まあ、そんなこんなで布団に到達し、彼女を横たえる事には成功したのだが。

「……あー」

「何ですか？」

「いや、タオルや下着がダメなら、シーツは大丈夫なんだろうか、と……」

「不思議な事に、それは大丈夫なんです。すべてダメなら、これは綿アレルギーか何かだという当たりをつけられるんですが……かといって私の場合、どんな異常が検出されるかわかりません。病院へ持ち込むのは躊躇われますし」

「それはちょっと、困ったもんだね……」

「はい。では、あなたのラップも水で少しずれ始めてますから、交換してください。その後は……」

「……」

「後は、私にはわかりません。お任せします」

　お任せします、か。

　こんな状況でこんな女の子からこんな事言われたら、男は舞い上がっちゃうよな。

　で、今、実際に言われてしまったわけだけれど。

　……うん。

　とりあえず、今巻いているラップをはぐる。新しく、ラップを巻く。そしてその後、僕は……。

　服を、着た。

「え」

　まあもちろん彼女は、猛然として抗議する。

「どうしてですか！　約束は、やっぱり嘘なんですか！　あんなにお願いしたのに……あんまりです」

「いや、リリィ落ち着いて。違うから」

　すいません、僕は健康男子なものですから、こんな状況になったらもう止まれないです。そんなわけ無いじゃないですか。そうじゃなくてね。

「違う……どういう事ですか？」

「ちょっと、買い物に行くだけだから」

「今になって……何を？」

「うん、やっぱりね。リリィはさっき、ちょっといろいろ言ってたけど……でもやっぱり、困る……っつーか、ちょっといろいろ考えちゃうから。今、子どもが出来ちゃうのは。だってそれ、リリィが産んでくれるにしても……僕の子どもだよね？」

「……そういう、事ですか。勘違い、してしまいました。ごめんなさい」

「いや、こっちこそごめん。ええと……それとあと、ガーゼとか」

「それは不要ですよ。活動時なら衝撃保護になりますけど、安静時は血を吸い取る以上の仕事はしませんから、血が止まっているなら無意味です。繊維が傷にこびりついたり、雑菌が溜まってしまったりするというデメリットもあります」

「そう？　じゃあ他には……」

「ラップを押さえるための、包帯かテープがあったらいいと思います。傷口を合わせるための接合テープがあればなおいいですが、それは今は手に入らないでしょう」

「了解。行ってきます」

　今度は確実にチェーンを外し、玄関ドアを開ける。相変わらず降り続いているから、まあ傘を開いた。

　男子高校生たるもの、頭を悩ませるのは近藤さんを買い求める場所であろうが……いやいや、人身売買じゃないからな！

　実は僕のアパートのすぐ向かいがちょうど薬局で、もちろん真夜中に店舗が営業しているわけではないものの、そこには避妊具を扱う自販機が備え付けられていたりする。

　っつーかもし店が開いていたとしても、こんな時間に男子高校生がそんなモノ買いに行ったら、間違い無く面倒な事になるよなあ。

　しかし、いろいろと種類があるみたいだけれども。……うむ。

　薄いほうが、いいよな！　な！　丈夫って書いてあるから、破れたりしないだろうしな！　な！　な！

　……少し高いけどな。

　ちょうど千円也。なかなかの出費である。まあその分、内容数がいっぱいあるみたいだけれども……。たくさんいたしてくださいって事？　コレってそういう事？　ねえ答えてよ青春の疑問！

　しかし出費といえば……リリィ。彼女は今後、僕の部屋で暮らす事になるのだろうか？　一人ででさえやっとギリギリの現状、彼女を食わせてあげる余裕などまったく無い。

　どうしようか……いや。それは後で、彼女と考えよう。

　とりあえず、避妊具の自販機で包帯やテープまで販売しているわけが無いので、近くのコンビニへ向かう事にする。そこまで片道、徒歩五分。本当にここは、都合がいい。

　店に到着し、時刻は深夜三時ほど。いわゆる丑三つ時というやつだが、それでも客足はあるらしい。商品搬入する店員の他、堂々と雑誌を立ち読みする客の姿が二名ほど確認できた。いや、立ち読みしかしないんなら客と云えるのかも怪しい所だし、注意しなくていいのか店員。

　ええと、包帯の取り扱いは、無し。テープは……不織布製のホワイトテープとかいう物もあるけど、微妙に高いからセロハンテープでも、いいよね？　コンビニに置いてある品物は基本的に安くないから、あんまり高い買い物はしたくない。

　でもそういえば、冷蔵庫の物をほとんど放り投げてしまったのだった。明日食べる物は、何か残っていただろうか？　惣菜パンくらい買おうか。いやしかし、パンってあんまり腹が膨れないんだよな。ここはやっぱりおにぎりとか……お、おお。百円均一。これを一人、三個あてで買っていこう。

　それから飲み物。一リットルの紙パック物が意外と安価だ。玄米茶でいいか。

　しかしそれでも会計してみると、千円近くに達する。恐るべしコンビニ、とてもデザートとかには手が届かない。

　……って、そんな事を考えている場合でもない。コンビニとの往復で、約十分。自販機とコンビニでの買い物で、合わせてやっぱり約十分。動けない体で一人寝かされて、二十分もじっと待つというのはかなり苦痛なはずである。これ以上長く待たせては可哀相だ。

　あー諸君。早くヤりたいからじゃないからな！

　あー諸君。早くヤりたいからじゃないからな？

　重要な事なので脳内で二回繰り返しつつ、急ぎ帰路をたどった。しかし……。

　リリィには何か言われたけれど、やっぱりケーケンするの、早すぎないだろうか。そんなような固定観念は、なかなか打ち破るのに難しく。何か現実感無い感じと、期待と、不安と。

　ところが、そんな感じのものを抱えつつ雨の中を行き、アパートの部屋の前にたどり着けば……何やら部屋の中から人の動く気配がするのである。

　……誰？

　リリィの例もあるし、また他の誰かが来ていないとも限らない。人は危険に晒されなければ警戒する事を覚えないと云うが、今はそれと逆の状況だ。少し緊張し、おそるおそるドアを開け……。

「お帰りなさい」

　それは果たして、リリィだった。

　力が抜けた。でも、よかった。

「はあ何だ、やれやれ……」

「どうかしましたか？」

「いや、何でも。……動けるの？」

「ホットミルクを振る舞ってもらったお蔭かも知れません。予想より早く回復したんですが、牛乳を放置するのもどうかと思いましたし、掃除をしていました。本当は片付けもと思ったんですが、その前にあなたが戻ってきてしまいました」

「そっか。何か、悪いね」

「いいえ」

「足、大丈夫なの？」

「かなり動かしづらいですが、どうにか」

「あーいやいや、そうじゃなくて……痛く、ない？」

「痛いです。でも、平気ですよ」

　何かもう……健気、という言葉で片付けてしまっていい、のかな？

　何かもう……いじらしすぎて。

　何かもう……いろいろと。

　何かもう……僕は、松平瑞穂が、好きなのであるわけだけど。

　何かもう……リリィにはさっきああ言ったけど。

　何かもう……実は僕の心は既に、彼女へ傾いたり……していたり、するのかな？

「あ、ええと。セロテープ買ってきたけど」

「では貼りましょう。脱いでください」

「いや、自分で」

「背中は無理なはずです」

「あ……そっか。お願い」

「貼ります」

　ぺた、ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。

「終わりです」

　手際いいなあ。

「僕も、貼ってあげようか？」

「そうですね。座ったほうがやりやすいと思うので、布団のほうでお願いします」

　布団がある場所以外の床、ずいぶん散らかってるしね。移動。

「テープは長目に切って、縦にいくつも貼ってください」

「なるほど」

　ぺった、ぺた、ぺたり、ぺったん、ぺた。

「こんな、もんか、な……？」

「そうですね」

　いいのかな？　あんまりきれいにできなかったけど……。

「では……」

「あ。えーと。うん……えーと」

「……はい。お願いします」

　ちょっと、見詰め合った。

　その視線は、まっすぐ僕を捉え。

　その面貌は、可愛さと美しさを兼ね備え。

　その肢体は、すらりと神々しく。

　この子は……この子が、僕の、初めての人、に……。

「明かりは？」

「どちらでも」

「じゃ、消すよ」

「そうですか」

　それが僕の初体験になったわけだが……細かい部分は、よく覚えていない。

　何とか記憶に残ったのは……暗がりだったから、避妊具の装着に恐ろしく手間取った事。

　期待に反して……僕が彼女に何をしても、まるで無反応だった事。

　それでも彼女と一つになれた時……この世のものとは思えない、至福と感動を得た事。

　そうしてすべてが終わった後……彼女がこんな言葉を、漏らした事。

「私を……殺してください」

# **《３》超人と呼ぶべき存在**

　日曜日。

　僕とリリィは裸のまま、布団の中で抱き合って過ごした。七月のさなかだが、雨が降り続いているせいもあってか、その暑さは気にならない。

　ただ、彼女は……無言。何であんなセリフを口にしたのか、その説明も無いままだ。僕も初めてであったわけだから、多少浮かれていても許されるはずだろうけれど、そんな気持ちはその言葉によって霧散してしまっていた。

　おかげで、年頃の男がひとたび経験すればしばらくサルのようになると云われているのにもかかわらず僕は、そして今も年頃の女の子と全裸で抱き合っているという状況であるのにもかかわらず僕は、そんな気が起こらない。ぶっちゃけ、悲しいくらい健康な僕にまったく反応が起こらなかったわけではないけれども。まあそれは云ってみれば半生状態というやつだろうか、ヤツが邪魔になる事は無かった。

　ともあれ、そんな気分だったからあれから一睡もできずにおり、しかし昼下がりになればさすがに空腹を感じたわけだが。

「……食べようか」

「……はい」

　それ以外の会話は無く、買ってあったおにぎりを二人で口にして。そして食事が終われば二人、示し合わせるでもなく布団へ戻った。

　僕が昨晩、何かまずい事をしたのかどうなのかは、何度振り返ってもよくわからない。確かに彼女はあまりにも無反応だったわけだが、それについてはむしろ向こうが謝罪をささやいていたように思うし、おそらくそれは問題ではない。それに、こうして抱き返してきてくれているのだから、そもそも嫌われてしまったわけではないだろう。だから、謎が残る。

　……殺してください？

　安易に死を選ぶ人は多いと云うが、彼女がそんな子ではないという事は馬鹿の僕でもわかる。余程の事のはずだ。

　どうして？

　わけを、聞かせてよ。

　リリィ……。

　そんな風に悶々として過ごし、しかしリリィはなかなか反応を見せなかった。

　そうしてふとケータイが鳴動し、それは気が付けば夕方の頃。

　リリィの肌とその体温は恐ろしく心地よく、また丸洗いしてから時間の経過している彼女からはとてもかぐわしい匂いが漂ってきていて、だから離れてしまうためには膨大な精神力を要した。

　ケータイを確認すれば昨日、裸体人形の写真を送り付けてきた上の姉からの、再度のメールだ。

『戻ってくんのかどうなんか！　女ならはっきりしろ！　男って呼ぶぞ！』

　また写真が添付されていて、それには味噌汁の入った鍋が写っている。ちなみに具は、ワカメと豆腐。もうもはや、いろいろ脈絡がわからない。まさかこれで、郷愁を煽っているのだとでも言い出すつもりなのだろうか？

『背景　ぬるぽ　早々』

　これで充分だろう。

　返信し終えると一気に脱力したが、間髪入れずに返事があった。

『拝啓の後ろは敬具だ！　つーか軽々しくぬるぽとか書くな！　あれは怖いんだぞ本当に！　戻ってきた時にみっちり教え込んでやるからな！　ガッ』

　あの文面で、一応帰るつもりというこちらの意思が伝わり切ってしまう所は、まあ流石と云える。

　ところでこの姉上、既に就職していてプログラマなぞをやっておられる。ぬるぽがその障害である事は有名なので、もちろんそれを承知で書いたわけだが……うむ。

　ちょっと、イタズラを。

「リリィ。いい？」

「……何ですか？」

「ちょっと、こっち」

「はい」

　素直に、傍に来てくれる。可愛い。

　二人並んだ所で、ケータイを目前にかざした。

「写真ですか？」

「うん。まずい？」

「いえ、そんな事は無いと思いますが」

「じゃあ、撮るよ？」

「はい」

　カシャッ！

　もういい加減、わざとらしい効果音が鳴る。

　それを添付した空メールを、返信。鎖骨とかナチュラルに写ってるけど、まあいいや。

「ええと……まだ、布団の中に、居たい？」

「……」

　リリィは無言で、布団へ戻った。僕が追い掛ければ、彼女は再び布団の中で僕の背中に腕を回してくる。

　今しがた、ちょっとだけではあるものの、リリィと普通に会話できた事で、やや安心したらしい。その心地よい感触の中に、僕は少しだけまどろんだ。

　とっぷり暮れた頃、リリィが何の前触れも無く尋ねてくる。

「……明日は、学校ですね？」

「え。うん、まあ」

「私も行こうと思います。連れていってください」

「あ、そっか……うーんでも、連れていく事はできるけれども……追い出されないかな？」

「はい。ですから、正面突破をします」

「正面、突破？」

「なるべく早い時間に出て、私を校長室へ案内してください。直談判を持ち掛けます」

「……校……長……」

　嫌な事を、思い出してしまう。せっかく忘れていたのに。

「何か？」

「あ、いや……説得材料とか、あるの？　僕には手伝えそうにないけれども……」

「どうにかします」

「そ、そう……」

　いや、無計画にそんな突撃をするような子じゃないのはわかり切っているし、だから当然何らかの考えがあるんだろうけれど……。

　言いたくないのか。

　まあ僕を口説いたのを見てもかなりの口達者だし、特に心配は要らないかな？

「でも、どうして学校なんか？　あんまり知られないほうがいいんじゃ？」

「それについては後で、対策を練りましょう。同行したい理由は、二つほど」

「二つ？」

「まず、私への命令には期限が無いと言いましたが、マスターは監視を続けているかも知れません」

「え……えええええ。監視？　また？」

「私ほどつぶさにはしていないと思いますが、それでも今の私を見れば当然、命令遂行の意思無しと判断するはずです。そうすればマスターが、何らかの手を打ってくる可能性が非常に高いんです。だからあなたの傍には常に、私が居る必要があります。私はあなたを……守らなければいけません」

「そっか。まあ背に腹は代えられないけれど、でも……女の子に守られるというのはちょっと、格好悪いかなあ……」

「あなたの命が懸かっています。面子を立てている場合ではありません」

「あ、うん。ごめん。それで……もう一つの理由は？」

「それが、自分でもこの理由はどうかと思うんですが……」

「勿体ぶらずに」

「……あなたの傍に居たい。そう思いました」

　お。おやおやこれは。

「それって、途方も無い成長じゃないかな？」

「成長、ですか？」

「うん、好きな人ができたらそう思うもんだから。普通に近付いたって事じゃん」

「いいえ。おそらく違います」

「え」

　あっさり否定されちゃった。

「どうして？」

「好きとか、そういう事。未だわかりません。だから違います。私はただ……あなたに、しがみ付いていたいだけなんだと思います」

「……しがみ付く？」

「昨晩、あなたは私を抱いてくれました。そのお礼が遅れましたが今言います、ありがとうございました。それからあなたを、かなり強引に誘ってしまいました。ごめんなさい」

「あ。それは、いいけど」

　ううむ、こっちが存分にいい思いをしているのだが、礼とか言われてしまった。こんなんでいいのだろうか。

「最大限の努力をする。あなたのそのセリフは私にとって、恐ろしく魅力的なものでした。その言葉に口説かれて、あなたに身を任せてみようと決めた時……それでも私は普通ではありませんから、普通の誘いかたではダメだと思ったんです」

「それで……あんな？」

「はい。どうしても私の裸体を目にして、かつ肌に触れなければいけない状況を作ってみればどうかと考えて……実は、この程度の負傷であれば、自力で対処できたんですよ？」

「……あ……さようですか……。あ、じゃあ肌が荒れるとか何とかってのも？」

「いえ、それは嘘ではありません。思い出してください、私がまだあなたを殺すつもりだった段階で、私は既に下着を身に着けていませんでしたよ？」

「あ……あー、そっか」

「確かにそれも、誘うための演出にはなったのかも知れませんが……しかしあなたは実際、なかなか誘いに応じてくれませんでした。もうどうしようかと、やっぱり私ではダメなのかと、そんな風に思いましたが……」

「いやそれは……仮にリリィが普通の女の子だったとしても、あの対応は変わらないって」

「そうですか。でもせっかく……あなたがせっかく、結局はその対応を曲げてくれたのに、私は……ごめんなさい。その時私は、どうしようも無い絶望を感じてしまったんです」

「……え」

「セックス以上に愛を交わす方法は、ありませんよね？　異性間の愛情はそのためにあるはずですから、プラトニックを至高とする考え方には理解を示すつもりもありませんが、とにかくセックスは私にとって、最後の砦だったんです。そしてそれを体験すれば、私にも何かを感じ取る事ができる。そんな期待を抱いていたんですが、しかし……そんなものは、いとも簡単に打ち砕かれてしまいました」

「……」

「この行為に何の意味があるのか、私にはまったく理解できなかった。私は、あなたに何を与えられても、何も感じ取れなかった。愛と呼ばれるものはもとより、安らぎと呼ばれるものも、興奮と呼ばれるものも……そして性交への大きな動機となる、性的快感と呼ばれるものまでも。私は、感じ取る事が……できなかったんです」

「……」

「それどころか私は……円満な性交には不可欠な、愛液と呼ばれるものを分泌する事すらしませんでした。あなたにとってもそれは、あまり気持ちのいいものではなかったのではないですか？」

「あー、えっと、いやその……最高でしたけれども」

「そうですか？　それならそれは、よかったですが……」

　まあ何だ、その……オリーブオイルとかいう単語がリリィの口から発せられた時には、ちょっとフリーズしたけれども。そして何だ、ちょっと奮発して買っておいてよかったけれども。

「とにかく私はそれで、つまりそういう事なんだと。私にはそういったものは感じ得ない。見付からないのは、そもそも目的のものが存在しないから。だから私の感じる空虚も永遠に、満たされる事は無い。そう考え至りました。だから私はもうこれ以上、生を長らえるのが……嫌になってしまったんです」

「リリィ……」

「そもそも私は最初から……あなたとの行為で自分の今後を、判断するつもりでした。それは要するに……失敗したなら、今世から身を退くという意味です」

「……え」

「そんな覚悟で臨んだだけに、この結果は私には、あまりに……。私はもう、嫌なんです。何もかも。誰かを殺すのも、空虚を抱えながらやっていくのも、答えを探すのも……もう、嫌なんです。もう……嫌なんです」

「……リリィ……」

「もう……嫌なんです……」

「……」

　それで……殺してください、と……。

「ただ、もう少し考えると私は……命を絶つ事すらも嫌なんだ、という事に……気が付いてしまいました。私は、自分が考えていた以上に……浅ましかったみたいです」

　あ……。それはちょっと、追い込まれるかな？　確かにそれは、どうしたらいいのかわからなくなるかも知れない。

　けれど、そういうのって。何か随分……人間、なんじゃないのかな。悪くないんじゃ、ないのかな。

「いいんじゃない？　そういうのが普通だと思うし」

「そういうものでしょうか？　私にそれは、判断できません。ただ……それなら、今後どうしていこうか。そこに悩みました」

「あ、うん。そうだね」

「その結論は……残念ながら、出ませんでした」

「そっか……」

「それでも今、あなたが少しは私のほうを向いてくれているみたいだったので、ちょっと甘えてしまおうかと。方針が決定するまで、ちょっと寄り掛からせてもらおうかと。そんな風に思いました」

「僕に、寄り掛かる……」

「……迷惑ですか？」

「あ、それは全然。いいよ？」

　僕の即答に、リリィは慎重に確認を重ねる。

「本当に？　あなたの傍に居たいと思うのは、あくまで打算なんですよ？」

「打算？」

「はい。私はあなたに、愛情というものなど感じてはいません。あわよくば貪ろうという、そのような厭らしい魂胆がただ、ただあるだけです。それでも……ですか？」

「あー。いや、大丈夫だよそんなの」

　っつーか、さ。こんな状況で、こんな子を見捨てられたりできる人物が、この世に存在するとか全然思えないんだけれども……。

「そうですか」

　リリィは少し間を置いてから……身を起こし、ちょこなんと座り込んではこちらへ頭を下げた。

「ありがとうごさいます。ふつつかにもほどがありますが、今後よろしくお願いします」

　おおー。ちゃんと正式に、三つ指ついてるなあ。

　いや、本当に正式かどうかはわからないけれど……。でも多分、リリィの事だしね。

「こちらこそ、リリィ」

　しかしその何か、普通にカップルになってしまってる気はするけれど……。松平瑞穂にはもう、振られてしまったわけだし。まあ、いいよね？

　と、そのリリィはこう継いだ。

「明日は学校です。部屋を片付けて、明日の準備をして、傷のラップも交換して。それから、腹ごしらえをしませんか？」

「あ……あー、うん。そうだね」

　うーん。白状すればもっと、リリィと布団で抱き合っていたかったんだけど……。言われてしまった、な。

　と、そわそわした様子が見て取れたのか、リリィはこう尋ねてくる。

「あなたは……ひょっとしたら」

「え？」

「もう一度、したいんですか？　私と」

「あ、え、いやその……っつーか、いいよそれは」

「私は構いませんよ？　むしろ、あなたのほうが構うのではないですか？」

「確かにまあそりゃあ、した……いいいいい、いや。いやいや、その。だからさ……リリィは、気持ちよくないんだよね？　全然」

「それはそうですが、あなたは私に、最大限の努力を約束してくれましたから。私もあなたに、最大限の努力をします」

「そういう事じゃなくて、さ。つまり、僕一人がいい思いするだけなら、リリィが本物のダッチワイフになっちゃうからさ……」

「……なるほど。確かにそう云われてしまうと、ちょっと。ただ……気遣いはありがたいとは思いますが、それにしてもあなたは本当に、私へ遠慮をしますね？」

「……もう放っておいてよそれは」

　少し困ったのが、リリィの着る物だ。

　彼女の戦闘服とやらは昨日の夜にやっと洗ったのだが、雨天たたって未だ乾いていない。実を言うと彼女の靴もきちんと乾いていないのだが、僕の物はサイズが合わず、今はこれしか無いので我慢すると彼女は言っていた。

　とりあえず上は僕のＴシャツを下地に、さらに僕の制服の、半袖のワイシャツを選択。下着はＮＧとの事でノーブラであり、彼女のムネのまったくけしからんのがどうにも強調されてしまっている。加えて下はデニムのショートパンツ、ときた。その露出度に相まって、服の取り合わせとしてもあまりに事後感ありありで、正直もうエロさ全開すぎるので別の物で勘弁して欲しかったのだが、いざという時のために手足はなるべく露出させておきたいのだと言う。説得はできなかった。まあ彼女の足の傷だけは、長目の靴下でどうにか隠せたけれども。

　朝食も済んで早々に出発する事になったが、雨はやんでいない。しかし傘は一本しか無いから、相合傘をするしか二人が濡れないでいる手段は無かった。いずれにしても、足を怪我しているリリィには肩を貸さなければいけないから、二本の傘はかえって邪魔ではあるけれど……。これ、思いっ切り注目されるよなあ？

　自慢すればいいか！　冴えてる！

　……僕にそんな勇気が無い事を考慮しなければ。

　いや、でも。これって。

　いきなり目の前に現れた不思議少女が、無条件で慕ってくれるアレ。それそのものなんじゃないだろうか？　確かにまあ、最大限の努力を、とかもっともらしい事は言ったけれども、しかし実際に何をしたというわけでもない。

　あれー、こんなもんなのかな。

　何だか拍子抜けしつつも、しかしすぐ隣の少女は可愛らしくひょこひょことやっている。

　……いっか。

　可愛いは正義、という言葉もあるし。いや、よくわからないけれど。

　しかしこれは、やっぱり歩きにくいし、歩きにくそうだし。

「怪我とか、都合よく治らないもんなんだね？　兵器なのに」

「そうですね。私も機械ではなく生体のようですから、修理というわけにはいきません。その生体も、フィクションでは実に容易に怪我や病気が治ったりしますが、治癒というものはその本人が自力で行っているもので、医療というのはそれが滞り無くできるように手助けしているに過ぎませんし、実はそれ以上の事は何もできないんです」

「え……そうだったの？」

「魔法は存在しませんよ？　ですから、人間そのものが変異してしまうか、物理の法則を覆すくらいに画期的な医療革新が起こらない限りは、そんな夢の治療法は実現しない。私はそう思います」

「結構、シビアな現実主義者なんだね、リリィは。でも、変形でどうにか……とかは？」

「私も液体ではありませんから。一度穴の開いた風船は膨らませようがしぼませようが、どう形を変えても穴は開いたままです。傷を隠す事くらいはできますが、塞ぐには至りません。そもそも、トランスフォームモードのままではエネルギーの無駄遣いです」

「なるほど。そうすると、これが治るのは……」

「完治するには少なくとも、一ヶ月は掛かると思います」

「ずいぶん扱いづらい兵器だね？」

「はい、非効率だと思います。私は運よく、滅多に傷を負ったりしませんでしたが」

「今回は、運が悪かったわけだ？」

「どうでしょうか。そのお蔭で今、私はあなたとこうしています」

「あー。それもそうだね」

「ただ、どうしてなのか……」

「え。何？」

「はっきりとした事は未だ、わかりません。でも冷静に考えれば、あれは私が狙いを外すような距離ではありませんでした。私は絶対にミスを犯さない、などと驕るわけでは決してありませんが、私はあなたの首筋を狙ったんですよ？　いくら何でも、あり得ません」

「ふうん？　じゃあ、何でだろうね？」

「はい。もしかしたら私は……そもそもあなたを手に掛ける事に、後ろ向きだった。つまり……最初から、あなたを殺すつもりは無かった、のかも知れません」

「そっか……それは、感謝しなきゃ……ね」

「いいえ、とんでもありません。私は今、申し訳無い思いでいっぱいなんです。こうしてあなたに付き添って守る事を決めたのには、その由も大きいんです」

「……そっか」

「私が、マスターの命令に従わない事を最初から決めていれば、あなたは怪我などしないで済んだはずでした。本当に、ごめんなさい」

「いや、それは、もういいから」

「……そうですか」

　そこで一旦、会話は途切れる。

　ひょこり、ひょこり。隣のリリィは、とても健気だ。

　もうしばらく行って、ちょっと思い立って別の話をする。

「ええと、でも学校に行くって、勉強とかするの？」

「いいえ、ただあなたの傍に居ます。それに私はいまさら学ばなくても、いろいろ知っていますよ？　専門的な事でなければ、一般大学レベルくらいまでカバーできると思います」

「うおい、言ってくれるなあ。みんなどんだけ苦労しああああああああああああ！」

　ヤヴァい……。すっかり忘れていたが、そういえばヤヴァかったんだった……。

「どうしましたか？」

「もうすぐ、テスト……うあー……」

「不安があるなら、私が教えますよ？」

「え……でも僕、かなり……出来の悪い生徒だよ？」

「何とかします」

「じゃ……じゃあ、よろしく……たのんます……」

「わかりました。後で教材を見せてください」

　僕、ダメ人間かも知れず……。リリィが眩しすぎる。

「でもリリィって、そんなに勉強したんだ？」

「それなりに。何が必要になるかわかりませんでしたから」

「立派、だね」

「どうでしょうか」

　ここでまた会話は途切れた。

　早い時間だけあって、通行人にはなかなか行き合わない。

　そうしてさらにしばらく行けば、リリィのほうから話題が挙がる。

「そういえば、学校へ行くにあたって決めておくべき事がありました。今、決めてしまいましょう」

「決めておくべき事？」

「私の正体を、どう誤魔化すかについてです」

「あ、そっか。忘れてた」

「それにはまず私の名前ですが、リリィだけでは不自然です。差し当たり、由来にちなんでリリィ・ウォーターを名乗ろうと思いますが、どうでしょうか？」

「それ、聴こえは悪くないけど、ウォーターって姓はあるのかな？　聴いた事無いような」

「無いかも知れません。ただ、ウォーターソンというのはありますし、何々ソンというのは何々の子孫という意味ですから、通らない事は無いと思います」

「へえ。じゃあ、いいかな？」

「では次に、生い立ちです。年齢は、あなたと同じ十六歳という事でいいでしょう。しかし、私が目覚めたのは日本でですが、どう見ても私は日本人ではありません」

「ウォーターって、どう聞いても英語圏だよね？」

「では適当に、アメリカ出身という事にしてしまいますか。ロサンゼルスあたりで」

「あ、でも日本語ペラペラだよね？　それ、どうしようか」

「たびたび日本へ訪れているか、半定住している事にしましょう。実はむしろ、英会話のほうが不得手なんですが、まあ日常会話くらいでしたらそれなりに」

「何でもできるなあ。ならそれで、問題無いか」

「そうしたら後は、私があなたの部屋に滞在している理由です。同棲はどうやってもバレるでしょうから、知られるのは時間の問題です。理由を考えておかないといけません」

「うーん。それは悩むなあ」

「はい」

「でも……あのクソ狭い男の一人部屋に、女の子が滞在する理由ってなかなか無いぞ？」

「そうですね……ではいっそ、こういう事にしてしまいますか？」

「どういう事？」

「私は家出少女。あなたは親切な人。そんな感じで」

「……うわお」

「そもそも私は通学するわけではありませんから、きちんとした家も身分も必要ありません。それにその関係なら、あなたと私が親密にしていても何らおかしい点はありません。さらには、家出の経緯についてすぐに明かす必要はありませんし、他の経歴もそれを理由に内緒という事にできます。どうでしょうか？」

「凄い考えだね。突飛だけど、意外と穴が……あ。でもそれ、それこそ通報されない？」

「そこは、親は黙認しているという事で取り繕いましょう」

「それだと、親に確認しようとかいう事にはならないのかな？」

「私の見込みではそこまでの追及は受けないと踏んでいますし、そうさせない方向に話を持っていくつもりですが、もしそういう事になってしまった場合は、マスターに保護者役をやってもらいます。私の存在がおおやけになって困るのはマスターも一緒ですから、その程度は話を合わせてくれるでしょうし、実際にロサンゼルスに知り合いが居るようですから、委任状に見えるものや他のそれらしい書類もどきも用意できるでしょう」

「……なるほど」

　よくまあここまで、深読みできるものだなあ。それもたった今、ぽっと思い付いたような事に対して。

　もしリリィが本人の言う通りに改造人間であるなら、その頭脳もやはり人間のものであるはずだ。つまりこれは完璧に、作られたという事を抜きにした実力として、この判断力を生来から持ち合わせている事になる。併せてその記憶力も、その学習力もだ。その上その年齢が僕と同じだというのであれば……いや。目覚めて六年と言うのなら、六歳と云ってしまってもいい。まあその、目覚めた時点での知力がどんなものだっかかはわからないが、いずれにしてもこれは、もう。何と云えば、いいのか。

　……天才。だろうか。

　人は完全を理想とするが、自身がそれに反して不完全であるがゆえに、完全な存在に対して親近感を覚えないと云う。僕も今、そんなような感想をリリィに持ってしまっていた。これはとても、不思議少女に慕われて、などという呑気を言っているどころではない。ギクシャクしないで、果たしてやっていけるのだろうか？

「もう一つ」

　僕のそんな戸惑いに気付いたかどうなのかはわからないが、リリィは話を続けた。

「え……あ。えっと、まだある？」

「二人の間では、あなたで通じます。しかし人前では、私はあなたをどう呼んだらいいですか？」

「あ、そっか。でもそれは、自由でいいんじゃない？」

「そう言われると迷います。あなたはどう呼ばれたいですか？」

「うーん……特に希望とか、無いけど」

「では、あなたは私をリリィと呼びますから、私もあなたをオリヒコと呼びます」

「あー。何か照れるな、それは」

「嫌ですか？」

「嫌なわけじゃ、ないけれども」

「では決まりです、オリヒコ」

　まあ結局、リリィが全部決めてしまったような気はする。

　そんなこんなで片道十五分の通学路を三十分でたどり、学校に到着した。それでも時刻的には一応、普段よりずっとずっと早いわけだけれども。

「うーん。今後、自転車とかあったほうがいいんだろうか。怪我が治るまでこれじゃあ、ちょっと……」

「あるに越した事は無いですね」

「でも……買うお金、無いんだよなあ」

「それなら私が支払いますよ？」

「え？　大丈夫？」

「現金はありませんが、預金はあります。身のまわりの物なども手に入れたいですし、今日の放課後は買い物という事にしませんか？」

　そういえば例の戦闘服、洗う前にリリィはそこから何やら、いろいろ携行品を取り出していた。今それらは僕がリリィへ貸し出したミニバッグに入っているが、きっとその中にキャッシュカードか通帳あたりもあるのだろう。

「いや、それは。僕のお金じゃないから、僕が意見言っても」

「なかなか分別がしっかりしていますね。ただ、それでもあなたの同意は必要です。私がオリヒコの傍から離れられない以上、付き添ってもらわなければいけませんから」

「そっか。じゃあ、そうしよう」

「はい」

　そんな事を話しつつ、玄関に入っていったわけだが。

　……これは？

　僕の下駄箱に、白い封筒。

　土曜日に帰った時に、こんな物は無かった。

「えーと……」

　手に取ってみるが、その封筒には何も書かれていない。下駄箱に置くような手紙だから当然ではあるが、外面を見ただけでは差出人はわからなかった。

　リリィも尋ねてくる。

「これは、ラブレターという物ですか？」

「いや、わからんけれども」

　だったら困る……の、かな？　僕もリリィも。

　とりあえず今、周りに誰も居ないし、開けてみようか。

「私も見ていいですか？　ラブレターでしたら興味があります」

「あ、ちょっと待って。先に僕が」

「わかりました」

　うーん……。リリィの目的は知っているから、そうじゃないという事はもちろんわかるんだけれども。それでもちょっとこれは、野次馬っぽいね？

　ともあれ開封すれば、中から出てきた白い便箋には短く簡潔に、こうあった。

『宮前織彦様　今日の放課後に北棟屋上で　松平瑞穂』

「松平、さん……？」

　今日の、と書かれている。つまりこれは今朝、僕が来る前に投函したという事だ。まだずいぶん早い時間だというのに、一体どうしたんだろう？

「松平さんというのは、あなたを振ったミズホの事ですか？」

「あ、うん。そうだけど」

「それで、何とありましたか？」

「ええと……見ていいよ」

　ちらり。

　リリィへその便箋を向ける。短い文章という事もあり、彼女がそれを読み取るのは一瞬の事だった。

「……これは、私もついて行っていいんでしょうか？」

「どうかなあ……？　振られたばっかだし、まさか告白とかじゃないだろうから、ダメでもない気はするけれども……」

「では、ついて行きます。それより、私は履き物をどうしたらいいですか？」

「え……ああ。向こうに来賓用の下駄箱とスリッパがあるはずだから、それで」

「わかりました」

　リリィがスリッパを取りに行くその間も、僕は便箋から目を離せずに見入っていた。黒いボールペンで書かれたその文字に、特に乱れは無い。

　うーん？

「オリヒコ。私を校長室まで案内してください」

　リリィには一緒に中へと促されたが、相手が相手だ。やはりそんな気にはなれないし、だから廊下で待つと伝え、それを受けたリリィは素直に一人で入室していった。しかし、それは余所者の彼女を単身、学校トップへ突き出すという行為であったわけで、後から考えれば酷い対応だったように思う。

　まあ、後悔は後に回るのが順序というものではあるが、そんなに短くない時間やきもきしながら待っていると、リリィが校長室から出てくる代わりに、廊下から僕の担任が来た。

「居たのか、おはよう」

「おはよう、ございます」

「何というか、宮前がなあ。火遊びはほどほどにしておけよ」

　多分、校長から担任へ内線が入ったのだろうが、それにしても一体どういう話に？

「居たんならちょうどいい。くだんの彼女の机と椅子を、教室まで運んでくれるか？」

「ええと、どこからですか？」

「南棟四階の隅の空き教室にあるから、適当なのを見繕ってくれ」

　げ、遠い。

「まあ俺は、ちょっと話をしてくるわ。宮前は入らないのか？」

「いや、その」

「そうか？　まあいいけどな。なら今のうちに運んどけよ。彼女は俺が教室へ連れて行く」

　そう告げて、校長室に入っていった。

　まあ、席を用意しろという話なら、つまり彼女は教室に居られる事になったのだろう。とりあえずは、よかった。

　南棟四階は本当に遠かったが、それでも何とか比較的きれいそうな机と椅子を選び出し、運ぶ。まだ早い時間なので廊下で誰かとすれ違う事はほとんど無く、そして僕の席はちょうどクラスの窓際の一番後ろだったから、何も考えずにそのさらに後ろへ設置。既に教室に居た男子にそれは何だと問われるも、適当にあしらった。

　松平瑞穂の姿もある。彼女は他の女子と談笑しており、僕がガタゴト机を運んで来た時にはちらりと視線を寄越し、目が合えばちょっと微笑んでみせたが、それっきりだった。まあそれで普通であり、いつもと違う所は無い。そんな彼女の用件とは一体何なのかももちろん気になるが、それよりも重い物を運んだせいか脇腹が何気に痛むわけで。

　はっとした。

　それで思い出した。リリィも足を怪我している。

　どうしているのだろうか？　一人にしてしまったのは、相当まずかったのではないか？

　そういえば下駄箱で、松平瑞穂からの手紙を見てから、リリィに肩を貸すのをすっかり忘れていた。その時、特に歩みを遅らせた覚えも無いし、普通に歩いたはずだ。平気だったのだろうか？

　あまりにも、うっかりとしすぎだった。しかしその不安を煽るように、リリィはなかなかやってこない。時計は見れば既に八時過ぎ、もうしばらくでホームルームの時間となってしまう。

　やっぱり……怪我が？

　どうにも席でじっとしていられなくなって、廊下に出てみた。多くの生徒がたむろしているのが見える。

　リリィの姿は……。

　あった。担任の姿が見える。それに付き従い、普通に歩いてくる。

　思わず駆け寄った。

「リリィ！」

「……オリヒコ」

「だいじょ……」

「しー」

　僕の言葉を、彼女はとっさに僕の唇へ人差し指を当てる事で遮った。

「？」

「何を言いたいのかは大体わかりますが、それは秘密にしておいてください」

「……あー」

　それを見た担任が、釘を刺してきた。

「おいおい、早速イチャイチャするのか？　まあそれも勝手だが、一応ここは勉強する所だからな。建前くらいは通してくれ」

「あ、すみません」

　とりあえず、並んで歩く。

「机はどこに置いた？」

「あ、はい。とりあえず僕の席の後ろあたりに」

「隣に移動だ。確かそこは三田島だったか？　彼には後ろへずれてもらうか」

「え？」

「お前の専属顧問って設定なんだから、隣じゃないとどうにもならんだろ？」

　そんな話になりましたか？

「ホームルームで紹介するが、詳しい話はしない。後はお前らで勝手に話せ」

「はあ」

　詳しい話って、何が伝わってますか？　さっぱりわからん。やっぱり我慢して、一緒に校長室へ入っておくべきだったか。

　そんなこんなで廊下を歩く。当たり前だが既に、注目を浴びている。きわどい私服の金髪美少女がいきなり歩いているわけだから、そこはどうしようも無いだろう。

　そして教室に入れば案の定、騒ぎになった。まあリリィは女の子であるわけで、だから騒いだのは主に男子であるわけだが。

「おおおおお？」

「転校生？」

「おいおいおい、むっちゃ可愛くね？」

「パツキン？」

「輸入物？」

「マジ？」

「お前ら黙れー、席に着けー」

　鶴のひと声で一応、落ち着きはした。それも嵐の前の静けさなんだろうなあ、とは思いつつ僕も席へ向かう。

　壇上の担任は、白墨を取って『Ｌｉｌｙ　Ｗａｔｅｒ』と板書した。

「紹介するぞ。この子は今日からこの教室に来る事になった、リリィ・ウォーター。アメリカの出だが、日本語は普通に大丈夫だから、よろしくやってくれ。はい挨拶」

「リリィ・ウォーターです。よろしくお願いします」

　彼女はぺこりと頭を下げる。

「おおおおおおおおおおおおー」

「黙れ。あー、この子は編入生じゃない。そこのアホ宮前の専属顧問だ。マンツーマンで勉強の監督をする」

　ああ、言っちゃった。

「はああああああああああああああああああああああああああああああああ？」

　大合唱。

「何で宮前だけ？」

「黙れ。俺もよく知らんから訊くな。とにかく特例だ」

「ずりーぞ！」

「意味わかんねー！」

「黙れと言っとろうが！　あー、まあ特例になるくらいだから、この子は相当やる。多分俺よりもできるから、お前らも何かあったら教えてもらえばいい。それで、当然ながらこの子の席は宮前の隣だ。三田島、悪いがお前は後ろへずれろ」

　それでリリィに関して伝える事は全部らしく、ごく小規模な席替えが済むと出欠を取り始め、そして別の連絡事項に入る。もちろんみんな、そんなものには一切身が入っていない。それが終わって担任が退出すれば、僕らの席には即行で人だかりが出来た。

　しかしリリィは、相当可愛いはずの松平瑞穂よりもなお可愛いから、松平瑞穂を超える人気を誇る事になるかと思ったのだが、そうはならなかった。

「えっと、ウォーターさん？」

「リリィと呼んでください」

「じゃあ、リリィさん。こいつの専属とか、どうして？」

　取り囲んできたクラスメイトにそんな事を尋ねられたわけだが、リリィは自分の椅子を僕の椅子に寄せると、僕へしなだれ掛かったのである。

「このような関係ですから」

　……。

「ぎゃああああああああ終わったああああああ！」

「兄貴ぃぃぃぃ！　もう、ダメだっ！」

「待て！　これは孔明の罠だ！」

「神も仏もあるものか！」

「宮前死ね！」

「もげろ！」

　絶望と呪詛の声が上がる。

「ちょっとリリィ？」

「私は、あなた以外の人を相手にするつもりはありません。こうしておいたほうがいいでしょう」

　うーん……嬉しいような、困るような。

　まあ、よく考えれば松平瑞穂の人気は、容姿とは別にある、形容できない魅力による所が大きかったわけで。だから、こんな事が無くても彼女の王座は揺るがなかったのかも知れないが、ふとその彼女を見やれば向こうもこちらを、ちらちらと窺っている。やっぱり、気にはなるらしい。

　その後もなかなか人だかりは去らなかったから、リリィに話が聞けたのは授業中、筆談を経ての事だった。

『どういう話に？』

『取り決めてあった設定をそのまま校長と担任へ伝えてあります』

『校長にはどんな手品を？』

『ある前置きをして後は普通に私へ便宜を図るよう要請しました。顧問の話は私が提案して校長が練りました』

『どんな前置き？』

『松平瑞穂の件を知っていますと』

　脅しか！　黒いよリリィ！　だからどうするつもりか言わなかったのかよ！

　っつーかそれって、話をどう持っていくも何も無いじゃんかよ！　問答無用だよ！

『それも知ってたの？』

『図らずも監視中に。非常に有効と思われそれを超える手段を他に考え付きませんでした。ただそれを伝えた時の校長の反応が気になりました』

『反応って？』

『判断しかねますがただの不倫関係を指摘されたものとは違うような印象を受けました』

『どうしてそう感じたの？』

『どこまでをと訊き返されたからです。ご想像にお任せしますと切り返しておきましたが』

　それは……何だろう？　確かに、校長のような人物が生徒との不倫を指摘されて、その関係の深さを訊き返すというのは、あまり意味を為さない。リリィの言う通り違うとしたら、それは今朝の松平瑞穂からの手紙と、何か関係あるのだろうか。

　まあそれはそれとして、もう一つ気掛かりだった件についても尋ねてみる。

『普通に歩いてたけど足は平気？』

『あまり。しかし怪我が見付かって病院に連れていかれたら困るのでどうにか繕いました』

『一人にしてごめん』

『それは気にしないでください。ただ私も注意し忘れましたが私から極力離れないようにしてください。いつ何があるかわかりませんのでずっと付き添います』

　あ、そっか。僕が気を揉んでいたのと別の意味でまずかったか。

『僕も忘れてた。でもそんなにべったり？』

『トイレの中までは流石に難しいでしょうけどその入口くらいまでは。冷やかされるとは思いますが何とかこらえてください』

『わかった。気が重いけど』

　そんな所だ。リリィは授業を真面目に聞いては要点を逐一僕に伝えてきてくれていたし、休み時間になれば周囲から質問攻めにされていた。他に、何かやり取りする隙は、無かったわけだ。

「おー、やっぱり一緒に来ましたか。妬けますなあ」

　屋上に屋根などあるはずもないから傘を持参しつつ向かうと、既に居た松平瑞穂にはそんな言葉で迎えられる。その笑顔は、やっぱり可愛い。可愛いがしかし……複数の女の子に可愛いとか感じまくってしまう僕は……浮気性、なのかな？　ちょっと、罪悪感。

「おととい私が振ったばっかりなのに、宮前くんがこんなに電光石火だとは思わなかった。びっくりだよ？」

「自分でもびっくりしてるけど……ええと、一緒で大丈夫な用件だった？」

「どうかな？　リリィちゃんは私の事、どの程度ご存知でしょーか？」

「僕の知ってる事はまあ、大体」

「そっか。それなら……あ。あああああ」

「え？」

「なるほどほほう、宮前くん約束破りやがりましたな？」

「あ、いやその……」

「ミズホと呼ばせてください。そしてミズホ、私がそれを知ったのは別経路ですから、オリヒコを咎めないでください」

「別ですと？　誰かなー、それ……」

　その誰かはおそらく実在しないので、この話は終わりにしておく事にした。

「ええと。用件は？」

「あ、うん。実はその……」

　松平瑞穂はどうしてか、まいったというような苦笑いで頭を掻き。

「……既に機を逸しておりまして」

「え？」

「宮前くんなら絶対来ちゃうと思ったから待ってたんだけど、もういいんですわ。ごめんね？　でも別に、おとといの意趣返しってわけじゃあないよ？」

「どういう事？」

「お願いがあったんだけど、もうそれは絶対ダメだから。でも、せっかく来てもらうんだし報告だけしとこうかな？　って、考え直してたとこ」

「報告？」

「うん。あ、一応、絶対ナイショの話ね？　リリィちゃんもよろしく」

「はい、わかりました」

「内緒って……何の話なの？」

「ええとね。……ええと……んー」

　そこで途切れ、松平瑞穂は弱った様子で笑い、次の言葉をなかなか発しなかった。

「えーと、言いにくいなら……」

「ううん、ごめんね？　凄い言いにくいけど、宮前くんには知ってて欲しいから。ちょっと待ってね？」

「そう？」

　これから彼女が何を言うのか、まったく予想が付かない。先日の告白以上の話は無いように思うが、雨が傘打つ音を聴きながらジリジリ待つと、三分ほど経っただろうか。やおら彼女は静かに目を閉じると、深呼吸を行った。

「ふう……よし、言うぞ。言っちゃいますよ？」

「あ、うん、どうぞ」

　そして目を開き。

　例によって最高の微笑で。

　告げる。

「校長とは破局しました。でも私にはお金が凄い必要なので、援助交際を始めます。以上」

　……。

「え」

「二度は言えないよ？」

「いや、聞いてたけどさ……校長と、破局？」

「うん、残念ながら。っていっても実は、全然残念じゃないんだけども」

　心底ぞっこんだと言っていたのに、全然残念じゃない？　しかもその上……援助交際、だって？　どうして、そんな……？

　確かに今見せている微笑からは残念さがまったく窺えないが、そもそもその微笑がおかしい。さっきの告白の内容と、まったくそぐわない。わけが、わからなかった。

「説明は……貰えるのかな？」

「いいよ？　どこから話そうかな……まあ、最初からだよね？　んー、んっんっん」

　そう考えるそぶりを見せるも、大まかには言う事は既に決まっていたらしい。松平瑞穂はほとんど詰まる事も無く、語った。

「ええとね。うちの親、会社やってて。いろいろ手広く取引してたんだけど、中には真っ当でない取引もあったらしくてね。それが元で、会社が転ぶような事態になっちゃったらしいんだ」

「え。えええええ」

「それが、高校に入学してすぐの事だったんだけど。もう飛ぶの無理だから、被害がなるべく少ないような不時着をさせるように、とか何とかね。そんな話になっちゃってて。学校のみんなは私の事、いいとこのお嬢様だって信じてるけど、実は火の車どころか隕石降るくらいの騒ぎなんだ」

「そう、だったんだ……」

「びっくりしたかな？　ごめんね？　意外と会社の借金って、社長が何とかする義務無いらしいんだけど、裏取引だったからね。会社でどうにもできない分は全部うちに回っちゃって、もう私の学費どころじゃなくなっちゃって」

「……じゃあ、どうなるの？　松平さん……」

「うん。今年分は全納してるけど来年から見通しが立たないからって、それでも私をせめて高校三年間くらい通わせたいからって、親、校長の所に陳情に行ったんだ。そしたら校長……場所を改めて、私と二人きりで話をさせろとか言い出したんだな、これが」

「え」

　ちょっと待て。何だそれ。

「それって、つまり」

「はい、そういう事です」

「……」

　そんな、事が。そんな、事が。

　つまり彼女は……無理矢理？

「私は絶対に学校辞めたくなかったから、親振り切って、それなりに覚悟もして、行ったんだけど、でもねえ……あんな事言われた時はもう流石に、どうしようかと思ったよ？」

「……あんな、事？」

「単純では、あるんだ。こんな関係はいけない、でも君がする事なら受け入れる。そんな言葉をひたすら、繰り返すだけ」

「……どういう意味？」

「うん。私も最初は、一体何わけのわからない事を言ってるんだ、って思ってたんだけどね……そのうち意味が、わかっちゃって」

「それは？」

「……ご自分でどうぞ、って事」

「！　……」

　そんなの、ありか？　あんまり、卑劣すぎないか？

「そんな事しなきゃいけないのかって、そのうち泣いちゃったりもしたけれど、見逃してなんかくれなくて……。結局、私に選択肢は無かったんだよね」

「……」

「脱がせたのは私。上に乗ったのも私。そんな風に、私の……純潔は、散らされちゃいました。いっそ無理矢理だったほうが……ずっと、よかったのかも……ね」

「……そんな……」

　自分の意中でもない相手に、生まれ出てから一つしか持ち合わせていない大切なものを、自ら捧げさせられてしまう……？　そんなものは、それは、どんな屈辱だったか？　どれほどの無念だったか？

　察するに余りあるが、そんな事が窺えないほどの微笑を保ちつつ、彼女は続けた。

「もちろんそんな事するの、もの凄い嫌だったよ？　それは、今も変わらない。……変わるわけがない」

「え……じゃあ」

「うん。ぞっこんだの何だの、もちろん演技。指示されてただけ。いや、指示って云うのかどうかもわからないかな？　どうしてもという時は、君が私の事を愛している事は言ってしまって構わないよ。そんなセリフだった」

「……」

「嘘ついてごめんね？　ちなみに心配させたくないから、親にも同じ嘘ついたよ？　だから頼れる人、全然居なくて……そんなんだからおととい、宮前くんにあんな事言われた日には何もかも投げ出して、なびいてしまおうかと本気で悩まされました。恨みますよ？」

「あ……ごめん……」

「ううん。悩まされたのは本当だけど、恨みますは冗談。ごめんね？」

「……」

　いや、それでは済まなくて。彼女に言葉で伝えたわけじゃあないけれど、それでも僕は心の中で、僕に対する彼女の態度は酷いと、そう思ってしまったわけで。こんな事だとは、知らなくて。

　表面だけで判断してはいけない。このあまりにも有名な言を、こんなにも痛烈に思い知らされるとは思わなくて。

「それで、校長と破局になった理由だけど。ちょうどその、おとといだよ。私は知ってしまったわけだ。……その、元凶になった取引。校長が仕組んだものだった、って事」

　……校長、人でなしじゃねーかよ！　ただの役得で図に乗っただけならまだしも……。

　こんな事は、初めてだ。誰かが憎いと、こんなに強く思った事なんか。死んでしまえと、思った事なんか。いいや自分の手でと、思った事なんか。

　……はらわたが煮えくり返るとは、こういう事なのかも知れない。実際にお腹のあたりで、そんな感じがする。

「もちろんそれは、真っ当な取引じゃなかったわけだから、親に言ってもどうにもならない。私だって、知らん振りをするのが賢いやりかただとはわかってた。でも、どうしても我慢できなくて……」

「校長に、言ったの？」

「うん、詰め寄っちゃったんだ。そしたら……こう言われちゃってね。関係を続けるかどうかは任せる、ただし場合によっては思い出が流れ出たりするかも知れない、って」

「……思い出？　が、流れ出る？」

「私も全然気付かなかったんだけど、多分そういう事してる時に録画でもしてたんだと思う。それを、ネットかどこかでばら撒くって意味かな」

　……。

　これは、ダメだろ？

　うん、ダメだ。そうだよね。

　よし。

「え。宮前くんちょっと……どこ行くの？　まだ話は……」

「ちょっと校長室行ってくる」

「……え」

「人殴った事なんて無いから、うまくできるかわからないけど」

「……待った！　それまずいから！　宮前くん待って！　ダメ！」

　余程慌てたらしい松平瑞穂は、たたえていた微笑も放り出して必死に僕を引き止めた。

「ダメだから……やめて？　お願い」

　手首を掴まれてしまったから、仕方なく振り返る。

「だって！　だって……それじゃあ、松平さんがあんまり……」

「いいの。いいんだ、もう……それより、そんな事で宮前くんが退学とかになったら、私そのほうがずっとずっと嫌だから。絶対やめてちょうだい？　ね？　それから、告発とかもダメだよ？　後ろ暗い取引をしたうちの親も、芋づる式で引っ掛かるから」

「……」

　うーん、そう言われてしまうと……。

　全然納得はできないけれど、一応の制止を見せた僕に平心を取り戻したらしい松平瑞穂は、その顔にも微笑を取り戻し、続けた。

「とにかく、そんな事言われちゃって私もう、完全に頭に来ちゃってね。好きにすればいい！　って思わずタンカ切っちゃったんだ。校長が本当にばら撒きをしてるかどうかは知らないけど、そういうわけでもう手遅れなんですわ。あはは、馬鹿だよね私……」

「……」

「だけど、一矢は報いたから。去り際に、思いっきり引っぱたいてやったよ。どう？　やったでしょ私。だから校長の話は、これでおしまい」

「おしまいって、そんな……」

「うん、おしまい。……って事にしておいてね？　もう……思い出し、たくもない……し」

「……」

　リリィが感じた違和感については納得がいった。むしろ、納得いきすぎだ。

　これは不倫暴露どころの話ではないが、それにしてもこんなに酷すぎる話があったものか？　もはや警察に届け出るべきレベルの事案とは思うけどしかし、セカンドレイプという言葉もあるくらいだから、本人がおしまいと言っている以上はもうどうしようも無いわけで……。

　……。

　悔しい。悔しいよ……。

「まあそれでも実際問題として、お金が必要なわけで。それも、恐ろしく大量に必要で。普通のバイトとかじゃもう、全然足りない。最終的に体を売る事しか思い付かなかったんだけど……」

「……」

　そんな事は、しちゃダメだ。

　そう言うのは、もちろん簡単だ。しかしそれで、何かが解決するだろうか。そう言って、彼女は聞き入れるだろうか。

「でも、フーゾクとかエロビデオとかって意外と厳しくて、本当に十八以上じゃないと使ってくれないみたいなんだよね。探せばあるのかも知れないけど、少なくともネットにそういう情報は無いし。それじゃあ摘発されちゃうもんね？　だから選択肢として、援助交際しか残らなかったわけです」

「……」

「えっと、説明はこれで全部、かな？」

「……松平さん……」

「ごめんね？」

「……そこでまた何で、謝罪？」

「うん……。知ってて欲しいとは思ったけど、やっぱり重たすぎるかな、って……本っ当に、ごめんね？　私、我が儘すぎるよね……」

　その重たい話を、彼女はここまで、微笑で通してみせたのだった。そしてそれがむしろ、だからこそ……あんまり、可哀相がすぎた。

「あのさ」

「何でしょか？」

「さっき言ってた、お願いってやつ。何だったの？」

「いや、だからそれは……もういいって」

「ダメ。僕は松平さんに、何かしてあげたい。そうしないと、もう僕の気が済まない」

「でも……でも」

「もし僕にできない事でも、言うだけならタダだし。言ってみてよ」

「それは……違うかな？」

「え？」

「言うだけで、代償を払わなきゃいけない事も……あるよ？　だから、言えない」

「……」

　そんな、事が、あるものなのだろうか。

「ごめんね？　今日は、来てくれて、聞いてくれて、ありがと。リリィちゃんも、いきなりこんな話でごめんね？　……じゃあ」

「あ……」

　松平瑞穂が、行ってしまう。引き止めないと……早く、早く。

　でも、何を言えば？

　頭が空転を始めた。

　その時、天の助けのようにリリィが口を開く。

「ミズホ、待ってください」

「……え」

「必死に隠している所を申し訳無いですが、私にはそれが何なのか見当が付きます。というより、一つしか思い当たりません」

「え。えええええ。わかっちゃい、ましたか……」

「その事で私もお願いがあります。その話を是非、オリヒコへ打ち明けてくれませんか？」

　松平瑞穂が、完璧に想定の範囲外、というような顔をした。

「……リリィちゃんが、それを言うの？」

　何だ何だ何だ？

「リリィ、どういう事？」

「オリヒコ。あなたにはわかりませんか？」

「ごめん、全然……」

「いいですか。私の存在を知る前に出した、呼び出しの手紙。私の存在を知った後に、撤回した用件。つまりそれは、私に対して気兼ねするような内容という事です」

「あ。あ。リリィちゃん、ちょっと」

　リリィは説明をし始め、松平瑞穂はオタオタとし始める。

「次に、あなたには知っていて欲しかった今の話。あなたへなびいてしまおうかと悩んだのは本当。あなたが退学になるのは嫌。つまり、あなたへそれなりの好意を抱いているのは、もはや動かしようがありません」

「うああああ、リリィちゃんストップ！」

「そして、援助交際を始める事を告白した上で、それに臨む前にあなたへ要求したい事。極めて限定されると思いませんか？」

「……もうやめて……」

「では自分で、言ってください」

「言えないよお！」

「曲げて、言ってください」

「無理！」

「それでも、言ってください」

「えうう……」

　リリィ……相変わらず、容赦無いな。

　……でも。

「ごめん……全然わからない」

「鈍いですね、あなたは」

「わからなくていいから！」

　松平瑞穂がもう逃げ出したいと全身で訴えるような気配を見せれば、リリィは彼女へと向き直って絶対に逃がすまいとばかりの気迫で見詰める。

「繰り返しますが、これは私のお願いなんです。言ってくれませんか？」

「どうして？　どうしてリリィちゃんがそんな事言うの？」

　言われた松平瑞穂は、もうわけがわからないといった感じの様子だった、が……。

「その通りになって欲しいからです」

「何で？　意味がわからないよ！」

「私が、普通ではないからです」

「……え……？」

　まあこんな対応されれば、戸惑うしか無いだろう。

「リリィちゃん、それはちょっと、本当に意味が……」

「私とオリヒコは、既に浅からぬ関係にあります」

「……えー、あー……うん、そうみたい、だね……」

「でも、私は普通ではないので、私ではオリヒコへ与えてあげられないものがあります。それをあなたに、代わりにオリヒコへ与えてあげて欲しい。そう願うものです」

「……」

　これを聞いた松平瑞穂は少し、悩み入った。

「……うーん……どう普通じゃないのかはよくわからないけど、リリィちゃんの言いたい事は何となく、わかった……と、思う。でもねえ……やっぱり、言えないよ？」

「では私が、代わりに言ってしまいますが」

「やめて！」

「でしたら。お願いします」

「……」

　松平瑞穂は完全に逃げ道を断たれ、もうどうしていいかわからないといった体だ。ちょっと緩衝を入れてみようか。

「いやいやリリィ。松平さん。そんなに言いにくい事なら、言わなくても。せめて言えるようになるまで、時間を置くとか……」

「それは無理だと思います。おそらく今を逃せば、もう機会は無い。そうですね？」

「そこまでお見通し、ですか……」

　……緩衝は失敗したらしい。

　しかし一体、二人は何を話しているのだろうか。

「言わないでいて、後悔しませんか？」

　うつむいた松平瑞穂は、泣き出しそうですらあった。しかしすぐ、気丈に顔を上げる。

「わかりました……言いますよ。でもリリィちゃん、いいの？　恨まない？」

「私のほうが、そうしてくださいとお願いしています」

「そっか。ごめんね？　……えっと、じゃあ……宮前くん」

　松平瑞穂が、僕を向き直る。

「あ、うん。何かな？」

「……その、ええと……一回、だけ」

「……一回？」

「うん、一回だけ……お願い、したい……んだけど……」

「何を？」

「私と……」

「うん」

「……して……ください」

「え……」

「その……え……ち……」

「ごめん、聞こえな」

「エッチしてください！」

「……え」

「……」

「え、え……えええええええええええええええええ？」

　何、ですか？

「……」

　松平瑞穂はもう、目を閉じ、うつむき、顔を真っ赤にし、固まってしまった。

「あの……松平、さん？」

「……」

　応答は、無い。

「限界ですか？　後は私が言いますか？」

　リリィが助け舟を出すと、松平瑞穂は無言のまま小さく頷く。

「リリィ……どういう事？」

「オリヒコ。つまりあなたは、彼女を口説き落としてしまったんですよ。おととい告白をした時点で」

「ええ？　でも、振られたけど……」

「状況が違います。その時はまだ、校長との関係があった。だからあなたの事は、断るしか方法が無かった。でも今となっては、その障害は無い。そういう事です」

「でも……いきなり、え、エッチとか……そんな……」

「それは、援助交際を始めるという点に関係すると考えます。そうですね？」

　松平瑞穂はまた、小さく頷いた。

「つまり？」

「彼女は気丈に振る舞っています。しかし本当は、校長にもてあそばれた結果、深く傷付いてしまっている。そんな状態で援助交際という行為に身を落として、汚れていくのは耐えられそうになかった。そこで彼女はその前に、あなたと愛を築いてそれを支えにしようと考えた。けれどお金が必要なのはかなり逼迫していて、あなたとじっくり関係を深めるための時間があまりに足りなかった。だから早急に結ばれるためには、セックスという手段をいきなり提示せざるを得なかった。……そんな風に私は想像しますが、当たっていますか？」

　松平瑞穂はゆっくり三回ほど、頷く。

　うーん……。

　リリィは意外に、というか僕なんかよりもずっとずっと、機微というものが読めるらしい。それもかなり、正確に。リリィは愛を知らないって言っているけど、今のは感情とか抜きにして論理的に推察できると、そういう事なんだろうか？　頭の悪い僕にはよくわからず……。っつーか。僕の機微は全然読んでくれないけど？

　うーん……。

　とか考えているうちに松平瑞穂が、とうとう声を押し殺しては泣き出してしまった。

「あ、松平さん……」

「オリヒコ。彼女を抱いてください」

「あ……いや……でも」

「あなたが彼女を口説き落としたんです。責任は持ってあげてください」

「それは……そうだけど」

「何か不都合ありますか？」

「でも、それじゃ……リリィは？」

「私は、見学させてもらいます」

「……は？」

　今度は一体何を言い出すの？

「私は、本当に愛し愛される二人の、その様子をじかに見て学びたいと思います。ダメですか？」

　はあ……なるほど……。

　しかし理由はどうあれ、あんまり悪趣味すぎるのでは？

「それはダメだろう……」

「しかし私は、どうしても目にしたいんです」

「それはわかるけど……恥ずかしいでしょ？」

「しかしあなたは私へ、最大限の努力を約束しました。その履行を求めたいと思います」

「いやいやいやいやいや！　それ僕だけならまだしも、松平さんがダメでしょ！」

「そうですか？　そうしてもらえるように、あなたからお願いする事はできませんか？」

「無理に決まってるでしょうが！」

　そこに松平瑞穂が、目を拭きながら口をはさんだ。

「ううん……いいよ？」

「え……えええええ？　松平さん？」

　今度はこっちが一体何を言い出すの？

「宮前くんもだけど、リリィちゃんも。何でこんなに、私の気持ち。わかってくれるのかなって……嬉しいよ？　すっごく。だから……」

　いや、それはそうなのかも知れないけど。わかるけど。

　何か凄く、変な話になってない？

「ま、松平さん……」

「それに……リリィちゃん、宮前くんのカノジョだもんね？　それくらいの権利、あると思うよ？」

「いや、リリィは彼女っていうか……何ていうか」

　僕がそう言うと、松平瑞穂は泣き顔もどこへやら、ちょっと呆れるような声で言った。

「あ……あー何かこの人、こんな事言っちゃってますよ？　リリィさんシメますか？」

「いいえ、それで正しいですよ。オリヒコは私と肉体関係を結びましたが、今の所それだけです。それ以上の関係ではありません」

「あ……エッチ、もうしてるんだ？　本当に電光石火だね？　宮前くん」

「あ……それは……いや」

「しかも、愛の無いエッチですか？　なるほどキミに、エロ大魔神の称号を授けよう」

　エロ大魔神……何それ……。何だかよくわからないけれど、凄くみっともないよ……。返上できないかな……。

「善は急げといいますから、早速実行に移しましょう。場所はどこにしますか？」

　善なの？　ねえ。これ、善なの？　ついて行けないよ、もう。

「あるいは、人も来ませんし……ここで」

「リリィいいい！」

　そんなに早く見たいのかよ！　ついて行けないっちゅーに！

「あー……あー。それなんだけどね。私、恥ずかしながら、きちんとした場所じゃないとダメなんですわ……ごめんね？」

「え……きちんとした、場所？」

「その、えっと……ラブホ」

「え。えええええ？」

　ラブホテルって……。それはハードルが、高いぞ？　かなり。

「その理由は、いたしてみればおわかりになると思うので、そういう事で……ごめんね？」

「……」

「って、そういえば、まだお返事いただいてないですよ？　宮前くん」

「……返事？」

「あー。じゃあ、改めて言いますか。私と、エッチしてください。お願いします。……あ、何かすんなり言えちゃった。……えっと、お返事、ください」

　夢が、空想が、現実になっている。

　どうして？　こんな風に、物事が運んでしまって、いいのだろうか？

「……ダメ、なんですか？」

「オリヒコ！　あなたの想い人でしょう。何が不満ですか？」

「……急すぎて」

「時間が無い、と言いました。そんな迷いは捨ててください」

「……」

「オリヒコ」

　……。

　頷くしか、無いんだよな？

　頷いて、いいんだよな？

「うん……じゃあ」

「え。それはＯＫしてくれたって事かな？　宮前くん」

「うん。松平さん。こんな僕でよければ」

「ありがとう！　ありがとう。……ごめんね？」

「何の謝罪？　それ」

「何でしょね？　あはは。ごめんね？　……場所、私の知ってるラブホで、いいかな？　ってまあ、校長と行った所なんだけども……」

「ラブホテルなんてわからないから」

「決まりだね。制服じゃ入れないんで、一旦帰って着替えてから駅集合で」

　フリーズ。

「ダイジョーブ、怖くなーい」

　入口の前で往生した僕を、松平瑞穂はそんな風に茶化した。

　そこは電車で二駅行って、繁華街から少し外れた所にあるラブホテル。いや、高校生だし。もちろん、入るのなんか初めてだし。しかも、女の子は二人居るし。固まるなというほうが無理だろう？

「もう。これじゃあ私が、エッチに積極的な女の子みたいになっちゃうでしょ？」

「ミズホ、その辺で。オリヒコも性欲は強いみたいですが、それでも私の扱われかたを思い返す限り、恐るべき奥手と断じざるを得ません。あなたがリードしてください」

「あ……さようでございますか……。えっと、じゃあ」

　松平瑞穂は、僕の手を取った。

「……あ」

「ごめんね？　行こ？」

　手が、引かれる。拒絶するわけにもいかない。ついて行くしか無かった。

　後から振り返れば多分、彼女は少しおめかししていたんだと思う。ただ、それを見ている余裕とかなくて、どんな服装だったかチェックする事も、それを誉める事もできていなかった。あーあ、未熟だなあ……。

「今日は、私の我が儘だから。私が払います」

「あ……でも」

「大丈夫。まだそれくらいの余裕、あるよ？　それよりも、宮前くんのほうがキビシイ事、私、知ってるから」

　うあー……何かもう、情け無さすぎる……。

　中に入ったが、無人のようだ。まあ、そんな感じなのは風の便りに聞いた事はある。

「一番やっすい部屋でいいよね？　オプションも要らないかな？」

「オプション？」

「エッチな道具とかコスプレの衣装とか、あとエロビデオ？　それから録音録画の機材もあったりしますよ？」

　……アブノーマルすぐる。

「まったく不要ですハイ」

「だよね？　あはは」

　フロントのパネルのようなものを操作した後、松平瑞穂はこう付け加えた。

「でも密かに、録画は興味あったりした？」

「……無いよ！」

「そっか。録音のほうだったか」

「勘弁してください……」

　ねえ、松平さんっていじめっ子だったの？　ねえ、だったの？

「あはは、ごめんね？　そっか何々のほうだったか、ってセリフ。ちょっと言ってみたかったんだ。……えっと、二階だ、２０１。行こ？」

　エレベータは、ある。しかし、曲がりなりにもホテルを名乗っているくせに、それは何故か最上階で停止していたから、階段を行く事になった。まあ二階ならすぐではあるが、その途中で僕に支えられながら階段を登るリリィが、割り込んでくる。

「私は、録画は欲しいと思います」

「ほほう。リリィちゃんもなかなか……じゃ、追加する？」

「リリィ……それ僕も映るだろうから、やめてくれない？」

「それならやっぱ録音は？　私の声しか入らないだろうし、記念にどうっすか？　旦那」

「いや……だから……」

　まあ本音を言えば録画も録音も、喉から手とか、触手とか、もっと凄いモノまで出てきてしまうほど、超絶欲しいのだけれど……それを言ったらすさまじい勢いで、人生が終了してしまう。イタズラっぽい表情をして言っているのだから、もちろん松平瑞穂も本気でサジェストしているわけではないはずだろうし。

「着きました！」

　２０１号室のドアを、三人で通過する。

「あ……しまった。安い部屋だとお風呂、狭いみたい。一緒に入れないけど、ごめんね？」

　くそうラブホテル、誘惑だらけじゃないか！

「宮前くんが先にお風呂、使ってください」

「うん」

　脱衣所で服を脱いで、入ってみればバスタブが無かった。アパートの部屋を思い出してしまう。……あの狭い所に、僕とリリィは二人で詰めていたんだよな。うーん。

　しかし普通に考えたら、土地に余程困っていない限り、安い部屋だからといって風呂をわざと狭く設計する必要は無い。階層を増やして、間取りが似通う事になるのなら、なおさらだ。つまり、エントリー料金を安価に設定して広く集客しつつ、リピーターからはさらに儲けようという計算があるのだろう。

　憎い、憎すぎるぞラブホテル！

　……カモにされるかも知れない。できるだけ来ないようにしよう。

　シャワーを適当な所で切り上げる。

　脱衣所に用意されているバスローブを羽織ってみるがコレ、否応無く気分が出るなあ。

「終わりました」

「じゃ、私入ります。待っててね？」

　そう言い残して、松平瑞穂はバスルームに入っていった。

　ふと見やればリリィは、ダブルベッドの傍でただ、立っている。そういえばこの部屋、椅子とか無いのだけれども。

「リリィ。ベッドに座ったら？」

「邪魔になります」

「でも、足……」

「耐えます」

「……ダメだよそれは」

　リリィに歩み寄ると、僕は彼女を無理矢理ベッドへ腰掛けさせた。

「これだけ大きなベッドなら、邪魔になんかならないでしょ？」

「オリヒコ。今、どんな気持ちですか？」

「え……」

「教えてください」

　少し考えてしまう。

「うーん……こんなとこ、初めてだし。緊張、するかな？」

「そうではありません。彼女に対してどう感じますか？」

　また少し、考えてしまう。

「やっぱり緊張するよ。憧れの人だったから」

「緊張の他には？」

「えーと……そうだね、不安とか、期待とか？」

「愛おしい。そのようには感じませんか？」

「あ、うん。それはもちろん」

「その気持ちを、噛み砕いて説明できますか？」

　あ、そうか。リリィはそれを知りたがっているんだよな。

　でも……。

「ごめん。それはちょっと、どう云ったらいいか……」

「そうですか。普段は表現するのが難しい事でも、実際に強く感じる瞬間であればあるいは、と考えたんですが」

「そっか。ごめん」

「いいえ」

「リリィは？」

「はい？」

「今、どんな気持ち？」

　そんな軽い気持ちで出た僕の質問に、特に深い意味は無かったのだけれど。

「……」

　あれ。黙ってしまった。

「訊いちゃ、いけなかったかな？」

「いいえ……私は少し、成長を見たかも知れません」

「え？」

「ただ、これがいい事なのかどうかは判断しかねます。それは、学校の屋上で彼女の告白を聞いたあたりから、ずっとです。彼女が羨ましくて、憧らしくて、妬ましくて。どうにもやり切れません。私はどうやら、嫉妬というものを理解してしまったようです」

「……あ……」

　それは……何と言ってあげれば、いいのか。

「オリヒコ……私は、どうしたら。今すぐ、この場を辞するべきなんでしょうか？」

「それは……リリィが、この後の事を見たいかどうかで決めれば、いいんじゃないかな？」

「見たい見たくないで云えば、見たいと考えます。ただ、その事に、云いようのない不安と、とてつもない恐怖を感じます」

「……え」

「こんな事は、初めてです。不安と恐怖は、もともと理解できます。でも……こんなのは、どんな敵と対峙した時にも、感じた事はありません。こんな……こんなの……オリヒコ。私はどうしたら？　オリヒコ、私はどうしたら？」

「リ、リリィ？」

「オリヒコ！　わ、私……どうしたら！」

「リリィ！」

　もうどうしようも、無い。

　何も掛けるべき言葉が、無い。

　……抱き締めるしか、無かった。

「オリ、ヒコ……」

「……」

「……わた……し……」

「……」

「……」

　やがてリリィも、抱き返してくる。

「……」

「……」

「待ち切れません、でした？」

　まあ時間的にそろそろだったかも知れないが、松平瑞穂が戻ってきたのはこんなタイミングだった。

「あ、ごめん松平さん……ちょっと時間、ください」

「うーん……はい、待ちます。でも隣、失礼しますよ？」

　そんな事をつぶやいて、松平瑞穂はリリィとは反対側の僕の隣に、腰掛けた。

　彼女には悪い事をしてしまったが、今はそれよりもリリィのほうだ。

「……」

　そういえば。いや、これは一体？

　リリィは言った。確か言ったはずだ。

　抱かれても安らぎは感じられない、と。

　さっき取り乱していたリリィは今、落ち着いてしまっている。

　どうしてだろうか。何か、リリィが落ち着きを取り戻せる要素が、どこかにあっただろうか。

「……リリィ？」

　ばっ。

　そのリリィは急に、僕を突き飛ばすようにして離れた。

「リリィ？」

「ごめんなさい。大丈夫です」

「えーと？　リリィちゃんどうかしたのかな？」

「何でもありません。どうぞ」

　どうぞって、ちょっと。

「いやあ……どうぞと言われて、はいわかりましたって始めるものでもないんだけども」

「そうですか。私はやっぱり、中座したほうがいいですか？」

「ううん、そんな事はしなくて大丈夫だよ？　見られちゃうのは恥ずかしいけど、三人目の割増料金って結構高いし。無駄にするのもね？」

「そうですか」

　割増料金。そんなものが……あるのか！　よろしい、ならば戦争だ！　聞けえ全人類、真悪はラブホテルだ！　ラブホテルを敵とせよ！

　どどーん！　どんどんどーん！

「じゃ、宮前くん……とりあえず、お見合いから始めますか？」

「あ、はい」

　リリィの見守る中、二人してベッドの中央に寄った。

　松平瑞穂も、バスローブである。

「あはは。照れくさいね？」

「そう、だね」

「どういう風に、いたしますか？」

「どういう、って？」

「えっとまあ、どっちがリードするとか。それから……ちょっと恥ずかしいけど、オーラルな事もしてあげられるよ？」

「オーラル？　って？」

「いやそれは、そのー……お口で」

「……あーいや、えっと、そんな……その……」

「あはは。じゃあやっぱり、私がリードって事で」

「ごめん……」

「いいよ？　私、好きな人にはどんな事でもしてあげたい」

「……」

　凄いセリフを今聞いた。

　何なのこれ？　夢なのこれ？

　今も言われたが、しかしそれはちょっと疑問に感じていた事だった。それをそのまま、目の前の彼女へぶつけてみる。

「あのさ、いまさらなんだけど……」

「えっと。怖くなっちゃった？」

「あ、いや、そうじゃなくて。松平さんって僕の事、そんなに……？」

「ん……あー。そっか。あんまり急だって思うわけですね？　確かにまあ、いくら見事に口説かれたとしても、それがエッチする二日前の話ってだけだったら、流石に私もどうかと思うよ？」

「……え？」

　どうも最近、意味がすんなり入ってこないセリフをたくさん聞かされている気がする。

「もちろん決定的だったのはおとといの告白だよ？　私、凄い嬉しかった。なのに、はいって言えないのがもの凄い悲しかったんだけど……」

「……あ、それは……本当にごめん……」

「ううん。それはもう、いいんだ。それよりもね。憶えてる？　入学式の次の日」

「……え」

　その日にあった彼女との接点と言えば、これしか無い。

「えっと、糸くず……」

「うんそれ！　……憶えてたんだね」

　いやそれはもう、鮮明に。

　けど、どうして松平さんがそんな事を？　彼女にとってはほんの些細な事だったと思っていたのだが。

「……ごめんね？」

「いやあの……何でそこで謝罪なの？」

「うん。あの時別に、糸くずなんてもん……付いてなかったんですわ」

　……はい？

「もちろん、あの時から今みたいに本格的に好きだったわけじゃないけど、まあちょっといいかな、とは思いまして。要するに……単にツバ付けてただけなんです、あれ」

　……はい？

「それ繰り返して気を引こうかな、とか馬鹿みたいな作戦だったんだけど。今にして思えば、もしそのすぐ後に校長がちょっかい出してきてなかったら、私も宮前くんとおんなじやりかたで告ってたかも知れないね？　あはは」

　……はい？

「そんなわけですから宮前くん……ねえ宮前くん」

　……はい？

「ちょっと。宮前くん？」

　……はい？

「きーこーえーてーまーすーかー？」

「……あ、え、あ」

「あ、戻ってきた。そんなわけですから宮前くん、これからあなたとエッチする女の子は、別に自分に嘘をついてるわけでも、気持ちから背伸びしてるわけでもないんだよ？　あなたに抱き締められたい。愛されたい。そう、ただ純粋にそう思ってるんだよ？」

「……松平さん……」

　その……これは、何と言ったらいいのか……。

「あはは。何て言ったらいいかわからない、って顔してますな。あはは、まあそういうわけなんで、大丈夫。大丈夫ですよ？　何も心配しないで……ね？」

「……」

　えっと、何？　僕って……とんだラッキーボーイだったの？

　いやまあ、それはそれとして、彼女が本当に僕の事が好きなんだとわかったのは、もちろん嬉しい。しかしそのせいで、僕は彼女があまりまともに見れなくなってしまい、ちょっとオロオロしてしまった。

　すると……。

「あー。でもこれ……すごくドキドキする……あ、あれ？　私……やだ、嘘……私？」

　彼女もまた落ち付かなげに、見合っていた顔を少しそらしたりしたのである。

「え、松平さん？」

「あ、あ、あ……大丈夫、かな……わ、わたくし、きききき緊張してまいりました！」

「……大丈夫……？」

「あ、あああ……うあー……校長相手だと、かえって何も考えないですんなり始めちゃってたけど……好きな人相手だとこんなに……ああ、こんなに踏み出しづらいんだ……私、初めてじゃないのに初めて……みたい、だよ……？」

「松平さん……」

「私……ちゃんとリード、できない、かも……ご、ごめんね？　えっと……ごめんね？」

「いや……いいけど……」

「うん……ごめんね？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……えっと。うん」

　お見合いの末、そんな合図を彼女は出した。

　そのような流れで僕は、ごく短期間のうちに二人目を経験する運びになったわけだけれど。ただそれは、リリィとの時とはまったく違う体験となった。

　松平瑞穂は、僕が彼女にするどんな事に対しても、まるで水に放り込んだナトリウム塊のように激しく反応し、その体はちょうど釣り上げられたばかりの魚のように大きく踊り跳ねた。また、そんな状態にありながら狂おしいほどの抱擁を見せ、絶対に離れようとしなかった。そして彼女は何度も、何度も何度も、僕の名前を呼んだ。それらは尋常でない興奮と、愛欲をかき立てられるものだった。

　小柄で痩身である彼女の肉体は、リリィと比べてしまうと大分、実りに乏しいと云わざるを得ない。それでも、そんな事は関係無かった。普通の女の子とは、これほどまでのものだったか。そんな感想を持つ事を余儀無くされ、それは少し、と云うにはもう少しだけ強く、リリィに対しての申し訳無さを感じさせられた。

「……」

「……」

「……ありがとう。凄く、素敵、だったよ？　宮前くん……」

「……松平さん、も……」

「好きな人が相手だと、こんなに違うんだなあ、って……」

「……」

「ラップが出てきた時には、ちょっとびっくりしたけど……大丈夫？　それ……」

「まあ……何とか」

「……そっか」

「……」

「……ふにゅ……」

　まだ二人は裸のままだ。やんわりしがみついてくる松平瑞穂の肌は、やはり心地がよい。

「ところで……私がラブホじゃないとダメな理由……おわかりいただけました、かな？」

「ちょっと……びっくり、したかな」

　それは、声である。松平瑞穂の口からは、とんでもない音量の声がこぼれ出したのだ。こういった時に女性が声を抑えるのは至難という話ではあるが、しかし彼女のそれはそんな次元ではない。確かにこれでは、下手な場所だと嫌でも広範囲に響き渡ってしまう。

「でも、エッチな女の子だなんて思わないでね？　出したくて出してるわけじゃあ、なくて……でもどうやっても、抑えられなくて……それにあれ、凄い恥ずかしいんだよ？」

「うん……」

　そこへ、ずっと傍観していたリリィが割り込んできた。

「ミズホ。一つ訊いてもいいですか？」

「え。あ。えっとリリィちゃん、なあに？」

「実はさっき、私はとても驚いたんです。口を使って、という発想がまったくありませんでしたから。でも、そういう行為こそ、恥ずかしく感じはしないものなんですか？」

「……あー……えー……あー……」

　リリィ……。

　突っ込まないでよ、そういうのは。松平さん大変だから。

「それはまあ……恥ずかしいよ？　すっごく。でも、好きな相手なら……って事かな？」

「確かに愛情を示す行為としては、相手を舐めたり、相手の一部を口に含んだり、さらに甘噛みしたりするのは一般的ではありますが……しかし、相手の精液まで飲み下すというのには、少々理解が……」

　セー……その言葉をはっきり言わないでくださいー……。

「あー……それは、宮前くんだから頑張れたんだよ？　校長のは全力で拒否しました」

「つまり、それくらい好きだという気持ちを示しているものなんですか？」

「ええと……まあ、突き詰めて言えば、そういう事になるのかな？」

「そうですか、なるほど。それについて実はもう一つ、気になる事があるんですが……」

「え……な、なあに？」

「食べるために作られているわけではない物は基本的に美味しく感じないはずなんですが、美味しかったですか？」

　……。

「……ふええええ……」

「ストーップ。リリィ、ストーップ。もうそれやめて。松平さん死んじゃう」

「どういう事ですか？」

「いや、もういいでしょ。僕もそれで嬉しかったんだよ。もうそれでいいじゃん」

「つまり、気持ちがよかったという事ですか？」

「はいはい気持ちよかった気持ちよかった！　後で説明するから！」

「いえしかし、こういう機会を逃したくはありません。そういえばミズホ、あなたも気持ちがよかったですか？」

「リリィってば！」

　もういい加減、強制的に物理的に、リリィの口を塞いでしまおうか。そう思い始めた時、松平瑞穂がおずおずと言い出した。

「あー……その……それ」

「え？」

「私もちょっと、びっくりしちゃって。ケーケンほとんど無いはずの宮前くんに、まさかあんなに気持ちよくさせられちゃうとか、思わなくて。うん」

「え……えー？」

　あれ？　何かお鉢がこちらに回ってきた？　特に何か頑張ったつもり無いよ？

　何か妙に、イタズラっぽそうな顔をする松平瑞穂。

「ねえ、リリィちゃんで上手くなった？　もう既にヤりまくりですか？　あはは、ニクいですぞエロ大魔神様！」

「あ……えっと、いや……えっと、リリィとは……そういう事には」

「……え」

　それは意外な言葉だったらしい。一瞬きょとんとした、のち。

「えええええええええっ？」

　一変、いきなり激昂した松平瑞穂が僕に食って掛かる。

「どうして？　何で？　一方的だったの？　ちゃんとしてあげてよ！　リリィちゃん可哀相じゃん！」

「それは……その」

「あーもう宮前くん正座！　いーですか宮前くん？　こーいう事はですね、一人でするものじゃなくて、二人で協力して作り上げていくもので……」

　何すか？　正座って……。

　よくわからないものが始まってしまいそうになったが、リリィが割って入ってくれた。

「ミズホ、それは見当違いです。ただでさえ、奥手のオリヒコです。彼が、そんな扱いをすると思いますか？」

「あ……あー。そっか……ごめんね？」

「それに、忘れていませんか？　私は普通ではない、と言いました」

「……え」

「云うなら私は極度の不感症で、ついでに無感動症なんです。厳密に云えばまったく違いますが、大体そんなようなものです。とにかく私は、オリヒコが何を与えてくれても、何を受け取る事もできません。何を返してあげる事もできません。それは肉体的にも、精神的にもです。だから、あなたにお願いしたんです」

「え……それは……えええええ？　そんな。そんなのって……」

「それは、いい結果になったと思います。あなたに感謝します、ミズホ。ありがとうございました。そして……これからも、よろしくお願いします」

「……リリィ、ちゃん……」

「……リリィ……」

　嫉妬を理解した。そう僕に申告したはずのリリィは、一体このセリフをどんな気持ちで放ったのだろうか。胸が……チクチク痛んだ。

「これからといえばミズホ、オリヒコにあなたの番号とアドレスを伝えてあげて欲しいと思います。さっき確認した所、彼のケータイにはその登録が無いようです」

「あ……そっか、そうだったね。じゃあ」

　そんな事を言われて、僕と松平瑞穂は手に手にケータイを持ち、連絡先の交換作業をする……けれど。えーと。

「リリィ」

「何ですか？」

「さっき確認した、って？　いつでもよかった気がするけど、何でこんな時に？」

「はい。実は少し前、あなたのケータイへ通話の着信があったんです。あなたのお母様のようでしたので、ご挨拶をと思って私が応対しました。そのついでですよ」

　……。

「ちょっとおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「何か問題ありますか？」

「問題しか無いよ！」

「どんな問題が？」

「いや、だからまず！　リリィがいきなり出るとかダメだし！」

「そんな事はありません。あなたがお姉様に送った写真の件でしたので、むしろちょうどよかったかと。それにあなたたちはクライマックスに差し掛かっていましたから、あなたが出るわけには」

「クライマックス……って！　そんなの放置してよ！」

「そ、それ……私の声も、聴こえちゃったんじゃあ……」

「そのようです。尋ねられましたので、状況は説明しました」

「説明するなあああああああああああああああああああああああああ！」

　帰れねえ！　帰れねえよ夏休み！

　リリィはいろいろ物知りなのに、何で常識だけこんなに物知らずなんだよ！

　僕はもう心の中でだびだびに泣いてしまっていたが、それはもちろん松平瑞穂もだ。

「い……いきなり宮前くんのお母さんに、こんな？　は……恥ずかし、すぎるよ……？」

「大丈夫です。あなたはオリヒコの花嫁候補ですから、問題ありません」

「え？　はい？　は、花嫁？」

「現時点ではあなたしか相手は居ないんですよ？　私は結婚できませんし」

「け、結婚、とか……そんな。わ、私が、宮前くんと、とか……ちょっと、早い、よ？」

「はい、確かにオリヒコが十八になるまで待たなければいけないという点では、早いと云えます。でも、それだけです」

「それだけ、って……そんな簡単に……」

「そうですね。先日私がオリヒコに言った考えを、ミズホにも聞いてもらいましょうか」

「……考え？」

　ああ、あれですか。

　それから少し時間を掛けてあの、倫理がどうとかいう話。あれをリリィは、松平瑞穂にした。

　聞き終われば松平瑞穂は、ほー、とため息のようなものをつく。

「確かに、リリィちゃんが言う事は全部正しいと思う……けど。現実として、結婚は許されてないんだよねえ。ところで、リリィちゃん結婚ダメってどうして？　束縛されるのがイヤとか、そういう事？」

「いいえ、私の好き嫌いの問題ではありません。もっと単純で、だからこそどうにもしがたい問題があります。つまり、私の籍は世界のどこにもありませんから、日本人であるオリヒコとの結婚には、書類上の手続きがどうやっても不可能なんです」

「え」

　あ、そうか。考えなかった。

　しかし、作られたと云うなら、籍が無いのはごく当たり前の話だ。

「そもそも結婚とは、本人たちがどうこうという話ではありません。一緒になるだけなら本人たちが永遠を誓い合うだけで充分ですし、性交に及べば子は為せますから、夫婦になるのに他の裏付けは必要無いんです」

「いや、そうだろうけど。でもそれじゃあ、きちんと夫婦になったって見られないんじゃないの？」

「そうなんです。つまり結婚とは夫婦になる事自体ではなくて、二人が夫婦である事を周囲が認めて、盛り立てていく。そういう事を本人たちと周囲の人たちの間で約束する一種の契約で、だから本人たち以外の人々が判断する話なんですよ」

「……あー」

　うーん。まあ、結婚と恋愛は別物、っていうのはみんなわかってるとは思うけど、ここまできちんと認識している人はあんまり居ないかも知れない。

「そういう意味では、例えば駆け落ちなんかによって結ばれる事は結婚とは呼べないはずです。にもかかわらず、見ず知らずの人間を証人に立てるだけで結婚できてしまう現代の婚姻制度は、なかなかのザルだと私は思います」

「あー……そう言われてみれば、そうかも？」

「その誰と誰が一緒になるかについて、誰と法的に特定するためのものが国籍や戸籍というものなんですが、ただ私の身の上を考えれば、新たにそれを得るのは絶望的なんです」

「難しいんだ？」

「不可能に近いです。自治体によっては、住民登録があれば籍が無くても婚姻届を受理するケースがあるようですが、やっぱり身の上の事があって、私の住民票を置いてくれる自治体があるかどうか疑問ですし」

「確かにまあ、この見た目だと日本じゃあ、みなしごにもならないね……あ。それこそアメリカとか、外国でなら？」

「いえ、身元不明の人間がまともに扱われる事が保証されている国は、ほぼ皆無です。それに、そうでない国は他の国に対して信用がありませんから、その国籍を取得する価値はありません。そういった条件はどこでも変わりありませんから、日本から出て行く意味もこれといって無いんです」

「あー、ダメなのか……」

「とにかく繰り返しになりますが、それは絶望的です。そしてそれでは周囲から、私は誰と認めてなんかもらえませんから、だから私は結婚ができないんです。あるいは、内縁や事実婚を言い張るだけなら可能かも知れませんが、その生活にはいろいろ支障が出るでしょう」

「うーん……そうなんだね……」

　と。ここまで僕とリリィだけでくっちゃべってしまい、置き去りを喰っていた松平瑞穂が、至極当然の質問を口にした。

「ねえ、あの……。リリィちゃんって……どういう、子、なの？」

「あー、えっとそれは……」

　ちらり。

　ちょっと迷ったのでリリィに少し目を遣ると、リリィも少しこちらに目線を送ったのち、彼女へ告げた。

「そうですね。あなたは重大な告白を、私たちにしました。だから私も、告白する事にします。私は……人間ではありません」

「……人間、じゃ、ない……？」

　その時、松平瑞穂の手にしていたケータイが鳴った。アラームのようだ。

「あ、あれ……もうこんな時間。ごめんなさい、その話、今度ゆっくり教えて？　私ちょっと、これから用事があります。ごめんね？」

　そう言うと松平瑞穂は、とても慌てた様子でベッドを離れては、服を身に着け始める。

「この部屋、七時までフリータイムだから。二人でゆっくりしていったらいいよ？　代金、ここ置いてくから。ごめんね？　じゃあ！　ごめんね？」

　そうして彼女は、疾風のごとき素早さで部屋を後にしてしまった。

　二人、残される。

「行っちゃった、な……」

「オリヒコ。お願いがあります」

「え。何？」

「確認したい事があります。そのためにもう一度、私を抱き締めてください」

「え、あ、そう？　……じゃ、おいで」

「はい」

　リリィはベッドに乗り上ったが、しかしすぐには寄り添ってこない。

「どうしたの？」

「私が服を着ていて、あなたが裸のままという事を妙に思います。私も脱いだほうが、いいですか？」

「あ……あー。まあそれは、リリィの好きで」

「そうですか。では、脱ぐ事にします」

　するすると脱ぎ始めるリリィ。そこに少しも躊躇いは無いようだ。彼女は普通の女の子を目指してるんだろうけど、でもそれに近付くには……まだ道のりは遠い、かな？

　っつーか。女の子が男の目の前で服を脱ぐって、めちゃんことんでもない事だと思うんだけれども。ここまでナチュラルにやられてしまうと何か、ドキドキしない……というわけでもないんだけれど、何かが違う。

「では、お願いします」

「うん。ええと……横になったほうが？」

「そのほうが楽ではありますね」

　二人ベッドに寝そべり、抱き合う。

　その抱き心地は、松平瑞穂には悪いが、リリィのほうがはるかによい。おそらく、その肉付きによらず肌の感触というものは、そんなに違いは無いんだろうと思う。ただ、精神的に受ける印象が大幅に違った。

「えっと……確認って、何なのかな？」

「ごめんなさい。いいと言うまで、こうしていてください」

　そう言われれば、黙って待つしか無い。

「……」

「……」

　まあ、とにかく裸身で抱き付かれる気分はいいし、ふわらかな抱き心地もいいし、よい匂いまでするし、嫌というわけでは間違ってもないのだけれども。

　しかし……。

「……」

「……」

「……」

「……」

　しかしそれは、異様に長かったのだ。さすがにそのままで一時間ほども経過すれば、訝しさが募ってしまう。

　もう一度声を掛けてみようか。そう思った時、やっとリリィが声を発した。

「……あ」

「リリィ？」

「……オリヒコ。ありがとうございます、もう充分です」

「そう。それで、何の確認だったの？」

「やっぱり……間違い無さそうです。ついさっきまで私は、オリヒコ。あなたに抱かれながら、意識を閉じてしまったんです」

「意識を、閉じる？」

「多分、眠りについたんだと思います」

「え。寝てたの？」

「オリヒコ、聞いてください。そんな事は今まで無かったんです」

「……無かった？」

「私は、殺人兵器です。危険に身を置いても問題の無いように、休止状態にあっても意識が途切れる事は無いはずなんです」

「そうだったの？　なら……それが、どうして、今？」

「私は今、酷く安心して、気が緩んでいます。油断と云い換えていいかも知れません。とにかく、とても穏やかです。そのせいかと考えられます。……あなたに抱き締められたら、そうなりました」

「え」

「さっき私が取り乱して、あなたに抱き締められた時に気付きました。もしやと思いましたが、今ので確認が取れました。私はおそらく、あなたの抱擁から安らぎというものを受け取る事に成功しています」

「リ、リリィ！　じゃあ！」

「はい。私は間違い無く、成長を見ています」

「やった……やった！」

　すっかり嬉しくなった僕は思わず、彼女を力いっぱい抱き締めてしまった。

　そっか、なるほど。じゃあさっきのあれは、落ち着かせる事ができたのはやっぱり……。　っつーか、リリィが安らぎに目覚めてくれていなかったら、さっきの騒ぎは収まってなかったって事か。すんでの所で、ってやつだったなあ……。

　リリィのほうもその感触を確かめるように抱き返してきていたが、しばらくしてぽつり漏らした。

「これまでどんなに探しても手の届かなかったものが今、あっさりと手に入ってしまいました。理由がわからないだけに、どうもすっきりとしない部分があるんですが……」

「うーん、それは僕といろいろ……その。とか？」

「どうでしょうか。ただ、この感覚……とても恐ろしいです。永遠にこのままで居たい。そんな事を思わせられてしまいます。緊張も完全に解けてしまっていますから、今もし何らかの危険が迫ったら、おそらくきちんと対処できません」

「そんなの大丈夫だよ！　よかったねリリィ！」

「いいえ。いいえ」

　リリィは、かぶりを横に振る。

　そして僕の両肩に手を置くと、合わせていた肌を離した。

「……え？」

「一方で、嫌な私も姿を現し始めています。私は、それを私にもたらしてくれるあなたを、独占したい。そんな考えを持ってしまいました。その結果あなたに、故意に伏せた情報があるんです」

「え？　何を？」

「ミズホが急に、私たちを置いて出て行ってしまった理由です」

「え、知ってたの？　松平さんの用事」

「いえ、推測ですが……しかしそれで、間違い無いはずです。彼女は……仕事をしに行ったんです」

「仕事？　バイトか何か？」

「違います。客と、落ち合っているんですよ」

「客？」

「全部言わないとわかりませんか？　援助交際の相手です」

　……。

「あ……あああああ！」

「すぐに明かしてしまえば、あなたが彼女を追い掛ける事はわかり切っていました。そして私は、それを嫌だと感じてしまいました。伏せた理由はそれです」

　僕はリリィが全部言い終わらないうちに、ケータイを手に取った。

「何を話しますか？　彼女は止まらないでしょう。それにもう、行為に及んでいるかも知れません」

「黙ってられないよ！　これ以上、松平さんが汚れるのは嫌だ！」

「……そうですか」

　そうして、知ったばかりの番号にダイヤルしたが。

「あれ？　通話中……」

　これでは、居場所を訊き出す事もできない。それでも、何もせずに居られなかった僕はせめてメールを送ろうと、ケータイを操作し始めた。

　文章を入力しながら、ふと思い立ってリリィに尋ねる。

「矛盾、しない？　僕を独占したいと思ったリリィが、何で松平さんに、僕へ番号とアドレスを教えろとか言い出したわけ？　しかも直前に」

「直前と言いますが、順序を考慮してください。彼女が部屋を後にする事になったのは、当然ながらアドレス交換の後です。私もまさか、こんな急な事になるとは思わなかったんです」

「……まあそれは、そうかもだけど」

「それから彼女に、あなたと仲良くしてもらいたかったのも本当です。私があなたにあげられないものを彼女が持っているのは、確かですから」

「……そう」

「でもそれが、矛盾になるのは、認めます。私も、私の事が、よくわかりません。……オリヒコ」

「何？」

「私を……怒っていますか？」

「……リリィの気持ちは、わかるから」

「ごめんなさい……」

　リリィは頭を垂れる。

　瞬間、メール作成途中のケータイが鳴動した。

「……あ」

　それは通話の着信で、発信元は松平瑞穂とある。

「もしもし松平さん！」

『……あ……繋がった……よかった……』

　という事は、さっき通話中だったのは向こうもちょうど、こちらへ発信していたからなのだろうか。

　しかしその声は切れ切れで、どうにもか細く、頼り無いものであり。

『……宮前くん……今どこ……ですか……？』

「まだホテル出てないよ！　松平さん、何かあった？　今どこ？」

『……今から……会いたい……です……。会って……くれま……せんか……？』

「行くよ！　今どこなの？」

『……ありがとう……ごめんね……』

「松平さん！」

『……再入室……できないから……。そこのすぐ近くの……公園で……』

「わかったよ！　松平さん大丈夫？」

　通話は途切れた。

「もしもし！」

　何が、あった？

　何か、嫌な目に遭って？

「彼女は……何と？」

「わからないよ。でも、凄く弱ってるみたい」

「私の……せいでしょうか」

「言ってる場合じゃないよ。出よう」

　服を着て、リリィにもそれを促した。

　それから松平瑞穂が置いていった紙幣を手に取ると、部屋の片隅にある精算機に通す。部屋をどうしておけばいいかはよくわからなかったが、多分スタッフが全部セットし直してくれるのだろうと勝手に想像し、放っておく事にする。

　そしてリリィに肩を貸しながらも、なるべく急いでラブホテルの外へ出ると、すぐ斜め向かいに公園は見付かった。

　そんなに広くない……というよりも、いっそ狭いと云ってしまっていいその公園に、まだ松平瑞穂の姿は無い。雨はやんでいるが、ベンチは濡れていて座る事ができない状態だ。とりあえず入口付近に、突っ立っている事にする。

　位置が落ち着いた所で、リリィがぽつり尋ねてきた。

「オリヒコ……やっぱり、怒っていませんか？」

「……怒ってないよ」

「そう思えないので尋ねています。あなたの表情……とても、険しいです」

「それは、松平さんが心配だから」

「そう、ですか」

　それっきり、沈黙が訪れてしまう。

　それから待つ間、こんな場所には付き物の、蚊などと交戦する事になった。どんな場合でもこういった煩わしい些事にとらわれてしまうのは、まあ仕方が無いと云えばそうなのだが、だからこそ煩わしいと云える。

　少なくとも見渡す限り無人の、その侘しげな公園の時計が、七時を示す。それでも、まだ夏至が過ぎて間も無い空は、依然明るい。

　その長針をぼんやり観察していると、それはやがて真右を向き……松平瑞穂は現れた。

「……松平さん……」

「宮前、くん」

　彼女は元気無く、とぼとぼと、こちらに歩み寄ってくる。

「大丈夫？　何があったの？」

「ううん……何も、無かった。ありませんでした……」

「え？」

「宮前くんと、エッチしちゃったの……失敗でした。もう失敗も失敗、大失敗だよ？」

「どういう事？　何があったの？」

「だから、何も無かったんですってば。あはは、は……」

　彼女はそんな空笑いをしながら……落涙した。

「ま、松平さん……」

「私……どうしよう？　もう、ダメだよ……」

「わけを、聞かせてよ……」

「うん……ごめんね……ごめ……えっ……えっ……えええええ……」

　彼女は、泣きじゃくり出す。

「オリヒコ、抱き締めて背中をさすってあげてください。これでは話が聞けません」

「あ、うん……」

「そっか。リリィちゃんには、またもやお見通しだったんだ」

　リリィが買ってきたのは、缶入りの甘酒だった。凄いチョイスだなとは思ったが、甘さを強く感じれば心は落ち着き、そして体内でブドウ糖が飽和すれば問答無用で元気が湧くものだから。そうリリィは主張した。

　今、松平瑞穂はその缶を傾け、そして確かにその目には生気が戻ってきているような気はする。

「甘酒なんて正月以来だよ？」

「実はそれは、邪道なんです。甘酒というのは酒蔵が夏の間、冬の寒い時期にしか造れない日本酒の代わりに手掛けていたもので、だから本来は夏の暑い時によく冷やして飲む物だったんですよ」

「へええ。リリィちゃんって本当にいろいろ詳しいんだね？」

「それはオリヒコからも言われましたが、それほどでしょうか？」

「いやあ、甘酒の本来とか、普通知らないよ？」

「そうですか。それでしたら、ついでですから付け加えましょうか。タウリンやカフェインなどの、即効性の奮起作用がある成分が入っていない事を除けば、甘酒は栄養ドリンクよりも栄養面で優れているんです。それは飲む点滴と云われるほどで、だから夏バテ対策には打ってつけの飲み物なんですよ？」

「そうなんだ！　じゃあ私も今度から、栄養ドリンクの代わりに甘酒飲もうかな？　勉強疲れした時とか、活入れるのに……」

「いえ、繰り返しますが即効性の成分は入っていませんよ？　効能はあくまで滋養であって、奮起させる作用はありません」

「あ、そっか。じゃあ病気した時とかにいいのかな？」

「そうですね」

　甘酒を飲み切ってしまうと、他愛の無い話にすっかり普段を取り戻したらしい松平瑞穂は、話を始めた。

「ご指摘の通り、私はお客さんを取りました。ネットに募集出してみたのは昨日の夜なんだけど、こんなにすぐ見付かっちゃうとは思わなかったよ？」

「何かネットって、いいんだか悪いんだか……」

「なかなか微妙だよね？　うん。それで、さっき待ち合わせして。普通にオジサマが来るのかなとか思ってたんだけど、大学生のお兄さんでした。よく考えたら、勤め人ならもうちょっと遅い時間だよね？　待ち合わせ」

「そう、なのかな」

「それで、喫茶店でお茶して。結構話しやすい人だったし、この人なら大丈夫だって思った。でもね……いざ、ラブホ連れてかれて、ベッドインしたらね……」

「嫌な事を、された？」

「だから。何も無かったって言ったでしょ？」

「あ、そっか。でも、じゃあ？」

「うん……その瞬間、もの凄い勢いで出てきちゃったんですわ……宮前くんが」

「え……？　僕……？」

「そうだよ？　宮前くんが。私は、宮前くんの事、好きで……それこそ多分、ぞっこん？　で……。もう、宮前くん以外の人には何もできない、されたくないって……それはどうしようも無くて、修正できなくて……頭から追い出せなくて、何もかも無理になっちゃって。だから宮前くんと、しかも直前なんかにエッチしちゃったのは……もう完全に失敗」

「……」

「相手には必死こいて謝りました。でももう状況が状況だから、このまま無理矢理されちゃったりするのかな、とか思ったら私……凄い泣けてきちゃって。わんわん泣いちゃいました」

「……松平さん……」

「ただ、相手のお兄さんがとっても紳士な人だったんだ。あの状態じゃあ中断するの、凄い大変だったと思うんだけど……」

「……えー、あー……うん、それはそう、だね……」

　うん……それ、大変。もう……滅茶苦茶、大変。おそらく……不可能に、近い。とてつもない凄さの……精神力だね、その人。

「一応、相手が遊び人だとわかり切ってないと自分も遊び人になり切れない、みたいな事は言ってたけど。でも、遊び人なのに紳士って云うのもおかしいのかな……？」

「あー……それは大丈夫。世の中には変態紳士という言葉があってだね……」

「……そんなのあるんだ……？」

　っつーか、紳士イコール変態であり、変態イコール紳士である、というのがネットでの常識で、全裸にネクタイが正装のアレだから、ちょっと違うかも知れないけどね？

「うーん、ええと。まあそんなわけで、私は無事でした。でも、そのお兄さんには釘を刺されちゃいまして。こういう事はネジの一本狂った人がする事で、私には絶対無理だからもう二度とするな、って……」

「そっか……まあ、よかったんじゃ」

「よくない！」

　その唐突な叫びは……あまりに、悲痛で。

　僕はただただ……驚いてしまうしか、無くて。

「……松、平……さん……」

「あ……ごめんなさい……でも、私にはお金が必要で……とってもたくさん必要で。それには援助交際しか無くて……でも、それも無理ってわかっちゃって」

「……」

「このままじゃ私、高校行けなくなっちゃう。家も親の会社も、全部無くなっちゃう。宮前くんにも、リリィちゃんにも、他のみんなにも、会えなくなっちゃう……」

「……」

「私自身も、どういう事になっちゃうのか……これが、普通の借金だったらどれだけ借りてても、お金払えなくたって最低限の権利とか一応、保障されるらしいよ？　でも……全然そんなんじゃないんだもん！」

「……」

「私、どうすればいいのかな？　ねえ、宮前くん！　教えてよ、ねえ……ねえリリィちゃん、教えてよ！　私、どうすればいい？　私もう、もう……もうっ……」

「松平さん……」

　また泣き出しそうなくらい、弱り切った表情を見せる松平瑞穂。そんな彼女に、僕は何も言ってあげられなくて。

　その時、その場に居る三人以外の者が発言した。

「何やら深刻な話をしているな？」

「……え？」

「だったら、死んでみないか？」

　そんな事を言い放った人物は、少し背の高い女性だった。

　その長髪は見事な栗毛で。

　その目は翡翠色。

　その顔は凛々しく美形。

　その歳の頃は二十代後半？

　身に着けているのは革製の黒い、よくわからないデザインの、手足むき出しの丈夫そうな服……。

　もちろん会った事など無い人物だが、しかしこれは、どう見ても。

　この人は。

「こんな所で初対面になるとは思わなかったぞ？　マークⅡ」

「……」

「私はマークⅢ。今後よろしく」

「……」

「マークⅡ？」

　呼び掛けられたリリィは、しかしなかなか反応しない。

　そんなリリィに、マークⅢを名乗った女性はおどけてみせた。

「何か言ってくれないか？　お姉さんは悲しいぞ？」

「では、一度だけ言います。私はリリィ。マークⅡなどというものではありませんので、よろしくどうぞ」

「リリィ？　名前なんてものがあったのか？　マークⅡ」

「……」

「ああ、そうかそうか。なるほど」

　彼女は、リリィが言外に要求した、ある一定のルールを理解したらしい。鷹揚に頷くと、改めて話し掛ける。

「では、リリィ」

「私に何か用ですか？」

「いや今は、あなたには特に用事は無いぞ？　私は私の標的を追っていただけだからな。しかし、偶然にしても見付けてしまったのに、挨拶しないわけにはいかないだろう？」

「そうですか。しかしもう、挨拶は済みました。用が無いなら行ってください、さようなら」

　年上の相手をあしらうリリィ。そんな光景に、ちょっと内心笑えてきた。

「待った待った、用はある。あなたには無いと言っただけだ」

「オリヒコを、殺しに来ましたか？　それはさせません、オリヒコは私の」

「不正解」

「……は？」

「用があるのは、あなたにです。松平瑞穂さん」

　マークⅢと名乗った女性は、松平瑞穂に向き直る。

「私……？」

「はい。私はあなたの、命を貰い受けに来ました。申し訳無いが、ちょっと死んでみてもらえるかな？」

「死……？」

　まったく当たり前だが、言われたほうはぽかーんとしてしまっている。

　しかしこれは……新しい刺客が、松平瑞穂を殺しに来た？　僕が狙われた理由すらまったく不明だが、しかしどうして彼女まで？

「マークⅢ。どういう事ですか？」

「あなたに説明する義務は無いんだが、説明が欲しいか？」

「教えてください」

「そうだな。タダで教えるのも何だから、とりあえず一つ言う事を聞いてもらおうか？」

「お断りします。でも説明はしてください」

　ぶっ。

　あんまりリリィ無双すぎて思わず吹いてしまった僕を尻目に、マークⅢはぼやいた。

「マークⅡ、それはちょっと無いんじゃないか？」

「……」

「ああ、リリィ」

「あなたの言う事が真摯なものであるなら、一考するのもやぶさかではありません。でも今のそれは、単なる気まぐれなのではないですか？　私は、そんなものに耳を傾けるつもりはありません」

「手厳しいな。こんなでは苦労していないか？　宮前少年」

　え、僕ですか？　えーとえーと……。

「リリィは、可愛い女の子です」

「そうか？　だからといって何でも許していると、後で大変な事になるぞ？」

　あー。何か格好つけてみたら倍返しされてしまいました……。

「マークⅢ。話をそらさないでください」

「言うと思うか？」

「その場合は、実力行使をする事になります」

「私はマークⅢだ。バージョンナンバーの高いほうが、能力も高いのは常識だが？」

「勝敗は、能力の優劣で決まるものではありません。試してみますか？」

　マークⅢは、苦笑した。

　……って、あれ？　苦笑した？

「やめておく。あなたの言う通りだ。本当に能力差があるのかどうかは実は知らないんだが、いかんせん私には実戦経験が無い」

「では、早く説明をしてください」

「せかすな。まあ、勿体ぶっただけで大した説明にはならないが、そこは勘弁して欲しい。彼女を殺す目的は、あなたの宮前少年と同一のものだ。それだけだが、いいか？」

「それでは説明になっていません。私は、オリヒコを殺さなければいけない理由を知らされていませんから」

「……何だって？」

　その言葉にマークⅢは、非常に驚いたらしい。その表情は明らかに驚愕のそれである、のだが……。

　表情？

「それともあなたは、それを知っていますか？」

「それは私が尋ねたい。あなたは何故それを知らないんだ？」

「どういう事ですか？　私が知らない理由は、知らされていないという以外にありません」

「本当に知らないのか。あなたを完全体にするためだろう？」

「まったく話が見えません。完全体とは何ですか？」

「……マスター、これはどういう事だろうか？」

「マスターがここに居るんですか？」

「いいや、今のは私の独り言だ。しかし本当に、どういう事なのか……」

　待ってー？　僕と松平さんにはもっと話が見えないですよー？　置いて行かないでー？

「わかりました。私をまったくの無知という前提に立てて、すべてを話してください」

「それはやや膨大すぎる。あなたから、知りたい事を尋ねてくれないか？」

「そうですか。ではまず、完全体とは何ですか？」

「それについては逆に前提知識を尋ねるが、我々が何であるかは知っているか？」

「殺人兵器」

　マークⅢが今度見せた表情は、怪訝のそれである。

「……何だ？　それは。一体どこからそんな勘違いが……」

「違うんですか？」

「違う。その、兵器というのは何の事だ？　我々は、人間だ」

　……。

　え？

　それにはもちろん、リリィも食って掛かる。

「納得しかねます。そんなはずがありますか？」

「最後まで聞いて欲しいな。人間は人間だが、云ってみれば超人とも呼ぶべき存在なんだ」

　はあ、それはまたベタな単語が来たな……。

「超人？　それは何ですか？」

「もともと特別な力を抱えて生まれ出る人間は、それなりに居る。ただ、そういった人間たちは力の存在に気付かないばかりか、その影響で短命に生涯を終えてしまう。マスターは、その力を固定化して生き長らえさせる手段を見付け出した。その結果誕生したのが、我々というわけだ」

「特別な力、というのは非常に胡散臭いですが、ひとまず置いておきます。しかしそれなら、私たちはもともと真っ当な人間だったという事ですか？」

「そういう事になる」

「それならどうして私たちは、戸籍、目覚める前の記憶、そしてさまざまな感情や感覚を失っているんですか？」

「戸籍と記憶の消失については、マスターが見付けたその手段に理由がある。それはその対象が、死体でなければ適応しないという事だ」

　んー。ええと今、よくわからない事を聞いた気がする。その疑問を、リリィがまとめてくれた。

「……それは、死者を甦生させたという事ですか？　そんな事が可能なんですか？」

「我々は実在してしまっているのだから、可能と云うより他に無いだろう。ただ、記憶が無いわけだから、甦生と云ってしまえるかどうかまではわからない。それからそれは、あくまで超人相手で初めて可能な事なのであって、普通の人間では不可能らしい」

　そうなんだすごい。

　って、いや。いやいやいや。そういうのは、普通じゃない人間でも無理な気がするのだけれども……。それができるから普通ではない、という事なのだろうか。

「そして感情や感覚についてだが、実は私の場合……そんなものは、欠落してなどいないんだ」

　そうなの、か。

　確かにこの人はリリィと違い、さっきから不敵に笑ったり、リリィの言に驚きを顔に浮かべたりしている。それについては納得いったが、しかし……。

「それは、どういう事なんですか？」

「私が完全体で、あなたが不完全体という事だ」

「つまり不完全体とは、感情や感覚が欠落している状態を云うんですか？」

「違うようだ。不完全体には何やら重大な欠陥があって、感情と感覚の欠落はそれを保護するための、云わば封印のようなものとの事だ」

「重大な欠陥？　それは何ですか？」

「私は知らない」

「そうですか。では、私が完全体とやらになるために、オリヒコやミズホが殺されなければいけない理由は何ですか？」

「それでは不正確だ。あなたが受けた命令は、正確にはどんなものだっただろうか？」

「殺害後、すみやかに遺体を回収する事」

「つまり必要なのは、殺害行為そのものではなく、その結果出る死体という事だ」

「彼らの遺体が、一体何になると言うんですか？」

「詳しい理屈は知らない。あなたと同じ時、つまり日本標準時にして１９９６年の７月７日、未明の２時５３分に出生した人間の死体が必要という話だ。それは誰でもよくて、まず見付かった宮前織彦に白羽の矢が立ったが、あなたがなかなか行動を開始しなかったので、少し後になって見付かった松平瑞穂にも白羽の矢が立った。そういう経緯だ」

　え……えええええ？

　つまり僕と松平瑞穂は、同時に生まれていて？　さらには、リリィの原本までもがそうだった、と？

「三人揃ってとか、あんまり……偶然すぎない？　それ」

「それは違うぞ、宮前少年。現状だけを見ればそのように感じるかも知れないが、同一のものを探したわけなのだから、同一のものが揃うのはむしろ当然だ。何の不思議も無い」

「それはそうだろうけど、でも……」

「釈然としないか？　まあ、君と松平瑞穂がごく近い距離に存在した点については確かに、偶然と云ってもいい。しかし何にせよ、偶然が過ぎるとは云ってもそれは、ただの感傷だ。既にそのように存在してしまっているものを否定する理由には、ならない」

「……」

　そんな正論を述べたマークⅢは、それに僕が黙ってしまったその後、ちょっとしかめ面になる。

「ところで苦情を言わせてもらうが実は、私は目覚めてから一ヵ月しか経っていないんだ。そんな所を駆り出されて、背景知識だの戦闘技術だの突貫で叩き込まれたのには心底まいった。これは一ヶ月以上も命令を実行しなかった、あなたのせいだぞ？　マークⅡ」

「……」

「あ、いや。あなたも頑固だな。リリィ」

　呼ばれたリリィは、きっとマークⅢを向き直った。

「私が頑固なら、あなたは何なんですか？　私はあなたが、私をからかったものと判断します。どういうつもりなんですか？」

「それは酷いな。そんなつもりはまったく無い」

「しかし実際、まるでお話になりません。遺体が私に一体どのような作用をするのか。その遺体がどうして私と同時刻の出生でなければいけないのか。第一、同時刻の出生であれば何だというのか。そもそもどうして死亡した者を生き返らせる事などできるのか。特別な力とやらもそうです。まったく理由付けができません。非科学的にもほどがあります」

　うんうん、そうだよねえ。

　と、そんな呑気な相槌を脳内で打ってしまっていたが、この話は次に、思いも寄らない方向へ展開を見せる。

「非科学的であれば何だと言うのだろうか？」

「まったく信用に値しないという事です」

「それはどうだろうか。我々の能力を思い出してみればいい。意思の力だけで、自在に変形し自在に操れる能力。そんなものが科学技術で実現できると、本気で考えたのか？」

「……え」

　リリィが、フリーズした。

「もしそうなら、それはあまりに幻想を見すぎだ」

「……私は……私が……幻想など……」

「幻想ではないと言うなら、我々の能力を科学的に説明してみせろ」

「……それは……」

「断定する。それは幻想だ」

「……あ……」

　リリィが、やり込められてる？

　それも信じ難かったが、そんな事よりも……もしかして今、彼女のアイデンティティがズタズタにされてる？

　そんな事は、看過できない。

「マークⅢ、やめてくれよ」

「君は今、少し黙っていてくれないか？　彼女のために話をしている」

　……一蹴されてしまった。

　リリィがほとんどうめくように、しかしどうにかその先を尋ねた。

「マークⅢ、では……それでは、私は……一体……」

「云ってみれば、これはむしろ魔術の領域なんだ」

「……魔術……など。そんなものは認められません……」

「認めるのと存在するのとは、別の話だ。もちろん我々にも、何らかの原理はあるんだろう。ただ単にそれが解明できていないというだけで、原理がわかるなら科学技術。わからなければ魔術。それだけの話だ。実にシンプルだと思わないか？」

「……しかし私たちは、機能別に各種モードというものを具えています。それはつまり、機械のようなものとして作られたという事の証左では、ありませんか……？」

「いいや。モードなんてものは、普通の生き物が普通に具えている。最もメジャーなものは睡眠モードで、その極みは冬眠だ。食が断たれる事によって省エネ状態になる飢餓モード、緊急時に普段休眠している七割以上の筋力が一気に解放される火事場モード、そんなものもある。小規模なものでも、発汗する冷却モード、鳥肌を立てる保温モード。挙げればキリが無い」

「……」

「それともモードという言葉に語弊があるなら、状態。形態。そんな風にでも云い換えればいい。もともとが、マスターが勝手にそう呼んでいるというだけの事だ」

「……」

「そもそも、人体を構成している物質が何であるか分析できている以上、それを再現するのは科学技術を駆使すれば不可能な話ではないし、実際にできたらしい。ただし、出来上がったものは単なる死体に過ぎなかった。つまり、生命の原理はまったく解明できていなくて、その実態はやはり魔術の領域と云っていいものなんだ。生命の神秘とも云われているが、同じ事だ。何ら違いは無い」

「……」

「変形にしたってそうだ。筋肉が動く原理についてすら、今でもある程度の目星は付いているが、解明し切れているわけではない。第一、筋肉をおいて他に生物が自動できる仕組みは存在しないという証明など誰にもできないわけだから、結果論としてそれが物理法則から逸脱するようなものでない限り、何があっても不思議ではない。そういう事になる」

「……」

「私はここに居る。あなたはここに居る。それがその証明のすべてだ。我々は……生きているんだ」

「……」

「そして、自分が何なのか知っている生物など皆無なのだから、我々自身についても別段、細部に及んでまで知っている必要など無いと私は思う。それともどこかに、深く考えなければならない理由はあるだろうか？」

「……」

「もし我々が、あなたの言うように作られた存在なのであれば、それは確かに事情が変わる。作る方法があるのなら知りたいと思うのも当然だが、しかし生命の原理が神秘である以上、はっきり言って作られたという可能性のほうがはるかに疑わしい」

「……」

「特に反論無いのなら、説明は以上だ」

「……」

　マークⅢは一方的に語り、リリィは黙ったまま。確かに何らかの新事実でも知っていない限り、反論のしようも無い話ではあるけれど……。

　リリィがここまで、言われっ放しだなんて。

「他に何か、知りたい事は？」

「……思い、当たり、ません……」

「そうか。なら、話を戻そう」

「いいえ……あと一つ。私の標的は常に強敵でした。それが今回に限って、オリヒコが標的になった。どういう事ですか？」

「その強敵は、我々の能力を利用せんがためにマスターの技術を付け狙う、敵対勢力だ。それは撃退しなければならないが、宮前少年についてはただのお遣いだ。この二つを同じ種類の命令として捉える事に、無理は感じなかったのか？」

「……それは……」

「あなたは殺人兵器などと勘違いしているが、我々はそんなものではない。そもそも我々の能力だってただ単に存在するものであって、戦闘を想定して用意されたものでもないわけだ。つまり敵対勢力への対抗には有用だったというだけで、だからそのためだけに命令が言い渡されるわけではないんだ」

「……兵器でないなら私たちは……何のために作り出されたんですか？」

「超人の救済。何かのための手段というよりも、目的そのものだ。そんな事をして何になるのかは不明だが、マスターがそう言うのだからそうなんだろう」

「……」

「知りたい事はまだ？」

「……ありません……いえ、もう一つだけ。あなたは完全体との事です。遺体の提供を受けたんですか？」

「いいや、私は目覚めた時から完全体だった。どうやらマスターに、軍隊や工作隊などの威力を作るつもりは無いらしく、我々を不用意に増やすつもりも無いらしい。だから本来なら、私は存在しないはずだったんだが……」

「……では、どうしてあなたは？」

「甦生の時点で完全体とする手段を、発見したとの事だ。何でも、元となる死体の年齢が二十五歳程度を超えている必要がある、という事らしい。超人の中でそこまで生き長らえる者はほとんど居ないようだが、とにかく要するに……私は単なる、その実験台だ」

「……そうですか……。それなら、マスターを……恨んでは？」

「余計な事をしてくれたとは常々思う。ただ私はあなたと違って、いろいろ感じる事ができるからな。それなりに楽しみはあるわけだから、一応の感謝も持ち合わせいる。まったく違うし、そう思いたくもないが、云ってみれば親のようなものなんだ」

「……」

「いいかリリィ？　マスターは普通の人間なんだから、我々の能力があればいつでも逆らう事ができるし、あるいは無視もできる。なのに命令……いや、命令という呼びかたすらそもそも癪だが、私がマスターの要求を律儀に聞き入れるのは、それがあるからだ。そういうあなたは、どうしてマスターに従うんだ？」

「……私は、殺人兵器。マスターに作られた、道具。そう、思って……いました……」

「気の毒だな。……まだ他にも？」

「……いいえ」

「そうか」

　リリィから追加の質問が繰り返されたせいだろうか、その返事にマークⅢは充分時間を置いた。そうしてこれ以上何も出てこない事が確認できると、いかにも選びがたい選択肢をリリィへ突きつける。

「今度こそ話を戻す。あなたは完全体になる必要がある。それには、宮前織彦。松平瑞穂。どちらかの命を奪う必要がある。あなたが選ぶんだ、リリィ」

「……そんな事は……お断り、します。私が、完全体になる必要性とは、何ですか？」

「何を聞いていた？　あなたの希望だろう？」

「そんな希望を……私が、しましたか？」

「私が直接聞いたわけではない。それでもあなたは常々、言っているそうではないか。愛が知りたい、と。違うのか？」

「……それは……相違、ありません……」

「あなたのその欠落はただの封印なのだから、つまり完全体になれば自動的にあなたは、それを知る事ができる。さあ選ぶんだ、どちらだ？」

「……」

　リリィ……。

　こんな話になるとは、思わなかった。正直、きちんと理解できているかどうかも、よくわからない。

　どうなる、んだろう？

　どうなって、しまうんだろう？

　リリィの判断は？

「オリヒコ……ミズホ……私は」

　と、その時。声を張り上げた者がいた。

「リリィちゃん！　私で！　私でいいよ！」

　松平瑞穂。

「……何を言い出しますか？　ミズホ」

「話は……よくわからないけど、わかったよ？　リリィちゃん、大変だったんだね……？　私を殺して、どうか幸せになってください……」

「私は、そんな事はしません」

「リリィちゃんがしなくても……この人はするんでしょ？」

「させません」

「いいんだよ……いいの。私きっと、このために生まれてきたんだよ……」

「馬鹿な事を口走らないでください。第一、どうしてあなたが殺せなどと言い出すんですか？」

「それは……死にたいからだよ？」

「どんな理由があってですか？」

「さっき全部話したよ？　多分私はもう終わりで……これ以上つらい事があるなら、死んだほうがマシだと思ったから……」

「あんな事で絶望してはいけません。活路は存在します」

「他の理由もあるよ？　宮前くんが死んじゃったら、やっぱり私、平気じゃ居られない。だったら、私が身代わりになる。それでリリィちゃんも幸せになれるなら、一石二鳥でしょ？　そしてリリィちゃんは宮前くんと、末永く幸せに暮らして……」

「素晴らしいです。美しすぎるほど尊い自己犠牲です。とてつもなく寛容でお優しいおかたなんですね、あなたは。私は非常に感服しました。あなたの事はきっと、末代まで語り継がれるでしょう」

　リリィが唐突に展開した、普段見られないキツい口調に、松平瑞穂は少しひるんだ。っつーか、僕も少しビビった。

「う……。それは……イヤミ、ですか……？」

「そうですよ、ミズホ。あなたもオリヒコと同じくらいの馬鹿だという事は、よくわかりました。それは基本的に悪い事ではありませんが、今この状況でその馬鹿は罪です」

「どう、いう……？」

「まずあなたは、オリヒコが死ねば平気では居られない、と言いました。ではあなたが死んでも、オリヒコは平気で居られると思いますか？」

「あ……そ、それは……」

「つまり残された側の気持ちを重視するのであれば、あなたかオリヒコのどちらかが、という選択肢はそもそも存在しないんです」

「……」

「それに、です。仮にあなたが死んで、その結果私が完全体となり。しかしそれで私がそのまま、オリヒコと結ばれてめでたしめでたし、というような事にはなりません」

「え……それは、ケッコンの話？」

「違います、それ以前の話です。マークⅢ」

「何だろうか」

　いきなり話を振られたマークⅢは、しかし特に慌てるでもなく受け応える。

「ミズホが死んで私が完全体になったとしたら、オリヒコの処遇はどうなりますか？」

「私はマスターではないから、わかりかねる。ただ……いろいろ知ったからな？」

「そういう事です、ミズホ」

「どういう事なの？」

「わかりませんか？　知りすぎた者の処遇。どちらを犠牲にするかという私の選択にかかわらず、あなたたち二人に平穏無事の保証は無いという事です。ただちに命を奪われたりはしないかも知れませんが、少なくともあなたが死守しようとした学校生活はまず、消えて無くなるでしょう」

「そん……な……」

　ああ……そういう事も、あるか。むしろ、ありがちではある。

　そんな事を告げたリリィは、しかし毅然としてマークⅢへ向き直った。

「そしてマークⅢ。それとは別の理由で、私はどちらを犠牲にする事も拒否します」

「その理由とは？」

「私は成長を見ています。オリヒコと出会ってからのこの二日間で、私は抱擁から安らぎを得る事に成功しましたし、また嫉妬をする事も、独占欲を主張する事も覚えました。意識の閉じた睡眠もです」

「……何だって？」

「私はこれからも、さまざまなものを開花させてみせます。そして最終的に、愛というものを獲得してみせます。……いいえ、もともとが人間だというのであれば、取り戻すと云ったほうが正しいのかも知れません。だから、私を完全体にする。そんな事は、余計なお世話……どこへ行きますか？　セリフは最後まで聞いてください」

　そう。マークⅢはリリィの言葉の途中で、いきなり背を向けていた。呼び止められれば振り返り、一応の説明はする。

「急用を思い付いた。また接触するから、その時までに方針を決定しておいてもらいたい」

「それは今、決定しました」

「早計だ。不完全体の欠陥とは何か、知る前に決めてしまうのはな。その決定は今受理しないから、よく考えておいたほうがいい」

　言い残すと、マークⅢはその辞する理由に従ってか、足早に去っていった。

「……」

　はああああ……。

　何か、一気に膨大な情報が入ってきて、もういろいろ混乱してしまっているけれど。

　……リリィ。いろいろ、言われてしまったよな？

　ちょっと慮って、声を掛けてみる。

「リリィ……大丈夫？」

「何がですか？」

　え。

「何が、って……だって、あれだけいろいろマークⅢから……。何とも思ってないの？」

「それは、私がいろいろと間違った認識を持っていたせいです。マークⅢはそれを指摘してくれたんですから、感謝しなければいけません」

「……あれだけボロクソ言われて、恨んだりしないの？」

「自分は間違っている。そう親切にも教えてくれた相手を、どうして恨みに思ったりしなければいけないんですか？　それは正真正銘、逆恨みというものです。恨むべくは、自分の至らなさでしょう」

「……」

　うーん。

　リリィは、強いんだね……。僕だったらとっとと、くじけていじけてしまうけれども。

　やっぱりどこか、頭もそうだけど、心の構造までもが違うのではないだろうか。

　……うーん……。

「それよりも今は、これまでの事ではなく、これからの事を考えなければいけません」

「これから、の事？」

「私がこれから、マスターにどう対処すべきか、です。それにはまず、マークⅢの置き土産へ正式な回答を用意する事ですが……」

　そこで、待ってましたとばかり、松平瑞穂がリリィへと言い募る。

「やっぱり……私が」

「まだ言いますか？　あなたが死ぬ理由は、まったく無いんですよ？」

「無いわけじゃ……ないし」

「いいえ。あなたは死の理由を二つ提示しました。オリヒコが死ぬのは耐えられないからその代わりに。身の破滅に絶望したから。そうでしたね？　私はこの両方を、きっぱり否定します」

「そんな事が……できちゃうの？」

「可能です。まず、あなたやオリヒコが私のために死んでもらう必要が無いのは、さっきマークⅢへ言った通りです」

「でも……欠陥がどうとか……あの人、言ってたし」

「そうだよ。僕も、リリィが暴走して人類の敵になる、みたいなありがちな展開だったら嫌だよ？」

「オリヒコ、ミズホ。今それを考慮する必要はまったくありませんし、そもそも知らない状態で対策なんて立てられるはずがありません。そういう事は、知った時に何とかすればいいんです」

「それは、そうだろうけれども……」

「まあ実は、その欠陥について、マークⅢから得た情報の断片から、思い当たる可能性が一つ、あるんですが……」

「え。わかるの？」

　もちろん僕には、皆目見当もつかない。一体この子は、どこまで深読みというものができるのだろうか。

「どんなの？　リリィ」

「……言えません」

　え。何、それ。

「それじゃあ不安しか無いよ……」

「しかしオリヒコ、それはあなたの云うような、周囲への甚大な被害が発生したりするようなものでは、おそらくありません。その点では、安心してください」

「それじゃあ何も安心できないよ……」

「いずれにしても、まだ根拠の薄い推測の段階ですから、その意味でも言えません。そしてもし、それが本当に重大なものであったとしても、それは私の問題です。ですからあなたたちに、命を諦めてもらう義理は、これっぽっちも無いんです。オリヒコが死ぬ必要も無ければ、ミズホがその身代わりになる必要もありません」

「でも」

「それに、ミズホが私の欠陥の件で命を投げ出す動機は、身の破滅の絶望による死の一石二鳥を狙ったものでした。つまりこちらの理由を否定すれば、そちらの理由についても根拠が限り無く薄弱になります」

「それは、そうかも知れないけど……」

「そしてその絶望について、私はさっきこう言いました。活路は存在する。これはいわゆる励ましではありません。それならその言葉は、きっと活路は拓ける。そんな感じになるはずです。しかし私は単なる事実として、活路の存在を指摘したんです」

「リリィちゃん、それは……無理じゃないかな？　お金だよ？　大金だよ？」

「とにかくそれで、訊きたい事があります。ミズホ、あなたの家の負債額を教えてください」

「え」

　……額？

「それはちょっと、わからないけど……凄いたくさん、って事は確かだよ？」

「正確な数字が知りたいです。あなたのお父様かお母様に今すぐ連絡を取って、それを訊き出す事はできますか？　今すぐ、です」

「……やって、みるけど」

　松平瑞穂はケータイを取り出すとダイヤルし、しばらく何事か話し込む。それが終了すれば、リリィへと報告した。

「すぐにはわからないって。計算してメールで教えてくれるって……でも、それ知って、どうするの？　どうにかできるの？」

「私はできると考えていますが、それは金額を知ってからです」

　ええと。ちょっと何か、違和感。

「ねえリリィ」

「はい？」

「ええと、そういうのって校長を突っつくとか、そういうやりかたで攻めるんじゃないの？　金額が何か関係あるのかな？　って思うんだけど……」

「校長自身で、高利貸しをやっているわけでもないでしょう。それに、裏取引というものが成立してしまっている以上、ミズホのご両親も責められてしまいますから、正攻法で解決するわけにはいきません」

「あ……そっか。……あれ？　でもじゃあ、どうするの？」

「ですから、それは金額を知ってからです」

　うーん……馬鹿にはわからん。金額によっては何か切れるカードがあるとか、そういう事なんだろうか。

　僕の疑問をよそに、リリィは続ける。

「今はそれよりも……ミズホ。これから私とオリヒコを、あなたの家へ案内してもらう事はできますか？」

「え、うち？　どうして？」

「実は少し、困った事になったと思っています。オリヒコは私のせいで、命の危機に晒されています。当初は今とは状況が微妙に違いましたが、とにかくそれで私は彼の傍で彼を守る事、そのために彼の部屋に滞在する事を決めました」

「あ。そういえば、一緒に住んでるって話だっけ？」

「はい」

「同棲、かあ。すごーい。何か……進んでるね？」

「ともあれ今また、私のせいであなたまでが、命の危機に晒される事になってしまいました。私はあなたの事も、守らなければいけません」

「あ。守ってくれるんだ？」

「はい」

「じゃあリリィちゃんって、そんなに強いんだ？」

「相手によりますが、それなりに」

「それなりに、かあ。すごーい。何か……カッコイイね？」

「ただ、そのためにはあなたにも、オリヒコと私の傍に居てもらわなければいけないんですが……彼の部屋は、三人で生活するには狭すぎるんです。特に寝床が、どうにもなりません」

「あ。それでうちに？」

「はい。あなたは社長令嬢ですからそのお宅には、少なくともオリヒコの部屋に比べれば、多少のスペースがあると考えました。やっかいになるのが無理なら、これからホテルを探してそこを仮の宿にしますが、そこへはあなたにもついて来てもらう事になります」

「ううん、大丈夫だと思うよ？　客部屋もちょうど二つあるし」

「そうですか、それはよかったです。移動してしまうと、すぐには必要無くてもいずれかは引越が必要になりますから」

「いらっしゃい。じゃ、駅行こっか」

　ちょっと待った。

　どうも話が、勝手に進んでしまっているけれども……。

「あー……ちょっと待ってリリィ？　それじゃあ僕も、松平さんの家に？」

「そういう事になりますね」

「なら……僕の引越は決定事項、なのかな？」

「そうですね。それはもう、仕方ありません」

　そっか……狭いなりに、愛着はあったんだけどな。

　しかし、彼女の家へちょっとお邪魔するとかいう話なら、何となく甘酸っぱさがあるけれど。お世話になるとまでなってしまえば、どうしても構えてしまう。いいのかな。

　と、僕のそんな考えをまたぞろよそに、リリィはさらに言い出した。

「ただ、一旦は彼女の家へ落ち着いても、また再び転出する事になると思います」

「どうして？」

「私は、マンションを探すつもりです。それには時間が掛かるので、とりあえずは彼女の家に間借りさせてもらいます」

「え、リリィちゃん何で？　ずっと居てもらう事も、多分できると思うよ？　まあそれは、借金が何とかなったらの話なんだけども……」

「あなたのためですよ？　ミズホ」

「ええ？　私は全然構わないよ？」

「そういう事ではありません。私が何を基準に物件を探すと思いますか？　立地でも居住性でも、値段でもありません。遮音性です。だからアパートではダメで、マンションです。戸建てでもいいですが、それは手続き的にも時間的にも難があります」

「……音？」

「あなたの声が問題なんです。少なくともあなたの家では、気兼ね無くオリヒコとセックスするわけにはいかないはずです」

　……。

「ちょっとリリィ！」

「いやあ、リリィちゃん……それは。私はその、そういう事……進んでしたいほうじゃ、ないし……まあええと、宮前くんに望まれる……ならもちろん別だけど、そんな話になってもラブホとか、行きますから……」

　このセリフで説得されてくれればよかったんだけど、もちろんリリィはそんなタマじゃあないし、そしてそれどころかとんでもない事を言い始めた。

「それが頻繁であってもですか？」

「え。えええええ」

「リリィ！　人を色魔みたいに云うな！」

「否定しますか？　あつかましい。ミズホ、オリヒコは私と出会う前まで、しばしばマスターベーションを行っていたんですよ？　その頻度も毎日必ず、多い日には五回も六回も」

　ちょっ！

「……ろっかい……」

「リリィいいいいいいいいいいいいいいいい！」

「その時何を……いえ、誰を想い浮かべていたかは想像に難くありません。それは、受け止めてあげなければいけないと思いませんか？」

「……ふええええ……」

　何なのこの暴露プレイ？

「松平さん！　受け止めてくれなくていいから！」

「なら、オリヒコ。あなたはマスターベーションを続けますか？」

「……リリィは何でそんなにエッチなんだよ……」

「言いませんでしたか？　私は、欲には正直であるべきだと考えています。私自身、知識欲については知っての通りですし、もし私に性欲の持ち合わせがあれば、私はとんだ淫乱になり得ていたと思いますよ」

「……はあ……」

　その可憐な顔で、私はとんだ淫乱とか言わないでくれ……。

「というよりも本当に、私は近日、性欲に目覚めるかも知れません。その時には、オリヒコ。あなたにはきっと、覚悟してもらう事になりますよ？」

　げっ！　本気ですか！　っつーかしかも、そうなっちゃう可能性って全然低くないでしょ！　ちょっと助けてよ松平さん！

「あー、そっか……もしそうなったら、宮前くんの事……どう共有していくのかとか、考えないといけない、のかな……？」

　えええええ！　逃げ場無いのかよ！

　っつーか……その。乱れまくっちゃってるリリィの様子を、思わず想像してしまい。いや、それを実際に目で見てみたいというのはもちろんあるんだけど……男だし。いやいやいやいやいや、その想像が頭から離れないんですけど……。どうにかなりませんか……どうにかしてください……。じゃないと……あ、あ……あ。

　……あーあ。

　反応してしまった……さっきまで深刻な話だったのに……もう男で居るのイヤだ……。

　そんな僕の不穏を知ってか知らずか、リリィはさらに話を続けた。

「私はそれなりにお金を持っていますから、ラブホテル通いをする事はできます。あるいは部屋の機密性だけを考えれば、ホテル住まいでも問題ありません。しかし私は、お金を湯水のように使うつもりは無いんです」

「それならなおさら……マンションとか無駄なんじゃないの？」

「そうでもありません。きっと私はもう、マスターの元へ戻るわけにはいきませんから。それに私はもう、マスターの元へ戻るつもりもありませんから。どこか、居場所にできる拠点が、私には必要なんです」

　あー。こっちが本当の目的だったか。

　何かリリィって、本当に言いたい事を後ろに回すような話しかた、するよね。

　だけれども……。

「それにしたって家賃とか、どう……」

　その時、松平瑞穂のケータイが鳴動した。

「あ、お父さんからだ。計算できたのかな」

　そう言ってケータイを操作していた彼女は……一瞬にして蒼白になった。

「……無理」

「何とありましたか？」

「ダメ！　こんなのどうにもなんないよ！　私やっぱ、もう終わりだよ！」

「総額はいくらだったんですか？」

「……リリィちゃん……やっぱり私を、殺してください……」

「ミズホ！　……ケータイを、見せてください」

　松平瑞穂は、その画面をこちらへ向けた。そこには、扱い慣れない桁数の数字が表示されている。大金なのは一目でわかるが、額がすぐに把握できない。

　￥９，５８１，６０４，０００─。

　そんな感じの数字だった。

「およそ九十六億円、ですか」

　リリィ……どうするの？　これ。彼女が言う通り、いくら何でもどうにもならないでしょ？　宝くじ当てまくったとしても到底追い付かないだろうし、これを何とかできるような裏ワザっぽい切り札なんて無いように思えるけれども？

「よかったですミズホ、あなたが死ぬ理由はきれいに無くなりました」

　……へ？

「リリィちゃん？　こんな大金、どうにかなっちゃうの？」

「はい、どうにかなっちゃいます。この額でしたら、即金で支払う事ができますよ。全額私が、肩代わりします」

　……。

「ええええええええええええええええええええええええええええええ？」

「はあああああああああああああああああああああああああああああ？」

　ちょっと待ってよ！

　さっき九十六億って言ったよね！

　九十六億って、九十六億でしょ！　九十六億で合ってるよね？

　しかも何か、即金とか聞いた気がするけれど？

「リリィ、ちゃん……？　何で、そんな……」

「……リリィのマスターに、出してもらうとか？」

「いいえ。私が肩代わりする、と言いました。マスターも貧乏というわけではありませんが、きっと私のほうがお金持ちですよ？」

「どうしてそんな大金を……リリィが？」

「はい。私は、コンピュータプログラムも勉強しました。そしてその成果を確認するために、実践の題材に選んだのがオンライントレーディングなんです」

「それで一山、当たっちゃった？」

「一山どころではありませんが、とにかく当たっちゃいました」

「ちょっとそれは……運がよすぎるというか、むしろ都合がよすぎない？」

「盲点をうまく突いたんです。そもそもプログラムとは、予定の事です。行事の演目予定なんかをそう呼びますよね？」

「あ……うん、そういえばそうだね」

「つまり、プログラム通りに動くコンピュータは、予定された動作しかできないものなんです。ですから一般的にあるトレードシステムは、予定外の事態が発生した時に間違った処理をさせないために、その決済に人間の承認を必要とするように作られているんです」

「まあ、そうするしか……無いよね？」

「しかしそれは、人間が判断を下すまで処理が保留、遅延してしまうという事でもあります。私はそこに隙があると考えて、全自動のシステムを構築してみたんです」

「全……自動？」

「はい。既存のシステムでもある程度の自動化は果たされていますが、それでもまず何にどれほど投資するかくらいは人間が決定しなければいけません。私はそれすら自動化しましたが、このシステムは私の思惑を超えてうまい具合に稼動してしまいました。どんなトレーダーにも先んじる事ができ、裏をかく事ができ。結果、私は膨大な資産を手にする事になったんです」

「はー……」

「ただ、どんなによく出来ていても予定は予定ですから、私があらかじめ想定しなかった事態が訪れてしまう前に、そのシステムは停止させました」

「……やっぱり凄いな、リリィは。でも、全自動って……本来、人間が状況を見ないと判断できないものまで、プログラムにしちゃったんでしょ？　そんな事、どうやって？」

「そうですね……ここでトレードやプログラムについて詳しくは語れませんし……そこはまあ、とにかくいい感じになるように組んでみた、としか」

　……。

　天才、なんだ。

　リリィはこんなに傍に居るというのに、とても遠い存在であるという実感はさらに強まってしまった。

　うーん、リリィ自身がこちらに懐いてくれているだけに、しかしこれは、どうも……。僕がもっとガキだったら、素直に手放しで褒める事ができたのかも知れないけれども。

「……もしかして私たち……とんでもない偉人と、お近付きになっちゃいました？」

「そうでもありません。私はマスターが端末に設定した年齢フィルタを、とうとう突破する事ができませんでした。マスターのそれは、神業と呼んで差し支えありません。それに……お金なんてものを持っていても、何にもなりませんよ？」

「え、えええええ？　そんな大金あったら、欲しい物何でも手に入っちゃうんじゃあ？」

「殺人兵器が愛を知る方法。それはお金で買えますか？」

「……あ」

「私に物欲はありませんが、それだけはどうしても欲しいと思います。そしてそれが手に入らないなら……こんなものを持っていても、何にもなりません」

「そっか……ごめんね？」

「いいえ」

　松平瑞穂が申し訳無さそうに言うも、リリィはかぶりを横に振って流した。

「ただ宣言しておきますが、私は将来どんなにお金に困ったとしても、同じシステムをもう一度構築して動作させるような事は、絶対にしません」

「え、どうして？　そんなに効率よくお金が集まるんなら……あ。それとも、将来だと同じ仕組みじゃ通用しないとか……」

「違います。ああいったシステムは、通用するしないではなく……作ってはいけないものだったんです」

「それはまた、どうして？」

「トレードで得られるお金というのは、本物のあぶく銭なんです。つまり、何ら生産をしないで発生するお金です。そんな摩訶不思議な事で、どうしてお金が稼げてしまうかわかりますか？」

「ええと……物に対して、お金を出して買う人が居るから、だと思うけれど……」

「かつては、本来はそのはずだったんです。しかし残念ながら、今は違います。いつの間にか市場というものは、物を扱う場所ではなく、お金を扱う場所に変わってしまっていているんです」

「物、ではなく……お金？」

「はい。だから、買った人は儲けるために、買った物をさらに他の誰かに売るんです。もちろん損をするわけにはいきませんから、基本的に買った値段より安く売りはしません。それが繰り返されれば、どういう事になってしまうと思いますか？」

「……あー。どんどん値段が釣り上がるんだね？」

「そうなんです。それも、その商品自体の価値にお構い無しに、です。その値段にも限度というものはありますが、しかし高騰する品目はトレーダーたちのその日の気分などというものによってころころ変わってきます。結果として末端の消費者へ、きちんとした物がきちんとした値段、きちんとした量で供給されなくなったり、あるいは作り手が商品の価値に見合った利益を得られなくなったりするんです」

「何か迷惑な話だね、それ」

「さらには、その商品には株式証券も含みますから、トレーダーの気分のみに左右された見掛けだけの株価変動で経営戦略を狂わされたり、真面目にコツコツ頑張っていた企業がある日突然、いわれの無い理由で倒産に追い込まれたりまでしてしまうんです」

「……そんな事になっちゃうんだ……」

「一方で、そんな甚大な代償まで支払って得られるものは、少し運がいいトレーダーの懐を暖める事だけです。それによって経済は活性化していると云われてはいますが、事実彼らは自分たちが経済を動かしているのだと言って威張り散らしていますが、私からはどう見ても、資産家の間だけであぶく銭が行ったり来たりしているだけのものとしか窺えません」

「ええとつまり……金持ちだけしか、得をしない？」

「はい。だから彼らが経済を動かしているというのが本当だとしても、その経済が動いている意義は皆無なんです。こんな、搾取をするしか能が無いシステムは……あってはいけないんです」

「そうなんだ……まあ要するに、地道に頑張るべしって事なのかな？」

「ごめんなさい。本当に申し訳ないんですが……冷酷な事を言います。それは、まったく正解ではありません」

「え。えええええ」

「では正解は何かとは、私もまだ答えを見付けられてはいないんですが、つまりその地道に頑張っている人たちを食い物にするのが、市場というシステムなんです。何か対抗策を考えなければ、オリヒコ。目に見える所でもそうでない所でも、あなたは搾取され続けますよ？」

「……何それ。うーん……それが、金持ちってやつか……」

　あー。何て云うのかな、こういうの。

　義憤？

　だってこれ、あんまり汚すぎるでしょ？

　まあ、どんなに憤った所でリリィにも答えを思い付かないような難問、僕に解くのは不可能に近いだろうけれど。

「答えの見付からない話は、この辺で切り上げておきましょうか。一応、そういった問題がある事だけは、頭の片隅に留め置いていてください。いつか芽吹くかも知れません」

「あ、うん。……でもこれ、すんごく悔しいね？」

「そうですね。ところで、ミズホ」

「……いやあ、リリィちゃん凄いね？　何言ってるかはよくわからないけど、凄い事言ってるのはよくわかるよ！」

「……そうですか」

　あー。えーとー。

　ねえ松平さん、それじゃあ凄いって事もわからないんじゃないの？

　流石にリリィも突っ込んでないよ？

　……面白いけど。

　うーん、松平さんって別に成績とか悪くなかったはずだけれど……もしかしてアホの子だったりするの？　こういうのって成績とは関係無いものなの？

　問題勃発。何かさっきの冷酷な社会の話とか、どうでもよくなっちゃったよ。

「ところで。お父様はご在宅なんですか？」

「あ……えっと。まだ、かな？　十時か十一時には帰ってると思うけど」

「そうですか。それではその時にお会いして、もう一度きちんと数字を確認したら後日、振込手続きをしましょうか」

「でも……こんな大金、貰っちゃっていいのかな？　私、何も返せない……」

「所詮あぶく銭です。気兼ね無く受け取ってください」

「ありがとう……私もう、リリィちゃんに一生頭が上がらない。おかげで私もう、エンコーなんて事しないで……って、あー！」

　いきなり声を張り上げる、松平瑞穂。

「……どうしたの？」

「その、お客さん、結構たくさん取ってたんだった。断りの書き込みしとかないと……」

「え。そんなに、たくさん？」

「いや、もう本当に足りなすぎたから……ほら、援助って付いてても交際なんだから、一度きりって事になるのはあんまり無いみたいなんだけど、そのお客さんもそんなに多くない余裕を削るわけだし、長く付き合えば値切られちゃったりもするみたいだし、一人から援助してもらえる額って限られちゃってるでしょ？」

「なるほど……でもどうせみんな下心なんだから、そんなの放置でいいと思うけど……」

「いやあ、それは不義理すぎるっしょ？　よくないと思うよ？」

「うーん……まあ、それはそうかもね」

「大丈夫。リリィちゃんみたいにプログラムとかは全然ダメだけど、文章打つのは結構得意だよ？　あ、今度、私が書き溜めたお話とか読ん……あ」

「……お話？」

「あああああやっぱ今の無し！　私は何も言ってない！　宮前くんは何も聞いてない！」

「あはは」

　アホの子だ。うん、そうだ。

「……あ、そうそうそれで、リリィ。あのさ……その事なんだけど」

「何の事ですか？」

「こう言っちゃあ何だけど……どうして最初から、何とかできるって言ってくれなかったの？　松平さんがお客取ったのもそのせいなわけで……」

「その事ですか。私は……それほど親切ではありませんから。私は大金を手にした事でそれほど得をしたとは感じていませんが、だからといってそれを理由に浪費をしようとも思えないんです。今は、彼女を守る必要が出ましたから」

「そっか……」

「……オリヒコ」

「何？」

「私を……怒っていますか？」

「そんなわけ無いでしょ」

「ごめんなさい……」

「いや、だから、謝んなくていいんだってば」

「……そうですか」

　ええと……こっちもアホの子なのかな？

# **《４》狂乱**

　目の前にある紙切れに書かれた、文字が信じられなかった。それは期末テストの成績表で、そこには軒並み９０以上の数字が並んでいたのだ。うち二つに至っては、１００とある。

　小学校を卒業したが最後、７０以上の得点には縁が無かったはずだった。

　もちろん、採点済みの答案は先立って返却されているのだから、それはあらかじめわかっていたはずではあるのだが、いざこうして一覧として眺めてしまうと、これはもはや。

　何が何だか、わからない……。

　確かにあれから、リリィからいろいろとみっちり叩き込まれはした。しかしそれも別に、徹夜するほど長時間だったというわけでもない。

「大切なのは毎日継続する事であって、長時間連続する事ではありません」

　そんな事を言っていた。

　そのリリィの教えかたとは驚いた事に、関連するものは教科書に書いていない事まで絡めて、何でもかんでも教え込むというものだった。知識量が増えるのであれば、覚え切れなくて効率が下がってしまうのではないか、と思ったけれども。

　つまりリリィが言うには、問題に対して必要な解法が出てこないのは、その問題と解法をつなぐ情報が欠落しているからだ、との事。だからそれをまんべんなく補完すれば、覚えたはずのものが出てこないような事はそうそう無い。そういう寸法らしかった。

　しかし、それがどれだけ完璧だったとしても、あの短期間のうちに高校入学以来の範囲を総ざらいしたわけだから、何か抜け目があるだろうと思っていた。それでもすべての答案のすべての項目を埋める事はできたので、まあ赤点だけは無いかな、程度の認識だった、の、だが……。

　まさか、こんな結果になってしまうとは。

「宮前くん……凄すぎだよ？」

「いや……僕にも、何がどうなっているのか……」

「でも実力でしょ？　カンニングしたわけじゃないよね？」

「それは、まあ、そうだけれども……」

「オリヒコ。よく頑張りました」

　そんなねぎらいを掛けてきたリリィには、少し前に制服が支給されていた。夏服のそれは半袖に短目のスカートで、手足が隠れるのを嫌う彼女にも充分許容範囲だったようだ。

　それは、とても似合っていて。

　初めて見た時にはちょっと見とれてしまったが、そういえば松平瑞穂はあまり焼き餅を焼かない。それどころか一緒になって見とれていたから、ケンカにもならない。僕も随分いい身分だと思う。

　その彼女はリリィに話し掛ける。

「リリィちゃん流石。私もやせ我慢してないで、一緒に教えてもらえばよかったかな？」

「ミズホ。あなたはどうして辞退しましたか？」

「あー、いやあ……そんなに高得点に興味は無かったし、勉強漬けになるのも何となく嫌で。でも、こんなの見せられちゃったら……私って現金なのかな？」

「明日の終業式をはさんで、明後日から夏休みです。せっかく住まいを共にしているんですから、これから少しずつ一緒に勉強していきましょう」

「よろしくお願いします、リリィ先生！」

「ミズホ。先生とは云えないでしょう。同時刻の生まれなんですから」

「あ。何かそれ、宮前くんにも似たような事言われたよ？　ってかそれが、私が決定的に口説かれちゃった理由の一つなんだけども」

「それは、知っていますよ」

「え。えええええ。どうしてそれ……あ。それ……み・や・ま・え・くーん？」

「あ、いやその……」

「ミズホ、私がそれを知ったのは別経路ですから、オリヒコを咎めないでください」

「別ですと？　誰かなー、それ……って、他に誰も居なかったじゃん！　えええええ、別経路ー？」

　松平瑞穂は両手の五指を髪に突っ込んで頭を抱えつつ、悩み入ってしまった。うーん、何だかなあ。可愛いけど。

　っつーか、はっきりわかったのは今だけど、やっぱりあの告白もどうやってかして覗いてたんだな、リリィは。まあそんなの、今となってはどうでもいいんだけどさ。

「ところで住まいといえば、昨日の夜に驚くほど都合のいい物件を見付ける事ができました。ネット経由で見学を申し込み済みですから、今日これから行きましょう」

「へえ！　見付かったんだ。リリィちゃん、探すの苦労してたよね？」

「そうですね。探す範囲を大胆に広げて、それに伴って転校をしてしまう事も検討していたんですが、その物件がちょうど昨日、入居者募集になったんです」

「そっか。その物件はどれくらい都合がよかったの？」

「戸建てに比べれば手続きは簡便ですが、それでもマンションへの入居には一ヶ月から三ヶ月くらい掛かるものです。ところがそこは即入居が可能との事で、契約を交わせば一週間を待たずに入居できるものと思います」

「へええ」

「未成年者のみの入居も許可されていますし、間取りは……これはむしろ上等すぎるんですが、まあ仕方ありません。ライフラインは随時開通可能との事ですし、近隣の商店や交通も充実しています。後は実際に見学してみて、遮音性やその他の事に問題が無いか確認するだけです」

「なるほどー。ちなみに、場所はどこなのかな？」

「すぐ近くです。最寄りは隣駅ですが、ここからだと自転車のほうが早いかも知れません。そこに決まったら自転車も買いましょう」

「おおー。何かワクワクしてきましたー」

「それと、ミズホ。あなたのノートＰＣに私が作成したマンション関連の資料やブックマークが、かなりの量になっています。それは大丈夫でしたか？」

「あ、それは全然問題無いよ？　ＯＫＯＫ。それよりも……」

「約束は守ります。あなたの文書フォルダにはまったく触れていません」

「うん。私もリリィちゃんが約束破るとか思ってないけど、それでも頼みますよ？　あれ見られたら私、多分普通に死ねるので」

　ホント、どんな文章書いているんだろうなあ？

　ちなみに今、僕たちは三人でつるんでいるのだが、もうその周りに人だかりは出来なかった。

　どういうわけか松平瑞穂が実にあっさりボロを出し、リリィに加えて彼女までもが僕になびいてしまった事がとっとと広まって、あーはいはいごちそうさまと呆れられてしまったのである。その松平瑞穂はふああああ！　とか悲鳴を上げ、僕にもリリィにも周囲にも、泣きそうになりながら死に物狂いでごめんね？　を連発していたけれど。

　まあ、冷静に考えれば謝罪の必要性なんかどこにも無く、そして僕たちも別にクラスメートから嫌われてしまったわけでもない。むしろ気を遣って、適度な距離を置いてくれているのだ。みんな素直じゃないからそんな事は決して口にしないが、こんなに多くの好意を寄せられたのは生まれて初めてであり、それはもう感謝としか云いようが無かった。

　それでも当初、男子どもにはぐるりと取り囲まれたものだから、袋叩きにされてしまうのかと思ったのだが、それ以上の仕打ちを受けた。

「おい宮前、なかなか景気がいいな」

「イチゴのショートケーキってやつか」

「お蔭で俺たちのジャイロは短絡して、精度が甘くてしょうがない」

　何その無駄な連係プレイ。

　っつーか、みんなそれなりに微笑をたたえているが、目が笑っていない。不気味すぎる。

「な……何だよみんな……」

「いいやいいや。別に何も」

「ここでみんなで寄ってたかって、とか大人げ無いからな？」

「ああ、大人げ無い」

「うむ。卑劣の極みである」

「だからみんなでお前をどうしようとか、そういうのは無いぜ？」

　ああ、これはアレだ。

　真綿で首を絞めるアレだ。

「じゃあ僕は何で囲まれてるんだよ……」

「俺たちは親切だからな。忠告に来た」

「……忠告？」

「そうだぜ？　俺たちでは何もしない、とは一応決めたけどなあ」

「ああ、何しろ事が事だ。個人的に突っ走らない奴が居ないとも限らん」

「気を付けてたほうがいいぞって思ってな」

　だからお前ら、目が笑ってないだろうが。

「あのさ。一応訊くけど」

「何だ？　宮前。親友の頼みだったら聞いてやるぜ？」

「……。ここに、個人的に突っ走らない奴は居るの？」

「おいおいおいおいおい。宮前、俺たちの仲だろ？」

「そうだそうだ、そんな訊くまでも無い事を訊くなんてなあ」

「うむ。他人行儀である」

　どう見ても突っ走る気満々です、本当にありがとうございました。

「ね……ねえみんな、ここは一つ穏便に……」

「……上履きに画鋲の写真を仕込んでやるから覚悟をしておけ」

「ひ」

「……一日一通不幸のメールを送ってやるから覚悟をしておけ」

「あ、や」

「……神社の木に呪いの人形を打ち付けてやるから覚悟をしておけ」

「うっ」

「……私怨手帳を作ってお前の名前だけ書き込んどいてやるから覚悟をしておけ」

「そ、そんな」

「……ゲームのキャラにお前の名前を付けてわざと何べんも死んでやるから覚悟をしておけ」

「ちょっ」

「……お前の教科書の人物画に漏れ無くダンディひげを書き込んでやるから覚悟をしておけ」

「げっ」

「……お前の財布の五円玉を全部一円玉に両替してやるから覚悟をしておけ」

「勘弁してよ！」

「……近所のネコにお前が大悪人であると教え込んでやるから覚悟をしておけ」

「やめて！」

　まあそんな、背筋が凍るほど恐ろしい事をいろいろ言われたわけだが。

　最後の極めつけだけは、本当に極めつけだったのだ。

「……夜道でブッスリやってやるから覚悟をしておけ」

「……え」

　何て、言った？

「ちょっ、お前……」

「お、おい……マジか？」

「俺は本気だ。絶対にブッスリやる」

　ざわ……ざわ……。

　いや、ちょっと待って。コレ本当に待って。

　いくら何でもまずいでしょ。誰か何とかしてよ。

　そういうのはリリィだけで充分だから。シャレになんないから。

　さすがにこれはアレすぎて、みんなも真っ青になってオロオロし始める。

　あっコラそこ一名、心許ない足つきでドジョウすくいを踊るな！　あっコラそこ一名、血相変えて床のキズの数を数えるな！　あっコラそこ二名、うつむきながらジャンケンを始めるな！　藻前ら餅つけー！

　そうしてみんなが右往左往し、本気で戦々恐々とした所で、ついにそいつは高らかなる宣言をしたのだった。

「ただし……刃物とは限らない物で、腹とは限らない箇所を……だ」

　……。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「か、漢だ……！」

「特攻を決意した青年将校に、敬礼！」

「さらなるごハッテンを、心よりお祈り申し上げます！」

「ジーク・アベ！　ジーク・アベ！」

　ちょっとちょっと！

　それって何が行われるんだよ！　一体どうなっちゃうんだよ！

　アッー！　とか言わなきゃいけなくなっちゃうのかよ！

　やだよ！　普通に死ねるよ！

　刃物のほうがなんぼかマシだよ！

「……男子ってば……ヒソヒソ」

「……イヤねえ……ヒソヒソ」

「……でも薔薇の花もなかなか……ヒソヒソ」

「……確かにあの二人なら……ヒソヒソ」

　いやあああああああああああああああああああああ……。

　やめてそこの女子……せめてヒソヒソ声は聴こえないように出して……。

　っつーか！　何でヒソヒソって擬音を言葉に出して言ってるんだよ！　女子たちまでが突っ走る気満々なのかよ！　確かに松平さんは女子にも人気だったけど！

　はあ……もう、いろいろ高度すぎるよ……。何かコレだと、高度って言葉の意味が変わっちゃいそうだけど……酷い精神汚染だってばさ。

　まあ、その場はそんな感じで散々ながらも無事の元に散会したわけだが、今に至ってももちろんみんな、そんな事は実行していない。ただもし、僕がリリィとも松平瑞穂ともエッチしちゃった事がバレたら確実に、漏れ無く粛々と遂行されるだろうから、それだけは命懸けで隠し通した。

　駅への道の途中。

　まだ怪我の完治はしていないものの、僕の肩を借りずに歩けるようにはなったリリィが、話し掛けてくる。

「ところでオリヒコ。成約の場合、書類の揃わない私が契約主になるのは難しいです。それはあなたになってもらいますから、そのつもりで居てください」

「えっと……そういうの、高校生でも大丈夫なの？」

「はい。契約主が未就業の場合は断られる事が多いようですが、今回の物件については了承が得られました。それにこれは分譲物件で、支払いは一括で行います。家賃を担保する必要も融資を受ける必要も無いので、保証人が必要ありません」

「あー、いや、保証人とかよくわからんけども」

「難しい事はありませんよ？　約束のお金が支払われない時に代わりに支払う人、というだけの取り決めですし、そもそも今回それは不要なんですから」

「あ、そっか」

「ただ、あなたは未成年ですから、契約書に対して親権者の署名捺印が必要になります。契約書を提出する前に、あなたのお父様かお母様にそれをしてもらわないといけないので、話を通しておいてください」

「うーん……どう話せばいいんだろう？」

「思い付きませんか？　それなら私が話します。不動産業者から契約書を預かったら、それを持ってあなたの実家にお邪魔して、そのまま署名捺印してもらいましょう。あなたの里帰りも果たせて、ちょうどいいのではないですか？」

「え……うちに、来ちゃうの？」

「物が物ですし、郵送でやり取りというわけにもいかないでしょう。それに、電話で話はさせていただきましたが、それでもやっぱり実際に会ってご挨拶したいと思います。ミズホもそうではないですか？」

　いや……彼女は母さんにあの時の声、聴かれちゃってるし。顔を合わせづらいんじゃ？

「あー、いや、まあ、その、あの、えっと……あはは」

　ですよねー。

「いずれにしても、契約書には署名捺印してもらわなければいけませんから」

「その、契約書って何をどう書けばいいのかな？　難しそう……」

「私もマンションを買った経験が無いので詳しく知りませんが、それなりに調べてありますし、それに不動産業者はプロです。必要な事はわかるまで教えてくれるはずですから、心配要りません」

「そうなんだ」

「それよりも面倒ですが、税金の話があります。これは本当に面倒なので、心して聞いてください」

「え……税金？　未成年なのに？」

「いいえ、未成年という理由で免税になる事はありません。あなたたちが納税を求められないのは単に、所得が規定額に達していないからですよ。現に子役スターなどの高所得者には、通常通り課税されています。そもそも、所得に応じて減免される税金の種類すらも限られていますから、あなたたちは普段から消費税などを支払っているはずですし、その還付も受けていないはずです」

「そういう、もんなのか……」

「はい。それで今回のマンションですが、私がその代金を支払ってしまうと、契約主であるあなたには贈与税が課せられてしまいます。今回の物件の値段は四千百万円ですから、その税率は５０％です。つまり税額は二千五十万円にのぼるんですが、もちろんあなたには支払えませんよね？」

　げ！　マジっすか……。

「贈与税って、そんなに高いの？」

「累進課税ですから、額が多ければ多いほど税率も上がります。両親などからの贈与では免除になる場合もありますが、それは対象者が二十歳以上で額が一千万円以内の場合に限られますから、今回のケースでは適用になりません」

「じゃあ、どうするの？」

「私のではなく、あなたの名義で支払えば、購入の際に贈与税が課税される事はありません。そのために代金を一旦、あなたへ預けてしまいます。銀行の口座は持っていますか？」

「あるけど……でも、それでも贈与って事になるんじゃあ？」

「はい。ですから、かなり余分に預けます。要はあなたの手元に、必要な分だけ残ればいいんです。一千万円以上の贈与税は一律５０％ですから、必要な分の二倍以上を渡しておけば足りる計算です」

「なるほど。でも、何かもの凄く損させられてる気が……」

「税金とはそういうシステムなんですから仕方ありませんし、国の将来を考えるならその支払いは絶対に渋ってはいけません。とても大切な事ですよ？」

「あ……いやまあ、そうだろうけどさ」

「ちなみに、その申告と納税は来年になりますから、残金には絶対に手を付けないでください。実は、納税の期日に猶予があるのを利用して、贈与を毎年繰り返す自転車操業をしてしまったほうが安く上がるんですが、それには時間が掛かりすぎます。私が……ずっとあなたの傍に居られる保証はありませんから」

「……あ……」

　リリィが、居なくなってしまう……そんな事は、考えたくなかった。

「それから、贈与の証拠を残しておかないと後で面倒な事になる場合がありますので、私とあなたの間で贈与契約書を交わしておきます」

「え。また、契約書？」

「これはそんなに複雑ではありません。贈与者が贈与して受遺者がそれを受諾するという一文と、その受け渡し方法を普通の紙切れに書いて、それに日付を入れて両者が署名捺印すれば、その紙切れは贈与契約書として成立します」

「そんなもんなんだ？」

「はい。もっとも、贈与の証拠としてはそれ以上、書くべき情報がありませんが……。それから、受遺者が未成年の場合は、やっぱり親権者の署名捺印が併せて必要になります」

「あー……面倒臭いね、未成年ってやつは」

「後は、そうですね。マンションは不動産ですから、購入する時には不動産取得税というものが、さらには毎年、固定資産税というものも課せられます。やはりあなたにこれらの支払いは難しいと思いますので、その分もあらかじめ預けておきます。これらの税は自治体が管轄ですから、税務署で申告する国が管轄の贈与税とは扱いが別になります。気を付けていてください」

「何かいろいろ……うーん。さっきリリィが言った通り、本当に面倒だね……」

「なおざりにして追徴課税されると、もっと面倒ですよ？」

　そこへ、松平瑞穂が割り込んでくる。

「……あの。リリィちゃん？」

「何ですか？」

「うちにも、お金……振り込んで、くれたよね？　それって……」

「当然、課税されますよ。もちろんその分も計算して、ついでにこれから再出発するための資金も含めて、余分に数字を決めました。贈与契約書もきちんと残してあります」

「あ、何だよかった……。リリィちゃん、何から何までごめんね？」

「いいえ」

「あのさ、気になるんだけど。リリィの貯金ってどれくらいあるの？　そんなにジャブジャブ使って大丈夫？」

「当面は問題ありませんが、額が気になりますか？」

「いやまあ、そりゃあ」

「一応釘を刺しておきますが……みだりに分けてあげたり、しませんよ？」

「そんなつもり無いって。わかるでしょ？」

「そうですね、ごめんなさい。大まかな額としては……今回のミズホの会社の件で十桁へ転落してしまったんですが、それでも普通に暮らす分にはまあ、十二分かと」

　えっとそれは……十億単位かよ！　あれだけ払って、まだそんなに残ってるのか……。

「って、リリィ？　そういうの稼ぐ時も、税金取られたりするんじゃないの？」

「はい。所得税が課せられますが……」

　リリィは、少し考え込んだ。

「ん？」

「そうですね。いい機会なので少し、説教を売ります」

「……説教？」

「損にはならないと思うので、まあ聞いてください」

　おお……また何か、凄い話が来るんだろうか？

　と思ったら、やっぱり凄い話だった。

「まずはあった事を話しておきますが、実は……その支払いには悩ましい問題があったので、脱税をしてしまったんです」

「え。えええええ」

　いきなりこんなだもんね……。ちょっとこれは、ジャブどころじゃない。

「別にその支払いに、抵抗があったわけではないんです。ただ私には、正式な名前がありません。名前が無ければ申告ができないので仮名を用意する必要があるんですが、私はこんななりですし、日本国籍を持っているわけでもありませんから、日本人名を名乗るわけにはいきません」

「それは……そうだね」

「しかしそうすると私は、外国人という事になってしまいます。普段なら税務署もそんな事はしませんが、私の場合は額が額ですから、申告を行えば私は不法就労の疑いで通報される恐れがありました」

「不法就労？」

「知りませんでしたか？　どこの国でもそうですが、外国人がお金を稼ぐには許可が要るものです。そして当然ながら私は、外国人登録証もパスポートも持ち合わせていません。つまり結果的に、私は不法入国の疑いで逮捕される事になるんです」

「不法、入国……？」

「いわゆる密入国の事ですよ」

　うわ、どんどん話が膨らむな……。

「それは例外無く起訴されますし、私には在留資格がある事も正規の入国手段を取った事も証明のしようがありませんから、間違い無く有罪判決が下ります」

「ゆ……ユーザイ……」

　はっきりそう言葉にされてしまうと、これはどうにも重い。

「そうすると私には、懲役か禁錮か罰金、あるいはそれらを複合した刑事処分が課せられますが、それはあまり問題では……いえ。罰金はともかく、懲役や禁錮では健康診断が実施されるので悩ましかったんですが、それよりももっと悩ましかったのが行政処分……つまり、退去強制です」

「退去……強制？　って？」

　何か、知らない単語がどんどん出てくるなあ。

「日本国外へ身柄を追放するという事です。強制送還とも呼ばれますが……」

「あ、それは何か聞いた事あるね」

「そうですか。ただ、その対象者に国籍があるとは限りませんし、国籍があっても母国へ移送されるとは限りませんから、送還という言葉は不適当だと私は思います。とにかく、一度その処分が下されれば初犯でも五年間は再入国が許可されませんし、そもそも私には正規のパスポートを取得する手段がありませんから、前科者が偽変造パスポートで入国審査を通過するのが不可能な日本には、もはや尋常な方法では二度と戻ってくる事ができないんです」

「はああああ……もう、めちゃんこ大ごとだね……」

「それでは私もマスターも困りますから、どうしても脱税を働かざるを得なかったんです。もちろん脱税は犯罪ですが、しかし私は既に何人もの敵と戦い、屠ってきました。この手はもう、汚れ切っています。進んで法を破るつもりは毛頭ありませんが、その必要があれば躊躇うものではありません」

「うーん……犯罪をしないと馬鹿を見るなら、やったほうがいいんだろうけど……」

「もう一つ、やっぱり額が額ですから、逮捕、あるいは判決の時点で、私の事は大々的に報道されるでしょう。それも困ります」

「何かリリィちゃん、いろいろありすぎですわ……私、感覚がどうにかなっちゃいそう」

「僕もだよ……」

「あ。でも……ええと、何かリリィちゃんなら、こっそり入ってくるくらいできそうな気がするんだけども……難しいのかな？」

「確かにここは島国ですから、海を自力で渡って侵入するという手段が無くもありません。ただそれは、はっきり言って命の危険が大きすぎます。難民のように、このまま日本へ渡らなければ死んでしまう、というレベルの強い動機が無い限りは間違っても選択できない手段ですし、第一そういった難民たちはおおむね海上保安庁に発見されます。難民の場合はそれでいいかも知れませんが、前科者の場合はそういうわけにはいきません」

「そっか……でもそれなら、こっそり他の船とかに便乗して、とかじゃあダメなのかな？」

「いい選択とは言えません。積み荷に混じって密航、という手段はよく考えられがちなんですが、積み荷がそもそも生存環境に置かれていない事がほとんどですし、そうでない場合は抜け目の無い警備体制が敷かれますから、あまり現実的な手段ではないんです。それが成功するのは映画の中だけ、と言ってしまっていいでしょう」

「ううん、難しいんだね……」

「それに、それをどうにかかいくぐって、あるいは乗組員を篭絡して、渡航だけは果たせたとしても結局は、日本の税関が待ち受けています。国民の危機意識が低い日本の入国審査がむしろ、ずさんであるはずがありません。公的機関に見付かってはいけないという制約がある以上、確実性に疑問のある手段を選択するわけにはいかなかったんです」

「そうなんだ……。でも、リリィちゃんって凄いね？　私だったら、そこまで考えられないよ？　絶対」

「そうですね……それは、絶対に計算違いが許されない。そんな心境、そんな状況だったからでしょうか。それでも、絶対に間違えないというような事があり得なくて、課税されるという事を認識しないまま現実環境で、トレードシステムを動かしてしまったのがそもそもの落ち度なんですが……」

「リリィちゃんでも、そんな計算違いするんだねえ」

「とにかくその状況では、脱税をしてしまうのが一番の選択肢だったんです。そんなわけで私のお金は、完全に清いものとは言い切れません。申し訳無いですが」

「あー、いやまあ、それで松平さんは助かったわけだし」

「うんうん。リリィちゃん、本当ありがとね？　……あ。でも……これ知ってて黙ってるのって……犯人隠匿とか、そういうのにならないのかな？」

「大丈夫です、そうでなければ話したりしませんよ。実際に犯人が捜査の手から逃れるための具体的な手助けをしない限り、それには該当しません。それは例えば、隠れ家を提供するとか、逃亡資金や旅券を提供するとか。そんな感じです。オリヒコやミズホは私に滞在を許可しましたが、捜査をさえぎる目的ではありませんでしたから、隠れ家には相当しないでしょう。それは単なる、住まいの提供です」

「何か、凄く抜け道っぽいね？　それ」

「それはどうあれ、私は犯罪者です。でも、オリヒコやミズホにまで、そうなって欲しくはありません。脱税の方法などはどうか、絶対に訊いたりしないでください」

「あー……うん……」

　犯罪者、ねえ。こんな外見をした子がそうである事も、こんな性格をした子がそうである事も、まったく信じられないのだけれども。

「ところで説教に移りますが、ここで一つ例題を設けます。私のではなくマスターの収入だったという事にして、代わりに納税してもらう。そんな手段も考えられますが、これはクリーンでよいやりかただと思いませんか？」

「あ……なるほど。うん、どうしてそうしなかったの？」

「騙されましたね？　オリヒコ。期待通りの回答、ありがとうございます」

「……」

「要するに、所得税というものは所得を得た者が支払わなければいけないもの、という事です。ですからこれは、私が脱税をするという事実に何ら違いが無いばかりか、マスターが納税をするのにもかかわらずマスターのほうまでが脱税の共犯という事になってしまう、非常にまずい悪手なんです。それなら、お金をまるまる温存しつつ私だけが脱税してしまうほうが、はるかにクリーンで得をする。そういう事になります」

「……はー……」

「つまり、何か不正を企てようと思ったらそのためには、相当に注意深くなくてはいけません。それには優れた頭脳がどうしても必要になりますが、それが実際にあれば犯罪が実行できてしまうんです。ですからあなたたちは、願わくば……馬鹿で居てください」

「……あはは……」

「真面目な話ですよ？　それが、無知の知というものです。それをわきまえておく事によって、できない事はしないと切り捨てる。あるいは、仕方無しにするにしても充分な準備の上で臨む。そういった事ができるようになるんです」

「あー。そう言われると何か、馬鹿が凄いように聴こえるね……」

「ちなみに不正をするというのは、そこに悪意が無ければいいというものではありません。今の例で云えばむしろ、納税をちゃんとしようという善意しかありませんよね？　しかし裁きというものは事の善悪ではなく、事の正否によって判断されるものなんです」

「えっと……正否と、善悪って、どう違うの？　おんなじ事な気がするけど……」

「正否とはルールに沿っているかどうかという話で、善悪とは人がどういう印象を持つかという話です。例えば、酷い虐待を繰り返して、何度罰せられても改心せず、どうやっても制止できない者を殺害する。こういった事は決して悪行ではなくて、むしろ被害を迅速に食い止める善行だと、そうは思いませんか？」

「あー……そっか、なるほど。人殺しはダメってなってるけど、必ずしも悪い事とは限らない、ってわけか」

「そういう事です。ですから害意がすなわち悪意、という事はまったくありません。ところが、悪意ではなく害意を持つ事のほうが正しくないとされているので、罪に問われてしまうんです。逆に言えば、悪意を持つ事はこれといって間違っているわけではない、という事になります」

「うん、まあ、そうなんだろうけど……何か、凄く納得いかないね？」

「はい。ただ、悪意を持つだけでは何も起こらないのに対して、害意を持てば被害が発生する。その点においては、あながち間違った判断基準とも云えませんが……とにかく不正をするというのは、悪意の無いものであっても結果的に正道を踏み外す事になりかねませんから、やろうとしてはいけません。法を破るというような事は……正道にはどうやっても這い上がる事ができない、私のような者に任せておけばいいんです」

「……リリィ……」

「ただ、法廷というのは名称に反して必ずしも法一辺倒ではなくて、善悪についても多少は加味して判断していくものです。法に定めの無い要素をいろいろ考慮して、刑を減軽する事を情状酌量と云いますが……」

「あー。酌量の余地無し！　とか、決めゼリフっぽいよね」

「そうですか。そもそもの所で、単純に法と合致するかしないかの判定をするだけでしたら、そういった事はコンピュータのほうが得意です。人間が、それも複数の裁判官が判事を務める必要はありません。一応そのような救済システムはありますが、しかしそれでも、それを期待して犯罪を行う。そういう姿勢は、やってはいけないと決められている事をやるのに罰だけは逃れようという態度ですから、むしろ罪は重いと云えます」

「それはまあ、リリィの言う通りだけど。でも、そもそも必要も無いのに、犯罪者になろうとか思わないかなあ……」

「そこは、少し話はそれますが、非常に難しい問題なんです。ほとんどの犯罪者は何らかの理由によって、過失犯であればそれをせざるを得ない状況に、故意犯であればそれをせざるを得ない心境に、それぞれ置かれているものです。そしてその原因は、本人によるものとは限りません。だからこそどんな犯罪者にも裁判を受ける権利があるんですが……」

「そっか。犯罪者なんてそのまま罰しちゃえばいいのに、って思ってたけど……」

「人が人を裁くとは、どういう事か。この話は実は、法曹界でも揉めに揉めていて、決着がついていない議題なんです。少なくとも、目には目をという単純な杓子定規で片が付けられる話ではないんですが、現状の裁判では審議が尽くされているとは云い難い所がありますし、どうも世の人は不必要な偏見を持っていて、犯歴があるというだけで非難したり遠ざけようとしたりします。世知辛い、と云う以外にありません」

「あ、えっと……それは、リリィの事、なの……？」

「いえ、私の犯行は発覚していませんし、そういうわけでもありませんが……そうですね。酌量に期待するといえば私もかつて、考えた事があるんです」

「え。何を？」

「私は普通ではない。それでも、私はこういう境遇ですが、当たり前に生きたいので人権を与えてください、と。出る所に出て、誠意を持って正直に告白して、心から訴えて懇願すれば、もしかしたら私も社会に受け入れられて、人と同じように暮らせるかも知れない、と。そんな事を考えました」

「……あ。あー……そっか」

「人外というものが理不尽に迫害されたり、研究と称して実験材料にされたりしてしまうのはきっとフィクションだけの話で、現実はもっと寛容であるはず。だから、恐れずに自分の存在を明らかにしよう。そんな風に思い立ったんですが……」

「できなかった、の……？」

「遅すぎたんです」

「遅すぎ……？」

「その時私は既に、人を殺めていたんです」

「……あ……」

「それが複数人であれば酌量はほとんどされませんが、私の場合はさらに両手で数えられないほどでしたから、自分を明らかにすれば私はまず死刑になりますし、そうしてしまうのは惜しいという事で、本当に実験材料などにされかねません。諦めざるを得ないと理解した時、私は少なからず絶望を感じてしまいましたが……いいえ、関係無い話でしたね。愚痴でした」

「……リリィ……」

「……リリィちゃん……」

「まあ、後悔は先に立たないという事です」

「……」

「ところで本題に戻しますが、さっきの例では善意しか無い、と言いましたがそれは誤りです。厳密に云えば、うまくやろう。そういう欲が根底にあります。欲それ自体は前に言った通りそれほど悪いものではありませんし、それが無ければ世の中は成り立ちませんが、うまくやろうとする欲だけは害悪しか産まないものなんです」

「え……そういう欲、普通に持っているもんだと思うけれど……。そういうのがあるから世の中、うまくいってるんじゃないの？」

「いいえ、きっぱり有害でしかありません。その主なデメリットは、うまくやろうというお題目だけに捉われて、手順やそれがもたらす結果について深く検証しなくなる。そもそも、目標の設定を誤る。あるいは軌道に乗りそうだという時に、その状況に酔って盲目になったりする。そんな感じの、概して配慮や注意ができなくなるという事ですが、現にオリヒコが今、その状態にありました」

「……あー……」

「ですから、うまくやろうとはせず、慎重にやろうとしてください。この二つの言葉は意味が似ているようで、その実態は大きく異なります。あちらを立てればこちらが立たない、という感じでうまくやる事が不可能な場合はたくさんありますし、うまくいかない時に不必要な怒りや悲しみが発生するという事もあります。そんな一方でメリットはもう一切、皆無です。もしこんな欲をあなたたちが持っているとしたなら、そんなものは今すぐ捨ててしまってください。この世には、うまい話も方法も、存在しません」

「……なるほど……」

　含蓄深い事この上無い。一体、リリィの頭の中はどうなっているのか。

　そんな疑問もよそに、リリィの説教はまだ続く。

「それは不正に限った事ではなくて、例えば宝くじなんかがそうです。あれは、買わなければ当たらない。そう云われていますが、はっきり断じます。買っても当たりません」

「え。えええええ。はっきり言いすぎじゃ……」

「でもリリィちゃん、あれってきちんと当選番号とか発表して、って風にちゃんとやってるよね？　それなら、絶対当たらないって事は無いと思うんだけれども……」

「いいえ。確かに当選番号が存在する以上は当たるとは云えますが、それはこうして外を歩いている時に、いきなり隕石の直撃を受けるのと同じくらいの確率です。そんな事態にはまず、遭遇しません」

「そんなに確率、低いんだ……」

「えーでもでも、それは一等を狙えば、だよね？　四等とか五等とかなら結構、出るって聞くけども……」

「いいえ。そもそも宝くじなどの賭博のたぐいは、主催者側が儲かるようにきっちり計算されています。だから末等であっても、当選する確率は相変わらず低いんです。余程の強運を持ち合わせていなければ、およそ損をしますよ。お金を払って落胆を買う、そんな馬鹿げた話がありますか？」

「でもさ、夢を買うものだ、とも云われてるよね？」

「そうそう。万が一当たっちゃったら、とか……じゃあ当たったら何買おう、とか……」

「いえ、それも。考えてみてください。夢を買う、つまり当選するかも知れないと想像したらなぜ嬉しいのか。それはミズホの言う通り、普通はお金が欲しいからで、お金が欲しいのは何か買いたい物があるからです」

「だよね。何がいけないの？」

「いいですか。得られない公算が大きいお金によって求めるような物なら、確実に手に入るわけではないんですから、どうしても欲しかった物だとは云えないんです。だとすればそれは、無くてもおそらく困らない物という事になりますから、求める必要も無いんです。もちろんそれは物に限った事ではなくて、低収入ゆえに安定した生活を求める場合でも、理屈は同じです」

「あー……まあそれは、そうかも……」

「そして、もし幸か不幸か高額当選してしまった場合でも、貯蓄をする例はほとんどありません。それに当選者情報というのは、立派な金づるです。それは陰で売りさばかれますから、その情報を買ったハイエナのような業者に、取り囲まれる事にもなるんです」

「え……そんな業者居るの？　っつーか、そもそも当選情報って勝手にバラされたりするの？」

「宝くじビジネスとはそういうものです」

「マジっすか……」

「そうして当選者は、手当たり次第に物を手に入れる事になるわけですが、それは渇望していた物ではないのでのちのち手元を離れてしまいます。そうはならなくても、本当に欲しかったわけではない物に囲まれていた所で何にもなりませんから、そんなものは当選しなかったのと本質的に違いがありません。つまり、宝くじは買っても当たらない。もっと言えば、当たっても当たらない。そういう事です」

「……はー……」

「それに実際のところ、高額当選者は比較的高い確率で、破産してしまうそうです。どうしても、浪費に歯止めが利かなくなってしまうんです。お金が降って湧くのは、あまりいい事ではありません」

「そうなんだ……」

「結局、本当に価値があるものとは、お金によって手に入るものではないんです。それはセレブと呼ばれる人々を見れば明らかで、一見して優雅できらびやかなようではありますが、彼らは本当に有意義な体験をほとんどしていません」

「え、それは……どうかなあ？　贅沢をする、ってのも幸せな事だとは思うけど？」

「例えば登山。挑戦した事はありますか？」

「何か突然だね……無いけど」

「ミズホはどうですか？」

「あー、私も、無いねえ。そういえば」

「そうですか。登山家へ向かって何故山に登るのかと尋ねれば、そこに山があるからだと答えが返ってくるでしょう。そんな話を聞いた事はありませんか？」

「あー。うんうん、あるある」

「何か気取っちゃって、って感じはするけどね？」

「いえ、これは気取るとか格好をつけるとか、そういう話ではありません。そう聴こえてしまうのは、これがきちんとした説明ではないからですよ。つまり、それは確かに登る理由ではあるんですが、実はそのもっと先に本当の目的があるんです」

「え。どういう事？」

「そこに山があるなら、どうして登らなければいけないのか、という事です。そしてその答えは非常に単純で、数々の難所をクリアして登頂せしめるという、その達成感を得るためなんですよ。つまり、きれいな景色とか美味しい山の幸とか、功績に対する賞賛などといったものは、あくまで副産物でしかないんです」

「あー。そういう事だったんだ」

「ところがセレブたちはそこへ、ヘリコプターを使って乗り付けるような真似をするんですよ。馬鹿げていると思いませんか？」

「……いやいやリリィ。それは流石に、無いんじゃない？」

「まあ、実際にそこまでの暴挙へは出ないとしても、命懸けの真剣勝負であるはずのものを、万難排して単なるレジャーにしてしまうくらいの仕業は平気でやってのけるでしょう。現に、例えば富士山へ登るのに、五合目まで自動車を使うのは一般人の間でさえ、当たり前になってしまっています」

「んー。でもセレブって、あんまり死んだり怪我したりするわけにもいかないんじゃないの？」

「その条件は、一般人だからといって特に変わったりしませんよ。いくら冒険しに行くとはいっても、怪我上等で臨む人は居ません。それともオリヒコは、わざわざ怪我をしに山へ出掛けますか？」

「あー、いや。それは無いけれども……」

「逆に、だからと言ってその危険を排除してしまえば、当然ながら達成感も何もあったものではありません。そうして、本当の目的を見失ったまま副産物だけを享受して、やがては飽きてしまう事になるんですが、オリヒコ。ミズホ。果たしてそれのどこが贅沢なんですか？」

「……あ」

「あああああ！　そっか！」

「わかりましたか？　お金を使うとはそういう事で、そしてそれはまったく有意義ではないんです。もちろん登山を始めるにしても資金が必要でしょうし、だから最低限の水準というものは存在します。しかしそれ以上は……もちろん病気や事故などの、いざという場合に対する備えというものは必要ですが、それ以上を求めるのは……愚かな事でしかありません。お金がある事は、何らかの横着を働いて価値を見失うための手引きにしか、ならないものなんです」

「そっか……。まあ、お金は必要な分だけあればいい、って云うけれども……」

「それではまだ云い足りません。お金は、必要以上にあってはいけないんです」

「い、いいいいい？　それはまた、極端な……」

「え、えええええ……リリィちゃんそれじゃあ、それこそマンションとか、高い買い物ができなくなっちゃうんじゃあ……」

「いいえ。そういった大事なものこそ、欲しくなった時点で計画的に必要な資金を蓄えるべきなんです。つまり、お金がある程度集まった時点で何か手頃なものを、という選びかたでは結局、その物件が本当に欲しい物ではなかったという事になってしまうんです」

「あ……そっか」

「それによって、額に妥協して不満の出るような場所を選んでしまったり、欠陥住宅を掴まされたりして、買い物に失敗するんです。実は今回のマンションも、そういった不安を抱えているんですよ？」

「そうだったんだ。難しいんだねえ……」

「でもリリィ。そうすると、本当に欲しい家が見付かっても買えないんじゃあ？　先に誰かに買われちゃったりするでしょ？」

「そこは競争ですから、仕方ありません。それに、もし心から欲しい物件だったとしたら、その買主に譲ってもらえないか交渉するべきだと思いませんか？　一点物であればあるほど、誰かに買われてしまったら終わり、という事はありません」

「まあ確かに、本当に欲しいなら……そうするよね」

「どうしても欲しいとはそういう事のはずですが、しかしこの言葉は何故か、値切る時に使われます。逆ではないのかと思われるものがまた、ここにも存在するわけですが……」

「あー、そういえばそうだね。確かにそう云うけど、どうしても欲しいならいくらでも出すはずだよね」

「それはつまり、お金ほど大事なものは無いと考えているという事で、しかし事実は逆です。お金は、云われているほど価値のあるものではありませんし、より正確に言えば、大事にすればするほどその価値が下がってしまう、不思議な存在です。そしてもっと言えば、お金が無い状態でも買い物をする事はできるんです。そのためにあるのが融資、つまりお金を借りるという事です」

「でも、家を買えるくらいのお金なんて、そうそう借りれないでしょ？」

「もちろん、お金を借りるのにもある程度の担保が必要になるんですが、そもそも担保とは信用の事です。つまりお金よりもまず、信用を得なければいけないんですよ。逆に、信用さえあればお金が無くても、何でもできてしまうんです。他にも、老後のために貯金をする事が立派な事のように云われていますが、信用。絆。そういったものが得られていれば、実は一銭も無くても困りません。ちなみに絆とは、義理の事ではありませんよ？」

「信用、絆。かあ……」

「もちろん現実には、そういったものを得るのはお金を得るより難しいものです。しかしだからこそ、お金なんかよりもずっと、価値があると思いませんか？」

「なる、ほど。そうだね、うん。よくわかった」

「それにしても、お金は大事にするほど価値が下がる、かあ。ホントに不思議だね？　リリィちゃん」

「そうですね。ちなみにまったく関係無い話なんですが、面白いお話があるんです」

「え？　どんな？」

「ある子どもが、親からアイスを買ってもらいました。しかしその子どもは不覚にも、せっかく貰ったアイスを取り落として、台無しにしてしまいました。その子どもは大泣きしてしまい、親は仕方無いなともう一度同じアイスを買い与えました。その子どもは、さっきのアイスがよかったんだと駄々をこねて、泣きやみませんでした」

「あはは、あるある……って、私それやったよ……」

「うん、僕もやった……」

「同じ子どもが、親から今度はお小遣いを貰いました。しかしその子どもは不覚にも、せっかく貰ったお小遣いを取り落として、失くしてしまいました。その子どもは大泣きしてしまい、親は仕方無いなともう一度同じ額のお小遣いを与えました。その子どもは、ありがとうと大喜びをして、泣きやんでしまいました」

「……あ……」

「……そうだよねえ……あのお金がよかったとか、確かに無いよねえ……」

「はい。面白いと思いませんか？」

「うーん。面白い……っつーか、何か象徴的だね……」

「うん。もの凄い意味深、だね……」

「では閑話休題、そろそろ話を締めましょうか。わかっているとは思いますが、さっきの登山の話は、欲しい物は自分の手で掴まなければ意味が無い、という事の比喩です。そもそもの所で、賭博のたぐいが法律で禁じられているのはそういった理由からのはずなんですが、その一方で宝くじなんかの運営を許可するなど、あまりに片手落ちに過ぎます」

「それはまあ、そうだよね。それは絶対おかしい」

「そうだねえ。私、宝くじとか絶対買わない」

「それがいいでしょう。第一、宝くじの配当金というものは、当選しなかった人の純粋な損失によって発生するものなんです。そんな不誠実な方法によって手の届かない大きな幸運を求めるよりも、小さくても身近な幸福を育てていく努力をしたほうが、きっと人は豊かに暮らせます。この世には、うまい話も方法も、存在しません。……以上です。うまくやろうとするなという例はまだまだ挙げられますが、結論が似通うので省きます。いかがでしたか？」

「……おおおおおおおおおおー！」

　松平瑞穂は、惜しみ無い拍手をリリィへ贈った。

　何か人生のうち、リリィによるこの説教が、一番ためになる授業だったように思う。

　が……一体リリィはどうして、ここまで達観しているのだろうか。一体リリィは今まで、何を思って生きてきたのだろうか。

　やはりリリィは……遠い。

　そんな事も思わせられた。

　結局のところ僕には、物件の良し悪しなど判断できなかった。あの狭いアパートに比べれば、どんな部屋でも別天地だからだ。しかし、リリィはその遮音機能についての一点のみで満足し、松平瑞穂は二十畳の広いリビングと六階のベランダからの展望をいたく気に入り、その部屋は即決となった。

　その足で不動産業者の事務所へ行き、小難しい説明を受けてから、ええと……区分所有建物売買契約書、なるものを受け取った。説明のほうは本当によーわからんのだが、リリィが聞いてくれていたから大丈夫だろう。

　ただ、書類に目を通したリリィは、こんな言葉を漏らした。

「なるほど、こういう事ですか」

「ええ。ご不満でしたら、今回はご縁が無かったという事に致しますが」

「どういう事？　リリィ」

「こちらの要求があまりに通りすぎだと思いました。特に、未成年者による購入と入居を受け付けるというのがその最たるものでしたが……問題はこれです」

　リリィの指差したそれは……。

　う。読めねえ。

「瑕疵担保責任。物件に何らかの瑕疵があった時に、損害賠償や契約解除をする事を保証するものです」

「かし、って読むんだ。何かおかしいね？　あはは」

　駄洒落か。

「この契約書では、その責任を持たないとなっています。これは売主が直接取引する時には、買主の同意が得られれば放棄できるんですが、仲介業者が間に入る場合は、最低二年間の担保義務が定められています。それなのにこんな、法廷で争えば確実に折る事ができる特約を、あえて付けるからには……何らかの隠れた瑕疵が、あるという事です」

「瑕疵、って何なの？」

「早い話が、欠陥や落ち度の事です。しかし、見学の時に設備的な欠陥は見当たりませんでしたし、この契約書には他にこちらの不利に働きそうな記載はありません。そうするとつまり、何らかの心理的瑕疵があるんですね？」

「お客様は、お若いのに目利きでらっしゃいますね」

「教えてください。そちらには説明の義務があるはずです」

「申し訳ありません、今ここで私の口から申し上げるわけにはいかないんです。どうしてもとおっしゃるのであれば、オーナー様と掛け合ってみますが……お力になれるかどうか」

「そうですか」

　無表情ながら間違い無く不服であろうリリィに、しかしその担当者はニッコリ笑ってみせる。

「少々私語を漏らしますと、先代より前の住人の件につきましては、ご案内の必要が無いというのが通例でして」

「！　……ありがとうございます、あなたはそのオーナーのかたと違って良心的ですね」

「恐縮です」

　えええええ？　今、何のやり取りをしたの？

　っつーか担当者、何か馬鹿みたいにニッコニコ嬉しそうだけど？　ツーカーが成立したから喜んでるって事？

「リリィちゃん、どういう事なの？」

「ミズホ。オリヒコ。どうしますか？　きっと私たちが未成年という事で、バレても訴状を提出したりなどしないと、足元を見られたんでしょうが……これは、事故物件です」

「事故物件？」

「この物件において、人が不幸な死にかたで死んでいるという事です。自殺か、孤独死か、殺人か。その原因はわかりませんが……」

「……あー……」

　そんなもんがあるわけね、世の中には。

「直前の住人ではないようですが……あるいは、その住人がそれを知って逃げ出したので、慌てて売り急いでいるのかも知れません。物件の値段がこれといって低くないあたりに、狡猾さや巧妙さなど感じますが……」

「……タヌキだねえ……」

「どうしましょうか。私は構いませんが、オリヒコとミズホはどうですか？」

「僕も……あんまり、気にはならないかな？　直前でもないんでしょ？」

「では、ミズホは？」

「うーん……いやまあ、気にならないって言ったらちょっと嘘になるけど……でも、これ断ったら、次探すの大変でしょ？　また足元見られちゃうかも知れないし……うん。私も多分、大丈夫」

「本当に大丈夫ですか？　契約前に知ってしまった場合は、後になって瑕疵として訴える事はできませんよ？」

「じゃあ……何か出たら、リリィちゃんが守ってください」

「何も出ないと思いますが、ミズホがそれでいいならそういう事にしておきましょうか」

　そうして手付けを決め、契約書を手に不動産業者の事務所を後にすると、リリィが僕の口座へ購入資金を移してきた。だがしかし、通帳に記されたその数字は何度見直しても、現実のものとは思えなかった。何しろ、高校生の預金通帳に八桁、それも九桁に届きそうな数字が並ぶって普通、あり得ないだろう。まあ、僕が自由に使う事ができるお金ではないので、気にしても仕方が無いのだが。

　リリィとその贈与契約書を準備した時、それに対して何気にリリィは拇印、つまり指紋を押印していた。

　ハンコが無いなら、銀行の届け印はどうしているのか。そう疑問に思って尋ねたら、口座はもともとマスター名義のもので、そのための印鑑はちゃんとあるが、字面が署名と異なってしまうのでこの契約書には使えないとの事。

　その署名はリリィ・ウォーターとある。まあリリィの場合、どうしても本名を書く事ができないわけだが、これは別に本名でなくてもいいのだそうだ。つまり、本人が確かに署名したという事実だけが必要という事だ。だからタイプライトではダメで、直筆によるサインを要するとか。

　ちなみに二者間での契約書というものは、合意の無いうちに破棄されるのを防ぐために、二枚作成して両者がそれぞれ保管しなければならないらしい。もちろんその署名は、直筆でないといけないわけだから、そこだけはコピーができない。将来のために、勉強にはなったが……面倒のひと言に、尽きる。

　一方、マンションの契約書には恐ろしく様々な記入欄があったが、それらは既に不動産業者によって埋められていて、後はそれをよく確認して署名捺印するだけだった。その捺印もどうやら、普通のハンコでいいらしい。さっきの贈与契約もそうだが、マンションの購入契約などという大層な事には実印とかいう大層な物が要るのかと思ったし、そんな物を高校生の僕が持っているはずも無いからどーするんだろとも思っていたが、実印は購入のために銀行などから借金をする場合でなければ要らないらしい。肩透かしでも喰らった感じだ。

　他にも登記だの何だのと、またもや面倒な書類の手続きがあるとの事だった。あーもー、この世は書類で回っているんだなあ、と実感させられる。

　ただそれは、リリィが代行してくれるとの事だった。ありがたいのだがしかし、どうしてリリィはそんなにいろいろできるのか。ちょっと訊いてみたら、こんな答えが返ってきた。

「できる事はする。わからない事は尋ねるか調べる。それだけですよ？」

　うーん……。それはまあ、確かにその通りなんだけれども……。

　それを実行に移すのは、なかなか難しい事なんだよ？　リリィ。

　そんなこんなで、残すは二つの契約書に親の署名捺印を貰うだけになった。その話を親へどう伝えたものかと、僕がケータイ片手に考えあぐねていると、リリィがそのケータイを拝借していき、何事か話し込んでその通話が終了すると、僕と松平瑞穂へ言い渡した。

「明日、オリヒコの実家へお邪魔する事になりました。一泊という話になっています。オリヒコ、ミズホ、準備してください」

　終業式が終わってからの移動だったので、それなりに昼を回ったが、実家へ到着した時には母さんに迎えられ、まずは乾杯をという事になった。

「この二人の美女への祝福と、この阿呆が地獄へ落ちる事を祈って、乾杯！」

「かんぱーい！」

「……はあ。カンパイ……」

　そして今、刺身や天ぷらなどを中心としたいわゆるゴチソウが並べられ、乾杯の音頭を取ったのは前日の終業間際にいきなり有給休暇を申請するという荒業をやってのけたらしい上の姉である。父さんの姿だけはまだ無かったが、それを除けば大学生の下の姉。中学生の妹。一通りが集合していた。

　しかし、それにしても……これだけ頭数が揃って、男は僕一人だけか……。

　いきなり母さんに応対されてしまった松平瑞穂は真っ赤に染まり、それから今もガッチンガッチンに固まってしまっている。

　母さんは母さんで、そんな彼女にふふふふふふと微笑んだりしているわけだが。

　一方リリィは……無表情だからよくわからん。普通に質問されては普通に回答し、普通に食事している。

　無表情といえば、妹もリリィに負けじ劣らじの無表情で食べ物をガツガツ口へ放り込んでいるが、兄の僕にはわかる。これは怒っているな？　いやいや、お前は僕の彼女でも何でもないんだから、腹とか立てる筋合いじゃないだろ。

　下の姉は、上機嫌でビールとかグイグイやっている。おいコラお前、まだハタチじゃないだろ。僕も時々ワイン飲むしダメとは言わないが、せめて慎ましやかに飲めよ。

　順当に行けば酒を口にするのは上の姉のはずだが、こちらは母さんに似てアルコールが得意ではない。麦茶をチビチビやっては、僕に問い掛けてきた。

「ううむ。つまり弟よ。リリィ殿の話を総合すれば、瑞穂殿が本命でリリィ殿が二号さんという事でよろしいか？」

「いや……そこはちょっと、いろいろ複雑で……」

「しかしこの容姿を見れば、リリィ殿が二号さんというのはすんなり通らぬな？」

「っつーか、リリィを二号って呼ぶのはヤメテ」

「ほう。いかでか？」

「あー……いや、とにかくヤメテ」

「ふむ。さようか」

「っつーか何なんだよ？　そのしゃべりかたは……」

「弟よ。私は対応に困っているのだ。高校生の弟がいきなり、肉体関係を持ったという女の子を二人も連れ帰ってきたら……どー対応したらいいんじゃー！　しかも、しかもこんな、こんな美少女二人と来た！　けしからん、実にけしからん！　……私にゃー生まれてこのかた、そんな相手は……そんな相手はー！　……うううー……」

　知らんがな。

　轟沈した上の姉に替わって、妹が口を開いた。

「母さん……何かニイに言う事無いの？」

「ふふふふふふ。そうねえ、昔を思い出すわあ」

「……昔？」

「あら。昼間っからそういう話したいの？」

「……別に」

「まあ、そうね。一つ言う事があるとすれば……あと二年は、避妊をしっかりね？」

「……ダメだこの親、腐ってやがる」

　妹が食事に戻れば、今度は下の姉が僕へ話し掛けてくる。

「母さんが性におおらかで、びっくりしてる？」

「いや……それは、まあ」

「そこはあれだ。これだけ断続的に兄弟姉妹が生まれてるんだから、推して知るべしってとこなんじゃないの？」

「いや、よくわからんけれども」

「てか母さん、ずっと前だけど織彦の部屋で、イイモノ見付かったってエロ漫画見せびらかしに来たよ？」

「……ぶっ！」

「ヌード写真集とかエロ雑誌とかじゃなくて、エロ漫画、って所が織彦らしいよねえ」

「なっ、なっ、なっ……」

「あー。その様子じゃ、気付いてなかったんか。母さん優しいし、ちゃんと元通り戻してたんかな？　ナイショねーとも言ってたし」

「……むしろ優しくねえよそれは……」

「ちなみにかく言う私も今、彼氏二人居たりするぞ？」

「……は？」

「本命はもちろん一人だけだけどさ、あれだけしつこく迫られちゃあなあ。奴隷にだったらしてやってもいいぞって言ってやったら、あいつあっさりＯＫしやがった。言った手前、そんな返事されたら捨てるわけにもいかないじゃん？」

「……はあ。みんなそれ、知ってんの？」

「母さんだけは知ってたけど？」

「何で僕の話だけバレまくってるんだよ……」

「ふん。弟よ。私にまずあのような写真を送ってきたのが運の尽きだ。親戚中に転送しまくってやったから感謝したまえよ」

「だそうだ。よかったな織彦」

「よくねえええええええええええ！」

　親戚中に転送とか、お茶目って世界じゃないだろ既に。

　いや、第三者的にはそうなんだろうか？

「しかし妹よ。お前にも相手が二人居たとは初耳だが……その。ものは相談……」

「あん？　一人寄越せってか？」

「どうしてわかった？」

「わからいでか。まあ奴隷ちゃんのほうは、はっきり言ってあげてもいいんだけど……あんたにゃあ無理だと思うよー？」

「……そんなに変な奴なのか？」

「いんにゃ、無理なのはあんたのほう」

「なん……だと……」

「どことは言えないんだけど、何か残念な感じが……見てくれは別に、悪くはないんだけどねえ？」

「そっ、そんなっ……。私は……私はー！　……うううー……」

　あ。また轟沈した。

　チビチビやってるアレ、本当に麦茶なのかな。どうも、泣き上戸の酔っ払いにしか見えないんだけれども。

　そんなこんなで、ささやかな宴を過ごし。

　そのままお決まりのアルバム＆ビデオ暴露ショーなどを経て、夜を迎え。

　割と普通な夕ご飯を、食べ。

　ついでに、スイカとか食べ。

　食べながら、花火など嗜み……っつーか姉弟で激しく応戦し。

　その後は、適当にトランプなどに勤しみ……いや、何しろリリィはまんまポーカーフェイスで、だからそのゲームでは不動の王座を誇っていたけれど。

　そうやって過ごすも、しかしマンションの話は一切出なかった。まあそういう話は、父さんが帰ってから、という事なのだろう。あるいは姉妹たちには、その話は知らされていないのかも知れない。

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「……やめてよリリィ、そういうの本当に出しちゃうとか……」

「いえ、私も驚いているんですが……これはちょっと、いかさまでもしない限り、いくら出そうと思っても出せるものではありませんよ？　出る確率は、０．００１５％強です」

「完全に運かよ……どんだけ強運だよ……」

「……ふええええ……リリィちゃんって何かもう、憑いちゃってるんじゃあ……」

「魔物が居る、ここに居る……成敗しなければ……やられるッ！」

「リリィ……おそろしい子！」

「削除。削除。削除。削除。削除。削除」

　そんな感じでみんなでガヤガヤやっている……いや、ガタガタ震えているのかな？　とにかく遊んでいると、やがてこの家の主人は帰宅してきた。

「あ……父さん」

「織彦元気か？　久しぶりだな。ええと、松平瑞穂さん。それに、リリィ・ウォーターさんか。初めまして、こんばんは」

「あ……あの……こ、こんばんは……」

「こんばんは、お父様。お世話になっています」

「話は聞いたよ。むしろ、織彦のほうがお世話になっているとか。特に松平さんのお宅にはご迷惑お掛けして、申し訳無い」

「い、いえ、わ、私も……宮前くんには迷惑掛けてばっかりで……」

「私もオリヒコには、寄り掛かってばかりいます。こちらこそ申し訳ありません」

「おい織彦。どこでこんな出来た子たち、引っ掛けてきた？」

「いや……引っ掛けたというか……引っ掛かったというか……」

「この甲斐性無しめ。……ただ松平さん。少々苦情を言わせてもらえば、すぐに知らせてくれなかったのはあんまり水くさい。そのうちご挨拶に伺わせてもらうから、よろしくお伝え願えるかな？」

「あ……その、ご、ごめんなさい……」

「ああ、気にしないでくれるかな。一番悪いのは、何も言ってこなかったこの阿呆だ」

　ゴツン！

「痛いよ父さん！　父さんにもぶたれた事無かったのに！」

「お前は何を言っているんだ」

　父さんはそんな事を言いながら、今ぶん殴ったばかりの僕の頭をぽふぽふ叩いたりしている。

「まあ言えない気持ちは、わからんでもないがな」

「……」

　そういえば本当に、今まで体罰らしい体罰を受けた覚えが無い。とすると今のは、他所の人が居る手前の、パフォーマンスだったのだろうか。確かに、体罰はよくないとみんな口では言いつつ、実際には必要悪と認めてやっていたりするみたいだけれども。それについてよく、羨ましいとか何とか言われるし……。

　何か、難しいのかな？　そのあたり。そうしないと、甘い、とか思われるとか。

「さて。腹は減ってるが、その前に話は済ませてしまおう。三日月と冬空と雨鳥、悪いがお前たちは退場だ。部屋に行っててくれ」

「えー。ぶーぶーぶーぶー」

「いい歳して駄々こねてんな。行くぞー」

「ぎゃー！　みずちゃんリーちゃん助けてー！」

　下の姉は上の姉に引きずられるようにして、妹は無言で僕をにらみ付けてから普通に、二階への階段を登って行った。

　うんコレ、下の姉が一番長生きするパターンだよね？

「ま、座ろうか」

「あ、うん」

　父さん、母さん、僕、リリィ、松平瑞穂。五人、居間にある和室ローテーブルを囲む。

「まずは聞け、織彦。とりあえず、お前が何人の女の子と交際しようが、お前の人生だ。俺はそこには干渉しない。まあこの家は女だらけだったしな、お前にもいろいろあるだろう。俺も男だからな、それは理解する」

「うん……」

「ただ先に言っておくが、もしその事で何らかのお金が入用になった場合。つまり例えば、子どもが出来てしまった場合。それをどうするにしろ、うちからはビタ一文出さない。お金だけじゃなくて、手も貸さない。お前が自分でする事だからな。そこはよく考えて慎重に行動して欲しい」

「……はい」

「子どもを作ってはいかん、という事じゃあないからな？　しかし、結婚の資格が無い人間が子持ちになればとんでもない荒波を受けるのは想像できるだろうし、それに結婚できるようになってからでもだ。相当の覚悟が要るし、覚悟だけじゃなくて経済力も要るし、子どものために自分の時間すら投げ出さなくちゃいけない」

「……うん」

「複数の女の子を囲んでいるなら、子どもや結婚の問題はなおさら深刻だ。もちろんそんな事は煩わしいと言って捨ててしまうのもお前の自由だが、そんな無責任な事をするなら当然ながら勘当させてもらう」

「うん……」

「そんな重たい話をしたいのではなくて、今は単に恋愛ごっこを楽しんでいたいと言うんなら……まあその場合は、しっかり避妊しときなさい」

「……はあ」

　結局、そういう話になるんですか。

「本題だ。ウォーターさんがお前に、マンションを買ってくれると云う」

「リリィと呼んでください」

「あ、そうか。ではリリィさんね。……織彦、お前はもしかしたら、そんなお金が簡単に出せるのならそれでもいいかと思っているかも知れないが、これは大変な事なんだ。たとえ、リリィさんが進んで申し出ている事でも、だ」

　あー……すいません。確かにちょっと、そんな考えでした。

「リリィさんがマンションを丸ごと買えるくらいの大金持ちだと云うなら、なおの事だ。人間の欲には際限が無い。今はそうは思っていなくても、時間が経つにつれて他の何かも欲しくなってくる。自分で努力しないで何かが手に入るとは、そういう事なんだ。お前が乱れないでいられるか。差し当たりそんな懸念があるんだが、そのあたりについてお前の考えが聞きたい」

「……えっと……」

　考えって言われても……正直、何も考えていなかった。何を、どう言えばいいんだろうか。

　また頭が、空転し始める。

　そして、そこに割って入ったのはやはりリリィだった。

「申し訳ありません、お父様。口をはさませてもらいますが、今回の事は完全に私の都合で、オリヒコはそれに巻き込まれただけなんです」

「どういう事かな？」

「詳しい説明はできません。ただ、私はわけあって、オリヒコとミズホに付き合ってもらわなければいけない事になりました。マンションを購入するのも、その必要があっての事です。そしてそれは、天涯孤独の身で手続きに必要な書類が揃わない私に代わって、オリヒコに契約主になってもらうというだけの話で、本来は私の買い物なんです。ですから、オリヒコの考え、覚悟。そういう話は今回、あまり意味も意義も無いと考えます」

「んん。そうか」

「といいますか、そこにこだわられると私が困ります。捨て置いていただけませんか？」

「なかなかはっきり要求するね？」

「申し訳ありません。ただ、私はむしろ、オリヒコの信用よりも私の信用のほうが問題になると考えていたんです」

「つまり？」

「知り合って間も無い相手に、マンションの部屋を買い与える。あまり普通にある事ではありません。何か裏があるのではと、私とは一体どういう人物なのかと、そう真っ先に疑われるかと思ったんですが」

「ああ、それね。それも無いではないんだが、こういった話は身元がどれだけ確かでも、事情はそれほど変わるもんじゃない。あまり気にしても、俺は仕方が無いと思う」

「そうですか。お父様もなかなか、話の早いかたですね」

「まあ、ついでだから訊いてみるけどね。実際に俺がそういう質問をしていたら、リリィさんはどう答えるつもりだったのかな？」

「いえ……実は困った事に、明確な説得材料がどこにも無いんです。言った通り私は天涯孤独ですし、趣旨として信じてくださいという以下の話しかできないんですが……」

「なかなか卑怯な訴えかたをするね？」

「……卑怯だと、おわかりになりますか？」

「どこにも疑う余地が無い。裏があるなら嘘でも何でも、それらしい事を言うはずだろうしね。そう来られたらこちらは全面的に降参するしか無いんだが、これを卑怯と云わないで何を卑怯と云うのかな？」

「おっしゃる通りです。ですが、これは逆に云えば、信用する余地も無いという事です。そういった場合、話も聞かずに門前払いをするのが普通ではありませんか？　そうされた時こそ、私のほうが全面的に降参するしかありません。どうしてそうなさいませんか？」

「なるほど。リリィさんはつまり、俺をそんな神経の太いつわものだという事にしたいんだね？　しかし残念ながら、俺は小心者でね。自分から恥をかぶるのなんかどうやっても無理だし、何故そうしないのかとまで言われたらなおさら、どうなるかわからん。もう恐ろしくて、そんな事は絶対にできない」

「それは……失礼しました。しかしお父様、さっきも言ったように今回の事は、私の都合です。つまり説得する義務はオリヒコにではなく、私にあります。それについて私は、そういった卑怯な方法で説得をするつもりだったんですが、あてが外れてしまいました。何を言えば納得してもらえますか？」

「おい織彦。どこでこんな大人物、引っ掛けてきた？」

「……え、あ。……え？」

　びっくりした。急に振らないでよ。

「敵に塩を送るという言葉があるが、それを実際にやるのは非常に難しい。しかしこの子はそれどころか塩を散々投げつけた挙句、無くなったので送れとまで言ってきているぞ？　こんな愉快な事が言えるのは余程の馬鹿か大物なんだが、まあ前者ではないな」

　あー、うん。まあそこは、リリィですから。っつーか、リリィ無双は健在でしたか。

　いやしかし、こんな高度すぎる会話を僕に振られても、何の意見もできないってばさ。　日本語で話されてるのに、日本語聴いてる気がしないよ？　もう。

　でも……父さん。リリィの事、何となく気に入ったみたい。

「ただリリィさん、悪いが問題はそこじゃないんだ。リリィさんがマンションを買ってくれるという話に反対なわけじゃない。むしろ、諸手を挙げて歓迎する。だから、リリィさんが俺を説得する必要は無い。そうじゃなくて、だ。理由はどうあれ、経緯はどうあれ、実態はどうあれ。形だけでも、不相応なものが織彦の手に入ってしまう。そこが問題なんだ。それについて織彦がどう思うのか、どう考えるのかが聞きたいんだよ。本人の口から」

「……そうですか」

　そう言われると、リリィにも何も言い返せないようだ。

「そうですね、それは確かに私の出る幕ではありません」

「どうだ？　織彦」

「……僕は……」

「お前が何も考えていなかったのは、見ればわかる。だから今、必死で考えてみろ」

　そうは言われても、急に考えろと言われても。もともとが頭の回転の鈍い僕だ、何を思い付くはずも無い。しかし……。

　すぐに考えが出ないなら、その間にメシにでも。そんな事は、父さんは言わなかった。黙って僕の言葉を待っている。

　真摯という事だ。

　それを裏切ってはいけない。だが、どうしても考えはまとまらない。そうして焦りが募り、そうしてまた頭の回転が鈍る。いつものパターンだ。

　その沈黙に耐えかねたのかどうなのかわからないが、やがてリリィが口を開く。

「私が質問してみましょうか。いいですか？　お父様」

「んん。まあどうぞ」

「では、オリヒコ。答えてみてください」

「……え？　あ、うん」

「私はあなたにマンションを買いますが、それは迷惑ですか？」

「……いいや」

「あなたがマンションを受け取るのは、私の願いだからですか？　単に高額なものを手に入れたいからですか？　それとも他の理由がありますか？」

「……リリィの頼みだから」

「私の願いだと、どうして聞き入れてくれますか？」

「……リリィが大事だから」

「今のあなたがマンションを持つ事は分不相応だ、という認識はありますか？」

「……かなり」

「それについて、あなたが相応となるために今すぐ努力できる事は、あると思いますか？」

「……ほとんど無いと思う」

「では、何もしませんか？」

「……何ができるか考え続けようと思う」

「もしお父様の言う通り、将来あなたが無心の考えを抱いてしまったらどうしますか？」

「……リリィに相談してみる」

　リリィは父さんを向き直った。

「お父様。私にはもうこれで充分です。はっきり言うのは失礼ですが、あなたの息子さんは馬鹿です。でも馬鹿なりに自分にできる事をきちんと把握していて、できない事は正直に申告していますし、その改善を放棄しない姿勢も窺えます。きっとこの先起こるほとんどの事に責任は取れる。そう私は判断しますが、どうでしょうか？」

　うあ……何かとんでもない太鼓判を押された。

　ちょっとちょっとリリィ、あんまり僕を持ち上げないで？　怖いってばさ。

　っつーか、よくよく思い返せば今の問答、僕が他の答えを選ばないような感じに誘導されてた気がするけど？

「んん。悪くはない、かな？」

「では、お認めくださいますか？」

「しかし済まんが、少々決定打が足りない。何しろ不肖の息子でね」

「そうですか。ではオリヒコ、今の問答をあなたの言葉に練り直してみてください。材料があるんですから不可能ではないはずです」

　うーん。苦手なんだよな、そういうの……。

　と、また思考がよどみ始めたあたりで、ふと閃くものがあった。どうして思い付いたのかはわからないが、これはいける。

　というより、これしか無い。

　言ってみるしか無いだろう。

「父さん……僕は」

「んん？」

「何も考えてなかった。将来どころか、十秒先の事も」

「お前が考え無しというのは承知済みだが」

「でも、リリィ。松平さん。この二人が大事なのは、本当だから。未来の事は何も保証できないけど、最大限の努力をする」

「……」

「……えっと……とりあえず、それだけ」

　リリィが……あ、あれ？　ねえちょっと？

　あー何かリリィが、目に見えてガックリとしたけれども。

「オリヒコ……どうしてそうなりますか？」

「えっと……え？」

「どうしてその言葉が出てきましたか？　確かに私はあの言葉に口説かれましたが、今は相手も状況も違いますよ？」

「……あ……と……」

　言われてみれば、今の言葉はさっきの問答を踏襲できてないし。

　何でこんなのがいけると思ったんだ？　何でこれしか無いと思ったんだ？

　あれー？

「いや、その、ごめん……」

「あなたは……馬鹿ですね。いえ、馬鹿だとは思っていましたが……はるかそれ以上に」

「いや、だから、ごめん……」

「ふふふふふふ」

　その時母さんから、よくわからない笑い声が漏れた。

「これは、認めないわけにいかないわね？　あなた」

「んん。んんんんん……」

　え。母さん？　父さん？

「未来の事は何も保証できないけど、最大限の努力をする。ですって！　懐かしいわあ」

「え？　懐かしい？」

「それってこの人が結婚を申し込んだ時、お母さんのお父さんに言ったセリフよ？」

　……。

　はあ。さようですか。

　……いやいや、ちょっとちょっと。

　何それ？　どういう事？　何でかぶるの？　まさか遺伝？

　っつーか、あーまた何かリリィが、目に見えてガックリしてるけど？

「お父様……はっきり言うのは失礼ですが、あなたも馬鹿なんですね……。お願いですから結婚相手の未来くらい、嘘でも保証しておいてください。それではオリヒコの事、何も言えた義理ではありません……」

　あ、あああああ。はっきり言わないであげてリリィ、ちょっと可哀相だから父さん。

「……」

　あ、あああああ。ほらリリィ、落ち込んじゃったよ父さん。

「織彦。話は決まりよ。契約書を持ってきて」

「あ、あー……いいのかな？　こんなんで……」

「大丈夫よ、この人ただカッコつけたかっただけだから。ほら、噂に聞いた事はあるでしょ？　チチオヤノイゲンってやつよ。可愛いでしょ？　ふふふふふふ」

　いや、あの、自分の父親を、可愛いと紹介されるのもかなりアレなんだけれども……。

　っつーか何かそれ、元素名みたいだよね？　ハイドロゲンとかオキシゲンとか。貫禄も品格もガタ落ちだってばさ。

　しかしまさか、僕が父さんにこんなピンポイント攻撃を仕掛けてしまうとは。まあ説得できた、というかケムに巻けたみたいだし結果オーライ……なのかな？

「それと織彦、もう一つ」

「何？」

「そろそろいい時間だけど、お嬢さんがたのお布団、用意してないから。あなたのベッドでよろしくやりなさい」

　……。

「はあああああああああああああああああああああ？」

　あごが外れた僕の後ろで、リリィと松平瑞穂は顔を見合わせたのだった。

　そもそも僕の部屋のベッドはシングルなのだから、収まり切るはずが無い。

　そう主張したが、それでも客布団は長い間仕舞ったままで干していないから出すわけにはいかない、と返された。ついでに、シングルベッドでも三人寝る事ができるのは実証済みだし、肉体関係にある男女の寝所を別々に用意するのは無粋が過ぎるだろう、とまで付け加えられた。おまけに、あんまり声が漏れないように気を付けてね、という追い討ちまでしてくれたものだから、松平瑞穂はまたもやガチガチに固まらされる羽目になった。

　っつーか実証済みって何だよ！　そんな経験あるのかよ母さん！

　それに布団干してないって何だよ！　計画的犯行かよ！

　そもそも親って、間違いが起こらない方向に持っていくもんじゃないのかよ！

　母よ、あなたは間違っている！　いやむしろ、あなたが間違いだ！

　それにしても問題なのは、それなら僕は床に寝ると言ったら、リリィまでが自分もそうすると言い出した事だ。どうせならくっ付いていたい、と。しかし、二人でベッドを抜け出して松平瑞穂だけをのけ者にするわけにはいかないし、全員が出てきてしまうのであればそもそも床に寝る意味が無い。

　風呂も順繰りに使い終わったし、後は眠るだけなのだが、一応宣言しておく事にした。

「あー、二人とも。っつーかリリィ。言っておくけど、ここでエッチとか無しだからね？」

「う、うん。そうだよね？　宮前くん」

「あなたは大丈夫なんですか？　オリヒコ」

「我慢するしか無いでしょ？」

「そうでもありません。あなたはミズホにしてもらえばいいんです。口で以って」

　……。

　脱力するしかないでしょ？　もう……。

「あー、いやあ……リリィちゃん、それは……」

「何か不都合ありますか？」

「不都合しか無いよ……」

「どんな不都合が？」

「松平さんはリリィほどエッチじゃないって事だよ……」

「そうですか。では、私がしてみましょうか？　そういえば私はまだ、あなたの精液を飲んでみた事がありません。それも私の目覚めのきっかけになるかも知れませんし、ミズホ。やりかたを教えてください」

　セー……だからその言葉を、はっきり言わないでくださいってばー……。

「……ふええええ……リリィちゃんが激しいよお……」

「リリィもうやめて。どうしていいかわからなくなるから……」

「どうも何も、あなたの思いの丈をぶつければいいでしょう。経験が無いわけでもないのに、何を悩むんですか？」

「……同じ屋根の下に家族が勢揃いしてる事を悩んでるんだよ！」

「ですが、お母様はむしろ進んでこの状況を」

「向こうじゃなくて僕と松平さんが気にするの！　リリィも気にして！」

「……そうですか」

　ああ神様、この子にどうか羞恥心というものを与えてやってください早く。

「でもせめて、共に就寝する時は裸で、という事でお願いします。やっぱりそのほうが、感触が……」

　ああもう、悪魔でもいいからとにかくこの子に羞恥心を教えてやってください急いで！

「却下」

「……そうですか」

　大変だよもう、リリィの制御。

「えっと、でも……リリィちゃん、宮前くん……このベッド。どうやって？」

「そうですね。オリヒコが真ん中に。私とミズホがそれに寄り添う。それしか無いでしょう。まずオリヒコがベッドに入ってください。そしてミズホは壁側に。最後に私が明かりを消してから入ります」

　リリィはそんな指示を出した。

　冷静に俯瞰すればこれは至極妥当な指示なんだけど、よくとっさにこんな判断ができてしまうな、とは思う。無いものを欲しがるのはガキで無益で詮無いけれど、それでもこの思考回路はかなり、羨ましい。

「えっと、じゃあ」

「う、うん」

　ベッドに横たわると、松平瑞穂がおずおずと追従してくる。そして照明が消え、もう一人の存在も確認する事ができる。

「では、おやすみなさい」

「おやすみ、なさい……」

「……おやすみ」

　両手に花、状態……うーん、これはどうやら、苦しい闘いになりそうだ。

　と、そんな風な事を思ったが、しかしそれは孤闘にはならなかった。

「……」

「……」

「……」

　何しろ松平瑞穂の家ではそれぞれ別の部屋だったから、三人で夜を共にするのは初めてなのだ。結果、あのラブホテル以来はエッチもしていない。

　お蔭で、既に就寝してから二十分くらいは経過したと思うが、依然僕の目はパッチリだし、松平瑞穂からも眠ったような気配は感じられない。

　ただ、リリィの様子が、それどころではなかった。

　……その息は浅く、小刻みで。

　……蚊の鳴くような高くて小さい声を時折、短く漏らし。

　……そして何やらもぞもぞと、体をよじらせ。

　明らかに、挙動不審だ。不審だと思ったなら、声を掛けるしかないわけだが。

「リリィ？」

「……ひゃ」

「え？」

「あ……え……あ……わ、私？」

　これはどうにも、おかしい。リリィは、こんな反応をする子ではない。

「どうかしたの？　ちょっと変だよ？」

「わかりません……私、少し動悸がします。それに、顔も火照りますし、思考もよどみます。それから、冷や汗も妙にかきます」

「え。風邪？」

「リリィちゃん大丈夫？」

「ただの風邪なら、こんな動悸は無いはずですが……いいえ、わかりませんね。お騒がせしますが、少し様子を見てみましょうか……」

「そう？」

　もしその時、明かりが点いていればそれが何なのか、ひょっとしたらわかっていたかも知れない。しかし現実として明かりは点いていなかったわけだから、その後三十分間隔くらいでリリィに安否を確認し、その度に不確かな返事を貰う事になった。

　ちなみにその回数は、両手では数えられなかった。まあ要するに、一睡もできなかったわけだ。

　長い闘いだったが、もう既にカーテン越しに明るさを感じる事ができる。

「朝……か」

「朝、だねえ……」

「松平さんまで付き合って、起きてる事は無かったのに」

「いやあ……私も、何となく寝れなくて。でも……ちょっと、こんな風に宮前くんと居れて、嬉しい……かな？」

「そ、そう？」

「えへへ。えっと、それで……リリィちゃん？」

「……」

　そう松平瑞穂に呼び掛けられたリリィは……しかし、返事もせずにその顔を、僕の肩にうずめたままで。

「リリィちゃん、やっぱ具合悪いの？」

「……」

「リリィ？」

　そうして僕が、ちょこんと彼女の肩に触れた、その瞬間。

　リリィは電撃に打たれたかのように体をビクリとさせると、凄い勢いでベッドを飛び出たのだ。しかもそれは見事に失敗し、掛け布に身をとられてもんどり打つと、頭から床へ墜落してみせたのである。

　ごっ。

　そんな音がした。

「……っ……」

「リ……リリィ、ちゃん？」

「ちょ、ちょっと大丈夫？　リリィ……」

「……」

「本当に大丈夫？　頭打ったよね？　今。首とかも痛めたんじゃ……」

「……これは……決定的ですね……」

　リリィはそんな事をつぶやいて、かぶりを振りながらゆっくりと身を起こす。しかしそのまま立ち上がりはせず、その場にぺたりと座り込んだ。

「決定的？　何の話？」

「昨晩から私が訴えている症状の、原因です。今の私には、それのかなり特徴的な様態が現れていると思うんですが、見てわかりますか？　特に……顔です」

「え？」

　そう言われてみれば、何かおかしい気はする。

　ぱっと見た目ではわからないのだが、それは何なのかと考えたら、そういえばリリィは話し掛ける時いつもこちらの顔を真っ直ぐ見ていたのに、今は微妙にうつむき、また微妙に横へとそれていて。そんな事に気が付いた。

　それでは顔がよく見られないので、ベッドから降りてリリィの顔を覗き込むと……リリィは、ついと顔をそらすのである。

「え。ちょっとリリィ、それじゃ見れないよ」

　仕方無いので彼女の両頬に手を伸ばして、こちらに向け……。

「あ……あ」

「え」

「は、離して……ください」

　それは、どう見ても。

　……顔は、ほってり朱に染まり。

　……やや閉じかけた目の中の瞳は、斜め下へ寄ってはうるうる潤み。

　……口元は、わなわな半開きで。

　……ほほに触れる僕の両手には、ふるふる細かな振動が伝わり。

　その様子はどう見ても、恥じらう乙女のそれだった。

「リリィ……もしかして」

「ごめんなさい……離して……離れてください」

「あ……うん」

　離れるとリリィは、座ったままくるりと向こうを向いてしまう。

「恥ずかしさ、というものが……これほど、強烈なものだとは思いませんでした……」

　神様？　悪魔様？　昨日の夜の僕のお願い、聞き届けてくださったんですか？　……もうこれ以上無いくらい、すんごく妙なタイミングで。

「あー、まあ、とりあえず成長おめでとう、リリィ」

　リリィは向こうを向いたまま、どうやら自分の胸のあたりを抱きかかえているようだ。

「こ、こんな……こんなの……胸が破裂して死んでしまいそうです……。ミズホは、これは、平気なんですか……？」

「あ、いやあ、平気でもないよ？　でも……宮前くんがきっと受け止めてくれる、っていう信頼みたいなものがあるから、大丈夫……なのかな？」

「そう、ですか……。私にはちょっと、耐えられそうにありません……」

　えええええ。痛みにはあれだけ果敢に耐え抜いたリリィが、ですか。意外かも。

「……強弱の差はあってもみんな等しく性欲を抱えているはずなのに、どうして性行為に入り乱れたりしないのか……その理由がよく理解できました。これは……いけません。これは、いけません……。オリヒコ、それからミズホ……私は今まで、あなたたちに散々無礼を重ねてしまいました。ごめんなさい、ごめんなさい……」

「いや、いいけど……」

　何だろうね、これ？　エッチく迫られるよりもこっちのほうが断然、愛らしいよ？　すんなり受け入れられるより抵抗があったほうがよい、という事なのかな？　いやでもそういうのって、背徳の道なんじゃ……？　うーん。

　まあ、とにかくそれ以来、リリィはすっかり大人しくなってしまった。それは、平和になったなあと安堵する反面、やっぱり寂しくもある。

　ところで、目が覚めてるなら部屋に居てもしょうがないし、そろそろ起き出そうか。そう部屋のドアを開けた時に三人が発見したモノは、母さんが手に持つビデオカムコーダだったりした。

「あら。おはようさん」

　松平瑞穂は茹でダコのように、リリィは石のようになってるけど……。尋ねないわけには、いかないよなあ……。気が重いや……。

「……母さん……それは一体、何なの……？」

「あら。これはビデオという物よ？」

「……知ってるよ。それで何をするつもりだったの、って訊いてるんだけど……？」

「あら。ビデオっていうのは、録画をするためにある物よ？」

　……ダメだこの親、腐ってやがる。

　まあそれは強制的に検めた所、電源スイッチどころかメモリカードすら入っていなかったのでジョークなんだろうけど。これはいくら何でも、ご苦労すぎる。出てくるまでずーっと待機してたって事でしょ。

　おーい、お薬。

　っつーかこのせいで、リリィは完全に撃沈させられたよ。どうしてくれるんだよ母さん。

　その後の朝食の席で、父さんに署名捺印をしてもらった契約書を受け取ると、マンションのほうのそれはその日のうちに不動産業者へと提出する運びになった。その日は夕方くらいまで実家に滞在する予定だったのだが、やっぱり朝ご飯を食べたらすぐに発つ事にしたために、ヒマが出来たからだ。帰り道には電車で二時間ちょっとだし、不動産業者の営業時間内には余裕も余裕で間に合う。むしろ、下手すれば午前中だ。

　予定変更の理由はもちろん、リリィが僕の家族と顔を合わせる事に対して酷い羞恥を覚えるようになってしまったせいである。建前のほうの理由としては一応、リリィの調子が優れないからという説明をしてみるが、まあもちろん引き止められた。

「具合が悪いならなおさら、もっとゆっくりしていけばいいのに。何泊してもらっても構わないわよ？」

「調子崩した原因の一部はとりあえず、母さんにあると思ってくれ……」

「そうなの？　それはごめんなさいね？」

「……いえ……お構い無く……」

　何か、可哀相になってきた。リリィはうつむき、僕の後ろに隠れてしまっている。

「あ、あの。お世話に、なりました」

「はい、瑞穂さん。またいらっしゃいね？　リリィさんも」

「……はい……」

　そうして、家族からお見送りというものを受けるのだが……。

「んじゃあ……行くわ」

「織彦。達者でな」

「織彦。避妊はしっかりね？」

「織彦。二秒で死ね」

「織彦。避妊はしろよー」

「ニイ。二秒で死ね」

　……まともなのは父さんだけだった。こんな家庭に生まれていたのか、僕は。っつーか、酷すぎるだろ女ども。

　そうして歩き出した帰路。僕の隣には松平瑞穂だけで、リリィはまるで楚々たる淑女のように三歩後ろを付いてきた。そんなではやっぱり気になるし、松平瑞穂も気になるようで、リリィに声を掛ける。

「リリィちゃん？　宮前くんの隣で歩けばいいのに」

「いえ……今の私にそれは……至難です」

「そんなに恥ずかしい、のかな？」

「……はい……」

「んー。それってつまり、宮前くんの事が好きだっていう感情も、わかったって事？」

「いえ、それは、未だ。ただ……あれやこれや振り返るだけで、消えてしまいたい。切にそう思います。再び接近する勇気など、出るはずがありません……」

「そうなんだ……リリィちゃん、凄い恥かしがり屋さんだったんだね？」

「……私も、驕っているつもりはありませんでしたが……ここまで弱いとは、思ってもみませんでした……」

「宮前くん？　これはリリィちゃんの事、大事にしてあげないとダメだよ？」

「あー、うん……。でも、接近しないでどういう風に大事にするのかが、よくわからんのだけれども……」

「宮前くん？　こーゆー時は押しの一手ですよ？　気になる相手にはググッと強引に迫られちゃうと、女の子はキュンと来ちゃうのです」

「はあ」

　人によるんじゃないのかな？　そういうのは。

　アホの子っていうか何ていうか、松平さんもどっか一本ネジ狂ってると思う。こないだの変態紳士さんが言ってたのとはもちろん、違うネジだけれども。

　契約は恐ろしくスムーズに進み、入金確認が取れるとその翌日には部屋の鍵が引き渡された。

　部屋は水道、ガス、電気、電話、インターネット回線等が既に開通しており、まあその個々の契約のためにまた書類攻めに遭ったわけだが。それはそれとして、他のものについてはすっからかんだったので、すぐに住む事はできない。引越作業についても、業者に頼むには待たされすぎるから、と松平瑞穂の父親とその従業員が社用車を動員してどうにかしてくれるという手筈だったが、それも明日の事だ。

　かといってやる事が無いわけでは決してなく、各種住所変更手続きなんかに追われた。実は僕のアパートの引き払いもまだだったのだが、松平瑞穂と違って賃貸なわけだから、そこにある物の何を運んで何を捨てるかも決めなければならない。

　ちなみに冷蔵庫は、下手に小さい物を持ち回るよりも大容量の最新型を買ってしまったほうが経済的で省エネなのだとか。エアコンに関してもそうらしいが、これはもともと新しい部屋に備え付けがある。

　そうして運び込む家具を選別していった結果、既存の物は割と役に立たない事がわかり、新規に買わなければいけない物がそれなりに多く出たわけで。その日、新居の間取りや寸法などを再確認すると、その足で必要な物を買い付けに行く事になった。

　その行き先は、駅前の百貨店。そこまでがバスですぐ、そのバス停までもが歩いてすぐなのだから、本当に都合のいいマンションと云えた。

　そこではリリィがてきぱきと、必要な物の品定めをしては売約を決めていった。

　ＴＶ。ダイニングテーブル。コタツ付きローテーブル。ソファ。カーテン。バス用具。照明。冷蔵庫。洗濯機。食器棚と食器と調理器具。収納。自転車。

　地味に扇風機なども売約を受けていたが、それについてはこんな説明をした。

「夏の間、エアコンの設定は２８℃から動かさないでください。それで暑さを感じる場合、扇風機を使ってください。それからエアコンの運転は、十二時間以上外出する時以外は留守でも絶対に切らないでください。それが、省エネと体調のためになります」

「体調はともかくとして、省エネとか気にするんだね？」

「お金を湯水のように使うつもりは無い、と言いました。それにお金があるからといって、それは資源を無駄遣いしていい理由にはなりません」

「ははあ」

　何たかんだでストイックな、リリィらしいお言葉だ。

　まあストイックと云っても、異様にエッチだった事を除けばだが……。

　そして今、多少なりともそうではなくなったというその証左として、買約を続けるうちにただ一つだけ、彼女が選定を停止させてしまった物があったりした。

「どうしたら、いいでしょうか……」

　ベッドである。

「初めはキングベッド一つで、間に合うと思っていたんですが……」

「あー。やっぱ……一緒じゃ、ダメなんだ？」

「……。しかし、シングルベッド三台は……あの寝室には……。オリヒコ、私は……どうしたら？」

　まあ、その寝室すら僕の元いたアパートの部屋より広いわけだが、しかし収納など他の物も設置する事を考えると、そんなスペースは無い。一つだけ用途の決まらない部屋があったが、そこは物置にでも使おうかという話になっていたし、そこへシングルベッド一つ置いてリリィだけ一人寝かせるのも違うだろう。

「あ。えっとじゃあリリィちゃん、ベッドやめて、お布団っていうのはどう？」

「……それは……問題はあまり、変わりありません。もしも、三人で床を共にしたくなった時に、困ります……」

「そ、そういう事……ある、のかな？」

「今は……私が単に、恥ずかしい……それだけです。でもそれは、そのうち克服できる。そう思っています。そうなったら……布団でも二人なら何とかなるでしょうけれど、その時にもう一人が仲間はずれになりますよ？」

「あー……うーん……」

「あるいは、私とミズホが一緒に寝て、オリヒコを悶々とさせるというイタズラはできるかも知れませんが……」

「あー……あはは……」

　何のプレイだよリリィ。

「……あ。いけません……今それを、想像してみましたが……それもどうやら私には、無理そうです。これは、いけません……私と、ミズホが……あっ、そんな……」

「あ、うわあ！　ちょちょちょちょっとリリィちゃんストップストップ！」

　んー、何ですか？　百合ですか？

　リリィだけに。

「……とにかく、キングベッドを買ってしまいたいという思いはあるんですが……」

「でもそれだと、差し当たりリリィは？」

「……ソファも買いますから」

「それは僕が、いい気分しないなあ」

「そうですか……わかりました。やっぱりキングベッドを買います」

「え、でも、それじゃあ」

「何とか……頑張ってみます。どうしてもダメでしたら、その時はソファに避難する。そういう事にします」

「うーん……まあ、リリィのお金だし、リリィがそれでいいなら、いいけど」

　本当にいいのかな？　どうも、バンジージャンプを敢行しなくてはならなくなった高所恐怖症の人みたいな面持ちだけれども……。

　まあ、そうと決まれば彼女の選定は素早く、かつ間違いが無い。機能的に問題が無いのはもちろんの事、デザインや素地についても他の家具との統一感や融和感があった。

　ちなみにリリィの選ぶ物は、総じて値段が高めの物だ。少なくとも真ん中ら辺よりは、上の価格を選んでいる。無駄遣いしたくないという彼女の言と矛盾するようなので、尋ねてみるとこんな回答が得られた。

「消耗品は質に不満が出ない程度に安い物を。長く使うものは高くてもしっかりした物を。それが結局、浪費をしない事になります。それにそうする事で職人や業者を育てて、価値のある物をより多く流通させる事に繋がりますし、安い物ばかりを選べば結局、質の悪い物だけが氾濫して消費者自身の首を絞める事に繋がるんです」

「うーん。リリィって、何でも大きいスケールで考えるね？」

「そうでしょうか。まあそれはそれとして、高級品については機能の他に遊びというものがありますから、背伸びして求める必要はありません。しかしそれでも、中級品と廉価品では質の境目が歴然なんです。廉価品ではすぐに壊れるという事もありますし、それに高額であればあるほど大切に扱おうと思いませんか？」

「どうだろ。自分で買うんじゃないしなあ……」

「では、スポンサーの特権として言い渡します。大事に使ってください」

「あ、はい」

「付け加えるなら実は、物価が安い事にいい事なんて一つも無いんです。何故なら、それでは売っても売っても儲からない状態になって、その不利益はそのまま仕入れ価格や従業員の待遇などに転嫁されて、そのせいで余計に安い物ばかりが求められる事になって、そしてその悪循環で最終的には不況に陥ってしまうからです。結果、みんなが貧乏になってしまいます」

「うーん、難しい話だね……。だってやっぱり、どうしても安いほう選んじゃわない？」

「はい。でも、そこをぐっとこらえる事が必要なんです。お金をケチる理由は大体が、自分にはお金が必要だというものです。でも、だからといって支払いを渋るという事はつまり、自分だけはそれを主張しておきながら、相手のそれは認めないという事になってしまいますよね？　それはあまりに、アンフェアな考えかたというものです」

「そっか。確かにそれじゃあ、勝手すぎるね？」

「はい。公正でありたいと思えば、安い買い物にはかえって抵抗が出てくるものです。つまり、お金を大事にしすぎるのはいい事ではないという……まあ、この間の説教の時と似た話ではありますが」

「うーん。何か話が、何から何まで繋がってる感じがするなあ」

「そうですね。まあ、物に対してあまりに値段が釣り合わないといった時には、もちろん値切って構いません。ただその目安については、自分であればそれをその値段で提供できるか、というあたりが妥当だと思います」

「なるほど、それはわかりやすい基準だね」

「ちなみに安い物について、リーズナブルだという言葉が使われますが、リーズンとは理由という意味です。つまり理に適う値段、納得の行く値段であるという事であって、安価であるという意味ではありません。ですから本当であれば、物に対してあまりに安すぎるといった場合には客のほうから値段を吊り上げる、そういった事がリーズナブルというものと云えます」

「あー。何かそう聞くと、凄く高尚な言葉なんだね？　リーズナブルって」

「そうですね。まあ口語としては、庶民でも手の届く物、というニュアンスで値段の意味も含めて使われるようです。しかしだからといって、単なるバーゲン品までも指して云うのは流石に、独善的解釈にすぎるというものでしょう。ちなみにそのバーゲンという言葉も本来は掘り出し物という意味ですから、バーゲンセールという言葉すら安売りという意味ではないんですが、そのあたりには日本人のお金というものに対する考えかたすら窺えそうです」

「そっか。うーん……言葉っていうのもなかなか、深いものなんだね……」

　そうしてベッドも決まり、今まで売約を受けてきた物の購入に至ったわけだが、その支払いはすべて現金だった。彼女は社会的信用を得る手段が無く、クレジットカードを持つ事ができない。だからキャッシュカードによるデビット決済を考えていたそうだが、今回の買い物の総額を試算した時に限度額を優に超えてしまう事がわかり、あらかじめ銀行窓口で引き出してあったものである。

　その結果……札束を持ち歩く金髪美少女、なぞという不可思議なものが誕生してしまっていたわけだが。何が起きているのか全然わからんかっただろうなあ、行員さんも店員さんも。

　ちなみに配送についてだが、百貨店とは複数のショップが入店しているものだ。出荷の都合もあろうし、配送をまとめるという事はほとんど不可能なわけだから、結局バラバラに送られてくる事になった。

　リリィはちょっとだけ、トラックをチャーターして各店倉庫を巡回してもらうようにはできないかと交渉したが、部屋への搬入もあるので関係者の配送によらないと商品に責任が持てないと、そんな理由で断られたようだ。まあそれも当然でもっともな理由だが、悪く穿てば面倒をあしらう口実のようにも思えるし、たくさんの配送車が同じ場所目指して押し寄せてくるのが非効率で不経済だというのももっともな話であるわけだから、交渉を試みたリリィの行動力は褒められて然るべきである。

　それらの到着は、すべて明日という事だった。そういえばリリィは、即日発送が可能かどうかをいちいち確認していたっけ。

「せっかくマンションを買ったんです。なるべく早く新生活を始めたいと思いませんか？」

　そんな事を言っていた。もちろんそれには、完全に同意だ。

　購入手続きが完了するとリリィは、こんな事を尋ねてくる。

「とりあえず、目的の物は買い終わりましたが……二人は、疲れていませんか？」

「あー……うん、どうだろ？」

「ちょっと、疲れたかも？」

「少し休憩しましょう。今は夏休みですから、おそらく屋上に子ども用の遊戯施設があります。それに伴って何らかの出店があるはずですから、行ってみませんか？」

「お。賛成」

　連れ立ってエレベータに乗り込む。

　そういえば百貨店のエレベータには昔、エレベータガールなる乗務員があったようだ。もともとが客の手を煩わせずに昇降機を動作させる目的で配備され、それはやがて独特の声色と口調で客を案内するマスコット的な位置付けの花形ポジションとなって人気が高かったらしい。しかし悲しい事に、近年の景気衰退とかいうものに煽られてほとんど現存しておらず、僕も実物を目にした事は無かった。

「リリィ。松平さん。ちょっと、上へ参りまーす、とか言ってみて」

「え。えええええ」

「……何を言い出しますか？　オリヒコ」

「いや、男の夢と云うか、何と云うか」

「……ミズホ。これは……無視していい、でしょうか？」

「そ、そうだね……」

　ショボーン。

　Ｒ階へ到着すれば、やはりそれなりに親子連れで盛況である。

　あっはっはっ！　見ろ、人混みのようだ！

　……いや。ミニ列車、ボールプール、ゴーカート、小型メリーゴーラウンド、コインを入れると一定時間ウィンウィン動く名称のよくわからない乗り物。そんな感じの遊具で大いに賑わいを見せている。これも悲しい事に、屋上でこういう遊び場を提供する百貨店は珍しいというレベルにまで減ってきているらしい。

　その屋上は、鋭い日差しに晒されていた。梅雨が明けたと思ったらもう真夏かよ、そう思わない人は居ないはずだ。うんざりさせられるも、それがやっぱり賑わいを一層増しているエッセンスでもあるのだろう。

　ええと出店は……あるある。ドリンクはもちろん、ソフトクリーム、クレープ、ケバブ、ホットドッグ、などなど。

　……いや、何か……オトナのへビーカステラ２０１２とかいう看板も出てたりするけど、これは明らかに地雷だよね……。っつーか、へビーって何だよ。ベビーじゃないのかよ。そりゃあ確かにオトナだよ。いやむしろガキかよ。

　もちろんリリィにもその、あぶないキケンは察知できたようで、だから松平瑞穂にはこのように言い渡した。

「ミズホはクレープを食べてください。クリーム増量で」

「え。えええええ。強制ですか……」

「はい。あなたはもっと太らないといけません。そうでないと、オリヒコは……その」

「あー……宮前くん、やっぱりムネとかあったほうが……？」

「……大丈夫だから。好きなの選べばいいし」

　それでも結局、三人揃ってクレープをという結果に落ち着いた。僕も最初はケバブにそそられていたのだが、何だか聞いているうちに生クリームな気分になってしまい。

　まあ、クリーム増量は流石にしなかったものの松平瑞穂はトッピング全部のせという事にされてしまい、リリィはキウィ＆パイナップル、僕はストロベリー＆チョコを選んだ。

　混み合ってはいるがテーブル席が一つ空いていたので、三人で占領するとクレープにパクつく。そこから目に入るのは子どもたちの姿だから、会話も自然そんな感じになった。

「ミズホ。あなたは将来、子どもは何人欲しいですか？」

「えっと……うん。普通に、二人くらい？　とりあえず、男の子と女の子？」

「でしたら、ミズホ。あなたはやっぱり、もっと太らないといけません。そんな細身では出産へ向けて、あまりに不安すぎます」

「ええー、そうなのかなあ？　そんなの関係無いって思ってたけど……だって、気合いのほうが大事だって話だよ？」

「まあそういう要素もありますが、仮に無事出産できたとしてもです。あまり痩せていると、早死にしてしまいますよ？　それでは子どもが悲しみます。体格を表す指標にＢＭＩというものがあるのは、知っていますか？」

「あ、うんそれは。……あ、でもごめんね？　計算式忘れちゃった……」

「キロ単位の体重を、メートル単位の身長で二回、割ったものです。最も健康的なＢＭＩはおよそ２２とされていますが、実際に長生きしているのは２４から２８くらいの、肥満傾向の人たちなんですよ」

「え。本当？　うっそ……ええー」

「本当です。一応、肥満からくる成人病を未然に防ぐための、ケアがきちんと維持できていれば、という条件付きではあるんですが。それでも昔に比べて、肥満のケアのための医療が充実してきているという事もありますし、とにかく本当は本当ですよ。実は私もちょうど２２くらいですから、もう少し増やしたいところなんですが、ミズホは明らかに細すぎです」

「細すぎ……ど、どうしよう！　食べなきゃ！　食べなきゃ！」

「いえ、あまり急激に増やしても、体調を乱すだけです。落ち着いてください」

「あー……はい。えっと、ごめんね？　ところで、そういうリリィちゃんは、どーなんでしょう？」

「何がですか？」

「あ・か・ちゃ・ん。何人欲しいのかな？」

「それですか。それは……いえ、私は……月の障りはありますが、産めるのかどうなのかが、はっきりとしませんし……」

「じゃあ、産めると仮定したら？」

「そうですね、私は……その。私は、オリヒコとの事しか考えにありません……ので。やっぱりオリヒコの、希望に沿う形で……」

「あー、リリィちゃんラブラブ。っていうかリリィちゃんって、すんごい立派なお母さんになりそうだよね？」

「いえ、ですから、ラブラブとかそういう事。私には、わからないんですが……」

「あっ……ご、ごめんね？　ごめんね？」

「い、いいえ……。それで、オリヒコ。その……オリヒコは、その……私が、相手だと。その……仮定したらです。その……いかほど、望みますか？」

「あー、うーん……そういうのは、ええと何だっけ……コウノトリ？　キャベツ？　よくわからんけど」

「いやあ宮前サン、それは聞いてるこっちがわかんないよー？　すっとぼけてますかー？」

「あ、いや。そうじゃなくて、その……ええと、授かりものだって言いたくて。だから、成り行きでいいんじゃないのかな？　そういうの」

「ほほう、無計画っすか？」

「だってそれ、決めた通りにならないと、何か失敗した気分になるでしょ？　多分」

「あ……あー！　そっか、なるほど。いやあ宮前サン、何気に考えてますね？」

「そうですね、オリヒコもなかなか……これは、失敗しました」

「え？　失敗？　ってもう既に？　何をどう？」

「お、おおおおお？　リリィちゃん実は、何か凄い野望を抱えてましたか？」

「ごめんなさい、その話ではありません。……オリヒコ、しばらく私を守ってください。ミズホ、もし移動の必要が出たら私を運ぶのを手伝ってください」

　……。

　ええと。急に、何の話だ？

「リリィちゃん？」

「のうのうと屋上なんかに上がるべきではありませんでした。……敵です」

「……てき？」

「それは、リリィのマスターから？」

「違います。おそらくマークⅢの言っていた、マスターの敵対勢力というものです。私は名称も知らずに何十人と言わず相手をしてきましたが、身体的特徴は統一を見ません。ただ必ずサングラスと、左耳に何かの機器のようなものを着けています」

「……あれか」

　そんなような人物が、屋上入口のほうからこちらを見据えつつ、しかし混雑にさえぎられつつ、それでもゆっくり近付いてきているのが確認できた。

「こんな人混みで……争いを？」

「どういうつもりなのかはわかりません。とにかく私は、トランスフォームモードに移行します。その間、会話はできますが身動きは取れませんので、よろしくお願いします」

「えっと……宮前くん？　リリィちゃん？　何が起こるの？」

「何かはよくわからないけど……ごたごた、かな？　僕も経験無いけど、まあリリィと関わっちゃったのが運の尽きと諦めて……とりあえず、何が起きてもいいように心の準備とか、してみてもらえるかな？」

「あー。はい。よくわからないけど、わかりました」

　松平瑞穂は、状況はいまいち汲み取り切れていないようだが、それでも取り乱す事は無かった。

　僕は少し安堵するが、その間にも距離は縮まっている。もうそんなに、離れてはいない。

「私は向こうと違ってサングラスすらありませんし、見咎められては困るのでこちらから迂闊な行動を取るわけにもいきません。まずはこの場所からの脱出を図ります。そのつもりで居てください」

「……うん」

「……了解」

「それから、向こうは私の知る限り私のような人間離れした能力を持ちませんが、何らかの武器を使いますし、格闘も手練れです。守れとは言いましたが、オリヒコ。勝ち目はありませんので、安易に手を出すのは控えてください」

「……わかった」

　そして、会話ができる程度の距離で、その人物は立ち止まる。

　顔はサングラスに隠されてはいるが、平凡そうで。

　その黒髪は短く、おそらく男性。

　一時期流行った、汚らしいひげも無く。

　あまり年齢判定は得意ではないが、まあおそらくは三十前後。

　格好として、この炎天下で上下黒のスーツ姿。

　左手には黒のアタッシュケース。

　左耳の変な機械とサングラスが無ければ、多分ごく一般的なビジネスマンとして通用する。

　リリィのように変形したりするのかどうなのかは知るすべが無いが、ジャケットを着ているならその内ポケットあたりに何らかの飛び道具を隠している可能性が、あったり無かったり。

　血を見たり、するのだろうか？

　対面してしばらくすると、その人物は話し掛けてきた。

「田中一郎の所のマークⅡだな」

　え、えええええー……。

　それ、リリィのマスターの名前なの？　どんな一流の偽名？

　そう訝しがる僕の隣で、リリィは首を傾げてみせた。

「田中、さん？　マークⅡって何ですか？」

「そういうのは無しにしてくれ。今のは確認じゃなくて、ただの挨拶だ。あんたがそれで間違い無いのはわかってる」

「こちらには何の事だかまったくわかりません。警備員の人を呼んでいいですか？」

「別にいい。それで俺は困らんが、俺はそいつにお前の事を話す」

「何を言うつもりか知りませんが、私は全部否定します。あなたのようなオジサンと私のような少女、どちらが信用されると思いますか？」

　あ、なるほど。リリィはシラを切り通すつもりなんじゃなくて、時間を稼いでるのか。

「俺はまだ二十八だ。オジサン云うな」

「オジサンです。そうですよね？　サトシ、ユキナ」

「え……あ、うん」

「そーですねオジサンですね」

　一応シラを切るつもり、という建前は通すという事なんだろうか。いきなり違う名前で呼ばれたから、戸惑いかけてしまった。修行が足りないなあ……っつーか、松平さん強気だなあ。

　まあ相手は大いに傷付いたようだが、こう反撃してきた。

「お前に金をスリ盗られたと訴える。そうすれば警備員も、お前の鞄を検めないわけにはいかないだろう。それで実際に大金が出てきたらどうする？」

「私のお金だと主張します。通帳を持ち合わせていますから、残高を見てもらえば納得は得られます。そうすれば今度はあなたのほうへ疑いの目が向く事になりますが、その通帳までがあなたの物だと訴えますか？　仮にその通帳が私の物ではなかったとしても、そのままあなたの物だという事にはなりませんが」

　肩をすくめる。それで降参したようだ。

　僕が言えた義理ではないが、論戦は得意ではないらしい。まあリリィが相手では、大抵の人間は太刀打ちできないだろうけど、しかしもちろん難が去ったわけでは全然無い。

「俺はただ、ご足労願いたいだけなんだがな」

「やっぱり警備員を呼びます」

「俺のほうは、事が荒立ってしまっても構わないと許可が出ている。だから、これ以上シラを切られようが誰を呼ばれようが全然困らんが、そっちはどうだ？」

　そんな事を言い放つ男の手は、既に懐の内側にあった。

　引き伸ばすのは、限界か……。

　リリィもそう思ったようで、少し対応を変えた。

「あなたがたが私に会話を持つのは珍しいですが……私に、何の用ですか？」

「知らないし、知ってても話さない」

「来いというのは、どこへですか？」

「教えるわけが無い」

「そうですか。私一人ならいざ知らず、この二人をそんなどこともわからない場所へ連れては行けません。しかし、二人を置いて行くわけにもいきません。どうしましょうか？」

「どうも何も、用があるのはお前だけだ」

「そうですか。それなら招待はお断りしますが、とりあえずあなたは誰ですか？」

「話すわけが無い」

「そうですか」

「そんな態度でいいのか」

　男の懐から現れたのは……見た事が無くてもわかる。拳銃とか、詳しい型式は知らないけど、とにかくそういうやつ。それはそれ以外の何物でもなく、それはすぐに……こちらが身構えたりする前に、火のようなものを吹いた気がする。

　ぼおぁん！

　轟音を聴いた。それは、ドラマやゲームであるような、パン！　だとか、バキューン！　だとか、そんな生易しいものではなかった。音と云うよりむしろ、衝撃。そんな感じだった。音と云うなら、今残っているキーンとした耳鳴りを挙げればいいのだろうか。

　あれだけ騒がしかった辺りはシンと静まり返り、一様に何が起きたのかわからないという顔をしている。

　……発砲、したんだよね？　今。

　どこへ？

　周りに特に、異常は見られないけれども……。

　威嚇射撃……だった？

　やがて、何やら凶悪な行為が展開されようとしている事だけは認識した周りの人達が、ざわつき始める。居合わせた警備員も二人、我に返っては駆け寄ってきた。

　ぼおぁん！

　ぼおぁん！

　そんな彼らの足を、男は容赦無く、正確に、撃った。ちなみにその部位は……うわ、よりにもよって……膝。

　激痛によるものと思われる叫び声が、漏れ。

「キャアアアアアアアアアアーっ！」

　居合わせた誰かも悲鳴を上げ、それを受けて周囲はいよいよ大騒ぎになる。

　小さな子どもたちは、泣き出し。それよりもう少し大きい子どもには、面白がる者もおり。そんな子どもを引き連れた親たちは、ほとんどパニック状態に陥って、総勢悲鳴を上げてはこぞり屋上入口へと押し寄せた。もちろんその広さは有限であるわけで、押し合いへし合いの酷い騒ぎと化してしまっている。

　が、男はそんなものには気にも留めず、セリフを続ける。

「俺が躊躇しないで撃つ事はわかったな？　大人しく来ればよし、そうでなければ」

　その銃口は……松平瑞穂を向いた。

「や……やめろ！」

「それ以上しゃべったら撃つ。お前をじゃないぞ？」

　そんな事を言われたらどうしようも無い。黙らざるを得なかった。

　男はリリィへ向く。

「では、来い」

「不可能です」

「何だと？」

「私は今、まったく身動きできません。ですから不可能です」

「意味がわからん。普通にしゃべってるじゃないか」

「信じるかどうかはあなたの自由ですが、嘘ではありません」

「なら、勝手に運ばせてもらう」

　男は遠慮無くこちらに歩み寄り。

　僕と松平瑞穂は動くに動けず。

　リリィはそれでも悠然と待ち受け、こんな言葉を紡いだ。

「私が何をされても、オリヒコ。ミズホ。絶対に何もしゃべらないでください」

「素直になったな」

　そうして、両手がふさがっている事をものともせず、器用にもアタッシュケースを持つほうの腕でリリィの胴を抱え、担ぎ上げる。銃を持つ手を不自由にするわけにはいかないだろうからそれも当然だが、そのような扱いをされたリリィは再び言葉を紡いだ。

「そうでもありません」

「何？」

「たった今、動けるようになりました」

　次の瞬間、何が起こったのか認識できなかった。ただ、体を何かにギュッと包まれ、それから持ち上げられたような気がする。

「ひ……ひああああ！」

　そんな松平瑞穂の声が聴こえてきたから、何だと思ってどうにか気を取り戻し、よく目を見開いてみると。

　……眼下に、道路が見える。それは、近付いている。

　……横に、百貨店の壁と窓が見える。それは、下から上へスクロールしている。

　えええ落ちてるのかよ！

　屋上って十階だよ！

　死ぬでしょこれ！

　何でどうして死にたくないよ！

　十階相当の高さから飛び降りた後、地面へ到達するのに四秒掛からないらしい。だから、そんな事を考えたりしてるのも一瞬の事かなあ、とか思ったのだが、どうやらそうではなかったようだ。

　真横で流れている壁のスクロールは縦から横へと変化していて、落下の速度は減少の途をたどっている。地面も近付いているには近付いているが、到達しない。それよりも明らかに、水平方向への速度が増加している。

　これは、えっと……どうやって？

　もう一度身のまわりを見てみて、状況を把握した。

　まず、僕の体を包んで離さないのは、リリィの髪だ。大幅に長さを増しているそれは僕の胴体を腕ごと巻き包んでいて、それはすぐ傍の松平瑞穂も同じだった。彼女も驚いているのか何事か言葉を口にしているようだが、凄い風圧で聞き取れない。

　そして、そんな僕らの落下を回避させているのは、リリィの腕……なのか？　生えてる位置的には多分そうなんだろうけど、それは翼だった。

　それは広く大きく、片翼だけで優に身長の三倍以上の長さがあり、ハンググライダーのような膜を具えていた。足からも膜を張っては体勢を制御し、普通に……飛んでいる。

　あ。ああ……飛んでる！

　飛んでるよ！

　凄いやリリィ！

　そこでふと、気付いた。僕は今、ライトノベルの物語の中に飛び込んだかのごとき体験をしている。

　それにちょっと憧れみたいなものは漠然とあったが、別に夢見るくらい切望するものでもなかった。いきなりそんな状況になったのも不本意ではあるし、正直ついていけない部分もある。平凡な日常も、無くなってしまってからその貴重さに気付かされた。

　でも。

　悪くない。

　ちなみに通行人はというと、ある一定以上の高さにあるものには割と気が向かないらしく、特に騒ぎにはなっていない。

　リリィはその頭上を通過しつつ、ほとんど人目の無い裏路地を見付けると、翼を上手い具合に操ってはそこへ入り込み、すとんと着地した。

　とりあえず風圧は受けなくなったから僕はリリィに話し掛けようとしたのだが、彼女は髪による僕ら二人の拘束を解く事無く、そのまま走り出す。

　……ってか、待った！　何で走ってるんだよ！

「ちょっ、リリィ足！　怪我！」

「話は後です」

　速かった。頬を風が切る。

　大丈夫かなあ……。まあ事実走れてはいるのだけれど、怪我の完治はまだしていないはずで。

　走りつつも一方、リリィの翼膜はゆるゆると変形し……普通の手足に戻ったりした。　それはもう現実的な眺めではなかったけれど……まあ、見てしまったんだからどうしようも無い。

　その後リリィは僕と松平瑞穂を自分の両肩に運んで腰掛けさせると、元に戻ったばかりのその両腕で僕らをガッチリ押さえる。そうすると髪もまた普段の長さへ戻っていき、ごく当たり前の髪の毛ですが何か？　とでも言わんばかりに受ける風にたなびいた。

　当然ながら、こんな場所で人に出くわさないのは、シャワーを浴びながら濡れないでいるのと同じくらい難しい。僕らを肩へ移したのはもちろん、その奇異さを少しでも抑えるためだろう。それでも金髪美少女が二人も肩に担いで高速で街中を駆け抜けるさまは、どう見てもおかしすぎるとしか云いようが無いのだけれど、事無かれ至上主義の国の人たちは、何じゃありゃ？　程度の感想しか持たなかったようだ。苦労は報われている。

　そんな高スピードで街中を駆け抜けるリリィは、街から遠ざかりつつも、駅にもバス停にもマンションにも向かってはいないようだ。それよりもどうやら、何かを探しているといった感じである。しかしそれはなかなか見付からないようで、結構時間を食っていた。

　それについてちょっと、気になる事がある。すなわち、最初出会ってリリィが僕を拘束した時、エネルギー切れとやらまでに、それほど時間が掛からなかったような気がするのだ。きっちり計ったわけではないが、体感にすれば十五分か二十分くらいだった。そしてそれは今、過ぎているはず。大丈夫なのだろうか。

　彷徨いつつ、やっとたどり着いたのは人混み離れ、街から少し外れにある廃倉庫街のような場所。チェーンで封鎖された敷地内へしなやかに跳躍して侵入すれば、その入口に施錠はされておらず、扉を足で押し開け建物の一つへ入り込む。中はがらんとカラッポで、リリィは様子見に必要な隙間だけ残して扉を閉め、ほとんど闇と化した空間の中にようやく僕たち二人を、肩から降ろした。

　息ははあはあと激しく切れており、そういえばそんな様子のリリィを初めて見たような気がする。そんな状態の彼女へ話し掛けるわけにもいかず、そうして待っていればどうにかそれを整えたリリィのほうから告げてきた。

「……おそらく、どこまでも追ってくると、思います。ですから、撃退の必要が、あります。向こうは飛び道具を、使いますから、あなたたちを守るためには、それに私が人目に触れないためには、このような場所が、迎撃するのに都合がいいです。しばらくここで、辛抱していてください」

「あ、うん……ところでリリィ、足は？　怪我は大丈夫なの？」

「鈍く痛みはしますが、それでももう傷口が開かないくらいには、回復しています。動かす事に、問題はありません」

　いや……痛みがあるのって、動かす事に問題があるって云うんじゃないのだろうか？

「それと、トランス……モード？　エネルギーとか、大丈夫なの？」

「どうでしょうか。持続時間はモード移行時にある程度決められるので、今回は極力長続きするようにしてはみましたが……どれくらい活発に動くかにもよりますが、動き続けるとしてリミットは、あと十五分から二十分くらいです」

　充填方式でしたか。

　わずかに開いた扉の外を覗いながらそう答えたリリィに、僕は別の質問をした。

「そういえばさっき、普通に飛んだよねリリィ！　凄いじゃん！　もしかしたら、僕らを抱えてなかったら、鳥みたいに自由に空を……」

「不可能です」

　あああああ。きっぱりすぎる。

「いや、もうちょっと夢を……」

「例えばハト。持ち上げた事はありますか？」

「……ハト？　えっと、無いけど」

「驚くほど軽いんです。キジバトであればおよそ２４０グラム。それに対して翼長は片翼１９センチです。そこから単純計算してしまえば、私が飛ぶのに必要な翼長は片翼３５メートルほどに達します」

「３５メートルも？」

「もちろん単純計算です。面積を拡げればもっと短くできます。しかしそれでも、そこまで巨大化してしまうとどうしても、強度が犠牲になって、おそらく飛行に耐えません。私の体もなかなか常識を無視しますが、それでも質量保存の法則には一応従っているようです。さっき髪を伸ばした時も、細くなっていたはずですが、気が付きましたか？」

「あ……いや、全然」

　っつーか、それどころじゃなかったよ？　もう、全然。

「ですから実は、髪の毛だけで二人を支えられるかどうかに、多少不安があったんです。でも、髪の毛をオリヒコへ少しだけ多く配分する事で、どうにか切り抜ける事ができました。前言を覆して申し訳無いですが……ミズホ。あなたが軽量で、よかったです」

「あー……あはは」

「あ、リリィ。それなら、ちょっと不恰好だけど……籠みたいなものを形作ったりはできないの？　それなら僕たちも、自分で掴まったりとか……」

　深く考えずに言ってみた僕の質問に対して、リリィは質問を返してきた。それも、どう答えたらいいのかわからない質問を。

「オリヒコ。例えばそうですね……あなたが関節の無い箇所で、腕を自由に曲げ伸ばししようと思ったら、どうやりますか？」

「……は？　え？」

　あの、できないと思うんだけど、もしかして何とかする方法あったりする？　骨をわざと折るとかだけじゃあ、自由には動かせないし。いや、それ痛いし。

　えー？

「いいえ、答えは期待していません。あなたにそれは、不可能です。ところが私には、それが可能なんです。でも、ただちにというわけにもいかないんです。わかりやすく云うなら……実はあなたは、関節がある箇所ですら、自由な曲げ伸ばしは不可能だったんですよ？」

「……ええ？」

「覚えてはいないと思います、胎児の頃の話ですから。その胎児は、とにかく動かそうとしてみる。その訓練を長い間ひたすら繰り返して、やっと動かせるようになるんです。そしてオリヒコ。あなたは右利きと言いましたが、それはつまりあなたが今なお、左手を満足には動かせないという事なんです。私が何を言いたいかは、わかりましたか？」

　あ。そういう事、か……。

　リリィが何を言い始めたのか全然わからなかったけれど、一旦説明を受けてしまえば、何でわからなかったのかがわからなくなった。

「……練習しとかないと、どうにもならない。って事なんだね？」

「はい。ところで少し脱線しますが、関節が無い部分ではやっぱり、普通には曲げ伸ばしできません。それを実現するには、新たな身体機能を自分で作り出す。そのための命令系統も新たに整備する。その上でそれを自由に動かせるよう訓練する。そういう事が要求されます。きっと想像が付かないと思いますが、私には、そういう事が……できます」

　それは確かに、想像が付かない。新たな身体機能を自分で作り出す、ってまずその第一歩で挫折しちゃうでしょ。

　……。

　あまり、考えたくない。

　あまり、知りたくない。

　そんな淡い希望に反して、リリィは次々と知りたくない事実を僕に突き付けては、僕に考えさせる。

　ジブントハチガウイキモノ。

　そんな事を、考えさせられる。

　リリィ、お願い。あんまり遠くには……。

「そうですね……少し妙な質問をします。それは例えば、普通の人間に腕を一本、また一本と追加していくような感覚が近いと思いますが、オリヒコ。もしもあなたが、自由に腕の数を増やせるとして、実際に百本の腕を取り付けたとします。その時あなたは、その百本の腕を同時に、自由に操作する事ができますか？」

「え……えええええ？　それは……うーん……」

「きっと大混乱を起こして、まともに動く事もできないでしょう。ところが私の場合、その本数は数えた事がありませんが、髪の毛までもが動かせてしまいます。もちろん、訓練をしていない人間が足の指を、親指以外は同時にしか動かせないように、私の髪もすべてを独立させて動かす事ができるわけではありません。それでも私が、普通の人間よりも圧倒的に多いカーソル……制御点を操っている事に、疑う所は無いでしょう」

「……」

　いや。想像にも付かない、どころではない。これは。

　異次元の話。そう云ってしまっていい。

　……。

　何でだよ。

　どうしてだよ。

　リリィは一体、そんな事を僕に言うんだよ。

　これではいつまで経っても、リリィは僕の傍へやって来ない。

　これでは……。

　ねえリリィ！

「だとしたら、私の思考回路はやはり、異質が過ぎるんだと思います。それならば……オリヒコ。私は……」

「……何？」

「それならば私は、オリヒコ。ならば私は……私が、普通の人間へ、近付こうとする事も……おこがましい話なのかも、知れませんね」

　……あ……。

「……リ、リィ……」

　そうか……これが。

　これが言いたかった。のか……。

　その表情は何となく……淋しげに、見えた。今リリィはその申告をしなかったけれど、もしかしたらそういう感情も、開花してしまったのだろうか。

　いや、淋しいんだとは思う。

　いいや、淋しくないはずが無い。

　だけれど……。

　わからない。

　リリィは間違い無く、こちらへ近付こうとしている。

　だけれど、その手を取って引き寄せてあげるには、その距離はまだまだ遠く。

　僕はリリィを、どの位置に置けばいい？

　……わからない。わからない！

　そんな僕の葛藤をもよそに、リリィは話を続けた。

「話を戻しますが、体重が増えるにつれて、空を飛ぶのは難しくなるものです。どんなに軽い素材で翼を作ったとしても、その長さが３５メートルもあったりすれば、手足のように動かすなんて無理があると思いませんか？」

「えっと、あ……それは……持ち上がるかどうかも、わかんないね……確かに」

「はい。仮に面積を増やして短くしたとしても、同じだけの揚力を得るために結局は同じだけの力が必要になります。そして、それを動かすためには筋肉を増やさなければいけませんが、それではまた体重が増えてしまいますから、それを挽回するためにもっと大きな翼が必要になってしまって、それにはもっとたくさんの筋肉が、という堂々めぐりが発生するんです」

「あー、そうなんだ……」

「つまり、空を飛ぶ事については２７キロの限界というものがあって、体躯、それを浮かせる翼の形や大きさ、それを動かす筋肉量。それらをどうアレンジしても、現在の地球上においては、およそ２７キロを超えて重い動物が自力で飛翔するのは不可能。そんな計算結果が出てしまうんです」

「じゃあ……リリィは、飛べない……？」

「残念ながら。もっと言えば、安定して長時間飛翔するためには、その限度は１０キロ程度、という検証結果も出ています。つまり、鳥という動物はありふれた存在ですが、その体の構造は奇跡なんですよ？　私ではどう頑張っても、滑空が精一杯なんです」

「本当に残念だなあ、それ……じゃあ、そうするとアニメとかで、小さい羽根の人なんかが飛び回ってるのも？」

「それについては物理によらない、例えば魔法のような特別な力によって飛んでいるのだという解釈を付ける事は一応できます。しかしそれは少なくとも、翼によって飛んでいるものではありません」

「そっか……あ、でも昔、空飛ぶ恐竜とか居たよね？　ええと……プテラノドンとか、それから……ケツァルカトルス、だっけ？　とか。あれ、重いんじゃないの？　見るからに」

「いえ、確かにそういった巨大翼竜の化石もちらほら見付かってはいますが、計算上あれが飛翔できた可能性はほとんどゼロです」

「あー、そうなの？」

「はい。まず、安定飛行のためにはある程度の重さも必要になるものなんですが、それに反して推定体重が軽すぎます。それから逆に、その体重で飛翔するにしても、滞空に最低限必要な速度が出ている状態で羽ばたくには、強度や筋肉量が無さすぎるんです。ですから、本当に羽ばたいていたのなら大気密度などが今と大幅に異っていたのではないか、あるいは私と同じように単に滑空をしていただけではないのか。そんな推測がされています」

「うーん……。理解はしたけど、ちょっと夢壊れるなあ……」

「それがもっと壊れるような事を言いますよ？　同じ理屈で、ファンタジー物のフィクションではしばしば登場する、ドラゴンや巨鳥のような生き物がもし実在したとしたら……その生き物は、空を飛べません」

　……。

「でええええええええええええええええええええええ！」

　ＭＪＤＫ！

　飛べないドラゴンとかねーよ！　幻滅だよ！

　飛べない巨鳥とかねーよ！　いろいろ台無しだよ！

　っつーかリリィ、フィクションクラッシャーすぎるだろ！

　と……その時。

「静かに。……来ました」

「え」

　あんなに速く走ってたのに、もう？

「敵は……複数のようです。私は、撃って出ます。この中には身を隠せるような場所が無いようですが……せめて外には、絶対に出ないでください。……何があっても」

「……平気、なの？」

「気休めにしかならないかも知れませんが、私は無敗です」

　そう言い残して、リリィは扉を開け、閉める。

　ぼおぁん！

　銃声。

　そしてリリィの姿は、扉の隙間から消えた。

　その銃声は絶え間無く、と云うほど頻繁ではなかったが、それでも断続的に続いた。そんな音を聞きながら、僕と松平瑞穂は……する事が無くなった。

「何だか……凄い事になっちゃった、ね？　宮前くん……」

「うん……松平さん、大丈夫？」

「割と、落ち着いては、いるかな？　でも何か……全然、現実じゃない感じで……銃、とか……変身、とか……。それにリリィちゃん、凄い力持ちだったね……？」

「うん……そうだね」

　そう。僕たちを運んでいた間リリィには、二人分の全体重が掛かっていたはずである。その状態で、あんな速度で走ったりできるものなのだろうか。

　屋上から脱出した時もそうだ。状況を把握できなかった瞬間が一瞬だけあったが、それはそんなに長くない時間のはずである。百貨店の屋上にはもちろん柵があり、それをよじ登ったような感じではなかったし、それにあの時の持ち上げられるような感覚。つまり、跳躍か何かをして、飛び越えたのだと思う。

　それらを実際にやってのけているのだから、否定とかするつもり無いし、できないけど、そういえばリリィがどれくらい力持ちなのかとか、全然知らない。

「リリィが手を上げるとか絶対あり得ないけど、それでもケンカだけはよしといたほうがよさそうだな……」

「……あはは」

「だけど……少なくとも、包丁は刺さった。血も流れた。もし撃たれたりしたら、ただじゃあ……」

「うん……でも結局、私たちには何もできなくて……せめて、祈ろっか？」

「そう、だね」

　銃声は続いている。敵は複数との事だったが、リリィは果たして何人を相手にしているのだろうか。それに相手は、飛び道具だ。一応ナイフ一本は持ち歩いていたが、それで対抗できるものなのだろうか。

　時折、近距離では銃よりナイフのほうが有利、なんて事がささやかれたりするが、どう考えてもそれはおかしい。もしそれが本当なら、みんな銃ではなくナイフを持ち歩くだろうし、そもそも敵同士が最初から接近しているなんて事はまず無いのだから、近付く前に発砲されるだろう。ちなみに、銃口に指を詰めれば暴発して相手は自滅する、というのもほとんど嘘らしいし、本当だとしても指を詰める前に、やっぱり発砲されるだろう。

　僕たちは、じりじり待った。ただ、待った。

　それはもう、二十分以上は経過したはずだ。もうそろそろリリィは……活動限界、なのでは？

「あ、リリィちゃん」

　それが杞憂だったらよかった。

　しかし姿を現したリリィが、対峙する黒メガネの隙を突いて攻撃を仕掛けたその時……突如、その動きを止めてしまったのである。

「……リリィ！」

　相手の黒メガネは、リリィのナイフによって胸部を負傷しているようだ。それが致命傷なのかどうなのかの判断は僕にはできないが、しかし少なくとも完全に動きを封じるまでのものではなかったらしい。

　男は手の銃を……リリィへ向けた。

　これって。いや。

　リリィが、撃たれる？　殺される？

　僕たちの目の前で？

「宮前くん……ダメ」

　思わず扉を開けようとした僕を、松平瑞穂は止めた。

「だって……このままじゃリリィが」

「でもさっき、一緒に来いって話だったから……命までは……」

　松平瑞穂の今のセリフは、冷静な判断と云えるものだろうか。それともただの、希望的推測というものだろうか。ただまあ確かに、僕たちがこんな会話をしている時間があったわけだから、男はすぐには発砲しなかったのだろう。

　しかし……。

「でも、リリィが連れていかれて、何をされるのか……」

「うん……リリィちゃんが連れてかれちゃうのもダメだけど、それでも私たちにはどうしようも無いよ？　冷たいようだけど、でも……。ねえ、リリィちゃんさっき、ここから出るな、って。何があっても、って……あ」

　松平瑞穂がそこまで言った時、リリィの背後からも銃片手の黒メガネが近付き。そして……。

　ぼおぁん！

　ぼおぁん！

　響いたのは、二発の銃声。

　……え？

　リリィ？　を、撃った？

　そんな。そんな……。

　……そんな！

「リリィ！」

　もう何も考えられなくなった僕は、松平瑞穂から止められるより先に扉を開け放ち……フリーズした。目の前の光景に、理解が追い付かなかったからだ。黒メガネ二人は持っていた銃を失い、手からだらだらと流血している。

　何が……起きた？

「倒した相手の銃を奪うくらい、したらどうだリリィ？　馬鹿正直にもほどがあるだろう」

　少し離れて銃を構えていたのは……背の高い女性。

「……マークⅢ！」

　ぼおぁん！

　また銃声が轟き、リリィの背後から近付いていたほうの男は、胸から血を吹くとその場にくず折れる。

　って、あれ？　今、何か……映画のシーンのようなものをナチュラルに目撃したけれど……これは。

　人が、目の前で銃に撃たれて、死んだ。

　という事になるのだろうか？　どうもあんまり現実感が無さすぎて呆然としてしまい、恐怖とか感じる余裕は無かったわけだけれど、続いてもう一人の男へ銃口を向けたマークⅢは、リリィから制止を受けた。

「撃たないでください、マークⅢ」

「どうしてだ？　慈悲でも掛けるのか？」

「いいえ、訊きたい事があるだけです。それより助かりました、ありがとうございます」

「それはいいが、何を訊くんだ？」

「勢力と云うなら、本拠地があるはずです。こんな事はもう……終わりにしたいので」

「ふむ。私は、いちいち撃退していればいいかと考えていたが……確かにそのほうが、話は早い。しかし……それにしても、あの時手合わせをしないでいてよかったな。あなたには心底呆れたぞ？　リリィ。とても敵いそうにはない」

「いいえ。あなたも筋は悪くありませんし、経験次第でしょう。それに私は、射撃は得意ではないんです」

　ええと。つまりこれは、リリィとマークⅢはお互いの戦う姿を見ていたという事だろうから、マークⅢは別にたった今やってきたわけではないのか。僕たちは見ていなかったのだから、どれだけ凄い立ち回りがあったかは全然わからないわけだけれども。ちょっと見てみたかった気が……いや。本物の命のやり取りだ、不謹慎だろう。

　そのマークⅢは男を尋問すると言って、僕と松平瑞穂とリリィをその場に残すと、倉庫の中へ入っては扉を閉めた。うーん……何が行われるのか、あんまり考えたくないのだけれども……。

　その、あまりよろしくない想像を紛らわす目的もあって、僕は気になった事、もとい気になっていた事をリリィへ尋ねてみた。

「ねえ。リリィ？」

「はい？」

「銃相手にナイフ一本って……勝算あるもんなの？」

「必勝法は、存在しないと思います。コツのようなものはありますが、それも絶対ではありません」

「え。コツなんてあるの？」

「あると云えば、あります。原点としては、銃弾とは高速度で飛んで来る物ですから、自分へ向かって発砲された後ではかわしようが無い、という所になります」

「まあ、そうだね」

「ですから、まずは向けられた銃口から弾道を読んで、そこに居ない事」

「あー」

「次に、銃弾とはとても小さい物です。つまり、きちんと狙う事が難しいものですから、狙わせないために動き続ける事」

「うん……」

「ただし銃とは、逆にあまりきちんと狙わなくてもそこそこ命中するものなんです。ですから、同じ動作量で弾道をより大きく回避するために、無闇に接近しない事」

「……うーん……」

「そうして距離が取れたら、相手を騙して、つまり自分がそこに居る、もしくは居ない、るいはこう動くに違いないと思い込ませて、照準を自分へ向けさせない事」

「……えっと……」

「それから忘れてはいけないのが、自分から見えていない銃口がどこにあるかを探り当てて、かつその照準を騙して自分へ向けさせない事」

「……いや、あの……」

「そうやって逃げ続けて、好機が訪れた時に初めて攻撃を仕掛けるんです。こちらも飛び道具を持ち合わせていない限り、とりあえず先制攻撃は無謀です」

「……」

　うーんまあ、確かにそうやって逃げ切れたら、銃弾は当たらないって事になるけど……。どんどん人間業じゃあ、なくなってきてない？

「そんな事が……できちゃうの？」

「私がこうして無事で居る以上、できるとしか言えませんが……」

「いや、それはそうだろうけども」

「確かにまず、銃口から弾道を読む事がそもそも、難しいかも知れません。普通、銃弾とは直進しないものですし、品質の低い銃ではそもそも銃口の向いているほうへ、正確に銃弾が飛び出すとは限りません。だからその見極めについては、コツと云えるものが無いんです」

「え、じゃあ運任せ？」

「ほとんどそうですね。せめてできるのは、銃を見て識別して、その型式から弾道をある程度絞り込む事と、その上で考えられる誤差の分だけ、余裕を持って弾道を避けておく事だけです」

「うへえ……」

「それに、発砲された後に比べれば余裕があるとは云っても、引き金を引くのにはそれほど時間が掛かりません。弾道を見切れたとしても、それを脊髄反射的に回避できなければ意味が無いんです」

「まあ、そりゃそうだよね……」

「それから、騙したり探知したりする方法については、定石がいろいろあります。隙を見せる、つまりわざと自分を危険に晒すのがその基本なんですが、ただそれは相手もわかっている事ですから、そこにあるのは肉弾戦でも技量戦でもなくて、実は知能戦なんです」

「え……そういう、もんなんだ？」

「はい。心技体という言葉がありますが、これは重要となる要素がちょうど順番に並んでいる言葉なんです。力は技に敵わず、技は知に敵いません。それは銃撃戦に限らずほとんどの戦闘行為に云える事で、まあ今回は違いましたが、相対した達人同士がずっと静止したまま、という事がよくあるのはそのためなんです」

「あ。それってそういう事だったんだ……単なる演出かと思ってた」

「まあ、そういう風に勘違いされる事も多いようですが、判断を誤れば命はありませんから、動くに動けないんです。つまり力量差があったとしても、実際に刃を交えてみなければ、結果は誰にもわかりません。断言できるのは、だからこちらがナイフ一本でも一概に不利とは云えない、勝算も敗算も無い、という事だけです」

「はー……」

「ただそれは、拳銃のたぐいを相手にする場合でしか通用しない話です。銃は銃でも、機関銃なんかを持ち出されたらもう、尻尾を巻いて逃げるしかありません」

　ちょっと、自分が立ち入ってはいけそうに無い世界では、ある。流石にマシンガンはなかなか出てこないだろうけど、それでも日本で銃が規制されていて本当に、よかった。

「じゃあ結構、危ない橋渡ってたんだね？」

「はい、そういう事になりますね」

「うーん……よく、そんな勇気あるね？」

「それについて一つ。必勝法は存在しない、と言いましたが必敗法は確実に存在します。それは戦闘行為だけにとどまらずに、すべてにおいて云える事ですが……」

「……あ。それ、わかるかも」

「きっとそうだと思いました、あなたは前にその答えを口にしましたから。言ってみてください」

「諦めたら、何もできない」

「正解です、オリヒコ」

　うん。こういうのってちょっと、嬉しくなるよね。

「さっきの心技体という言葉の引用で、実は少し恣意的な解釈をしました。本当は、知能とはこの言葉で云うところの技に含まれるもので、心とは文字通り心、つまり心構えの事なんです。どんなに強靭でも、どんなに巧みでも、そしてどんなに賢しくても、心が折れてしまっては何にもなりません。しかし私は諦めなかった。だからここに、生き残っている。そういう事です。オリヒコにも、私は生き残って欲しいと思います」

「うん」

「ミズホもですよ？　簡単に命を諦めてはいけません」

「……はい」

「ただ一つ、気を付けて欲しい事があります。絶対に無理だと感じた時は、迷わず逃げてください。逃げを打つのは正しい姿勢とは云えませんが、必ずしも悪い事ではありません。……正否と善悪の違いはもう、わかっていますね？」

「あ、うん」

「絶対に逃げてはいけないのは、その結果自分の信念を折ってしまうような場合だけです。それでは何のために生きているのかわからなくなりますから、その時こそは命すら張らなければいけませんが、それ以外の場合であればどんなに人から罵られようと、基本的に逃げてもいいんです」

「……なるほど。そっか」

　何となく、思った。

　リリィは、強い。

　僕は、自分が知っている通りそんなに強くない。っつーか弱い。

　でも、今もリリィはこうして、僕へいろいろ教えてくれている。僕の手を引いてくれている。

　もしかしたら……それなら。

　リリィが僕の傍へ来てくれるのを、待つのではなく。

　いつか僕がリリィの傍へ、行く事ができたりするだろうか。

　……。

　やって、みようか。

　頑張って、みようか。

　どこまでできるか、何ができるか、わからないけれども。

　……。

　ぼおぁん！

　唐突に聴こえたそれは、のちのちになっても後味の悪いものとして心に残り続けた。それは無論、扉の閉じた倉庫から聴こえてきた……最後の銃声、だ。

「……」

「……」

　しばし、沈黙させられる。

「君たち二人には難しいかも知れないが、こういった事は深く考えてはいけない」

　姿を現したマークⅢにはふと、そんな事を言われる。そんなフォローをさせた僕と松平瑞穂は、果たしてどんな顔を見せていたのだろうか？　まあ想像するに、間抜け面だったのだろうけど……。

「あえて考えるなら、様々な不公平はあっても、命だけは平等。一般にはそんな風に云われているが、そんな事はまったく無い。命は基本的に、君たちみたいに平和にやろうという者のほうが重く、敵の命も自分の命も度外視して戦場に赴く者のほうが軽い」

「……」

　そう言い切ってしまって、いいのだろうか。

　戦って誰かの命を守る、という事ができる命の方が、重い。そう云う事も、できはしないだろうか。

「もっと言えば……命というものに価値など無いと言い切ってしまえば、あるいは命は平等と云えるかも知れないな。役職や能力的に命が惜しまれる事はあるが、それは役職や能力に価値があるのであって命に価値があると云えるものではない。実際、近隣の者以外の命など割とどうでもいいと感じるものだ」

「……」

　命に価値は無い。

　これは少し斬新な考え方だが、もしかしたらそれほど、不合理なものではないかも知れない。ただ、これが正しいという事にしてしまうと、いろんなものの価値観がひっくり返って、大混乱になる事は間違い無いだろう。

「しかし……やはり、深く考えるな。人を殺してはいけないというのは人が勝手に決めた事であって、本当にいけない事かどうかは誰にもわからない」

「……」

　この説は、間違っていないだろう。理屈的には、合っている。

　ただ、やっぱり……後味が悪い事だけは確かであり、そのように感じさせてしまうという点においては、人を殺してはいけないというのも間違ってはいないのではないだろうか。

　だかしかし、本当のところはやはり、わからない。それは、考えても、わからない。

　わからないが、しかし考えてしまい。

　仕方も無いが、しかし考えてしまい。

　そして、そんなであるのは僕一人では、なかったらしく。

「……あ、えっと。殺さなきゃ、いけなかったのかな？　って私、思うんだけども……」

　ふと言い出す、松平瑞穂。

　それは、そうだ。普通は、そう思うはずだ。

　そして残念ながら僕は、そうせざるを得ない理由を、知っている。前にリリィも、言っていた。モノのホンにも、載っていた。

　マークⅢもそれについて、ほとんど代弁をするような事を、言った。

「そうだな、理由は二つある。まずは、獅子はウサギを狩るにも全力を尽くす、という言葉の通りだ。たとえ圧倒的な実力差があって確実に勝てると思える相手でも、そして迫撃尽くして牙や気力を折って無害化できたと思っても、どんな手段で覆されるかわからない。油断はただの命取りだし、ましてや彼らは間違っても弱くない。悠長に余計な情けを掛けていたら、はっきり言ってこちらが危ない」

「ううん……じゃあ、もう一つは？」

「片が付かないんだ。殺されなければ諦めない。少なくともリリィが相手してきた相手は皆、そうだったと聞く。まあ死後の事などわかりかねるし、だから殺されて諦めているかもわかりかねるが」

「……」

　まあ、理解はできても納得は、いかないらしい。松平瑞穂がちらりと見せた、虚ろげな憂いげなその、表情。

　リリィからちょっといい事を言われ、ちょっと何かができる気になっていた僕は、そんなものを見せつけられて少し……恥じた。そして、こんな事で決意が萎えてしまう、自分の弱さに僕はまた……リリィの遠さを、思い知らされた。

　最近の事はどれも、記憶に強く残るものばかりだ。しかし今日の事は特に、特に印象強く、強く心に残ったのだった。

　ところでマークⅢは、どうやらモード移行とやらはしていなかったらしく、リリィのように動きを止める事は無かった。そんな彼女にリリィを運んでもらいつつ、その場を離れる段になって気掛かりだったのはもちろん、黒メガネたちの死体である。

「放っておいて……大丈夫なのかな？　あれ、見付かったら普通に殺人事件じゃあ？」

「リリィがかなり、都合のいい場所を選んだからな。あれだけ長い事銃撃戦をやっていたのに、誰も駆けつけていないだろう？　目撃した者なんかいないだろうし、死体も一応中へ仕舞ってある。当分は問題無いはずだ」

「……はず、じゃあ、ちょっと不安な気が……」

「細かいな。余程の幸運に見舞われない限り、完全犯罪など達成できない。隠蔽工作の過程で、かえって余計な証拠を作ってしまう事もある。あれだけたくさん死体があるなら、それはなおさらだ。不安要素がそれほど強いものでないのなら、それ以上の事は何もしないほうがいい」

　確かに説得力は、ある。釈然とはしないが、だからといって何か有効な代案を出せないのなら、それについては何を言う権利も無いのかも知れない。

　マークⅢは、こんな事も言った。

「楽天的に考えてみたらどうだろうか。例えばあの人数で、しかも揃いの服装だ。もし見付かっても、勝手に都合のいい勘繰りをしてくれると思わないか？」

「まあ……そういう事も、あるかも知れないけど……」

「いずれにしても、気にしたところで何も変わらない。それより、そろそろ人影が見えてくるあたりだ。その話はもう、終わりにしておこう」

「……」

　そうして向かって落ち着く事になったのは、結局の所マンションの部屋だった。

　リリィとマークⅢの間にどんな会話があったのかは知らないが、マークⅢはしばらく僕たちと一緒に居る事になったようだ。それには、松平瑞穂の家だと都合がよろしくないというわけなのだが、まだ家具の揃わない部屋では普通に過ごせない。それでも致しかた無しという事で、夕食は宅配ピザ、夜はゴロ寝という結論に落ち着いた。

　ちなみに、リリィはそのＬサイズピザを三枚、平らげた。僕と松平瑞穂とマークⅢはもう一枚のＬサイズピザを仲良く分け食べたのだから、つまり計四枚の注文だったわけだが、まあ配達の人には一人一枚あてで消費すると思われたに違い無い。

　しかし、そんなにどこに入るのか。そう尋ねた所、回答とは違う返事があった。

「はっきり言って私もつらいですが……今までの分の補給と、これからの分の備蓄です」

「……これから？」

「敵対勢力の、本拠地へ乗り込みます」

「本拠地……どこ？」

「教えません。あなたとミズホは連れて行きませんし、追ってきてもらっても困ります」

「じゃあ、マークⅢと二人で？」

「いいえ。私一人です」

「え。どうして？」

「何があるかわかりません。マークⅢには、あなたたち二人を守ってもらいます」

「逆に、マークⅢに行ってもらうわけにはいかないの？」

「二つの理由があって私が行きます。マークⅢにはやはり、実戦経験が足りません。そしてトランスフォームモードでの活動が、私に比べて半分ほどの時間しか維持できないとの話です」

「それなら、やっぱり僕たちも。そうすればマークⅢも行けるでしょ？」

　リリィは強硬に首を振る。

「お願いです。どうか聞き分けてください」

「僕たちが……足手まといだから？」

「違います。それが一騎討ち合戦でもない限りは、非戦闘員が戦闘の役に立たないというような事はまったく無くて、それは単なる采配の問題です。ですから、あなたの申し出は非常にありがたいとは思いますが、そうではなくて……」

「じゃあ？」

「そうではなく、私はただ……」

　先ほどの強硬な拒否とは打って変わって、その口調はリリィにしては、かなり歯切れの悪いものだった。

「ただ？」

「……見られたく、ないんです」

「見られたく……ない？　何を？」

「いいですか、オリヒコ。私はこれから敵対勢力を壊滅させます。つまり……大量殺戮を行うんですよ？」

「……え……あ……」

「そんな所、オリヒコ。ミズホ。あなたたちに、見せたくはありません。マークⅢは、私たちは殺人兵器などではない。そう言いましたが、それでも……そんな事が、再認識させられてしまいます。私は、それが、怖い。……だからです。聞き分けてください」

「リリィちゃん……」

「……リリィ……」

　それは、納得、できる。確かに僕も、リリィのそんな所、見たくはない。そんな事になってしまったら、またリリィは……。

　また遠く遠くへ、離れてしまう。

「それに、明日は引越です。購入した家具も大量に届きますし、それは受け取らなければいけません。あなたにも手伝ってもらいますよ？　マークⅢ」

「手伝い込みの子守りとは、やれやれ……かな」

　子守り……すか。

「実はマークⅢには、他のお願いもあるんです。オリヒコ。ミズホ」

「何？」

「あなたたちは今日、初めて目にしましたよね？　人が……殺害される光景を」

「あ……うん、そりゃあ……」

「そういった場合、多くの人はトラウマを抱えてしまうものです。ですからあなたたちも、特に今晩あたり、酷くうなされてしまったりするかも知れません。マークⅢ、そのあたりについてのケアもお願いしたいんですが」

「……本物の子守りなのか？　それは本当に、やれやれすぎるぞ？　リリィ」

「できませんか？」

　マークⅢは無言で、いっそ大袈裟に肩をすくめた。

　リリィは早々に、昨日の夜のうちに出て行った。

　松平瑞穂の家へは、三人で新居転入の前夜祭を催す、みたいな言い訳をしてあったわけだが、その連絡が済んだ後にわずかな食休みを取っただけである。

「二人をよろしく、お願いしますよ？　マークⅢ」

「承知」

　リリィの言いつけに対して、そんな堅苦しい言葉で生返事をするという事をしてのけたマークⅢ……あーいや、違った。

　彼女は英語で３を表す接頭辞である、トリィ。

　そう仮に呼ばれる事が、みんなでの相談によって決められたんだった。まあ本人は当初、センスが悪いとかどうとか言って難色を示していたのだが、他にこれという案が誰にも浮かばず、何となく定着してしまったというわけだ。

　そんな不承不承な感じのトリィは、リリィへ伝える事があったためにやって来たという事らしく、戦闘の助太刀をしたのはあくまで行き掛かり上の事だったようだ。何の話なのかはもちろん気になったが、トリィは教えてくれない。

「自分で伝える。リリィはそう言っていたからな」

　そんな説明をした。

　まあ、今は松平瑞穂の父親やその会社の人が押し寄せてきているし、詳しい話もできない。

　ただ、一点だけ。松平瑞穂をおびやかした事を謝罪され、その命をもう狙ってはいないとだけ告げられた。それは一体、どういう事なのだろうか。

　彼女が居てくれたお蔭かどうだか、僕たち二人もうなされはしなかったが、そのトリィもリリィ同様に力持ち……というわけでもなかった。トリィだけでなくリリィもそうらしいのだが、どうやらトランスフォームモードへ移行した時に、ある部位に対して力を集中させるような事ができるのだそうだ。その原理はよくわからず、少なくとも筋力によるものではないそうだが、とにかくそういった感じのチート的な事をやってのけてはじめて、あの怪力が実現するらしい。

　ふと思い立って、それなら空も飛べるんじゃあ？　と訊いてみたのだが、そうも行かないらしい。どうも、より大きく変形するに従って、力が込められなくなってくるのだそうな。やっぱり万能はあり得ない、という事か。

　いずれにしても、モード移行というものをしなければその怪力が発揮される事は無く、とはいっても別にトリィが搬入作業の役に立たないという事も無かった。むしろ、他の人たちの加勢もあって、びっくりするくらい働いてくれた。それよりも、僕と松平瑞穂のほうが役立たずで、あらかじめリリィから指定のあった設置場所を指示するだけに始終してしまったりして。

　それでも、すぐに終了というわけにはいかない。断続的に家具が到着するものだから、忙しいというわけではないがマンションから離れる事もできない、というわけだ。ただ、僕のアパートを引き払う必要があり、それには僕が行かなければどうしようも無く、僕には松平瑞穂やトリィも付き添っていなければいけないから、その時だけは松平瑞穂の父親に留守番を依頼する事になった。

　ところで今時、隣近所へ引越蕎麦を配るという風習もあったものではないのだが、それでも気分をという事で、昼食には松平瑞穂の父親が蕎麦を手配した。そうして和気あいあいと食事に突入するわけだが、その席でトリィは割と人当たりのいい人物である事がわかった。基本的に礼儀正しいのはリリィも一緒だが、それに加えてユーモア的なエッセンスもあり、またリリィとは比較にならないほど表情は豊かであり、松平瑞穂の父親とその連れに対する受けはよかったようだ。

「正直、しっかりしすぎてて話しづらいんだよなあ、リリィちゃんは」

　そんな感想が漏れた。

　ちなみにこの感想には僕は違和感があって、つまり僕はそれほど……リリィが何らかの難しい言葉を持ち出してこない限りは……特に、話しづらいという感想を持っていないのだ。これは、何だろうか。

　免疫……とは言わない。では、ええと……ああ、あれだ。

　波長。

　僕とリリィの間には、まあ僕が勝手に感じているだけなのかも知れないが距離が、ある。

　どうしても越えられない隔たりが存在するのだが、しかしそれでも波長が合う、というような事はあったりするらしい。不思議な感じがする。

　しかし、そんなリリィほどには、トリィは頭が回らないようで。リリィがあれほど周到に準備していたような、みんなに話すような設定は、用意しても思い付いてもいなかったらしい。とりあえずは、リリィのちょっとした知り合い、くらいには自己紹介したのだが、それ以上の事は伝えられずに、愛想笑いでお茶を濁していた。その事は……超人であっても、その思考能力が押しなべて高いわけではない、という事実はなお一層、僕からリリィを……引き離した。

　そのリリィは、昼下がりになっても戻っては来ない。

　こうしてただ、待っている。それは少し、歯がゆく思う。ついて行ったからって、別に僕はヒーローでも伝説の勇者でも何でもないのだから、何ができるというわけでもない。

　する事は……殺人、なのだから。それも、大量の。

　だからいまさら、ライトノベルの主人公を気取るつもりもさらさら無いのだけれど、それでも強いこの蚊帳の外感。それはどうにも、否めなかった。

　リリィ。大丈夫なんだろうか？

　そんなつぶやきも、口に出すわけにはいかない。普通に振る舞ってはいるが、どこか気懸かりそうな松平瑞穂も、同じ心境であるようだった。

　指示役の二人がこんな上の空で、よく何とかなったなという気はしないでもないが、それでも搬入設置作業は夕方までに済んでしまう。会社の人たちは手が空き次第辞していったが、松平瑞穂の父親だけは最後の荷物の処理が済むまで待機していた。

　その最後の荷物が大きなベッドだったのは、まあご愛嬌という所か。

　そして済んだ後、どこかへ夕食でも食べに行かないかと誘われたのだが、リリィがいつ戻るとも限らない。丁重に辞退すると、しかしそれでも一緒に食事くらいはという流れになり、寿司の出前など取る話になった。まあそれも、せっかくリリィから預かったお金だし、でもやっぱりせっかく引越の打ち上げなのだから、という事で松でも梅でもなく、竹がチョイスされた。それでも五人前で八千円を超えるのだから、寿司というものは恐ろしい。

　そう、五人前。一応、この場に居ないがリリィの分だ。

　松平瑞穂の父親、それにトリィはビールを傾けた。僕と松平瑞穂もちょっと味見しときなさいと言われて、ひと舐めしたのだが……以前にも試してみた事はあるが、やっぱり苦くてまずい。ワインは美味しいと思うのだが、大人の味覚というのはよくわからん。

　松平瑞穂のほうは……何か、気に入ったみたいだけど。うーん、ええとこれは……その、何だ。うーん。

　……呑んべえの子？　アホの子改め？

　ちなみに食事の間、松平瑞穂の父親には、高校卒業したらうちの会社に来ないか？　みたいな誘いを受けたりした。そういえばその会社、どんな業務をやっているのか全然知らかったわけだけれども、自身で販路開拓できない各種弱小メーカーの製品や製造技術を預り受けて、それらを複合した新製品の提案や営業を担う、というのがメインの商売なんだそうだ。規模としてはそんなに大きくはないが、中小企業基本法の範疇からはギリギリはみ出してしまう程度の商社で、一応大企業の分類に入ってしまうらしい。まあ、なんちゃって大企業ではあるが、あんな事がなければ別段業績が悪いわけでもないそうで、その研修システムもしっかりしているとの事。就職難のこのご時勢、大学目指すよりそっちのほうが断然おトクかな？　とか思ってみたり。

　あんな事、といえば別に、何か意地汚い欲をかいて裏取引に応じたわけでもないらしい。何か止むに止まれぬ理由があったらしく、しかしその説明は大人の事情、とだけで済まされてしまったが、ともあれ僕と松平瑞穂はその父親から謝罪を受けたりした。

　そんな感じで過ごしたわけだが、待ち人、来ず。食事が終わるまでに結局、リリィは戻ってこなかった。ついに松平瑞穂の父親は、リリィと顔を合わせないまま辞していく事になる。

「しかし、立派な住まいになったものだな？　瑞穂」

「あー、うん。お父さん」

「そもそも高校生だけでマンションというのも、普通はかなりの心配もんだがなあ。リリィちゃんなら何も問題無いだろうしなあ。私よりよっぽどしっかりしてる」

「あはは、だよねえ」

「こやつめ、ははは。しかし、リリィちゃんが居なかったら、どういう事になっていたか……考えたくもないが、考える必要も無いな。改めてお礼を言わないとなあ。よろしく伝えといてくれよ？」

「うんわかった」

「じゃ、宮前くん。瑞穂をよろしく頼むよ？」

「あ、はい」

「じゃ、トリィさんもまたよろしく」

「そうですね、また機会がありましたら」

　そして部屋の扉は閉まり、松平瑞穂の父親の後ろ姿は見えなくなった。

　……同時に、その人柄に醸し出されていた陽気な雰囲気も、姿を消した。

「リリィちゃん……遅いね？　とりあえずお寿司、どうしよっか？」

「えっと、夏だし……冷蔵庫？」

「ごはん固くならないかな？」

「リリィならこんな時、どうすればいいのかズバッて言ってくれる気がするけれど……」

「役立たずで済まないな」

「あ。いやトリィ、いいけど」

　後になってネットで調べた所、乾燥しない事と冷えすぎない事が肝要であり、そのためには容器に濡れティッシュを詰めてラップをし、タオルか新聞紙でぐるぐる巻きにして、野菜室に保管するのがよいという事を知った。

　しかし今はそこにはたどり着かず、ごく普通に冷蔵庫へ投入してしまった。

「トリィ。その、敵の本拠地っていうのは遠い所なの？」

「いいや、ここから８０キロほどしか離れていない場所だった。出ていったのがあの時間だからおそらく走って行っただろうが、それでも半日掛からず往復できるはずだ。もちろん、公共の交通機関を使えばもっと早い」

　えっとそれは……フルマラソンの四倍近い距離を、１２時間足らずで走破してしまうという事か。１００キロマラソンとかテレビの特番でよくやってるけど、あれ２４時間以上掛かってるよなあ。まあ、４０キロを３時間弱というペースであるわけで、だからトップランナーと比べてしまえば遅いペースなんだろうけど、それでも走り終わった後じゃあヘトヘトだろうし。

　その状態で戦闘、とか……。平気なの、かな？

　少なくともリリィやトリィが、体力的あるいは筋力的に別段、特殊な身体ではない事は、知ってしまった。とすればもう、そこには不安しか、無い。

「でも……リリィちゃん出てってから、もう丸一日、経つよね？」

「……うん……」

　要するにこれは、リリィが現地で活動する時間も半日以上あるという事であり。

　そしてそれは、リリィのモード移行後での活動時間には過ぎるという事であり。

「リリィってケータイ持ってないけど……トリィも、連絡取れないの？」

「実は発信器が、リリィの髪の中に埋め込まれている。それは私にもだが、ただそれで通信をするのは無理だな」

　そんなもんあったのか、全然気が付かなかった。確かにトリィは今までも、都合よく登場してきてたけれども。

　トリィは服のポケットから何やら小さい物を取り出し、覗き込んでは言を続けた。

「１０キロ近く届く高性能のやつなんだが、まだ補足できない」

「……それって……」

「……。あまりそういう事は考えたくないが、あるいは……」

　トリィは言いかけて沈黙したが、その先は口に出して言ってくれなくてもわかる。僕も考えないようにしてはいたが、頭からそれを追い出す事には失敗していた。松平瑞穂も多分そうだろう。

　リリィが、無事じゃないかも知れない。

　もしかしたら捕えられてしまったか、あるいは……。

　死？

　いやいやいやいやいやいやいや。そんな事は。

　そんな事は……。

　……。

　リリィ、お願い。

　無事に……帰って、きてよ……。

　その沈黙は、重苦しい沈黙は、人数が三人になってから二時間ほど続いた。

「やっぱり……僕たちも行ってれば」

「……いや。宮前少年」

「え？」

　トリィはおもむろに玄関へ行くと、その扉を開ける。そこに見えたのは……赤、という色。

「……リリィ、ちゃん！」

「リ、リリィ！」

「ただ今……戻り、ました……」

　そんなリリィの着ている服は、白いＴシャツ。戦闘服は松平瑞穂の家に置いたままだったので仕方無しに昨日、百貨店へ出掛けた時のままの服装で出ていったのだが、そのまっさらな布地に赤という色は嫌でも目立った。

「どうしたんだ？　リリィ。これは返り血なのか？」

「いえ……私の、血です」

「え、リリィ！　怪我したの？」

「いいえ。いいえ」

「どうしたの！　何があったの！」

　リリィは玄関の中に入ると扉を閉め、その場にへなりと座り込んでしまった。そして、はああああ……、と長く息を吐くと、ぽつり告げる。

「首尾は、上々です。私は敵を、完全に鏖殺しました。総勢百七十二名、皆殺しです」

「……」

　その言葉には……どうしても、戦慄させられた。その光景は……まったく想像できない。もちろんそれこそが、リリィの狙いであるわけなのだが……いまさらながら、ぞっとした。確かにそんな光景、見たくもない。これはもう、リリィに感謝しなければいけないが……。

　殺人、兵器。

　勘違いだったという事ではあるが、しかし。

　……。

　ここに。

　ここに居る、リリィという存在は。

　一体、どんな存在なんだろうか？

　どこへリリィを置けばよいか。その困惑は極まってしまった。

　リリィ、君は……。

　誰？

「……どうかしましたか？　オリヒコ」

「あ……いや……何でも」

「そうですか？　ところで私はその際……怪我も負いませんでした。私はつくづく、運がいいようです」

「……怪我が無いなら……何でこんな？」

「帰路につこうとした途端、私は異様な苦しみに襲われて……そのまま、吐血したんてす。マークⅢ……いえ、トリィ。こういう事、なんですね？」

「私もマスターから聞いただけで詳しい事はわかりかねるが……そういう事、なんだろう」

　何の……事、だろうか。

　リリィは苦しそうな顔。トリィは険しい顔。

　何か……何か、深刻な話……が？

「どういう、事？」

「先日言った、欠陥の話だ。不完全体というのはどうやら、いくつかの感覚や感情に強く支配されると、肉体が維持できなくなるらしいんだ」

　……。

　え。

「肉体……が維持、できなく……？」

　それって。

　それって要するに……。

「オリヒコ。私は前に、言いましたよね？　私の欠陥について、一つ思い当たる、と。それは残念ながら、的中してしまいました」

　確かにそんな事を、言っていた。

　言っていた、けれども……。

「どうしてそんな事が……あの時もう、わかっちゃったの？」

「それほど深く、考えたわけではありません。ただ……トリィは、超人は人間から生まれる。そう言いました。そして、しかし若くして死ぬ。そうとも言いました。だから私は、超人には子孫が存在しない。そう判断したんです。ただ単に、それだけなんですが……」

「うん、そういう事には、なるだろうけど……。でも、それがどういう……？」

「オリヒコ。そうやって突然生まれ出て、そして一代で絶えてしまう。そんな種の事を、何と云うか知っていますか？」

「え……いや、全然わからない、けど……」

「突然変異種。すなわちミュータント、です」

　……。

「とつぜん、へんい……」

「遺伝子の異常によって、親とまったく違う性質を具えて生まれる種を、そう云います。このミュータントというものにはいくつかタイプがあるんですが、基本的にはどれも遺伝子構造がでたらめな状態で誕生します」

「でた……らめ？」

「遺伝子異常とは要するにそういう事なんですが、それでもその構造がちょうどうまく機能するものであれば、それは生物としての進化までもが期待できる存在です。しかし……私たち、すなわち超人のように一代で淘汰されているものは……つまりは、そういう事です」

「そういう事、って……」

「性交は、世では日なたに晒せない、恥ずべき行為とされています。しかし、交配とは、そのでたらめな遺伝子構造を安定させるために必要な、何よりも大切な行為なんです。それが叶わない存在とは、つまり……強いて云えば、生物と云うよりも……生物失格。そんな存在です」

「生物、失格……」

「もっとも超人の場合、一度死亡しても甦生するといった、作り話じみた不可解な部分が少なからずあります。ですから一概に、同様のものと見做してはいけないのかも知れませんが……何の事はありません。超人とは、人間のミュータントだった。それも、生物失格のほうの、それだった。そして、魔術というものによってでも、結局はその寿命にいくばくかの猶予を与える事しか、できなかった。それが、私。……そんな所だと、私は思っています」

　リリィが……生物、失格。

　意味が、わからない。

　わけが、わからない。

　これはまるで、何かの冗談のようだ。

　これはまるで、何かの壮大な冗談のようだ。

　リリィを、見る。

　赤くて。

　荒く息をしていて。

　その髪は長くて。

　その髪は乱れていて。

　その顔は苦しそうで。

　その顔は可愛くて。

　人間の、女の子。

　傷付き倒れた、普通の女の子。

　そうとしか、見えない。

　リリィが、生物失格。

　意味がわからない。わけがわからない。これはまるで何かの冗談、まるで何か壮大な冗談のようだ。

「……トリィ。そう、なの？」

「いや。突然変異説は今、初めて聞いた。だが……大筋で、疑問を感じた部分は、無い」

「……そ、う……。じゃ、じゃあトリィも、そんなには……？」

「いや。私は完全体だと言っただろう？　そういった問題は無いはずだ。大丈夫か？　宮前少年」

「……あ」

「それに、君も私も、明日事故で死ぬかも知れない。寿命など、語ったところでそれほど面白みのある題材では、ないんだ」

「……」

「ちなみに、この欠陥が強く現れるのは目覚めた後でだそうだが、目覚める前の我々が早くに死んでしまうのも同じような理由らしい。しかし、感情や感覚が肉体を害すのであれば、では比較的長生きした私は一体どのような人生を送っていたのか、というあたりに著しい疑問を感じるんだが……まあ、それは今は、関係無い」

「……トリィ……」

「とにかくそれでリリィには、どんな手段でかは知らないが、封印が施された。その感覚や感情の種類が、いささか選択的すぎるのはもう……神の悪意。そんなようなものを感じるしか無いが……」

「……神の悪意……」

「ただ、封印が破れたのであれば、その時に強く感じた感情なり感覚なりが、何かあったはずだ。それがどんなものだったか、リリィ。心当たりはあるか？」

「……あります」

「それは？」

　リリィはその説明の前にまた一旦、はああああ……、と長く息を吐いた。今度のそれは二回、だった。

「私はこれまでも、数えられないほどの数、敵を葬ってきました。それでもその時は、何となく汚らわしい行為をしたという感覚はありましたが、それだけでした。しかし今日は、それはおそらく……罪悪感。良心の呵責。悔恨。慙愧。自責の念。後ろめたさ。そして何より、生理的嫌悪……私は汚れる所まで汚れ切ってしまった。越えてはいけない線をも大きく踏み越えてしまった。そんな感じがしました……。異様な苦しみに襲われたのは、その時です」

「そうか。これ以上無いくらい明白だな」

　それからリリィはもう一度、はああああ……、と長く息を吐き。そして説明を、続ける。

「そして、そんな私は……オリヒコに見捨てられてしまうかも知れない。オリヒコに見放されてしまうかも知れない。オリヒコに拒絶されてしまうかも知れない……」

　語るリリィのその、声。それは……少しずつ、上ずっていっていた。ここまでリリィが声を変えたのは……初めて聴いた。

「私は……私は、オリヒコに嫌われたくない。そんな考えに至って、たまらなくなってしまって……直後、私は吐血を……」

　その説明に、敏感に反応したのは松平瑞穂だった。

「……リリィちゃん！　つまり、それって……！」

「はい、ミズホ。……オリヒコ。私はもしかしたら、あなたの事が……好き、なのかも、知れません……」

「……リリィ……？」

　それは、愛の告白だったのだろうか。

　リリィ……？

　いや、それどころではない。そんなリリィはもう……どうしようも無く苦しそうで。

「リリィ。マスターの所へ戻るぞ。動けないなら、私が運ぶ。急いだほうがいい」

「……トリィ。私は、行きません」

「何を言うんだ」

「オリヒコの、傍に居ます」

「リ、リリィ……でも……」

「居たいんです……居させてください、オリヒコ……」

「手遅れになるぞ？　リリィ」

「構いません」

「構わなければダメだろう。死んだら元も子も無いが、生きていれば未来へ期待する事はできる。違うだろうか？」

「マスターの元へ戻って、私が完全体になる事ができる望みはありますか？　それまでに私が生き長らえる保証はありますか？　……先に釘を刺しておきますが、ミズホ。ダメですよ？　トリィの話によれば、私から封印とやらが破れ始めたあたりから……その手段はもう、手遅れなんだそうです」

「……リリィちゃん……」

「困ったな……宮前少年。何とか言ってくれ」

「トリィ……リリィ……」

「オリヒコ。何も言わずに、私を傍に置いてください。お願い、します……」

「リリィ……でも」

「リリィ。少年が困っているようには、見えないか？」

「……わかっています！　そんな事は、わかっています……。でも……でも、今ここに、すぐそこに、あるんです……」

　リリィは……わなわなと、震えて、懇願した。

「私が……ずっと、ずっと！　……求めてきたものが、ここにあるんです……もう手を伸ばせば、届く所に、あるんです……お願いです！　お願いですオリヒコ……」

「リリィ……気持ちはわかるけど……」

「ダメなんですか？　お願いです！　どうか！　どうか。あなたの傍に……」

　そう叫んでこちらを見上げたリリィの顔は……泣き濡れていた。

　涙を流したい。そう願っていたリリィ。

　しかしこんな涙は……受け止め切れない。つらいとしか言いようが無い。

「リリィ、やっぱり一度……」

「嫌ですオリヒコ！　そんな事言わないでください！」

「リリィ！」

「嫌です！　嫌です！　嫌！　嫌！　嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌！　いやああああああっ！」

「リ、リリィ！」

「いやああ！　いやっ！　いやっ！　やあああああああああああああああああ！」

「リ……」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

　狂乱。

　それが、今のリリィを表現するのに最も適切な言葉だった。

　無表情で無感情だったのも、近頃になって極端に恥ずかしがっていたのも、すっかり想像できないほどに取り乱し。

　叫び。

　嗚咽し。

　身をよじらせ。

　暴れのた打ち。

　掻きむしり。

　苦悶し。

　呻き。

　打ち震え。

　喘ぎ。

　消沈し。

　腑抜け。

　生気を失い。

　硬直し。

　やにわに叫び。

　再び嗚咽し。

　そうして泣き崩れたリリィは……。

「……！　っはぁっ……あ……ああ……オ……リ……あ……」

　今まさに目の前で大量に吐血すると、力尽きるようにゆっくりと伏し……。

　そのまま、動かなくなったのだった。

# **《５》殺人兵器が愛を知る方法**

『大変！　今どこ？』

「えっと今、駅の改札入ったとこだけど。どうしたの？」

『Ｕターン！　お客さん！　大至急！』

「お客さん？　誰？」

　よっぽど慌てていたらしい松平瑞穂は、僕の質問に答える事無く通話を切ってしまう。しょうがない、戻るか……。

　高校へは自転車通学だったから、その必要も無く定期券は所持しておらず、だからここへは当然ながら、切符を買って入場しているわけで。しばし迷うも、しかし駅員さんへ申し出れば快く返金してくれた。そうしてもう一ヶ月以上、住み続けたマンションへと取って返す。

　でも一体、誰が来たと言うんだろう？

　んー……あ。もしかして？

　マンションへの道中、前は律儀にバスを使っていたのだけれど、徒歩でも大して所要時間が変わらない事がわかり、いつしか駅へは歩きで行き来するようになっていた。今もついそのクセで歩いて行こうとし、そういえば大至急と言われていた事を思い出す。バス停へ戻り……。

　ダイヤが合わない。これは走ったほうが早い。

　まあ高校生にして既に運動不足な生活だ、たまには悪くないだろう。

　はっはっ、ほっほっ。

　この、ジョギングをする時に、二回吸って二回吐く呼吸法は誰が考えたんだろうな、とかあまり意味も無い思考がめぐる。

　割と、走っている間とは思考が止まるもので、だからそれ以外の事は特に考えるでもなくマンションへ着く。六階建て以上の建物には必ずエレベータを付けなければいけないという決まりがあるらしいが、そのエレベータを待っている間と乗っている間、呼吸を整え。部屋の前まで来てみれば、もちろん胸は湧く。

　……こんな場合、お客さんなんて、限られているじゃないか。

　と、そうして玄関ドアを開けてみれば。

「お帰り、みやま……あ、ええとその……織彦くん」

「え？　急にどうしたの？」

「……」

　迎え出た同居人は、言葉に表現できない表情をしており。

「……松平、さん？」

「えっと……お客さん」

「……？」

　よくわからない。

　何が何だかわからないまま上がってみると、ダイニングテーブルの椅子に一人、腰掛けている女性が居るのを見る。

　それは、栗毛の長髪で。

「トリィ！」

　もう俄然嬉しくなった僕は、はやる心のままに一も二も無く声を掛けた。

「トリィ、元気だった？」

「……」

「えっと、リリィは？」

「……」

　そのトリィの反応はしかし、どうやっても僕が期待したものではない。

「え……ねえ。トリィ？」

「私は、リリィが、とても不憫でならない」

　そのトリィは、両の肘をテーブルに置いてはあごのあたりを支えるように頬杖を突き、挨拶もせず、こちらも向かず、その姿勢のままそんな事をつぶやいた。

「……え？」

「リリィは、モルモットだった」

　……。

「モル……モット……？」

「マスターが、そう白状した。もともと、初代が居れば満足だった。他に特に何をするでもなく、ただ戯れていたいだけだった。そう白状した。だが結局、初代は今にして云うところの、不完全体だった。その欠陥が姿を現し始めると、マスターはそれに対処するためにいろいろ試行錯誤を繰り返した。しかし、有効な手段を見付けられないまま初代がそれに耐えられなくなり、やがて他にモルモットを求めざるを得なくなった。それが……リリィだ。そう白状した」

「……そんな……」

「一応、特定の感覚や感情が肉体を害し、それを封じ込める事で応急処置ができるという事だけは判明した。しかし初代に対するその処置は間に合わず、休眠させる以外の対処ができなかったという事らしいが……まあそれは、リリィとは関係の無い話だ」

「……それなら、モルモットなら、リリィが殺人兵器とか勘違いしてたのは……？」

「それは、はっきりとした事はわからない。私が想像するに、リリィは状況証拠的なものによって、そんな風に思い込まされてしまったのだと思う」

「……状況、証拠……？」

「勘違いできる要素は、確かにあった。マスターも、余計な感情が芽生えないように情報を制限したとも、自由行動を控えさせたとも言っていたし、それからマスターを名乗ったのも頼み事を命令と呼称していたのも、ただの……ごっこ遊びのつもりだった、と！　ああくそ忌々しい……はた迷惑この上無い話だが、あれだけ鋭い判断力を持っているリリィが、まさかこんな誤認を犯すとは。そうマスターも驚きを隠せないでいた。つまり、わかっていて演じていると、マスターもそう受け取っていたようだ」

「……演じて……？」

「しかし何より……リリィ本人が、あれから今に至ってなお、どこに間違いがあったのか分析する事が、できないでいるんだ。はっきりとした事はわからないし、自分が何者なのか認識できた今となっては、もはや追及する意味も無いだろう」

「……そう……」

「ちなみに言った通り、主従関係はあくまでごっこ遊びだったわけで、だからリリィには実は、マスターがこっそり付けていた名前があるんだ。もちろん私にも初代にも、ある」

「……え」

「愛玩目的……いや、実態はそんなままごとではなかったようだが、そんな目的で傍に置いた初代に、名前を付けないのは不自然だろう？　その流れでリリィや私に名前を付けるのも、不自然ではない。だが……今は、リリィだ。君が付けた名前だ。それがあるのにこんなものを知る必要があるかどうかは知らないが、君は聞きたいか？」

「……」

「だろうな。私もそれで、いいと思う。私の事も、……まあ気に食わないが、トリィでいい。ところで……私はリリィを不憫と言ったが、問題はそのあたりではないんだ。私は、リリィが自分を殺人兵器などと勘違いした事も、モルモットである事自体も、実はそれほど不憫には思わない。何となれば私もモルモットのようなものだが、そんなに困ってはいないからな」

「え……じゃあ？」

「本当に不憫なのは……リリィがモルモット以上の生きかたを望んでしまい、そしてそれが……絶対に叶わない、という事だ」

「絶対に、叶わない……？　そんな事は……だって……だってリリィは、あれだけ感」

「リリィは」

「……」

「リリィは……命が、もう保たない。今日はその話を、しに来たんだ」

　……。

「何か、言った？」

「聞こえなかったのなら何度でも言う。リリィは危篤だ」

　……。

「危ない、って事？」

「違う。それは重体と云うんだ。深い谷の上の、崖っぷちにぶら下がっているのが重体。危篤は既に、落下している最中だ。もちろん落ちても確実に死ぬわけではないが、そんな事はまず無い。危篤というのはつまり……もう助かる見込みが無い、という事なんだ」

　……。

「嘘……でしょ？」

「君との付き合いはそれほど深くはないが、それでも私が嘘をついた事があるか？」

　……。

「じゃあ、冗談？」

「私がこんなタチの悪い冗談を言うと思ったのか？」

　……。

「じゃあ、トリィは、僕は、何か悪い夢を見てるんだ」

「ならリリィも夢か？」

　……。

「じゃあ、じゃあ」

「もうよせ宮前少年、こんな問答をしている間にもリリィの命は喪われていっている」

　……。

「何で、なんだよ……どうして、なんだよ……どうしてリリィが死ななきゃ……？」

「どんな形であれ、生物の命は尽きる。幸福だろうと不幸だろうと、それだけは平等に訪れる」

　……。

　いくら何でも、あんまり……残酷、すぎる。

　あんなに。

　ああまで狂うほどに、僕との別れを激しく拒絶し。

　僕を求めてくれたリリィが。

　もう。

　もう……。

「それで、宮前少年。君にはリリィに、してもらいたい事があるんだ」

「……僕が死ねば、って事……？」

「その話じゃない、早とちりするな。そもそもそれは、手遅れとの事だ。言っただろう？　崖から落ちている最中なんだと。もう救いの手は届かないんだ。そうではなくて、もっと前向きの話だ」

「そんな状況で……前向きな話なんて……あるもんか」

「ある。そしてそれは、君にしかできない」

「僕に……何が、できるって言うの？」

「リリィの、最後に残された時間を共に過ごして欲しい。そして彼女を、幸福のもとに逝かせてあげて欲しい」

　……。

「何だよ、それ……死ぬ事が前提なんて……どこが、前向きなんだよ……」

「それなら何もしないで、リリィを見殺しにするか？　手を打たなくても、いずれにせよ彼女は、もう、死ぬ。それで、いいか？」

　……。

「幸福、なんて。僕には、そんな事は……」

「何をしなくてもいい。君がただ傍に居れば、リリィは幸せなはずだ。……ずっと、会いたがっていたんだ。君に」

　……。

　多分リリィはそう思ってくれている、とは思ってた。

　だから少しだけ……腹が立った。

「それを……閉じ込めて、いたの？」

「それは、マスターの手による奇跡に賭けての事だったんだが……まあ、結局どうにもできなかったわけだから、結果としてそういう事になるな」

「……」

「これは、まるで……不治の病を抱えた患者の面倒を看る羽目になった、医者にでもなったような気分だ。ほとんどの患者は、延命など望んではいないだろうに、な……。あれは、見ているこちらが……いっそ狂ってしまいそうなくらいだった」

　……。

　トリィに悪気が無いのは、あり余るほど理解できすぎる。

　ただ、それが納得できるかどうかは、まったく別の話だった。

「ちなみに初代のように、休眠させるという事すらできないそうだ。どんな状態にあっても、間も無くリリィは死ぬ。そういう判断だった」

　ここで僕はふと、思い浮かぶ。

「……そうだ。そうだよ、トリィのマスターは、死んだ人を生き返らせられるんでしょ？　普通の人間は無理でも、超人とかいうのなら。それならリリィも……」

「無理だ。マスターは万能ではない。火の立ち消えた焚き木は、また火を点けてやる事で再び燃え上がる事ができる。しかし燃え尽きてしまった灰では、そういうわけにはいかない。万能なものなど……この世に一つもありはしないんだ。宮前少年」

　……。

　そんなような言葉を、リリィの口からも聞いた気がした。

　それはまだ、ほんの二ヶ月近く前の事だっただろうか。

　しかしそれは遠く。

　懐かしく。

　そして切なく。

　淋しく。

　そして……。

　哀しかった。

　……。

　もう。

　もう……居なくなってしまうのか。

　リリィが……。

　……。

　もう……永遠に会えなくなってしまうのか。

　リリィと……。

　……。

　リリィ……。

　リリィ……。

　……。

「悲しい。それは、よくわかる。私も、そうだ。だから、それは無理に取り繕わなくてもいい。ただ、リリィの、傍に居てやってくれ。……頼む……」

　頼む。

　トリィのその言葉は、非常に小さく発音された。

　……。

「わかったよ。リリィの所に、連れてって」

「それには及ばない。リリィは寝室だ」

「……え」

「すぐそこに居る。会ってやってくれ」

　その顔が……リリィのものとは認識できなかった。

　いや、リリィである事は、わかる。確かに、リリィだ。だが……どうにも違和感が拭えない。

　その理由を探していると、リリィのほうから開口一番、こんな事を尋ねてきた。

「どうかしましたか？　私の笑顔は、そんなに変ですか？」

「……あ」

　そうだ。

　大きなキングベッドを一人で占領していたリリィは……そう。笑っている。

　リリィが、笑っている。

　ついに……ついに、リリィが……！

　あ……。

　あ……！

「リリィいいいいいいいいっ！」

「久しぶりです、オリヒコ。元気でしたか？」

「リリィ！　……リリィ……っ」

「オリヒコ。涙を流すのは、挨拶が終わってからにしてください」

「……無理だよリリィ……」

「そうですか……そうですね、そんなのもいいかも知れません。それにしても……」

「……何？」

「オリヒコに会ったら、伝えたい。そう思った事がたくさん、ありました。あったはずなんですが、でも……どうしてでしょうか？　今、それがまったく思い浮かびません。少し、悔しく思います。……いいえ、こんなに悔しかった事はありません」

「それは……それは僕もだよ……」

「そうですか。……オリヒコ」

「何？」

「愛しています」

　……！

　あ……。

　ああ……。

「わかった、んだ……」

「はい。ただ、あなたに会えないのは、もう本当に、つらかった。こんなにつらいものであるのなら、知らないでいたほうがよかった。そんな風にも思いましたが……今は、こんなにも嬉しい」

　あ……。

　ああ……！

　リリィ……リリィ……。

「……そう……そう……なんだね……」

「はい、オリヒコ。私はあなたを、愛しています」

「……リリィ……っ」

「オリヒコ。あなたがこの世に居てくれて、よかった。本当に、ありがとうございます」

「そ……それは僕もだよ……っ」

「オリヒコ……」

「リリィ……」

「オリヒコ」

「リリィっ」

「でも私はもう、死にます」

　……。

　……っ。

「いや、リリィ……そんな事は」

「その先は言わないでください」

「……」

「私はだから……遺言を、残そうと思います」

「遺、言……？」

「はい。これに法的効力を持たせるには、いろいろ面倒な条件があって……今はそれを満たせませんが、そもそも遺言というのは、死に往く者の意思を尊重してもらうためのものです。大目に見てください」

「法的、とか……リリィらしいね……？」

「そうですか。とにかく、これから私はいろいろと、我が儘を言います。覚悟して聞いてください」

「うん……」

　リリィが言うからには、それはさぞかし、大層な遺言なんだろうね……。それはさぞかし、覚悟をしておかなきゃね……。

「まず一つ、さっきミズホにも同様の事を言いましたが、あなたはミズホを松平さんではなく、ミズホと呼んでください。忘れているかも知れませんが現時点で、ミズホがあなたの花嫁候補です。大切にしてあげてください」

「……最初にして、それですか……。リリィにそれ言われると、微妙なんだけど……」

「できませんか？」

「いや、まあ、できないわけじゃあ、ないけれども……」

「でしたら、是非。次に一つ、今まで散々私は、さまざまな事柄に対して否定を行いました。それで大分、あなたが抱える夢というものは壊れたかも知れませんが、それは夢を見るなという事ではなくて、むしろ逆なんです」

「……逆？」

「はい。例えば、人が鳥のように飛ぶのは前に説明した通り、もう絶対に無理なんです。実現不可能な事を思い描くというのは、必ず裏切られる期待をするという事なんですから、虚しい事でしかありません」

「うん、そうだけど……でも、夢ってそういうものじゃないの？」

「私は違うと思います。つまり、自分たちは鳥などではないと、だから自分たちの方法で空を飛ぼうと、そう夢見た人たちが居たんです。そうしてモンゴルフィエ兄弟は気球を作り、そうしてジファール技師は飛行船を作り、そうしてライト兄弟は飛行機を作り、そうして人は今空を飛んでいます。私は鳥の存在を奇跡と言いましたが、人が今空を飛んでいるのもこの人たちが、魂を燃やし燃え上がらせたからこその奇跡なんです。こちらのほうが実に壮大で、夢のある話だと思いませんか？」

「なるほど……そう言われてみれば、そうかもね……確かに」

「つまり、夢というものはやはり、自分が実現する事を思い描くべきものなんです。ですから、ああなったらいいな。ではなく、あれを実現するにはどうしたらよいか。そう考えるようにしてください。妄想や空理空論にとらわれずに、どうか前向きに生きてください」

「あー……それはまた、難しい注文だね……」

「できませんか？」

「いや、まあ、うん。頑張ってみるよ……」

「健闘を祈ります。ただしくれぐれも、うまくやろうとはしないでください。ちなみに夢をただ一直線に追い続けるのも、無計画に近道を選ぶという意味で、うまくやろうとする事の内なんですよ？　一旦はそこから離れて、何もしない事も時には必要です。それでまったく別の無関係なものを追い始めたとしても、諦めさえしなければひょんな事からその実現の糸口が見えたりするものです」

「うーん……リリィの言う事っていちいち深いけど、どうしてそんな事わかっちゃうの？」

「それは……考えればわかる、としか。そこに複雑な暗号などありませんから、順を追ってきちんと考えれば、あなたにもわかるはずの事なんです」

「え……そうなのかなあ……？」

「では、ヒントを出しておきましょうか。その出発点は、今目の前にあるそれは何か？　という追究から始める事です。挑戦してみてください」

「目の前にあるものが何か、を追究？」

「はい。私の言葉は、すべてそこが根源になっているんですよ？　コンピュータとは何か、人工知能とは何か。欲とは何か、倫理とは何か。人体とは何か、医療とは何か。夫婦とは何か、結婚とは何か。善悪とは何か、法律とは何か。社会とは何か、経済とは何か。お金とは何か、物とは何か。飛翔とは何か、銃とは何か。……生きかたとは、何か。幸せとは、何か。みんな、みんなそうなんです」

「そんな事……僕にできるかなあ……？」

「できるはずですよ。少なくとも今、私が言った言葉。すべてが既に、あなたへ説明してあります。違いますか？　それともみんな、忘れてしまいましたか？」

「あー、いや、大体は覚えてるけど……」

「それで大丈夫です。あなたはそれを足掛かりにして、次へ進んでいけるはずですから。そうして理解を深めていけば、一を聞いて十を知るように、一を聞いて百を知るように、そしていつの間にか知らない事までもが、わかるようになります」

「え、えええええ。本当に？」

「この事はちょっと、実践してもらう以外には説明が難しいんです。ですのでそこは、騙されたと思って取り組んでみてください。そして、そんな風にゼロを聞いて一を知る事で、自分の何かやりたい事に対して、自分はどんな武器を持っているか。足りないものは何か。そういった事まで察しが付くようになります。それこそが、ゼロから一を産み出すという、コンピュータなどの人工知能には絶対に真似のできない、能力の根源なんですよ？」

「うーん……僕が、ゼロから一を、産み出す……」

「できませんか？」

「あ、ええと、いや。できるのか、できないのか、ちょっとわからないというか……」

「諦めなければ、きっとできますよ？　頑張ってみてください」

「……うん、そうだね。諦めちゃ……いけないよね」

「ところでまた、前言を覆しますが……神も仏も実在しない。かつてそのように言い切ってしまいましたが、本当は神も仏も実在するんです」

「え。それは……どういう事？」

「もちろん宗教で云われているところの神や仏は、実在しませんよ？　ただ、人が神にも仏にも成るんです。例えばインターネットのコミュニティなどで、神と呼ばれる人物が少なからず存在します。もちろんこれは単なる称号だとか、あるいはただの冗談だとか人は云うでしょうが、実は神や仏というものは、これの延長線上のものでしかないんです。どんなに小規模なものでも、神業の片鱗を築き上げていけば、いつしか人は神に成ります」

「そんな、簡単な話なのかなあ……」

「それほど難しい話ではないんです。先ほど挙げたライト兄弟も飛行機の神ですが、つまりそういう意味において神とはやっぱり、単なる称号でしかありません。しかしそれは、誰もが等しく目指す事ができる目標だという事でもあるんですよ？　そして神に成る条件とはただひとつ、ゼロから一を産み出す事だけです」

「何か大それた事が、随分シンプルになっちゃったね……」

「もちろん、飛行機級の大きな一を産み出すには運というものが激しく主張をしますが、積み重ねというものもあります。やろうと思った事が、できない事なんて、実はほとんど無いものですよ？　……オリヒコ」

「えっと……はい？」

「神に、成ってみませんか？」

「うーん……リリィが言うからには凄い遺言なんだろうとは思ったけど、まさかここまでとは……」

「できませんか？」

「たはは……。諦めちゃ、いけないんだよね？」

「その意気です。では、この話はこれくらいにしておきましょうか。次に一つ、勝手ながら私の預金を、あなたの口座へ全額送金しました。ちなみにその額は、およそ八十億円です」

「……うええええええええええええええ？」

「もちろんその半額は来年に、税金として徴収されます。それでも、あなたの口座の利率は年利０．０２％ですから、その利息は年間八十万円に達します。利子生活をするには届きませんが、それでも高校生のあなたには過ぎる額です。無駄遣いしないよう、ただしここぞという場合は決して惜しまないよう、慎重に判断して大切に使ってください。それから、大金に溺れて身を持ち崩すような事は、全力で回避してください」

「え、えええええ。うーん……自信無い、というかちょっと怖い、かな？」

「できませんか？」

「いや、えっと、これは本当に自信持てないかな……」

「大丈夫です、あなたはこの先起きるほとんどの事に責任が取れる。そうあなたのお父様に保証した私の言葉に、嘘はありません。少なくとも私は、そう信じています」

「あれは……あれはリリィが」

「はい、確かに誘導しました。でもそれは、あなたがもともと、どの選択肢を選べばいいかという答えをきちんと持っていたからこそ、できた事なんですよ？　つまりそれが、本当のあなたなんです、オリヒコ。いい加減観念して、認めてください」

「……ええと、褒められてるのか、叱られてるのか……」

「両方です」

「あ、はい……」

「それに、あなたに見抜けた私の誘導を、お父様に見抜けなかったはずがありません。ですからお父様はそれを承知の上で、納得したんです。今はそれ以上を望まないでも、まずまずとは思いませんか？」

「……そう言われると、それはそれで……調子に乗っちゃうかも」

「前にも言いましたが、失敗したならそこからまた学んでください」

「そっか……うん、わかった」

「それから、そんな立派なお父様を、私は悪しざまに言ってしまいました。後で詫びを入れるつもりだったんですが……いろいろあって、叶いませんでしたし……オリヒコ。あなたからその事を、謝っておいてください」

「あー……あはは、あれね。了解」

「そうですね。もしどうしても、散財をしたくなった場合。その時はあなたの言葉の通り、私と相談してください」

「……え？　リリィと……相談？」

「はい。つまり、それが私の遺産である事を思い出してみてください。あなたは私が大事だと言ってくれましたから、きっとそれが天秤の重りになるでしょう」

「……」

「できませんか？」

「あ……えっと……うん、できるけど……」

「では。次に一つ、この部屋から、転出する事は構いません。でも、所有権は放棄しないでください」

「……え」

「死んだ人の事を忘れようとして、関係する物をすべて処分するような事が普通にあるようですが、しかし私は、私のした事が無駄になる事が、どうしても我慢できないんです」

「リ……リリィ……」

「私が倒れた時、この部屋の購入も無駄になってしまったかと危惧していましたが……まだあなたたちは、住み続けてくれています。喜ばしい限りです。それにここは私が……いわゆる愛の巣を、築こうとした部屋なんですよ？　維持費には困らないと思いますからどうか、記念に残しておいてください」

「……リリィ、それは……」

「できませんか？」

「いや、そりゃあできるけどさ、でも……」

「では、そのようにお願いします。次に一つ、私の永代墓地を契約しました」

「……。リリィ」

「死亡届などの面倒な手続きを省いて、単なる儀式として葬儀を執り行ってくれる葬儀屋も、確保済みです」

「……ねえ」

「実は葬儀屋には、身元不明の遺体については警察へ通報せよとの通達が出ているものですから、探すのはなかなか難しかったんですが……とにかく、あなたが喪主になって、私を弔ってください」

「リリィ……だからさ……」

「できませんか？」

「……」

「オリヒコ？」

「……そうじゃないよ！」

「オリヒコ……？」

「できるよ！　リリィが嫌だって言ってもやるよ！　そうじゃないんだよリリィ……」

「……オリヒコ……」

「そうじゃなくて……そうじゃなくてさ。そんな事よく、よくそんな平気で……」

「……。私も、平気では、ありませんよ？　実際かなり、いっぱいいっぱいです。でも、だからと言ってすべてを投げ出してしまう。オリヒコ、それは違うと思いませんか？」

「……」

　違うのかも知れない。

　やっぱりリリィは、僕ら人間とは違うのかも知れない。

　リリィは、愛している。僕にそう言った。

　だから僕の手が届くくらい傍まで、てっきり来てくれたんだと思ったけれど、その距離はまだまだ遠くて。

　リリィも一生懸命僕をたぐり寄せてはくれているけれど、その隔たりは全然取り払われてはいなくて。

　そしてリリィは相変わらず上のほうに立っているけれど、僕は階段も何も無い場所を上へ登る方法なんか知らなくて。

　結局リリィは最後まで……僕の傍へ、来てはくれないのだろうか。

　結局僕は最後まで……リリィの傍へ、行けはしないのだろうか。

　そんな想いに駆られ、つい口に出てしまったのが、この質問だった。

「……ねえ。リリィ」

「はい？」

「リリィは……何で、そんなに……強いの？」

「……」

　ここで、今まで迷う事無く言葉を紡ぎ続けてきたリリィが、急に黙ってしまう。顔にたたえていた笑みも、消えて無くなってしまった。

「え……リリィ？」

「……」

　リリィの唇が動くも、それは声にならない。

「リリィ？」

「……」

　リリィが何かを、懸命に言葉に出そうとしていて。

　しかしそれは、なかなか成功せず。

「……リリィ……」

「……ない……」

「え？」

「……オリヒコ……私……私は……」

「リリィ？」

　そうしてやっと声になったリリィの言葉こそ、僕の失敗を痛烈に指摘するものだった。

「オリヒコ……私は！　強くなんか！　……ない……」

「……！　……」

「そんな風に見えたかも、知れません……。けれど、私は、弱い……限り無く、弱い……。いつ崩れ落ちてしまっても、おかしくなかった……そしてできる事ならば、許される事ならば、私は……私は！　泣いて！　崩れ落ちて！　しまいたかった……ずっと、私はずっと、そうだったんですよ？　オリヒコ……」

「……あ……」

　リリィの涙を見たのは、それが二回目だった。

　その様子はもうただ、弱々しく。

「私は……私が、誰なのか、わからなかった……教えてくれる人も、居なかった……だから私は、知って、知って知って知って！　ただ知って、そして考えるしか無かった……。そこに強さが見えたとしても、そんなものはただの虚構でしかなかった、のに……。だから、だから私は誰かに……オリヒコに……あなたに救って、欲しかった、のに……」

「……」

　そう。

　リリィは、こんなにも、弱かった。

　弱かったんだ。

　頭がいいとか。

　忍耐強いとか。

　力持ちだとか。

　そんな事は、まったく無意味だった。

　僕が、守ってあげなければいけなかった。

　そんな相手を、僕は勝手に、高みへ担ぎ上げて。

　僕は、何も、わかっていなかった。

　……リリィは何で、そんなに強いの？

　一体僕は、こんな質問をどうしてリリィへぶつけてしまったのか。

　そんな事は、訊かないでもわかるはずだったのに。

　強いはずなんて無かったのに。

　あの別れ際、あれだけ命を燃やして救いを求めた女の子が、強いはずなんてあるわけがなかったのに。

　僕は今、そのか弱い女の子を真正面に見る。

　そのか弱い女の子は今、か弱い女の子以外の何者にも見えない。

「……オリヒコ。私は、知ってしまいました……」

「……」

「……人が、傷を負った時に、最も痛い所……。それは、膝なんかでは、ありませんでした……」

「……」

　目の前に居るリリィはただ、ただブルブルと、震える事しかできなくて。

　それはまるで、オオカミに追い詰められたウサギのようで。

　そのウサギがリリィであるならば、そのオオカミは僕でしかなくて。

　そしてそのウサギは今、そのオオカミを頼るしか無くて。

「……オリヒコ。私には……支えが必要です。それも、今すぐ。そうでなければ、きっと……私は死んでしまう前に、壊れてしまいます……その一番痛い所は、粉々に……砕けてしまいます……」

「……リリィ……」

「私の、最後の我が儘です。一つ、私を……わ、私を……っ」

　何をお願いされるのかは、もう聞くまでも無い。

　それをどうするかを、誤ってはいけない。

　もう、後は無い、のだから。

　そして、だからこそ僕は……この期に及んでうまくやろうとしてしまったのだと思う。

「……リリィ。それは違う」

「……え」

「最後なんかじゃ、ないよ。これからもずっと……続くんだ」

「……オリヒコ……」

「リリィ。君はこれから、幸せに暮らすんだよ」

「……オリヒコ！　オリヒコおおおおおおおおおおおおおおお……」

　リリィは……号泣し。

　それを僕は……抱き締め。

　そして二人は……二人は。

　二人は。

　……二人に、時間なんか残されてはいなかった。

「くふっ……」

　リリィは僕の腕の中で、少しだけまた血を吐く。

「……リ、リリィ……！」

「……あ……オリヒコ……ああ……あ……ああああああああ……いやあああっ……お、オリヒコおおおおおおおおおおっ！」

「リリィ……っ！」

「オリヒコ……オリヒコっ！　オリヒコおおおおおおおっ！　わ、私死にたくないいいいいいっ！　わ、わた……オリヒコ私っ！　死にたくオリヒコいやああああっ！　ああああああああはあオリヒコおおおおおおおおお……っ！　オリヒコ、オリヒコっ、オリヒコおおおおお……」

　後悔先に立たずということわざが、こんなにも重くのし掛かってきた経験は無かった。

　リセットボタンが欲しいと、こんなにも強く求めた事は無かった。

　あのような言葉をリリィに掛けたのは、どう考えても間違いだった。

　結果、僕は彼女に、あまりに大きすぎる未練を与えてしまう事になり。

「……オリヒコ……私、死にたくない……私、死にたくない……死にたくない……っ」

　そんなセリフが……彼女のいまわの言葉になってしまい。

　僕の腕の中で漏れ続けていた彼女の声からはゆっくり……しかし確実に力が抜けていき。

　とめどなく滂沱していた彼女の涙は……やがて枯れ。

　ついにはそっと……息を引き取り。

　それが、リリィの最期だった。

　殺人兵器が愛を知る方法。

　それは命を手放す事だった。

「リリィいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

# **※オフ・レコード**

　救いの無い死を遂げてしまったリリィ。

　そんな彼女へ、命を与える方法がある。

　後悔と悲嘆に暮れていた僕へ、そんな事をトリィが言い渡した。リリィはもう逝ってしまったのに、もう既に灰にまでなってしまったというのに、一体何を言い出すのか。

　そう思ったが、聞いてみるとこういう話だった。

　結局、人の存在というものは不確かなものであり、では確かなものは何かと云えばそれは、心に残った想いである。だから、リリィを心の中に留め続ければよい。君の心の中にリリィがあれば、それは君にとってリリィが生きている事になる。

　そんな話だった。

　そんなものは詭弁。誤魔化しだ。そう主張してはみたがトリィには、では好きにすればいい。そんな風にあしらわれてしまった。

　納得できるわけは無い。だが、トリィの言った通りの方法でしか、リリィを捕まえておく方法が無い事も確かだった。

　しかしそれでも、そもそも人の心は移ろうものである。第一、傍には今、松平瑞穂が居る。彼女が好きであるのも本当の事だから、僕は次第にリリィが、僕の心から消え去ってしまうのではないか。そんな考えを持ってしまい、それを酷く怖れた。

　何か、形が欲しかった。

　もちろん、このマンションもある。墓もある。だがそれらは、リリィを表現したものではなかった。何でもいい、リリィとはどんな存在であったか。それを知る事ができる物。

　そんな物はまあ、探しても見付からなかった。

　だが僕はそのうちに、だったら自分で作ってしまえばいい。そう思い立った。わかりやすいのは、文章で残しておく事である。しかしでは、それは手記か日記か……。そんな時ふと目に付いたのが、お気に入りの文庫本。

　そうか、小説。

　振り返ってみれば、なかなか奇想天外な体験をしてきた。そんな内容の手記なんか誰も信じないだろうし、でもそれが例えばライトノベルなんかになってみたりしたら？　それは、悪い考えではないように思えた。

　僕は早速、松平瑞穂からノートＰＣを借り受けると、ほとんど触り慣れないワープロソフトを操作し始める。もちろん、その過程ではどうしてもいろいろ思い出さざるを得ないから、涙は止まらないだろうが、きっとそれもまた悪くはない、はずだ。

　しかし、ライトノベルとするなら、その内容はあくまで架空のものとして扱われてしまうだろう。それが気掛かりではあるが、まあ贅沢は言わない。要は、心に残ればいいのだから。

　それでも、それに対する一応のささやかな抵抗として、その書き出しはこんなような感じにした。

　この物語はノンフィクションです。

　と……。

─了─